魔法少女リリカルなのはA`s　EarthCore

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ、ｓ　ＥａｒｔｈＣｏｒｅ

【Ｎコード】
Ｎ２４６９Ｒ

【作者名】
ユウスケ

【あらすじ】
星が落とした雫に魔の命を捧げよ。星の宿りし器に雫を落とせ。さすれば無限の力を手に入れん。　※物語りのカギはオリキャラですが、主役はなのは達です。よって主人公が滅茶苦茶に強いわけではありません。基本的に最低でもクロノ以上、なのは未満です。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

魔法少女リリカルなのはＡ、ｓから三年後、小学校六年生となったなのはの世界が舞台です。

リリカルなのはを始めて読む方、もしくは原作キャラやなのはの詳細なデータが知りたい方は下記のサイトを参照にしてみてください。そこから無印～Ａ、ｓ～ＳｔｒｉｋｅｒＳへの公式サイト、そしてなのはの世界観や魔法、デバイスの詳細などの理解を深める事が出来ます。

ｈｔｔｐ：／／ｎａｎｏｈａ．ｊｕｌｙｎｅｔ．ｊｐ／

もしくは　なのはウィキ　で検索する。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

真夜中の街。

殆んどの住人が眠りに就いた頃。

数少ない自然が多く残っている公園の林の中から数人のうめき声が響いていた。

「……ふん。この程度で管理局員か。これだとエースもたかが知れるな」

地面に倒れて呻き声を上げる管理局員達を見下ろす黒髪長髪のポニーテールの少年。

肘膝の関節部分に布が無く、ベルトの様な物で繋いであるやや薄手の黒衣のＢＪを身に纏い、その右手には黒光りする漆黒の拳銃が握られている。

少年の前に倒れ呻き声を上げてもがいているのは、無限の広さを誇る次元世界と、そこに星の様に点在している“世界”を管理する組織。法律、警察、裁判の三権を司る機関、時空管理局。彼らはその時空管理局の局員だ。

《普段は禁物だぞ、アル》

拳銃から手の平サイズの黒い狼がホログラムとして投影され、低い男の声を発し少年の名を口にする。

拳銃型のインテリジェントデバイスのウルフ。魔導師が魔法を行使するのに必要な触媒で、ＡＩを積んだ意思ある機械とも言える物だ。

そしてデバイスで行う魔法はプログラム化されており、魔法とは言ってみれば超発展した科学技術であり、摩訶不思議で超絶な神秘的な事は何一つとして行われてはいない。ただし、魔法とはリンカーコアを呼ばれる魔法を行使する為の先天的な才能――魔力が必要となる。

「だがコレだぞ？　これじゃあ、束になって襲って来られようと敵にすらならない」

アルと呼ばれた少年は軽く鼻で笑って拳銃を肩に担ぎ、地面に倒れて絶命寸前の管理局員達を見下ろして呟く。

実際、彼らと戦闘を始めてまだ五分と経っておらず、展開した結界に気付いて飛んでくるであろう管理局の応援が駆けつける前に終わってしまった。

《だが、だからと言って悠長にしていては捕まるぞ？》

「……わぁったよ、ウルフ。さっさと仕事を終わらせてズラかる。

コレでいいか？」

《ああ》

アルは自分のデバイスに諭され、懐から拳ほどの大きさの水滴を落として空中で固定した様な形の水晶の様なモノを取りだす。

ソレは下半分が鮮やかな七色に染まり、上半分は古く埃を被ったガラスの様な色をしている。

「――星は目覚めて闇を断つ」

ソレを起動させるキーワードを唱え、ソレの鍵を開ける。

鍵が開くと同時にソレは灰色の輝きを宿し、不気味さを醸し出す。

「我、力を欲す。汝、その力を我に差し出せ」

アルは更に機能を作動させるキーコードを唱える。

キーコードが唱えられると同時に、ソレは宿す灰色の光でアルの前に転がっている三人の管理局員を照らす。

すると、三人の魔導師の胸からそれぞれ三色の小さな光球――リンカーコアが浮かび上がる。

ソレと共に三人の魔導師は耐えがたい激痛に襲われ、悲鳴が林に木霊する。

だが、アルはそれに構わずキーとなる言葉を唱える。

「――掌握」

リンカ―コアは持ち主である局員から解き放たれ、ソレの中に吸い込まれる様に取り込まれた。

それと共に苦しんで身悶えていた局員達の動きが止まり、死んだ様に動かなくなった。

「……星は静かに眠り光は昇る」

ソレを停止させるキーワードを唱え、ソレは光を納めて輝きを失う。

アルは暫らく光を失ったそれを見つめ、そして呟く。

「これで……百八十人め」

《粗悪なリンカ―コアで後百人。良質のリンカ―コアで十人と言った所か》

「まだ……先は長いな」

アルは悲壮感漂う表情で小さく呟く。

ウルフはそんなアルに何も言えず、ただ黙って見つめるのみ。

しかしすぐに無表情に切り替え、それを懐にしまって踵を返す。

「これ以上留まってたら、ホントに捕まるな。さっさとズラかるぞ」

《了解だ》

拳銃からのホログラムが消え、代わりにアルの足下に黒いミッド式の魔法陣が展開される。

「次の目標は……９７管理外世界だ」

その呟きと共にアルの姿は黒い光と共にその世界から消え失せた。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

読んでいただけたなら、日々の精進の為に感想をいただけたら嬉しいです。

第一話　平和な日常（前書き）

世界に生れし星の子たちは誇りを胸に自ら光り輝く。

第一話　平和な日常

第９７管理外世界。現地名称『地球』。

その管理外世界のとある町、海鳴市の季節は丁度夏。

まだ朝だと言うのに日差しは高くなっていき、夜の内に冷えた街が熱を帯びていく。

そんな流れゆく街の風景を私立聖祥大付属小学校専用の通学バスの窓から眺める鮮やかな茶色いツインテールの少女。

彼女の名は高町なのは。今年十二歳になった小学六年生であり、正義感の強い女の子である。

「今日も暑くなりそうだね～」

「まだまだ暑くなるだろうって、天気予報で言ったよ」

なのはの呟きに、長めの紫髪で大人しそうな少女、月村すずかが答える。

「え～？　もう少しで夏休みなのに。まだ暑くなるの～？」

肩まである金髪で活発そうな少女アリサ・バニングスが嫌そうに表情を歪ませる。

どうやらアリサは暑いのがやや苦手の様だ。

「確か今日の体育の授業ってプールだったよね？」

「うん。時期的に一学期最後のプールになるかな」

「でもお昼からでしょう？　それまでが地獄だわ」

確かにアリサの言う通り、夏の教室での授業は本当にキツイ。

いくら私立の学校と言っても教室までクーラーが備え付けられてはおらず、夏場はかなり暑い。

この点はどこの学校も同じと言う事だ。

尤も、クーラーがあるなら夏休みは無くなるだろうが。

「あ、もう直ぐ学校に着くよ」

バスの前方に学校が見えるのに気が付いたなのはがバス停のある校門に見覚えのある人影を二つ見つける。

バスが止まり、乗車していた生徒達が次々に下車して行く。

「フェイトちゃん！　はやてちゃん！」

「おはよう」

「おはよ～」

なのは達がバスから降りると、そこには親友と呼べる二人の少女が待っていた。

一人は透き通った長い金髪の少女フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。

もう一人は元気そうな茶髪のショートヘアの少女八神はやて。

「おはよう、みんな」

「おはよう。今日も暑くなりそうやね」

なのは達五人は校門をくぐり、校内を並んで移動する。

「そうなのよ。全くやんなっちゃう」

「あはは。アリサ、それ此処最近いつも口にしてるよね」

「今日はプールがあるんやし。それまでの辛抱や」

軽く談笑しながら五人は自分たちの教室へと歩いて行く。

道中男子生徒からの視線を集めながら。

彼女たちは最早説明するまでもなく美少女だ。

それも聖祥の華と言っても過言ではないくらいの美少女達。

その全員が仲のいい友達で並んで登校しているのだから、いくら小学生とはいえ目を奪われるのは当然と言えば当然である。

◆◇◆◇◆◇

午前の授業が全て終わり、昼休憩に突入した聖祥。

なのは達は教室でお弁当を広げてお昼ご飯を取っていた。

「へぇ。謎の魔導師連続襲撃事件ねぇ」

アリサがお弁当のおかずを口に運びながら今の話題を呟く。

「しかもランクの低い人から高い人まで。まさしく手当たり次第や」

「襲われた人はどうなったの？」

はやての捕捉の説明を聞いて、すずかが訊ねる。

「襲撃された人達はみんな石みたいに変貌しとる」

「石化って事？」

「うん。リンカーコアを抜き取られた所為じゃないかって話しだけど……詳しい事は分かってないんだ」

フェイトは真剣な表情で答える。

「リンカーコアって確か魔導師にとって第二の心臓の様な物なんでしょ？」

「うん。リンカーコアに傷が付けばかなりの痛みとダメージを受けるから、普通は無理とか無茶は避けるんだけど……」

フェイトは言葉を濁し、ある一点に視線を送る。

それに合わせてアリサ、すずか、はやての三人も同じ一点に視線を送る。

四人の視線を一身に受けるその一人は、頬を引き攣らせて苦笑いをする。

「あはははは……。ごめんなさい……」

がっくしと折れる様に項垂れるなのは。

彼女は一年ほど前、身体の疲労の限界を無視して無理をし、それが原因で敵機の襲撃に反応し切れず落されてしまった経験がある。

今では問題なく生活できてはいるが、その撃墜当時はもう二度と空は跳べないだろうとまで言われる程の重傷を負っていた。

「全くよ。なのは落されたって聞いた時は心臓止まるぐらいビックリしたわよ」

「うんうん。でも二度と魔法が使えないって言うのにも本当にびっくりしたよ」

アリサとすずかの言葉にフェイトもはやても、うんうんと神妙に頷いて肯定する。

この場になのはの味方はいない。

「まぁ、それはそれで置いといて」

アリサは両手で箱の様な物を挟むようにして横へズラし、話しを元に戻す。

「その襲撃事件って色んな世界で起こってるんでしょ？」

「うん。リンカーコアさえ持っている人間がいる世界だったら片っ端からって感じ」

「じゃあこの世界は大丈夫なの？」

「魔力を持つ人自体が居ない世界だし。多分大丈夫だと思うよ」

すずかの疑問になのはが答えると、すずかは「よかったぁ」とほっと胸を撫で下ろした。

――キーンコーン！　カーンコーン！

全員がお弁当を食べ終えたのに丁度いいタイミングでチャイムが鳴り響く。

「あ、もうお昼休み終わっちゃった」

「さぁ！　次はプールよ！」

「アリサちゃん張り切ってるね～」

「一学期最後のプール授業だから余計なんだと思う」

アリサの元気具合に顔を合わせてなのはとすずかは笑いあう。

「ほら、さっさと行くわよ！」

アリサの言葉に全員頷き、教室へと速足で更衣室へと向かって行く。

◇◆◇◆◇◆◇

なのは達がプールで夏の暑さから逃避している頃。

海鳴の小山の頂上にある桜台登山道に、一人の少年の姿があった。

「……ホントに此処で合ってるのか？　ウルフ」

《ああ、間違い無い。第９７管理外世界の地球。海鳴市だ》

アルの呟きに、その肩に座る様にして投影される漆黒の狼のホログラムが答える。

「この世界でリンカーコアを持つ人間は十億分の一じゃなかったのか？この街だけで七人いるぞ」

《うむ。しかも全員ＡＡ～Ｓランク超えばかりだな》

アルは舌打ちする。

「今までの局員共の情報で此処に良質のリンカーコアを持つ奴がいるって分かったから来たってのに……」

《良質どころか最良質のリンカーコアばかりか。流石に全員を一度に相手にするのは無理だな》

「しかも最良質のリンカーコアの三つは行動を共にしてやがるし、良質のリンカーコア四つは一か所に固まって動かない。どっちにしろ分が悪い」

此処まで固まって行動しているのだから十中八九全員仲間だと考えてまず間違いない。

両方とも場所からしたらそれほど離れておらず、どちらかを襲撃すればもう片方がすぐさま駆けつけるだろう。

そうなれば自分と同等以上の相手を何人も、更に様々なタイプの魔導師を同時に相手にしなければならなくなり、最悪逃げられなくなるだろう。

《どうする？　此処は諦めて別の世界へ行くか？》

ウルフの言う通りにすれば、危険な真似をする事無く、時間をかけて目的を達成できるだろう。

だが、今後これほどの獲物に会えるとは限らない。

なぜなら一刻も早く目的を達成しなければならない理由がアルにはあるからだ。

「俺は負けられないんだ。どんな事があっても、必ず“助ける”って言ったんだ」

血がにじむ程手を固く握る。

「相手が誰だろうと、俺は絶対に負けねぇ」

クルリと踵を反して歩き出す。

「結構は今夜。あの中で一番リンカ―コアの数が少ない所を狙う」

そう言って山道を降りて行くアル。

その右手にはめている、黒く輝く指輪がキラリと輝いた。

第二話　星光と孤高の狼の出会い（前書き）

誇り捨てし星の子は力に呑まれ、他の輝きを喰らい散らす。

第二話　星光と孤高の狼の出会い

学校が終わり、なのはが家に戻ってから約一時間後。

高町家一同は、晩御飯を共にしていた。

色とりどりの野菜と様々な洋風料理。飛び交うのは今日昨日あった出来事や、嬉し恥ずかしの昔話。

そんな温かな食卓を囲んでいた。

「なのは」

「ん？　何、お父さん」

声を掛けた士朗に、なのはは一旦食べる手を止めて聞き返す。

「最近、時空管理局は忙しいそうだな？」

「あ～……うん」

なのはは士朗の問いに苦笑いで頷いた。

「例の襲撃事件でしょ？　まだ犯人捕まってないんだね」

「証拠も痕跡も残さずに消えてるって話しだからな。そう簡単には捕まらないさ」

美由紀と恭也が口を揃えて言う。

「広域次元犯罪って事で指名手配されてるんだけど……情報も何もないから、あんまり進展してないみたい。この前クロノ君が愚痴ってた」

「ああ、あのクールな少年か。……ふむ、彼も苦労してそうだね」

「フェイトちゃんによればこの話題が出る度に溜息吐いてるんだって」

「まだ若いのに苦労してるのね」

士朗と桃子が可哀想にっとクロノに同情しているのを見たなのはは思った。

（二人だって十分若いと思うな……）

と。思うだけで言葉にはしなかった。

◇◆◇◆◇◆

楽しい晩御飯も終わり、お風呂にも入り終わったなのはは、家族にあいさつして自室に戻っていた。

「えっと、明日持っていく物は……」

明日の授業予定を見ながら教科書などを突っ込んでいく。

その隣には、小さく丸い紅い宝石のデバイス。愛機レイジングハートがクッションの上に鎮座している。

その隣には小さなクッションが入った小さな籠がある。

ほんの少し前までは、そこに変身魔法を使ってフェレットに変身していたユーノの居場所だった。だが、ユーノは今時空管理局本局の無限書庫で司書長となって毎日を忙しく働いている。

だからその場所はもう只の観賞用となっているが、なのはは片付け

る事無くそのままにしてある。別に寂しいからとかではなく、ただ時々見ては自分が魔法に出会った時の事を思いだしているのだ。

「さてっと、これで明日の準備終了。もう寝ようか、レイジングハート」

なのはは自分のベットに入りながら机の上のレイジングハートへ語りかけ、レイジングハートは点滅して返事する。

「お休み、レイジングハート」

なのはは電気を消して、ベットに潜り込む。

《Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ》―おやすみなさい。

レイジングハートは静かにそう呟き、自身も機能の一部を休止して休眠しようとする。

だがそれは、家の正面で唐突に展開された結界によって遮られた。

「なっ、なに!?」

突然の事態にベットの上で跳ね起きるなのは。

そして次の瞬間。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

何の前触れもなく、なのはの部屋の壁が爆発と共に爆ぜる。

「キャアアア！！」

咄嗟にレイジングハートがバリアを展開していたおかげで爆発と砕けた壁の破片がなのはを襲う事はなかったが、部屋の惨状は酷いありさまだった。

しかし、今はその事に構っていられる状況ではない。

なぜなら、吹き抜けとなった壁の向こう側。

結界の向こう側の突きを背に立つ黒衣の防護服（バリアジャケット）に、月の光を浴びて鮮やかに輝くポニーテールの黒髪と、紫色の瞳を持った少年がそこにいた。

「お前に恨みは無いが……」

そして少年は確かな敵意をその紫の瞳に宿して言った。

「リンカ―コアは貰って行く」

◆◇◆◇◆◇

時は少し遡ってなのはが丁度自室に戻ってきた頃。

高町家の真正面にアルは来ていた。

極限まで魔力反応を消し、悟られぬよう此処まで何重にも重ねた隠蔽魔法をその身に纏ってデバイスの危険感知領域に侵入してきたのだ。

「これは当たりだな」

《ああ。他の魔導師達とそれなりに距離があって助かった。これなら結界を展開しても同時に捉える事はあるまい》

アルはニヤリと口元を釣り上げる。
そして右手の中指に付けた指輪を胸元に掲げ、結界を展開させようとする。

「こんな時間にこんな所で何をしてるのかな？」

「……！？」

「夜中に出歩くのは……あまり感心しないな」

しかし、突然両脇に現われた気配と男女の声に、アルの動きが止まる。

正確には、首元と背中に突き付けられた四本の木刀で動きを止められた、だが。

「……一般人……じゃないな。何者だ？」

「その質問、そっくりそのまま返すよ。君こそ、何者だ？」

アルは男の方、高町恭也を横目で見ながら尋ねるが、恭也は事得る事は無く質問をそのまま返す。

そしてその反対側で高町美由紀が同じように木刀を構えてアルの動きを制している。

「別に、ただの旅人だ」

「ただの旅人にしては……随分と殺気立ってた様だけど？」

美由紀が挑発する様に言うと、アルは目を細くする。

「さあ、応えて貰おうか。なのはに何の用だ？謎の魔導師襲撃の犯人君」

「――！　知ってたのか。ああ、ここの魔導師の“家族”だったら知ってて当たり前か」

アルは僅かに驚いた表情をするも、直ぐに冷静に戻る。

「流石の魔法使いでも、この状況からの脱出は無理でしょ？　大人しく捕まっておきなさい。悪い様にはしないから」

美由紀が今の状況を利用して脅迫にも聞こえる説得を試みる。

だが、

「いくら武の達人のだとしても、所詮はただの一般人だ……」

胸元に置いた右手を降ろし、僅かに俯くアル。

「そして俺は“魔法使い”じゃなくて“魔導師”なんでね。他かが一般人二人程度に負ける訳がないだろ」

『ッ！？』

その瞬間、恭也と美由紀の身体が左右それぞれの方向へ吹き飛ぶ。

二人は空中で体勢を立て直して着地してアルの方を見る。

だが、そこにあったのは目の前まで迫っている漆黒の光弾。

アルは恭也と美由紀を、バリア展開で吹き飛ばすと同時にウルフをセットアップし、二丁の黒光りする拳銃の銃口から、己の魔力弾で追撃していたのだ。

あまりの至近距離と弾丸の速度から二人は避けられず、光弾が二人の顔面に直撃するとほぼ同時に結界が展開され、世界から色と時間が失せる。

恭也と美由紀が意識を失って力無く背中から地面に倒れ込むのに合わせて結界の展開成功を確認すると、すぐさまアルはその右手に持つ拳銃をなのはの部屋へと向ける。

「……防いでみろ」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

その呟きと共にウルフはカートリッジを一発ロードする。

――バンッ！！

強化された一発の黒い魔力弾は、間髪入れずなのはの部屋へと撃ち込まれ、壁の一面が爆発と共に粉々に吹き飛ぶ。

「キャアアア！！」

誰も居ない結界内になのはの悲鳴が響き渡る。

その声を聞き、アルはワザとらしく舌打ちをする。

「チッ……一撃で仕留め損なったか」

《仕留める気もない癖によく言う》

「フン……」

アルは不機嫌そうに鼻から息を抜いて、丁度なのはの部屋を見下ろす位置まで空へ上昇する。

そこからは、粉塵が晴れて寝間着のままベットから転がり落ちたなのはの姿が見える。

その姿からは戸惑いと混乱している事が非常によくわかる。

「お前に恨みは無いが……」

だがアルはそれに構う事は無くウルフを構え、

「リンカーコアは貰って行く」

静かに告げた。

第三話　激闘の末（前書き）

誇り捨てし星の子に、誇り抱く星の子は痛みを刻まれる。

第三話　激闘の末

なのはの家の周辺に結界が展開されてから暫らく経った。

結界の展開と大きな魔力の出現。二つを感知したフェイトとはやて達は直ぐにデバイスを起動させ、現場へと向かったのだが……。

「エイミィ！　まだ結界内に入れないの！？」

『今やってる！　でも、この結界すんごっく硬いんだよ！　内部に転送も出来ないし！』

通信から聞こえてくるエイミィの必死な声を聞き、フェイトはグッと唇を噛締める。

その周りには、黒髪ショートに黒い防護服（バリアジャケット）に身を包んだクロノ、白い騎士甲冑に身を包んだ茶髪のショートボブの八神はやて、ピンク色の長髪をポニーテールにした薄ピンク色の騎士甲冑のシグナム、赤髪に三つ編みツインテールの紅いゴスロリの様な騎士甲冑を纏うヴィータ、薄金髪にドレスの様な騎士甲冑シャマル、屈強な身体に手甲を身に付けた白髪のザフィーラの姿もあり、全員がアルの展開した結界に阻まれて内部に入れず立ち往生している。

「ちっくしょう……！　こんな所でグズグズしてる場合じゃないんだよ！！」

ヴィータが苛立ちを隠さずに結界に向かってハンマーのグラーフアイゼンを振り上げ、思いっ切り振り下ろす。

ガコーン！と巨大な鐘を突いた様な音が響き渡るが、肝心の結界には傷はおろか、歪み一つありはしない。

「落ちつけヴィータ。既に我らの力では突破できぬ事は分かっているだろう」

「コレが落ち着いていられるか！」

シグナムがヴィータを落ち着かせようと冷静に注意するが、ヴィータは逆に怒りのボルテージを上げて叫び返す。

「なのはが一人で闘ってんだぞ！　しかも相手はあの連続襲撃犯かも知れねぇんだ！」

「確かに危険だが、我らはこの中には入れない。なのはがそう簡単に落される訳が無い事ぐらい分かっているだろう」

「それはッ……そうだけどよ」

ギリッ！と歯を食いしばって耐えるヴィータ。

ヴィータはかつてなのはが落された所を間近で見ていた事もあり、

なのはがまた落とされる様な事だけはさせないと誓った事がある。
だからこそ、なのはが危険な時に何もできないでいる自分に腹が立つのだ。

「ヴィータ、ちょっと落ち着こう。きっとエイミィさんが抜け道を作ってくれる」

「はやて……」

「な？　だから、今はなのはちゃんを信じて待とう」

「……うん」

はやてに説得されてヴィータは落ち着きを取り戻し、再び結界へ視線を戻す。

外から中の様子はまるで把握できないが、結界が破れればすぐにでも駆け付けられるように魔力を溜める。

そのすぐ傍で、同じく結界を見つめているフェイトは、デジャブを感じていた。

（この感覚は……前にも感じた。そう……二年前にシグナム達と出会った時と同じ……）

前回もなのははは結界内に閉じ込められ、リンカ―コアをヴィータに奪われそうになって撃墜寸前だった。

そこへフェイトが駆け付け、ユーノと共にシグナムやヴィータの相手をしながら捕獲結界の突破を試みて、なのはがリンカ―コアを蒐集されながらも集束砲で結界を破壊した事でなんとかなった。

だが今回は前回と違う。

今度はなのは一人で敵の数は不明。更には結界内への転送はおろか、破壊すらも出来ず、自分達は援護にも行けないという最悪の状況。

（なのは。お願い、無事でいて……！）

故に、フェイト達はなのはの無事を祈る事しかなかった。否、祈る事ぐらいしか残されていなかった。

◆◇◆◇◆◇

所変わって結界内部。

中では激しい戦闘が行われていると思いきや、戦闘音はまるで聞こえず、アルとなのははは空中で防護服（バリアジャケット）を着て、お互いにデバイスを相手に向けて構えて制止していた。

しかし、地上に目を向ければそこには魔力弾や砲撃が落ちたかの様な大小様々なクレーターがあちこちに出来ていた。

「よく粘る。他の局員（ザコ）とは違うって訳か」

《ふむ。流石“不屈のエース”と言う事か》

「へぇ……お前が管理局のエース、ね」

デバイスと会話していたアルがなのはの顔を見つめて鼻で笑う。

その動作に若干癇に障ったなのはが問い掛ける。

「何が言いたいの？」

「別に。管理局本局の占拠も制圧も簡単だなって思っただけさ」

「……？」

「“切り札（エース）”のお前がこの程度なんだ。他の局員なんてカスも同然じゃねぇか」

アルは口元を釣り上げながらわざと挑発しているかの様に言い放つ。

「……ッ！」

《Ｍａｓｔｅｒ，ｐｌｅａｓｅ　ｃａｌｍ　ｄｏｗｎ》―マスター、落ち着いてください。

「分かってる。挑発してこっちの動きを単調にしようとしてるだけ。私は冷静だよ、レイジングハート」

レイジングハートに注意されるも、なのはは至って冷静であった。

「それに時間を稼げばフェイトちゃん達が援護に来てくれるから」

そのやりとりを聞いていたアルは不敵な笑みを浮かべ、なのはに向けて言った。

「増援なら絶対に来ねぇよ」

「え……」

「この結界は魔導師を結界内に閉じ込め、且つ外からの増援を防ぐ為の封鎖領域を展開する捕獲型強装結界」

《外部からの干渉と転移の一切合財を通さず、内部からの脱出は結界を破壊しない限り不可能だ》

ある人物が完成させた完全な捕獲と逃走手段の断絶。更に外から結界への干渉および結界内への転移も遮断する完璧な結界。

ついでに周りの邪魔者を排除できる様に、空間の位相を僅かにズラす封時結界の効果を含んでいる為、魔力を持たない一般人への被害は無い。

しかし、結界内部から外部への一方的な通信が出来るって欠点がある。

『レイジングハート。どう思う?』

《Ｗｈａｔ ｈｅ ｓａｉｄ ｗａｓ ｎｏｔ ａ ｌｉｅ，Ｎｏｗ ａｂｌｅ ｔｏ ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｅ》―彼が言った事は嘘ではありません。現在通信できませんから。

『そうだよね』

念話で会話するなのはとレイジングハート。

今アルが言った事が嘘じゃない事はレイジングハートが証明し、なのはは目の前のアルを見つめる。

アルの眼には完全な敵意しか宿っておらず、おそらく説得や投降は

無意味だ。元よりそんな事が通じる相手ならば、こんな事にはなっていないだろう。

「助けが来ないと知って絶望したか？だったらさっさとリンカーコアを……」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ウルフから弾薬が排出され、銃口に黒い魔力光が集中する。

「渡して寝てろッ！」

《Ｒａｙｓ　Ｓｈｏｔｓ》

アルは間髪入れず引き金を引いてなのはへ黒い三発の魔力弾を放つ。

「っ！」

なのはは発射と同時に上昇して攻撃を回避する。だがなのはを追ってアルも上昇する。

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ》

アルはまるで影が走るか様に、一瞬でなのはの上を取る。

《Ｆｌａｓｈ　Ｍｏｖｅ》

だがなのはの短距離移動速度は、フェイトの高速移動に負けず劣らずのスピード持っており、その持前の動きで今度はなのはがアルの上を取る。

しかしアルの握る銃口はなのはを捉えて逃がさない。

「レイズショット！」

ウルフの銃口から黒い魔力弾が二つ同時に発射される。

放たれた二つの魔力弾は二重螺旋を描き、なのはに向かって一直線に駆ける。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

レイジングハートの柄からカートリッジが一発排出され、なのはの周囲に桜色の魔力球が現われる。

「シュート！」

なのはが思いっ切り杖を振るうと、周囲に出現した魔力球をアルの魔力弾に向かって放ち相殺させる。

それに伴って爆煙が広がるが、二人は共に下がってまだ煙で相手が見えないのにもかかわらずデバイスを構える。

「ウルフ！」

《Ｒｏｇｅｒ》

アルの右手に持っていた一丁の拳銃が二丁となって、アルの左手に現われる。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

二丁の拳銃それぞれが弾薬を排出し、それぞれの銃口に黒い魔力が収束する。

「レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

レイジングハートは一発のカートリッジを排出し、バスターモードに切り替わる。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

二発の弾薬を続けて排出し、杖の先端に桜色の魔力が収束する。

アルとなのはの二人は、自身のデバイスを煙の向こう側にいる相手ではなく、“空に向かって”構えた。

《Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ》

《Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｂｕｓｔｅｒ》

魔力の収束が終わり、一気に魔力が膨れ上がる。

『シュート！！』

爆ぜる様に溢れ出る魔力の奔流。

同時に空へと延びる二色の砲撃。

だかそれは平行線を描く事は無く、辺の無い三角形の屋根を描く様

に衝突し、二つの砲撃が鬩ぎ合う。

「なっ！？」

なのはの表情が驚愕に変わる。

その直後、均衡が崩れた砲撃が誘爆し、魔力の放射が止まる。

「結界を破壊しようなんざ、バレバレなんだよ！」

《Ｇａｎｒｅｉｚｕ　Ｓｈｏｔｓ》

アルは両者を遮る煙を突き破ってなのはの目の前に現われて二丁の拳銃の引き金を引き、それぞれの銃口に展開されている黒いミッド式魔法陣から黒い魔力弾が連射される。

「っ……！」

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》

なのははは右手を突き出して桜色のミッド式魔法陣を展開して連射される黒い魔力弾を弾いて耐える。

このまま続けても埒が明かないと判断したアルは、片方の銃で魔力

をチャージする。

《Ｅｘｐｌｏｄｅ》

連射していた方の銃を下げ、魔力をチャージした方の銃を突き出す。

「……いい加減吹き飛べ」

至近距離で発射された魔力弾がなのはのシールドに接触したその瞬間。

黒く眩い光と共に凄まじい衝撃と轟音が響き渡る。

「きゃあああ！！」

アルは後ろに跳んで衝撃を減らし、轟音と閃光はウルフがきっちりと防御。

だがなのはは衝撃に耐えきれずに後ろへと吹き飛ばされ、近くの空き地に叩き落されて粉塵が舞い上がる。

「……」

アルは銃を下ろしてなのはが落ちた所を見つめる。

《どうした？　いつものお前らしくない闘い方だぞ？》

アルの肩にウルフが現われて耳元で話しかける。

《いくら相手が管理局のエースだとしても、今のお前の“力”ならばあの程度――》

「わかってる。だが相手は仮にもエースなんだ。慎重になっても可笑しくないだろ」

《……今はそう言う事にしておこう》

そう言うとウルフもなのはの方に目を向ける。

そこは既に粉塵が晴れて見通しが良くなっており、なのはがレイジングハートを支えにして膝を着いているのが見える。

「はぁ……はぁ……」

《Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｏｋａｙ？》―大丈夫ですか？

「うん……だい、じょうぶ。そこまで大きなダメージは無いし、ち

ゃんと受け身は取ったから」

やや息を切らして額に汗をにじませながらレイジングハートへ話しかける。

汗を拭う事もせず、そのまま上空にいるアルを見上げる。

（あれ？　なんで攻撃してこないんだろ）

今の自分は格好の的だろうに。そう思うなのはは一向に動こうとしないアルに疑問を持つ。

そして見た。アルの眼に自分が映っているのを。

ただ鏡の様に反射している意味ではなく、間近で見ていた時とは違う。

敵意でも戦意でもない。自分の中に何かを見ている。

そんな瞳で、アルはなのはを見つめていた。

《流石は管理局のエース。これほどまでに力の差があると言うのに……よく粘る》

アルと共になのはを見ていたウルフが呟く。

「不屈っていう二つ名は伊達じゃない、か。さっさと屈してくれた方が個人的には嬉しんだけどな」

《アル。何度も言うようだが》

「分かってる！　何度も言うな！」

《ならば早く決めろ。いくら似ていようと……情けは無用だ》

そう言うと、ウルフの姿が消える。

アルは深呼吸すると、キッと目を細めてなのはを睨む。

「２ｓｄモード」

アルの掛け声で二丁だった拳銃は一度一丁に戻り、黒い光となって両手で持つようなアサルトライフルへ変化し、アルの右手に収まる。

足下に黒いミッド式魔法陣が現われ、アルは浮遊魔法を解除してその魔法陣に降り立つ。

「……狙い撃つ」

《Ｓｈｏｏｔ　Ｍｏｄｅ》

アルはアサルトライフルを両手で構え、体制を低くする。
それと同時にアサルトライフルの銃口の前に魔法陣が展開される。

「スナイプシュート！」

アサルトライフルの銃口に魔力が収束し、夜の空を一閃する閃光が放たれる。

「っ！」

《Ａｃｃｅｌ　Ｆｉｎ》

レイジングハートが足に桜色の羽根が出現させて羽ばたかせ、なのはを空へ一気に上昇させる。

その直後、なのはがいた所にアルの放った閃光が落ちて爆発する。

「……シュート」

逃げるなのはを追って、アルは再びなのはに向けて標準し直し、引き金を引き、再び黒い閃光が走る。

なのはは左へ避けて閃光を回避する。しかしアルは焦る事無く引き金を引き続ける。

だがなのはも避ける。上に下に右に左に、縦横無尽にアルの撃ってくる閃光を避けまくる。

しかし、突如その動きが止まった。

「え？」

なのはが自分の身体を見て見ると、手も足も胴も腕もデバイスも至る所に黒い光のリングやハコ状のバインドに捕えられていた。

先程からアルが放っている閃光には、設置型のバインドを仕掛けてそこへなのはを誘導したのだ。

そして、なのはをバインドで捕えたと言う事は。

「あ……」

なのはの目の前に入って来たのは、アサルトライフルの銃口に大きな魔力を収束しているアルの姿だった。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ライフルから三発の弾薬が排出され、アルは新しくカートリッジの入った八発入りリボルバーをライフルに装填する。

アルは収束する魔力の向こう側をウルフを通して狙いをつける。

その間もなのはは脱出を試みる。

「お願い……！　外れてっ……！」

が、何重にも掛けられたバインドを直ぐに解く事は出来ず、悪戦苦闘。

しかし、そうしている間にアルは魔力の収束を終える。

「コレで……終わりだ」

小さく呟いたその言葉がなのはに届いたかは分からないが、アルは一度深呼吸をし、更に集中する。

「目標を……撃ち砕くっ！」

収束された魔力が一気に圧縮され、展開された二つの黒いミッド式

魔法陣に挟まれる。

《Ｔａｒｇｅｔ．Ｌｏｃｋ》

「シューティング――」

更に環状魔法陣が射線上に展開し、完全になのはをロックオンする。

回避できない。その事実がなのはの表情に恐怖が宿る。

「ブラスター！！」

圧縮された魔力が一気に解放され、環状魔法陣の道を一気に突き抜けて行く。

抑圧された魔力が出口を見つけて噴き出す様に、閃光となって大出力の砲撃が放たれた。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ》

レイジングハートがカートリッジを消費して前方に強固な桜色のバリアを全力展開する。

その直後。

なのはのバリアとアルの砲撃が激突し、辺り一帯に凄まじい閃光と衝撃が走る。

「ぐっ……うぅ！」

必死に耐えるなのは。

だが徐々に均衡がズレ、なのはのバリアに亀裂が入る。

「撃ち……砕けぇぇ！！」

アルは大きく叫び、更に二発の弾薬を排出。それに伴って放出される魔力が一気に膨れ上がり、更に勢いを増して放たれる。

威力を増して追撃された砲撃は、あっという間になのはを展開するバリアごと呑み込んでしまう。

しかし、なのははそれでも耐えていた。

バリアの維持に精神を集中し、魔力も惜しむ事無く注ぎ続ける。だがそれでも、少しずつ少しずつ、亀裂は大きくなって広がって行く。

もう駄目だと諦めかけたその時、延々と続いていた砲撃止んだ。

（助かった……？）

そう思った次の瞬間。

アルがなのはの目の前まで接近し、デバイスの銃口を向けていた。

自分はまだバインドが解けておらず身動きは取れない。更に展開しているバリアも破れかけていて、次の一撃には耐えられない。

そしてアルは自分の懐にいる。それはなのはからの攻撃が出来ないことを意味する。

「……ッ！」

一瞬、アルは苦痛に表情を歪め、それでもライフルの引き金を引いた。

銃口から放たれた黒い閃光はあっさりとなのはのバリアを撃ち抜き、真下のコンクリートになのはを叩き込んで粉塵が巻き起こる。

「はぁ……はぁ……」

銃を降ろし、深く息をするアル。

先程の一撃はアルも魔力をかなり消耗したようだ。

アルは直ぐに息を整え、地面に倒れるなのはの下に降りてゆく。

「っ……」

《まだ意識があるか……手加減したな？アル》

再び狼のホログラムでアルの肩に現われたウルフがアルを咎める様に呟く。

だがアルはそれには答えず、ただ足下にぐったりと横たわるなのはを見つめるばかり。

《まあいい。離脱の準備をするぞ、かなりの魔力を使ったからな。結界の維持限界が間近に迫っている。取り出すならば早めにしろ》

ウルフはそう言うと、姿を消し逃走の為の転移魔法を準備し始める。

しかしアルは一行に動こうとせず、リンカーコアを抜き取ろうとしない。

《アル、何をしている。時間がない、抜き取るなら早くしろ》

ウルフが急かす。

だが、アルは動かない。

《アル！》

「……ッ！」

ウルフが怒鳴り上げ、漸くアルは懐からあの雫の結晶を取り出す。

「星は目覚め――」

雫の結晶の起動させるキーワードを唱えようとした瞬間。

アルは自分を見上げるなのはの眼を見てしまった。

――お兄ちゃん。

「ッ！？」

アルの眼に映るなのはが、ある人物に重なって見えた。

思わず半歩後ずさるアル。

なのはのリンカ―コアを抜き取る事を心の奥で拒絶する自分がいる。
それがアルにリンカ―コアの抽出を躊躇させる原因となっている。

《アル・スフィニール！！》

先程よりも大きな怒鳴り声を上げるウルフ。

だがアルとて分かっている。

ここでなのはのリンカ―コアを抜き取れば、今後の活動もしやすくなり、自分の目的を達成に一気に近づくと。

だが、それでも続きを唱える事が出来ない。

唱えなければリンカ―コアは手に入らない。悩むだけの時間は無い。
だがどうしても思い出してしまう。

――お兄ちゃん……助けて……。

大切な人の助けを求める声が、その姿が、今のなのはと重なる。

「くっ……！　……くそッ！！」

アルは悪態を吐きながら雫の結晶を力一杯握り、懐へ強引に突っ込

む。

そのままなのはに背を向けてウルフに指示を出す。

「ウルフ、離脱するぞ！　結界を解除しろ！」

《……了解だ。結界を解除する》

ウルフがそう言った途端、結界が天井からゆっくりと解けてゆく。

《転送！》

アルの足下に黒いミッド式魔法陣が展開され、アルの姿が薄れていく。

その途中で、アルは少しだけ振り返る。

「あ……」

その表情は悲しみと後悔に染まっており、なのはの心を大きく揺らした。

そして、黒い光がアルを包み込んでいき、転移魔法が発動する。

その間際。

「すまない」

小さく小さく呟いて消えた。

第四話　アースラ（前書き）

囚われし星の皇女、誇り抱きし星の子の心を守らんと歌を紡ぐ。

第四話　アースラ

日本のどこかの森の中。

静まり返った森に朝が来た事を告げる朝日が差し込み、おそらく夜の内に降ったのであろう雨粒が朝の陽ざしを受けて、森が美しく輝く。

それに呼応するように森の生き物たちが目を覚まし、森が目を覚ます。

「ぅ……」

そして、この森の主とも言える様な大きな樹の洞に身を隠す様に毛布に包まり、膝を抱えて睡眠を取っていたアルが目を覚ました。

一瞬、洞に差し込む日差しに眼が眩むも、ゆっくりと洞から外に出て大きく背を伸ばす。

《目が覚めたか？》

屈伸や身体を捻って身体を解すアルに、狼のホログラムでウルフがアルの肩に現われた。

「ああ。最高の気分だよ」

《そうか。あまり眠れなかった様だな》

最高の気分だと言ったのにもかかわらず、ウルフはアルが寝不足だと判断した。

それは、アルがいい気分だと答える時は大抵体調不良の時だからだ。この場合、昨日はあまりよく眠れなかったと判断するのが、正解である。

《昨日、お前はあの少女からリンカーコアを抜き取るのを躊躇していたな。それが原因か？》

ウルフがそう尋ねると、アルは屈伸をやめて立ち上がり、黙って空を見上げる。

見上げた木々の隙間から見えた空は、光が闇を追い立てる様に夜の闇が西へと引いて行き、東から青空が広がって行く。

「……思い……出したんだ」

暫らく空を見上げていたアルが、静かに語りだした。

「アイツから……リンカ―コアを抜き取ろうとした時……」

《……》

「アイツが……」

――助けて……お兄ちゃん……。

「アイツがオレに……助けてって言ったのをっ……！」

目を閉じれば、まぶたに焼き付いているかのように鮮明に、克明に思いだせる。

自分に力がなかったから、あの子を助けられなかった。

自分に覚悟が無いから、あの子は今も一人で泣いている。

そんな想いがアルの心の中を駆け巡り、止めどなく溢れてくる後悔と怒り。やり場のない感情を抑え込もうとギリギリと歯を食いしばり、血がにじむ程に強く拳を握りしめる。

《アル。お前はあの少女に始めから“アレ”を重ねて見ていたのではないか？》

「……ッ！？」

ウルフの一言にアルはビクッと震え、俯いて黙ってしまった。

しかしウルフは元々答えるとは思っていない様で、直ぐに口を開いた。

《確かに、あの少女は非常によく似ている。私も一瞬、間違えてしまった程にな》

ウルフは淡々とアルの考えている事を告げて行く。

アルはそれを黙って聞き続ける。

《だが、どんなに似ていようとあの少女はイリアではないのだ》

「……分かってる。それは、ちゃんと分かってる……！」

でもっとアルは続ける。

「でも……イリアを自分の手で傷つけてる様で……身体が言う事を聞かないんだ……！」

《……済まなかった》

「いいさ。お前はオレの為に言ってくれたって事ぐらい分かってる」

アルはウルフと顔を合わせる事はせずに言う。

（やはり……アルに悪事は心身ともに疲弊させるだけ、か）

ウルフが見つめるアルの横顔は今にも泣きそうな程にボロボロで、流石のウルフもなにも言えなくなってしまった。それはウルフにもアルの気持ちが痛いほどよくわかるからだ。

ウルフは元々アルの父親が持っていたデバイスで、アルを生まれた時から知っている。そしてアルにとって、イリアがどれほど大切でかけがえのない存在であるかもよく知っている。

だからこそ、そのイリアとよく似ているなのはを襲ったアルの苦しみは、計り知れない。

（テト、ルル。私は、お前たちに託された子供たちを……守ってやる事も……支えてやる事も出来ない）

ウルフは空を見上げ、今は亡き元マスターで、アルの父親と母親に懺悔する。

イリアは今も囚われ苦しんで、アルは自らの無力に嘆き、ウルフは両親から託された二人を守る事が出来ず後悔する。

（全てアレが原因だ……。アレが現われなければ、こんな風にアル

が苦しむ事も無かった）

運命とは残酷だ。

幸せであればある程、その人間を不幸にし、絶望の底に叩き落す。

勿論、アルもウルフもイリアもテトもルルも幸せだった。永遠にあの当たり前な幸せが続いて行くと信じていた。

だが、その幸せはいとも簡単に壊された。

イリアは自由を奪われ死ぬ事も許されず、アルはイリアを助ける為に自らを殺して人の命を奪う。

「……今度は上手くやる」

先程まで苦痛に歪んだ表情をしていたアルが、決意を秘めた声で呟いた。

ウルフがアルの顔を見てみれば、その表情は戦闘モードの冷徹な仮面を被った様に無表情だった。

《アル……いいのか？》

「ああ。弱音は吐いたし、夜は明けた。まだ良質のリンカーコアを持ってる奴はいる」

《まだこの世界の魔導師を狙うのか？　だがそれはイリアとよく似たあの少女もを敵にするという事だぞ？　それに奇襲は失敗し、向こうは警戒している筈だ》

「構わないさ。どうせ今のオレには勝てない。それに……オレは立ち止まれないんだっ」

焦りと必死さがごちゃ混ぜになった様な表情で言うアル。

そんなアルを見ながら、ウルフは止めようとはしなかった。

だが……

《わかった。だが今日はやめておけ》

「大丈夫だ。オレはやれる」

《ここ数日は休みなく戦闘の連続だ。それに、昨日は自身の魔力を全て使い切ってしまったのだろう？》

「それは……」

《ならば今日だけでも休め。少しでも疲労を回復させろ。でなければテトとルルに顔向けが出来ない》

「……わかった」

アルはウルフの言う通りにする為、近くの街を探し始める。
最低でも今朝はまだ何も口にしていないので、流石に空腹なのだろう。

「あった。金は……まぁ銀行の金庫でも漁ればいいか」

《……》

疲れた表情で小さく呟くアルを見ながら、ウルフは思った。
もし、あの頃のまま時が進んでいたのなら。この家族は今も幸せに暮らしていたのだろうか。
もし、あの悲劇が起きなければ。誰も傷つき涙する事も無かったのだろうか。
もし、アレが自分たちの前に現れなければ。アルもイリアも、光の中で生きていたのだろうか。
そんなＩＦの可能性が、ウルフの思考にノイズの様に過った。

◆◇◆◇◆◇

「う……ぅぅん……？」

眩しい人工の光に照らされて、なのはは目を覚ました。

瞼を開いてまず視界に飛び込んできたのは、白い無機物の天井だった。

ムクリと上半身を起こして、まだ思考の働かない頭を動かして辺りを見て見れば、自分がベットに寝かされていた事に気づく。

徐々に起床してきた頭で此処が次元空間航行艦船、時空管理局・巡航Ｌ級８番艦アースラの医務室だと理解した。

「あら？　なのはちゃん。眼が覚めたのね」

そこに薄金色のショートヘアの白衣を着た女性、シャマルが医務室に入って来た。

「シャマルさん……」

「おはよう。なのはちゃん」

「あ、おはようございます」

ニコニコとシャマルが挨拶したのに釣られる様に慌てて挨拶するなのは。

「どう？　昨日はよく眠れた？」

「ええっと……はい。え？　昨日？」

シャマルが口にした言葉の一部に違和感を案じたなのはは、何故自分が此処で寝かされていたのかを聞いてみた。

「あの、なんで私ここに……」

「昨日、何があったか覚えてる？」

「ええっと……」

なのはは昨日の事を順々に思い出してみる。

昨日はいつも通り学校に行き、いつも通りに帰宅。そして家族と食事してからお風呂に入って、寝ようとしたら例の魔導師連続襲撃犯に襲われて、危うくリンカーコアを奪われそうになった。

昨夜起こった事を全部思い出したなのはは、何故自分が此処にいるのかを理解する。

それと同時に医務室の扉が開き、執務官服のクロノが入室してきた。

「なんだ、起きていたのか」

「クロノ君」

クロノはなのはが起きているとは思わず入って来た様で、あまり驚いてはいない様子だが、

「シャマル。なのはの怪我の具合はどうなんだ？」

「もう大丈夫よ。元々それほど大きな怪我をしてた訳じゃないし、魔力の使い過ぎと強い衝撃で気を失ってただけみたいだったから」

「そうか」

クロノはなのはの容体を確認すると、少し安心したように表情を緩ませた。

それを見たシャマルが意地悪い笑みを浮かべて呟いた。

「エイミーさんって言う恋人がいるのに浮気ですか？　クロノ執務

官」

「なっ！？　何を言い出すんだ君は！　僕とエイミィはそんな関係じゃない！」

顔を真っ赤にして否定するクロノだったが、その言葉には全く説得力は無い。

それでも否定と言う名の言い訳を続けるクロノを見ていたなのはは、思わず笑ってしまう。

「あははは！」

「君も何を笑っているだ！」

ギャーギャー！クロノが文句を言っているが、二人の耳には到底届かない。

そこへ、医務室の扉が開いて人が流れ込んでくる。

『なのはが目を覚ましたって本当！？』

フェイト、アリサ、ヴィータの三人が必死の形相で医務室に飛び込んできた。

「君らは……此処は医務室だ。もう少し静かにして貰いたんだが……？」

クロノが思わず頭を抱えて呟くと、それと同時に再び医務室の扉が開いた。

「ごめんな～クロノ君。三人ともなのはちゃん大好きで止められへんかったんよ～」

「君の場合、面白がってけし掛けたの間違いだろう？」

「昨日の内に大事にはならないってシャマルさんに言われてた筈なのに」

「全く、落ち付きの無い奴だ」

「仕方ないさ、ザフィーラ。あの三人は、なのはの事が好きで好きで仕方無いのだ」

更にその後ろから、はやてとすずか、そしてザフィーラとシグナムが歩いて入って来た。

「なのは！　怪我は？　何処も痛くない？」

「うん。そんなに酷い怪我じゃないから大丈夫だよ、フェイトちゃ

ん」

「なのは！　熱は！？　どっか血とか出て無いよな！」

「出て無いよ、ヴィータちゃん」

「落されたって聞いてびっくりしたじゃない！　無事なら無事って言いなさいよ！」

「アリサちゃん……無茶苦茶だよ」

最初の内は笑顔で応えていたなのはも、流石の三人のテンションの高さに疲れたのか笑顔が引き攣り始める。

「はいはい。三人とも、なのはちゃんはまだ病み上がりなんだから無理させないの！」

『ご、ごめんなさい……』

シャマルの一括に三人はしゅんと縮こまり、並んで反省。

それを見たシャマルは「よろしい……なんてね♪」と言って明るく振舞い、周囲がクスクスと笑い始める。

だが三人ともなのはを心配しての行動であり、別に嫌がらせをしていた訳でもない。

なのはもちゃんとそれは分かっているので、一しきり周りと一緒になって笑った後、感謝を籠めて三人に向けて言った。

「フェイトちゃん、ヴィータちゃん、アリサちゃん。心配してくれてありがとう。でも私は元気だよ♪」

フェイトはその言葉にホッと胸を撫でおろし、ヴィータは恥ずかしそうに頬を掻いて余所を向き、アリサは頬を紅くして「げ、元気でなくちゃ困るのよ！」等と言って更に周りに笑いを齎した。

それから暫らくして。クロノは昨日の事で会議室で話しがあるからと他のメンバーと共にぞろぞろと移動して行き、残ったシャマルはなのはの着替えを手伝って後から共に行く事となった。

因みにアリサとすずかの二人はアースラチームの局員によって丁重に自宅に送って行った。

◆◇◆◇◆◇

アースラの会議室。

そこには先のメンバーと、アースラの管制のエイミィ・リミエッタ。
そしてアースラ艦長にしてクロノの実母、リンディ・ハラオウンが
既に席に座り、なのはとシャマルを待っていた。

「失礼します」

「遅くなりました！」

会議室の扉が開き、シャマルとなのはが敬礼しながら入室してきた。

「なのはさんのもう体は大丈夫？」

「はい。まだ戦闘は禁止ですが、日常生活や動作には問題ありませんよ。リンディ艦長」

シャマルがなのはの代わりにニコやかに応え、リンディもニコりと微笑み返す。

「そう？　でも無理はダメよ。なのはさん」

「はい。ご心配お掛けしました」

「じゃあ、席に着いてくれ。そろそろ始めるから」

クロノの指示に従い、なのははフェイトの隣に、シャマルはヴィータとシグナムの間の席に座る。

全員が席に着いた事を確認すると、コホンと席を一つし、和やかな場の空気を真剣な物へと切り替える。

「みんなももう分かっているだろうが、昨日のなのはが襲撃された件だ。あまり詳しい事は今まで何一つ分からないまま半年間、民間人、管理局員、犯罪者を問わず魔導師という魔導師を襲い、リンカーコアを奪い去られている事件で進展があった」

クロノは視線でエイミィに指示を出し、エイミィは直ぐに反応して机の中央のモニターに、アルが防護服（バリア・ジャケット）を纏ってなのはと戦闘している場面の静止画を表示する。

「こいつが……」

「ああ。魔導師連続襲撃事件の犯人だ」

ヴィータが憎々しげに呟いた言葉をクロノが頷いて肯定する。

「レイジングハートが一部始終を録画してくれていたから手に入ったデータだ」

クロノはモニターを操作して静止画から動画へと切り替える。

その動画はなのはとアルが激しい戦闘を繰り広げている所だった。

アルが放った二重螺旋を描く魔力弾をなのはが撃ち落としてお互いの姿と前方の視界を塞ぎ、空へ砲撃を放って結界を破壊しようと砲撃を放つが、アルの方も砲撃を空へ放って相殺させる。

そのまま二人を遮る煙を突っ切ってなのはに接近し、地上に叩き落す。

「こいつ、強ぇ……」

「ああ。一つ一つの動きに無駄がない」

「それだけじゃない。なのはの行動を先読みして動揺を誘い、その隙を容赦なく攻撃してる」

ヴィータ、シグナム、フェイトがアルの卓越した戦闘技術に驚きを隠せずにいた。

だが、それを実際に繰り広げていたなのはが一番驚いていた。

なぜなら、改めて客観的に昨夜の戦いを見て見れば、完全に次に自分がし様としている行動を読まれ、更に利用されているからだ。

（凄い……私、本当に“手加減”されてたんだ）

改めて思う。

あの時、アルのデバイス、ウルフが言っていた言葉は微かになのはにも聞こえていた。

――手加減したな？

あの言葉は嘘でも虚勢でも無く、本当に手加減されていたのだ。

あれほど自分の動きを読まれていれば、簡単に落せていた筈なのだから。

「にしても凄いわね、彼。アレだけの高位の結界魔法を使っていながらこれほどまでなのはさんと戦えるなんて……」

リンディが感心した風に呟く。

確かに、外部からの干渉や転移の一切合財を通さない強固さに加え、内部から外部への転移も出来無くしてしまうほどの完全な捕獲結界。それをこれほどの戦闘を繰り広げながらも維持し続けるのは、流石に此処にいるメンバーでも無理だ。

その事を考えると、アルはどれほどの能力を秘めているのだろう。

「確かに彼がこれほどまでに強いとは思わなかったが、問題はそこじゃない。エイミィ」

「はいはいっと」

エイミィはモニターを操作して別のモニターを開いて、アルが懐から出した雫の様な形の宝石の様な物を映し出す。

「これが何なのか、昨日の内にユーノに調べさせた」

「ユーノ君に？」

「ああ」

クロノは頷くと、モインターを一つ開く。

そのモニターには……

『ク～ロ～ノ～！』

無限書庫で、今にも怒り狂いそうなほどの怒気を含んだ声でクロノの名を口にするユーノが映った。

「やあ、元気そうで何よりだ」

『コレが元気に見えるんならミッド最高の眼科に行く事をお勧めするよ』

「生憎だが僕の視力は両目ともに1．2だから必要無い」

『なら脳外科に行って解剖されてくればいいよ』

いつになく黒いユーノにリンディ以外が若干引いている。

『全く、三日ぶりに寝られると思った矢先にいきなり仕事を持ってくるなんて……。クロノには常識がないの？』

「君はこき使われてなんぼだろう？」

理不尽とはこういう事を言うのだろう。

なのは達の思考が完全に一致した瞬間だった。

「君の仕事の本分は調べ物で、それは君の得意分野だろ？　ユーノ・スクライヤ司書長」

『ぐっ……』

遂に何も言い返せなくなって唸るユーノ。

口でクロノに勝負を挑んだユーノが悪い。そう思った一同だったが、それは会えて口にしない。

「それで？何かわかったか？」

クロノが話しを本題に戻すと、ユーノは小さく溜息を吐いて、仕事の顔になって昨夜調べた結果を話し始めた。

『結論を言って、アレが危険なロストロギアだって事しか分かって無い』

ユーノはそう言うと、アースラに昨日の内に調べられるだけ調べたデータを転送してくる。

『まず、アレは三つのロストロギアから成り立っているロストロギアの一つだよ』

三つ開いたモニターの内の一つが大きく拡大される。

そこには、先程の雫の様な宝石が映っていた。

『一つ目はコレ。“星の雫”』

「あれ？　でもコレ……犯人が持ってたのと色が違わない？」

フェイトがそう言うと、他のメンバーも確かにそうだなと気付く。

アルが持っていた方は下半分が七色の光に染まっていたが、ユーノが表示した方には全く色は無く、埃をかぶった曇ったガラスの様な色をしていた。

『その説明をする前に、この星の雫はリンカーコアを抜き取って吸収し、目に見える形で蓄積される能力がある』

「つまり、色の違いの数だけ魔導師のリンカーコアを抜き取られているって事か」

クロノの補足に、一同が息を呑む。

星の雫の下部に見える七色だが、その色は“七色に見えるだけ”で実際には何十色という魔力光が詰まっているのだ。だがそれが、交わる事無く溜まり続け、七色の光に見えるのだ。

『次行くよ』

二つ目のモニターが拡大表示させる。
そこには、十字架に六亡星を重ねた様な魔法陣が描かれた儀式の台座が映し出されている。

『二つ目はコレ、“星の器”』

「星の……器？」

なのはが復唱し、はやてがユーノに問い掛ける。

「器って、あの容器や食器とかの器か？」

『まぁ見た様な物だけど、この場合は、受け入れるっていうのが正しい表現かな』

「それで？　コレにはどんな能力がある？」

クロノがユーノに説明を急かす。

『これは、星の雫で集めたリンカーコアを全て受け止めて鍵を通して契約者に与える能力がある……らしい』

「らしいって……ユーノ、いい加減な仕事をするな」

『しょうがないだろ！　まだ調べてる途中なんだよ！　大体、あんな時間に呼び出されてまともな探し物が出来ると思うな！』

あまりにも理不尽なクロノに遂にユーノが吼えた。

だがそう言いたくなるユーノの気持ちは、今この場にいるクロノ以外にはちゃんと伝わっている。

『もう、さっさと次行くよ』

流石に疲れて来たのか、ユーノは溜息を吐いてモニターを操作し、三つ目のモニターを拡大する。

そこには、映像データは無く。ただ古い言葉での記述が記されていた。

『三つ目は“星の鍵”。これが一番重要なんだけど……』

「鍵と言うが、どんな鍵なんだ？」

シグナムは疑問を口にするが、ユーノは困った様に頭を掻いて説明し出す。

『他の二つは映像データがあったんだけど……コレについては管理局も全く情報がないみたいなんだ』

「つまり、このロストロギアは用途不明、能力も不明、形状不明っていう事か」

『でも、三つで一対のロストロギアの様だから……』

「その起動に必要なのか、あるいは他の二つを制御する為の物か」

『うん。そんな所だと思う。それと……』

ユーノはモニターの外から一冊の分厚い本を取り出してみんなに見せる。

「なんや？　それ」

『三つのロストロギアの事が記されてた記録書だよ。コレを元に雫と器を見つけたんだ』

そう言うとユーノはペラペラとページをめくる。

『それで、その途中で興味深い記述を見つけたんだ――っと、あった』

ユーノは探していたページを見つけると、本を持ち上げてモニターに向ける。

そこには古代語で書かれたであろう記述がギッシリと書き詰められていて、所々に四角で囲った挿絵の様な図もある。

「……古いミッドチルダの文字か？」

『流石クロノ、正解だよ。これは約三百年ぐらい前まで使われていたミッド語だ』

「なんて書いてあるの？」

なのはが訊ねると、ユーノは解読した文を読み上げる。

『星が嘆く時、星が流した涙は雫となって悪しき命を吸い上げる。星が笑う時、大地に器が刻まれ全ての命を受け入れる。星が願う時、命に鍵は宿り悠久の揺りかごに運ばれる』

ユーノが全部を読み上げて一同を見ると、全員が頭の上に疑問符を浮かべていた。

『まあ、コレはそれぞれのロストロギアの生まれた経緯の様なモノなんだけど……わかった？』

「正直、全く分からない」

『……だよね』

クロノの一言にユーノは思わず苦笑する。

しかし直ぐに表情を戻して話しを続ける。

『さっきのは三つのロストロギアの誕生を顕した物だけど……こっからは凄いよ』

ユーノはそう言うと、一ページめくって再び読み上げる。

『星が落とした雫に魔の命を捧げて満たせ。星の鍵を宿した者に満たされた雫を与えよ。星の刻みし器に満たされた雫を抱いた鍵を落とせ。さすれば汝に無限の力が与えられん』

「それって……！」

『多分、ううん。きっとこれが犯人の狙いだろうね』

三つのロストロギアを集め、条件を満たした者には無限の力。つまり絶対的な力が手に入ると言うのだ。

もしもコレが本当なら、犯人は手にした力で何をするかわからない。

そもそもどんな力かもわからない。
だがこれだけははっきりと言える。

『このロストロギアは危険だ。闇の書を超えるほどに』

闇の書。

それははやてと四人の守護騎士たちが深く関わった事件の原因となったロストロギアだ。

下手をすれば世界すらも壊しかねない危険なロストロギア。

それを超えるかもしれないロストロギアが、今まさに悪用されている。

「彼の目的がその力を手に入れる事かは分からないが、彼を捕まえなければ未曽有の危機も考えられる。艦長」

「ええ、分かってるわ」

リンディは立ち上がって全員の顔を見渡して宣言する。

「なのはさんが襲われた事もあり、おそらくこの事件はアースラが担当する事になるでしょう」

おそらく本局ではもうそういう話になっている事だろう。

なぜなら、この船にはＡＡＡランクを超える魔導師や騎士が何人も乗っており、ＰＴ事件、闇の書事件を手がけた本局でも有名なアースラチームだからだ。

「本局から正式に一任されたら、この魔導師連続襲撃事件の重要参考人の確保に全力を尽くします！」

『はい！』

「それでは、なのはさんの体調もありますし、今日はこの辺で……解散♪」

艦長であるリンディの一言で、その場は解散する事になった。

因みに、ユーノは適当に挨拶してモニターを切って仮眠室へとヨロヨロと歩いて行ったのは余談である。

第五話　短い休日（前書き）

誇り抱きし星の子は抱き続けた誇りを捨て、咎人の道を歩む。

第五話　短い休日

アースラでの会議が終了し、各々が会議室を後にしていく中。なのは一人だけが浮かない表情で席に座ったままでいた。

それに気が付いたフェイトがなのはに声を掛ける。

「なのは、どうかしたの？」

だがなのははフェイトの呼び掛けに応えず、ただただ俯いて考え込むばかり。

フェイトはそんなのはを見て、今度は少し大きめな声で呼び掛ける。

「なのは」

「ふぇ？　あ、何？　フェイトちゃん」

漸く返事をしたなのはだったが、全くフェイトの声が聞こえていなかったらしい。

「どうかしたの？　何だか元気がない様だったんだけど……」

「そ、そうかな？　私はいつも通りのつもりなんだけど」

と笑顔で言うなのはだが、明らかにその笑顔は引き攣っていて、作り笑いであると言う事は誰が見ても分かるモノだった。

「そうは見えへんけどな～」

「なのは。やっぱりどっか痛いのか？」

はやてとヴィータがなのはの傍へとやってくる。

気がつけば、周りにはクロノ達全員が集まってなのはの事を心配していた。

なのはは昨夜の襲撃で落されている。

それほど酷い怪我こそしてはいないが、身体にダメージが残っている事かもしれないと全員が心配しているのだ。なぜなら、多少改善されたとはいえ、なのはは自分がどんなに辛くても絶対に表に出したりはせず、自分の中で完結させてしまうという悪い癖があるからだ。

「身体……やっぱり辛いの？」

「そんな事無いよ。シャマル先生が直してくれたし」

今度こそ笑顔で元気だとアピールするなのは。しかし、直ぐに表情を暗くしてだた…っと続ける。

「ただ……ちょっと気になる事があって」

「気になる事？」

なのはの一言にクロノが首を傾げる。

なのははそんなクロノに頷いて見せ肯定すると、ぽつぽつと語りだした。

「犯人が私を倒して動けなくした時……リンカーコアを奪わなかったのはどうしてだろうって……」

「それは、結界が維持できなくなったからじゃないの？」

フェイトが答えるが、なのはは黙って首を横に振って否定する。

「例えそうであったとしても、確実に私のリンカーコアを抜き取れたはずだよ。だって、その時間は十分にあったから」

そう、確かに時間はあった。

だがアルはなのはからリンカーコアを抜き取れなかった。いや、抜き取らなかった。

アルの自分を見つめる表情が酷く辛そうで、その眼は後悔と恐怖、そして悲しみが宿っていた事を。朦朧とした意識の中でもはっきりと覚えている。

「それに、彼が逃げる時……『すまない』って言ってた」

アルが転移する間際、一瞬だけ振り返って小さく小さく呟いた一言。

――すまない。

酷く悲しそうに、とても後悔したのに、やり場のないやり切れない想いを押し殺した様な表情で呟いた様になのはには見えた。

「すまない……か」

クロノが神妙な顔で呟き、なのはが肯定する様に頷く。

「だから、何か理由があるのかなって……」

「理由か……謝るぐらい罪悪感を覚えているって事は、自分の意志でリンカーコアを集めてはいない可能性もあるな……」

クロノは一人ブツブツと呟くと、おもむろにモニターを開いて誰かを呼び出す。

程なくしてその呼び掛けに応じた人物が不機嫌そうに応えた。

『クロノ～！　君には本当に常識っていうのが欠けてるんじゃないかな?!』

たった今、今、寝ようとしていた様子のユーノが先程よりも不機嫌な状態でモニターに映る。

その瞬間、全員が思った。鬼だな、クロノ……と。

「君もかなり眠たそうだし単刀直入に聞く」

『誰のせいだ誰の！　……で？　何が聞きたいって』

「もし犯人に何かしらの理由があって、その理由の為に仕方なく行動していたとしたら……君は何を思いつく？」

ユーノは眠い眼を擦ってクロノの質問にあった答えを想像する。

『そうだな、僕だったら……。犯人はフェイトの時みたいに、誰かに無理やりやらされていても可笑しくないと思うよ』

「そうか……みんなはどう思う？」

『おい！』

ユーノの意見を聞きながら平然と周りにも意見を聞き出すクロノに、思わずユーノがツッコミを入れる。

「なんだ？　僕は忙しんだが？」

『なんだ？　じゃない！　こんな事の為に僕は呼び出されたのか！？』

「ああ、そうだったな。もう用は済んだから寝て貰って構わない。ありがとう、ユーノ・スクライヤ司書長」

『こ、この……！』

『うわぁ！　スクライヤ司書長、落ち着いてください！！』

『本が！　捜索中の本が！』

俯き、肩を振るわせているユーノの背後から、無限書庫の局員達の悲鳴が聞こえてくる。

『こうなったら君が驚く様な情報を探し出してひっくり返してやる！！』

『ちょ、ユーノさん！　落ち着いてください！』

「ああ、頑張って驚かしてくれ」

『ハラオウン執務官も余計な事を言わないでください！！』

『っていうかユーノ司書長！　いい加減寝てください！　もう三日も寝て無いんですから、これ以上無理したら倒れますよ！』

『関係無い！　クロノの馬鹿を見返してやる！！』

『見返す前に自分の日程を振り返って下さい！』

『誰かスクライヤさんを止めて！！　大切な資料が――』

ユーノがモニターから離れた為にモニターが自動的に切れ、会議室に微妙な空気が流れる。

誰もが気になったであろう無限書庫の現在の状況。しかしそれはユーノ達無限書庫のメンバーしか知らない。

「クロノ君……」

「クロノ……」

「クロノ君。あんたも鬼やね～」

なのは、フェイト、はやての三人は揃って呆れ顔になる。

実際にはその場にいた全員が引き攣った笑みを浮かべていたのだが、クロノはそんな事に構う事無く先程問い掛けた質問を再び投げかける。

「で？　君たちはどう思う」

その表情は真剣で、それを見たフェイト達も真剣に考え、そして各々の答えを口にする。

「私は、なのはの言う事を信じる」

「私も、な」

なのはの両脇にフェイトとはやての二人が並ぶ。

二人は昔、なのはに救われた。方や人生と心を救われ、方や家族と悲しい運命から掬って貰った。その二人の、なのはに寄せる信頼は大きい。それになにより、人の心に敏感なのはがこう言った時の的中率はほぼ百％と言っても良い。

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

なのはが二人の顔を見上げると、二人は微笑み返す。

だが、他のメンバーは……

「あたしは……ちょっと信じられねぇ」

「同じく」

ヴィータの意見に、ザフィーラも同意するように頷く。

「敵への下手な同情は、自らの身を滅ぼしかねない」

「ヴィータ……ザフィーラ……」

「すみません、主はやて。私もヴィータとザフィーラと同意見です」

ヴィータとザフィーラと同様に、シグナムまでもがなのはの意見に同意しなかった。

「ヴィータちゃん……」

「なのはの言いたい事は分かるけどよ……」

「犯人と直に戦ったお前なら分かる筈だ。生半端な想いで、奴と戦ったら勝負にすらならないと」

シグナムの言葉に思う所があったのか、なのはは寂しそうに俯く。

確かにシグナムの言葉は正しい。自分が負けたのは突然の襲撃という不意打ちを食らったからではなく、本気で戦えていなかったからだと。

なのは程のレベルの魔導師になら、不意打ちを食らって不利な状況で結果的に負けとしても相手に深手を負わせれた筈である。なのに完敗したと言う事は、迷いがあったと言う事だ。今の様に確信めいた疑問じゃなく、本能的にアルから“何か”を感じ取ったからだろう。

「シグナム言う通りだ。今回はフェイトやはやての時とは違う。相手は本当の問答無用だ。一人の感情で情けを掛けていたらこっちがやられる」

クロノがシグナムの意見に納得したように頷き、なのはが更に深く俯く。

しかし、クロノは「でも……」と続け、なのはは僅かに顔を上げて首を傾げる。

「一人ぐらい、相手の心を気にかける相手が居ても……支障は無いだろう」

まああくまでも保険だけどっと付け加えるクロノ。だがそれは遠回しに君の好きにするといいっと、クロノなりの許可の出し方だった。

クロノの決断に異議を唱える者はこの場にはおらず、反対したヴィータ、シグナム、ザフィーラの三人もその判断を喜んでいた受け入れていた。

「異議は？」

「ない」

「あたしもねぇ」

「同じく」

それを聞いたなのはは、見惚れるほど嬉しそうな笑みを浮かべて頷いた。

「うん！　ありがとう、クロノ君！」

「別にお礼なんか言われる様な事は言って無い」

と言いながらも顔を背けるクロノの横顔は、僅かに紅潮している。

「話は纏まった？」

話が一段落したと判断したリンディが口を開いた。

「それじゃ、なのはさんは一度家に戻りましょ。ご家族が心配してるから」

リンディの一言で今度こそ解散となり、クロノ、エイミィ、リンディの三人以外のメンバーは、アースラの転送装置から海鳴市へと戻って行った。

◆◇◆◇◆◇

海鳴臨海公園へと転送された一同は、それぞれの家へ向かって帰っ

て行き、なのはとフェイトの二人は高町家へと帰って来た。

まだ戦闘を禁止されているなのはを再びアルが襲ってくるかもしれないから、その時なのはを守れる（又は共闘）人が傍にいる方が良いだろうと判断したリンディの案で、フェイトはこれから今日明日の二日は高町家に泊まる事になっている。

「ただいま～！」

「なのは！」

なのはが玄関を開けた瞬間、桃子がリビングから飛び出して来た。更にその声に釣られる様にそて士朗、美由紀、恭也の三人が道場から戻ってくる。

桃子はなのはの身体をペタペタ触って怪我を確認してなのはの顔を覗く。

「なのは、もう身体は大丈夫なの？」

「うん。シャマルさんのおかげでもうすっかり元気だよ、お母さん」

「そう？　よかった……」

桃子は身体の力が抜け、漸く安心したのか大きな安堵の息を吐く。

それを見た美由紀が苦笑い気味に言う。

「お母さん。昨日の内になのはは大きな怪我はしてないって聞いたでしょう？」

「まあ、なのはは直ぐに嘘を吐くからな。母さんが心配するのも無理は無いさ」

恭也が美由紀の言葉にそう言って返せば、なのはがむっとした表情で言い返す。

「なのは嘘つきじゃないの！」

「ほう……」

恭也の眼が獲物を見つけた様に細くなる。

その瞬間、なのはは頬を引き攣らせて恭也が何を考えているのか悟った。

「三年前に魔法の事を隠して夜遅くまでで歩いていたのは誰だったかな？」

「うっ」

なのはの胸を鋭い何かが突き刺す。

「去年、疲労を隠して、無理を押して無茶をして生死の境を彷徨ったのは誰だったかな～？」

「ぅぐっ……」

美由紀まで恭也に乗っかってワザとらしく呟き、なのはの心を鋭く斬る。

更に士朗までもが悪乗りしてなのはへ最後のトドメを叩き込む。

「大事な事ばかり隠してるなのはは、本当に嘘つきじゃないのかな？」

「……ごめんなさい」

『分かればよろしい』

高町家の四人が声を揃えて頷く。

しかし次の瞬間、なのは以外から笑い声が何処からともなく湧き上がり、なのはもまた同じように笑い出す。

笑顔を浮かべたまま、桃子たちはなのはを取り囲んで元気に戻って

きた事を喜び、フェイトを家へ向かい入れ、桃子はリビングへと戻って行く。

「あ、そういえば怪我は大丈夫ですか？」

フェイトが思い出した様に恭也と美由紀に訊ねる。

「うん。全然大丈夫だよ、フェイトちゃん」

「ちょっと脳震盪を起こして気を失ってた様な物だからな」

美由紀が元気だと腕まくりする様にアピールして言い、恭也が肩を竦めて言う。

「え？　怪我ってどういう事？」

なのは一人が話しに着いて行けず首を傾げていると、フェイトがかいつまんで説明する。

「なのはを保護した時、恭也さんと美由紀さんも一緒に保護したんだ」

「犯人の子に吹き飛ばされちゃって気を失ってたんだよ」

「顔面に魔法をぶつけられてな」

「がっ、大丈夫だったの！？」

思わず大きな声を出すなのはに、恭也と美由紀は苦笑して答えた。

「あの子も本気で撃ってなかったみたいでね？　起きた時ちょっと頭がズキッとしたぐらいで済んだんだよ」

「そうなんだ」

「怪我しない様に手加減しながらも気を失わせる絶妙な力加減と銃の射撃の腕前だった」

恭也は悔しがる訳でも起こる訳でもなく、只冷静にアルの実力を口にする。

「やっぱり……」

「やっぱり？」

士朗が首を傾げる。

「うんん。なんでもない」

「そうか？　まぁ今度は負けないように頑張れよ」

「うん」

士朗はそれとなくなのはの頭を撫で、直ぐに恭也と美由紀を連れて道場に戻って行く。

フェイトとなのはも、なのはの部屋へと向かって行く。

◆◇◆◇◆◇

アレから数時間後。所変わって海鳴市の中心に位置するお昼時で多くの人で賑わう街道。

真っ黒な服とマントに身を包み込んで周囲から奇妙な物を見る様な視線を集める少年が周りを気にする事無く歩いていた。

ウルフから今日は戦闘をするのは避けろと言われているが、だからと言ってアルは暇をつぶせる趣味がある訳でもなければ、十代の子

供と同じ様に遊ぶ事もしない。というより、アルならそんな事をするぐらいならばリンカーコアを集めたり、アジトに戻るなりするだろう。だが、今の状況で次元転移をすれば確実に見つかってしまう。

そんな風に色々考えている内に、結局何をする訳でもなくアルは只当ても無く街を彷徨っていた。

暫らくふらふらと歩いていると、次第に人気の少ない海辺の公園に出た。

「……」

アルは海へ飛びだした公園の一角にくると、海に落ちない様に設置してある柵に腕を置いて体重を掛け、その体制のまま暫らく海面を見つめ続ける。

真上から陽の光が燦々（さんさん）と降り注ぎ、波間がキラキラと光を反射して宝石の様に輝く海面を見つめながら、アルは最近思い出す事の無かった“まだ家族で暮らしていた頃”の記憶を思い出す。

――ねぇ、お兄ちゃん。

――ん？

――お兄ちゃんは……海、好き？

可愛らしく首を傾げてアルに問い掛けるイリア。

――んー。そうだな……イリアは？

――んにゅ？　イリアが質問したのに質問で返された……。

――あははは。で？　イリアは海、好きなのか？

――うん！　凄くおっきくて何処までも青くて泳ぐと気持ちいいから大好き♪

目をキラキラさせ、眩しい程の笑顔で答えるイリア。そんなイリアを見たアルは一瞬、犬の耳と尻尾が元気一杯に千切れんばかりにブンブン振っている幻が見えた気がした。

「……フフッ」

思い出し笑いをして笑顔を浮かべるアル。その笑みは実に数カ月ぶりに浮かべた笑顔だった。

《久しぶりだな。アルがそんな風に笑う事は》

アルの腕に乗る様にウルフのホログラムが現われる。

それは自分でも久しぶりに笑ったなとアルは思っていた。その事にアルは悲しくなったが、それでも嫌な気分にはならなかった。こんな風に過去を思い出して暖かな気分になるのは、きっとあの少女に出会ったからだろう。そう思った、いやそう思う事にしたアルだった。

「海を見て……ちょっと昔を思い出した」

《ああ、犬か》

ウルフも何故アルが笑ったのかの理由を察し、ウルフも笑みを浮かべる。

《あの時はテトが暴走して、ルルと共に止めるのには苦労したものだ》

「ははは。父さん、親バカだったからな」

《そしてお前はシスコンだったな》

「うっさい。余計な事言うな」

という一人と一匹の掛け合いは珍しいほど楽しそうで、両者ともに笑顔が浮かんでいた。

「ありがとな、ウルフ」

《いきなり礼とは……頭のネジでも飛んだか？》

「そうじゃねぇって。こんな風に心を休める事なんて、ここ半年間全くしてなかったからさ」

《それはお前が私の言う事を聞かず、ずっと暴走していたからだろう。私は何度も言ったぞ？少しは心身ともに休めろと》

「だからだよ……。今まで、ずっとウルフには心配させてばかりだったから。礼ぐらい言っとかねぇとなって思ったんだ」

《……そうか》

微笑してウルフに話しかけるアル。ウルフはそんなアルを見上げ、満足げにうなずく。

《だが、それは全てが終わってからにしろ。途中で気を抜けば、取り返しのつかない事態にもなりかねん》

「わかってるさ。後少し……後少しでイリアを助ける事が出来るだけの力が手に入る。それまで……オレは絶対に負ける訳にはいかねぇ」

《ああ。絶対に取り返すぞ。私たちの家族を》

「ああ」

クルッと踵を返して歩き出そうとした時、トンっと小さな衝撃が身体に伝わった。

何が当たったんだと思い、足下を見て見れば。

「ぁ……」

ぐしゃりと潰れたアイスクリームを握った3～4歳の女の子が尻餅を着いていた。

よく自分のマントを見て見れば、そこにはぶつかった拍子に潰してしまったアイスクリームがべったりと付いていた。

「ふぁ……」

潰れたアイスクリームを見て、女の子の顔がみるみる歪み、目に涙が溜まっていく。

それを見たアルは焦る。いくらぶつかって来た女の子の方が悪いからと言って怒鳴る程、アルの良心は死んでいない。寧ろ、逆に罪悪感を覚えるほどだった。

だから女の子が泣き出してしまう前にアルは女の子の目線になる様にしゃがんで頭を撫でる。

「ごめんね。お兄ちゃんが前を見てなかった所為で君のアイスをお兄ちゃんのマントが勝手に食べちゃった」

柔らかな笑顔を浮かべて女の子の警戒を解き、ポケットから狼を模った青い刺繍が施された白いハンカチを取り出して、女の子の眼に零れそうな程に浮かんだ涙をそっと優しく拭う。

「何処も痛くない？」

「……うん」

「そっか、それはよかった。それじゃ……」

アルはおもむろにマントの中に腕を隠すと、もぞもぞと動かす。

女の子は訳が分からず、まだ少し赤みの残る目で見守る。

すると突然マントを広げたと思ったら、アルの手に先程女の子が持っていたのと同じアイスクリームが握られていた。

「うわぁ！　すごぉい！」

いきなりアイスクリームが現われた事に女の子は目をキラキラさせて驚き、アルを尊敬のまなざしで見つめる。

「おにいちゃんって、まほうつかいさんだったんだね！」

「魔法使い、か……そうかもしれないね。コレは上げるよ」

「いいの？」

「いいよ。君のアイスを勝手に食べたマントさんからのごめんなさいの気持ちだからね」

《す、すまなかった。おま――君のアイスを勝って食べてしまって》

「す、すごーい！　まんとさんもしゃべるんだ！」

《あ、ああ》

ウルフがマントの代弁をして更に女の子の目が輝く。

『ウルフ、面白いぞお前』

『アル……覚えていろよ。必ず仕返しさせて貰うからな』

『フッ。やれるもんならな』

念話でお互いに会話するアルとウルフ。その内容は全く主人のデバイスと言う風には聞こえない。

すると、少し離れた所から母親らしき女性が走って来た。

「絵里！」

「あ、おかあさん！」

女の子も母を見つけて母の下に向かって駆け出す。

「もう、あんなに一人でどっか行ったらダメだって言ったのに」

「ごめんなさい。でもね、おかあさん」

「ん？」

母親に怒られて一瞬元気を失うも、すぐに立ち直って先程あった事を話し出す。

「えりね、まほうつかいさんにあったの！」

「え？　魔法使い？」

「うん！　あそこに……あれ？」

女の子が指差した先にはもう誰もおらず、静かに海が打ち寄せるだけの海しか見えなかった。

「誰も居ないじゃない」

「あれ？　さっきまであそこに……」

母親は溜息を洩らし、女の子は不思議そうに首を傾げる。そんな親子を、アルは公園の林の中から見つめていた。

女の子が駆け出した瞬間に、高速移動を使って二人の視界から逃れていたのだ。

《……行くか？》

「ああ。十分身体も心も休めた。こっからは……目的の為に動くだけだ」

アルは二人の親子を背に、林の向こう側へと歩いて行く。

思わぬトラブルも休息にもなった短すぎる休日はあっという間に終わりを告げ、アルとウルフは再び戦いの日常へと戻って行く。

第六話　戦いの果てに（前書き）

夜天の王と夜天の雲に漆黒の牙が突き刺さる時、闇を切り裂く閃光が舞い降りる。

第六話　戦いの果てに

夕日が傾き始めて空が夕焼けの茜色に染まる頃。

百数十ｍほど離れた位置する電柱の天辺で、漆黒のマントを風に靡かせて五つのリンカーコアが一つに集まっている家＝八神はやてとその守護騎士たちの自宅ををただ冷たく見つめていた。

「……ウルフ」

《２ｓｄモード》

マントの中で指輪だったウルフが第二形態のアサルトライフルで起動し、それを肩の位置まで上げて構え、目標に標準を定める。

「結界を展開すると同時に砲撃を発射する。カウント」

《カウントスタート》

ウルフがカウントを始める。

丁度その頃八神家では夕食の準備が行われていた。

「シャマル。そっちの二つ取ってくれるか？」

「は～い」

シャマルがはやてに頼まれた野菜、つまり自分の目の前にある皮を剥いた人参と玉ねぎの二つをはやてに手渡す。

《10……9……8……》

アルの足下に黒いミッド式の魔法陣が展開し、体制を低くして発射の反動に備える。

はやては受け取った人参と玉ねぎを手慣れた手つきで包丁を扱い、いちょう切りで切って行く。

「はやて～、今日のご飯何？」

リビングに入って来たヴィータが台所にで調理するはやてに質問する。

《7……6……5……》

環状魔法陣がなのはの時の様に射線上に幾つも展開し、射撃角度が固定され、カートリッジがウルフから二つ排出されて銃口に小さな

黒い光球が発生。

「今日はヴィータも好きなカレーやよ～」

「やったー！」

大手を上げて飛び跳ねるヴィータを微笑ましく眺めるはやてとシャマル。

しかし、今だ迫りくる危険に気づく事は無い。

《4……3……2……》

カウントが進むと共に光球が大きく膨れ上がり、直径１ｍほどに巨大化する。

「……ッ！」

シャマルの首にぶら下げている四つの小さな金色のリングが光を放ち、所有者に危険を知らせる。

「少し遠くで大きな魔力反応！？　いつのまに！？」

シャマルの驚愕の悲鳴にその場にいた全員、リビングのソファーに座って新聞を読んでいたシグナム、そしてその足下で寝そべっていた狼形態のザフィーラ、台所入ろうとしていたヴィータ、そして共に料理をしていたはやてがシャマルに注目する。

《1……》

「みんな防御して！狙われてる！！」

シャマルが振り返りながら叫ぶ。

《……0。捕縛結界展開！》

「アサルト……キャノンッ！」

アルを中心に目標を包み込むように突破不可能な結界が展開され、同時に黒い光球体の砲撃が八神はやての自宅へ向かって放たれた。

それを感覚で感じ取ったシグナムは脊髄反射の速度でソファーを飛び越え、ザフィーラもほぼ同時にはやての元へと駆ける。

ヴィータやシャマルも、シグナムがソファーを跳び上がると共にデバイスを手に取り、セットアップしようとする。

だが、放たれた砲撃の速度の方が圧倒的に速く、全員がセットアップする直前に着弾。爆発の衝撃と轟音が色のない世界に響き轟く。

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ》

着弾を確認し、発射後の硬直が解けると同時に影を纏う様にその場から消え、一気に八神家へと接近する。

その向かう先の八神家はリビングの壁が吹き飛び、リビングも含めて台所まで家具はグチャグチャになってしまっている。

『……全員無事か？』

ギリギリで騎士甲冑を展開できたシグナムが全員に思念通話で呼び掛ける。

『なんとか無事だ。はやては？』

同じく騎士甲冑を身に纏ったヴィータが家の瓦礫の中から這い出て来る。

『うちは無事や。でもザフィーラが……』

はやてはまだ騎士甲冑を纏っていなかったが、シャマルが抱きしめて守り、ザフィーラがギリギリでバリアを展開して身を挺して盾となってくれたおかげでなんとか二人とも無傷でいられた。

『……大丈夫だ』

『でもザフィーラ、足が……』

はやてとシャマルの目の前で倒れるザフィーラは、後ろ足の太ももに砕けた木材の破片が食い込んで血を流していた。

だがそれを心配している余裕ははやて達には無かった。

「うおおおぉぉぉ！」

『――――！？』

高速移動ではやて達の正面に現われたアルは、急停止してその手に持つアサルトライフルを構える。

続け様にカートリッジを二発ロードし、銃口に黒い光が収束する。

更に一発カートリッジをロードして周囲に黒い光球が六つ出現し、環状魔法陣が取り巻く。

《Ｒａｙｓ　Ｓｐｈｅｒｅ》

「アサルトバスター！！」

ドンドンドン！！と三発の単発の砲撃を連続して発射する。

「でぇりゃあああぁぁぁ！！」

ザフィーラは傷ついた身体で出来うる限り大きな青白いバリアを展開してはやて達を覆う。

一発目がザフィーラのバリアを捕え、バリアに大きな罅が入る。続けて二発目が着弾し、ザフィーラのバリアが砕ける。そして間髪入れず三発目の砲撃がバリアを抜けてシグナム達に落ちる。

それと共に爆発の熱と爆風が五人を襲う。

「まだだ！　ウルフ！」

《Ｒａｙｓ　Ｓｈｏｔｓ！》

空中に展開しておいた黒いレイズスフィアが環状魔法陣から勢いよく放たれる。

撃ち出された六つの黒い魔力弾は粉塵が舞う中に落ちて更なる爆発

を繰り返す。

「コレで――トドメだ！！」

アルは息つく間もなくアサルトライフルを突き出すと、足下と銃口に黒い魔法陣を展開する。

銃口の先に展開された魔法陣の前にアルから溢れた魔力が収束していく。その様はまさしくなのはへのトドメに使ったあの大威力砲撃だ。

アルは始めから数で勝るはやて達を不意打ちの奇襲からの連続攻撃で、文字通り一瞬で勝負を決めるつもりでいる。

「シューティング――――っ！？」

一気に魔力をチャージし砲撃を放とうとしたアルは眼下で粉塵の上がる場所から鋭い何かを感じ取り、背筋に薄ら寒いモノが走る一瞬。

《アル、飛び上がれ！》

ウルフの警告に即座に反応したアルは、魔法陣を蹴って空へ上昇する。するとそこへ間髪入れずシグナムの愛剣であるアームドデバイス、レヴァンティンの第二形態――シュランゲフォルムの連結刃（チェーン・エッジ）が

突き抜ける。

アルはそれを視認したと同時に舌打ちする。

奇襲は成功したが、目標を落とし切れなかった。それを理解すると同時に最悪の場合、奥の手の一つを使わざる負えないかもしれないと考えた。

「今のをかわしたか。不意打ちのみの木偶ではないようだな」

粉塵の中から殆ど無傷のシグナムが飛び出し、アルと同じ高度まで浮上して対峙する。

《Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ》

連結刃（チェーン・エッジ）がスルスルと戻って行き、片刃の長剣へと形態移行する。

（形態変化にムラがない。……なるほど、近距離では剣。中距離では連結刃（チェーン・エッジ）。チッ、一番面倒な相手が生き残ったな）

形態移行したレヴァンティンを見て、瞬時にシグナム戦闘方法を見抜いたアルは、心中で悪態を吐く。

アルは銃を主体とした中距離、もしくは遠距離なのに対して、シグ

ナムは見た目通り剣を使った接近型。それだけならば、アルの方が上手だが、シグナムには中距離でも戦闘可能な連結刃（チェーン・エッジ）がある為、アルの方が不利になる。

アルの様な中距離射撃型は敵とある程度の距離があって初めてまともな戦闘が出来る。が、シグナムは近距戦闘型ではなく接近戦闘型だ。二つの戦闘スタイルは似てはいるが、似て非なるモノ。

近距離タイプは相手との距離が近ければ近いほど実力を発揮し、相手を圧倒する。それに対して接近タイプは相手との距離が空いていても、一瞬で間合いを詰めて必殺の一撃を放つという戦闘スタイル。近距離タイプの頂点とも言っても良い達人の戦闘スタイルだ。

「挨拶も礼儀もなく。いきなりの奇襲とは、おかげで家が滅茶苦茶だ。どうしてくれるんだ？」

飄々とアルを挑発するシグナム。だがアルはそんな挑発に乗る事はなく、ただ仮面の様な、目の笑っていない冷たい笑みを作る。

「どうせ近くにいる管理局の連中が後片付けしてくれる。心配する必要ないさ」

「まるであたしら全員ぶっ倒すみてぇな言い方じゃねぇか」

シグナムとアルの会話に割り込む形でヴィータが鉄槌のアームドデバイス、グラーフアイゼンを担いでシグナムの隣に浮上してくる。

「ヴィータ。みんなは？」

「大丈夫だ。ザフィーラがあたしも含めて守ってくれた。今はシャマルが治療してくれてる。直ぐにはやても上がってくるよ」

「そうか」

シグナムは鋭く射抜く様な視線をアルに送る。

その視線に込められた確かな殺気を真正面から受けたアルは一瞬恐怖を感じるも、その眼に恐怖する自分を気力でねじ伏せ、逆に気迫の放つ目で睨み返す。

「ほう……。あの殺気に耐えるばかりか、逆に威圧してくるか」

「やんじゃねぇか」

シグナムとヴィータがアルの気迫に感服する。

そしてそれと同時にその目に宿った意思と感情を二人は読み取った。

「真っ直ぐな目だな。信じるモノの為、己の全てを賭けて戦える者の目だ」

シグナムがアルの眼を見て感じた事を口にする。

「しかしそれほどの実力と覚悟がありながら、このような奇襲をするとは……」

「同じ自分が不利な条件で戦うなら、少しでも自分に有利な状況に持って行く事が戦略の基本だ」

「確かにな」

それにっとアルは続ける。

「それに……。戦いに卑怯も正々堂々も無い。あるのは一つ」

アルはアサルトライフルをシグナムとヴィータに向けて構える。

「目的を成す為の手段だけだ」

アルがデバイスを構えたのに合わせてシグナムとヴィータもデバイスを構える。

「その歳で戦いを知る、か。だが、いいのか？　私たちを相手にそ

の武器で」

「自分よりも劣る相手に本気を出す訳がない」

「てめぇ……！」

ヴィータのこめかみに青筋が浮き出る。「劣る」という言葉が彼女の癪に障ったらしい。

グラーフアイゼンがカートリッジを一発ロードし、形態を変形させる。

「フォルムヅヴァイ！」

《Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ》

ハンマーヘッドの片方が噴射口に、その反対側がスパイクに変形する。

「ぶっ潰す！」

グラーフアイゼンを背後に振り上げると、噴射口からジェットを噴射してアルへと回転しながら突っ込む。

だがアルは避けようとはせず、ただ向かってくるヴィータを待ち受

ける。

シグナムが何か叫んでいるが、完全に攻撃モーションに入ったヴィータの耳には届かない。

「言ったろ？　戦いは、少しでも自分に有利になる様にするのが基本だって！」

《Ｓｉｌｈｏｕｅｔｔｅ，Ｒｅｌｅａｓｅ》

「んなっ！？」

アルは左腕を振り払い、ヴィータの攻撃軌道上を覆う形で黒い光球が環状魔法陣と共に八つも浮かび上がる。

シグナムとの会話が始まった時から、アルはバレないように慎重に一つずつシルエットでコーティングしながら魔力弾を展開していたのだ。

まさかのカウンターに驚くも、ヴィータは直ぐに急ブレーキを掛ける。

だがそれはアルの予定通りの反応だった。

《Ｓｈｏｏｔ！》

八発全ての魔力弾が発射され、一発も外す事無くヴィータを襲う。

アルは間髪入れずウルフを構えて魔力チャージを短縮して砲撃を放つ。

「クイックバスター！」

カートリッジを一発排出し、魔力のチャージタイムを短縮した高速砲は確実にヴィータを捉え、爆風がアルとシグナムを襲う。

しかし、アルは直ぐに爆煙から離脱する。だがそれはシグナムに読まれており、上から長剣の刃が叩きつけられる。

「はあっ！！」

「チッ……！」

アルはアサルトライフルの銃身で受け、ガキィン！と金属同士のぶつかり合いによる甲高い音が響く。

アルは銃身を下げ右へ身体を滑らせてレヴァンティンの刀身をいなしてシグナムの体制を崩し、更に左足でシグナムの横顔に回し蹴りを喰らわせる。しかし、シグナムはピンポイントの障壁を展開してそれを防ぐ。

「フッ……！」

「……っ！」

シグナムは受け流されたレヴァンティンを返す刀で降り抜く。だがアルはシグナムに蹴りつけた左足をシグナムの肩に置き、力を籠めて上半身を起こし上げる。更にその勢いのままシグナムの正面から頭上へ、そして背後へと弧を描く様に移動し、シグナムの剣が空を斬る。

アルはそのままシグナムの肩を軽く蹴って宙返りする様に上下を反転、その体制でライフルをシグナムの背中に向けて引き金を引く。

《Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ！》

《Ｓｎｉｐｅ　Ｓｈｏｏｔ！》

シグナムは紫色の魔力を身に纏い、ウルフの銃口から黒い閃光が放たれる。しかし、放った黒い閃光はシグナムの全身を覆う装身型バリアで拡散させて防ぎ切る。

それを見て連続で攻撃する事は無意味と悟ったアルは、即座にその場から離れようと真下に向かって降下する。

しかし、それを爆炎の中から紅い光を纏った鉄球が四つ、追撃してくる。

《誘導弾だ、気を付けろ！》

「チッ……っ！」

アルは地上に向かって加速し、体勢を入れ替えて着地。続けて高速移動魔法を発動して黒い軌跡を残して大きく弧を描く様に空に再び舞い上がり、その直後に鉄球がアスファルトの路上を粉々に砕き割る。

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

カートリッジを排出してレヴァンティンは連結刃（チェーン・エッジ）の形態へ移行する。

「はぁぁぁ！！」

シグナムは思いっ切り剣を振り上げ、その動きに連動して無限に伸びる連結刃（チェーン・エッジ）が蛇の様にうねり、這い、螺旋を描いてアルを襲う。

「喰らえぇぇ！！」

更に爆炎の中から頭が冷えてグラーフアイゼンを第一形態に戻した飛び出して来たヴィータがお返しとばかりに八つの鉄球を創り出し、

二度グラーフアイゼンを振るって紅い光を纏う鉄球を放ってくる。

「くっ……ウルフ！」

《Ｓｈａｄｏｗ　Ｄａｎｃｅ》

このままではかわしきれないと判断したアルは、自身の機動性を一時的に高める高速機動魔法を発動させ、自身の黒い魔力光を薄く纏う。

上下左右前後ろから襲いくる連結刃（チェーン・エッジ）と縦横無尽に飛び続けるヴィータの鉄球を、魔法名通り、踊る様に避ける。

そしてほんの僅かに襲撃に間が空いた瞬間。

「そこだっ！」

《Ｓｎｉｐｅ　Ｓｈｏｏｔ》

一瞬の隙を見逃す事無くアルは高速起動魔法を解除して、カートリッジを一発排出して飛び回る鉄球を全て撃ち落とす。更に連結刃（チェーン・エッジ）の腹を撃ち、弛ませてコントロールを狂わせる。

シグナムは思う様に動かせなくなった連結刃（チェーン・エッジ）を引き戻し、再び片刃の長剣へと形態移行させる。

「はぁ……はぁ……」

流石に二対一はキツかったのか、僅かに息が荒くなり始めているアルと、まだ少し余裕の残るシグナムとヴィータ。

「戦って改めて思うな」

「ああ、こいつ……本当に強ぇ」

シグナムとヴィータは改めてアルの戦闘力の高さに感嘆する。そしてアルも同じように二人の強さとコンビネーションの良さに感服していた。

（こいつら……なんて戦闘力だよ。対処するだけでもかなりキツイ）

アルと二人の実力は拮抗している様に見えるが、実際はアルが押されている状況であり、戦闘スタイルの相性が悪いのもその原因の一つだ。

今の内に残った一発のカートリッジを消費して新たな八発入りリボルバーを装填する。

だが、状況は更にアルにとって不利になる。

「二人とも、ごめんな。遅くなったわ」

騎士甲冑を身に纏ったシグナムとヴィータの主が戦闘に加わったのだ。

「主はやて。ザフィーラの容体は？」

「大丈夫。戦闘はできへんけど、命に別状はないって」

「よかった～」

ヴィータがホッと胸を撫で下ろす。そして先程よりも表情に余裕を取り戻して声を上げる。

「はやてが加わればもうこっちのもんだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを振りかざす。

「ああ、コレで我らの絶対的に優位な状況だな」

シグナムもレヴァンティンで正眼の構えを取る。

「さて、ウチらの家を吹き飛ばしてくれたお礼をせなあかんな！」

はやてが十字剣を模った金色の杖を振り上げ、足下に白いベルカ式魔法陣が展開する。

それと同時にシグナムとヴィータが飛び出す。

「くっ……！」

《Ｒａｙｓ　Ｓｈｏｔｓ》

アルは後方へ移動しながら、ウルフが周囲に魔力弾を形成して接近してくる二人に向けて放つ。しかし、それは剣と鉄槌で薙ぎ払われ、二人の接近を許してしまい、自分のデバイスを振り上げる。

だがアルとて回避する手段がない訳ではない。

「はあああぁぁぁ！！」

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ》

その場に自分の影を残して一気に離脱する。一瞬遅れてシグナムの剣がその影を斬り裂く。

だが、ヴィータはカートリッジを排出して再びグラーフアイゼンを第二形態に移行させる。

「ラケーテン……！」

噴射口から魔力をジェット噴射させて一気に加速。ブン！と空を切る音がアルの耳に届く。

「ハンマァァァ！！」

（くっ……避けられない！）

先程高速移動魔法を発動した反動で再び高速移動には入れないアルに向けて、無慈悲な鉄槌のスパイクが襲う。だが咄嗟に左手を突き出してバリアを一点集中展開して食い止める。

アルのバリアとヴィータのデバイスが激しく鬩ぎ合い、激しい火花を散らし、眩い閃光が瞬く。

「ぐっ……吹き、飛べぇ！！」

《Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｂｕｓｔｅｒ！》

脇に抱えたアサルトライフルの銃口をヴィータに向け、黒い魔力光

が集束し、直射砲撃を放つ。

しかし、シグナムがヴィータの服を掴んで引っ張ってその場から離脱し、アルの砲撃を回避する。

「刃以(も)て、血に染めよ」

はやての魔法詠唱が終了し、砲撃の発射後の硬直で動けないアルの周りに十数本の血染めの短剣が展開される。

「ッ！？」

「穿て、ブラッティダガー！」

はやてが杖を振るうと同時に短剣がアルに降り注ぎ、連続した爆発が轟く。

「ついでに喰らえ！」

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

ヴィータは手のひら大の鉄球を一つ取りだすと、それを思いっ切り叩き飛ばして爆煙の中に撃ち込み、爆煙の中で更に爆発が発生する。

「ぐあああぁぁぁ！？」

爆煙の中からアルがヴィータの攻撃にやられて吹き飛ばされて出てくる。

吹き飛ばされた勢いと、重力に引っ張られて急激に落下する中、アルはまだ意識があった。

（ぐぅ……。このままじゃ……負けるっ）

先程の集中砲火と追い打ちの物理攻撃で、かなり大きなダメージを負った身体に少しずつ力を籠める。

（このまま……墜ちる訳には……！）

アルの脳裏に少女の姿が過る。

最後に別れた時の泣きそうな、しかし自分を信じている目をして、叫んでくるイリアの姿が。

――お兄ちゃん……イリア、待ってるから。

アルはギリッと歯を食いしばる。

――必ず助けに来てくれるって、信じてるから！

（そうだ……オレは、こんな所で……！）

アルは体制を立て直してその場で停止し、その場に浮遊する。

「あれを喰らってまだ意識を失わねぇのかよ……」

「手応えはあった。それに今のは相当効いた筈……なんやけど……」

「やはり一筋縄ではいかない、か」

ヴィータ、はやて、シグナムが眼下で体勢を立て直したアルを見て感服する。

「まだ……まだ……」

ゼェゼェと息を大きく乱しながら肩で息をするアルは、罅が入るんではないかという程強くウルフを握りしめる。

「止まれない……こんな、所で……！」

アルの足下に黒い魔法陣が展開され、ウルフからカートリッジが一発排出される。

「倒れて……たまるかぁぁぁぁ！！」

《フルドライヴ。３ｔｄモード》

魔法陣から黒い魔力光が風と共に溢れ出る。

アサルトライフルが黒い光に包まれて細く長く鋭く変形する。銃身は短くなって銃身の沿う様に漆黒の刀身が現われ、銃剣へと姿を変える。

アルは両手で銃剣を持って体制を低くして構える。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

銃剣の柄から三発のカートリッジが排出され、アルの足下に広がる黒い魔法陣から黒い光が噴き上がり、アルの身体に纏い付く。

次の瞬間。

《Ｓｈａｄｏｗ　Ｍｏｍｅｎｔ》

アルの姿が闇に消えた。

「え？」

「き、消えた？」

三人が辺りを見渡してアルを探す。だがその姿を捉えられない。逃げたのかとも思ったが、フルドライブまで発動して逃げるなど有り得ない。

そう思った刹那。

「ぐぁっ！？」

ヴィータが突然現われたアルに蹴り飛ばされる。

「はあああ！！」

アルは地面に向かって落下するヴィータを追い、銃剣を思いっ切り叩き込み、勢いよくコンクリートに叩き込む。

『ヴィータ！！』

はやてとシグナムが吹き飛ばされたヴィータの方を見る。

しかし、そこには気を失ってコンクリートに沈むヴィータのみで、既にアルの姿はない。

「シャドウ……」

「……ッ！？」

シグナムの背後で、アルの持つ銃剣に黒い光が伸びる。

振り返るシグナムの視界に、漆黒の魔力刃を展開した銃剣が迫る。

レヴァンティンを盾に振り下ろされるアルの斬撃を受け止める。が、即座にアルに薙ぎ払らわれて弾かれる。アルはその瞬間に再び姿が消える様に見えるほど加速し、瞬(まばた)きする間にシグナムの背後で銃剣を振り切った状態で現われる。

「モーメントォ！！」

次の瞬間、アルの纏う黒い影が弾け、夜の闇に混じった漆黒の刃がシグナムの身体を切り刻む。

「シグナム！」

はやての呼び声も虚しく、シグナムは意識を失って地上に落ちる。

ヴィータとシグナムの二人は落されて戦闘不能になり、ザフィーラはまだ動けず、シャマルは非戦闘員。

「コレで……終わりだ……」

銃剣を切っ先をはやてに向け、カートリッジを二発排出して魔力を収束する。

「ぁ……」

はやての顔に絶望が浮かぶ。

仲間が居ればまだ希望はあった。だが、その頼みの仲は全員やられ、もう逃げる事すらも出来ない。

ならば、とはやては俯きながら両手を広げる。

「……なんのつもりだ？」

はやてのあまりにも唐突な行動にアルは魔力を収束しながらも問い掛けた。

「リンカーコアなら……私のをあげる」

「……」

「だから……お願いや。ヴィータ達だけは……私の家族だけは、助けてくれ」

本当に死ぬ覚悟を決め、家族を助けてくれと涙ながらに懇願するはやて。

アルはそんなはやてを見て、そんな心からの懇願を聞いて、アルの動きが止まる。

「……？」

何のアクションも起こさず、返答も返さないアルを不思議に思ったはやてが顔を上げ、アルの顔を見る。

そこには、同じように俯き、何かを必死に堪えようとするアルの姿があった。

「オレは決めた……決めたんだ。何が相手でも、もう迷わないと……だから……」

「……？」

ぼそぼそ小声で呟くアル。

やがて、アルはキッと厳しい目つきで顔を上げ、はやてを睨み付ける。

「誰を、犠牲にしても……オレは……オレはぁぁあああああ!!」

無理やり自分に言い聞かせる様な咆哮を上げ、アルは銃剣の引き金を引いた。

その瞬間、黒い魔力の奔流が溢れ、はやてを呑み込まんと解き放たれる。いざその瞬間を目の前にすると、思わず恐怖に目を瞑むる。

そして、はやてを黒い魔力の砲撃が呑み込む、

その瞬間。

金色の閃光が駆け抜けてはやては連れ去り、アルの放った砲撃は空

を貫く。

アルはゆっくりと銃剣を下ろすと、通り過ぎた閃光の先へ目を向ける。

そこには、漆黒の黒衣と金色の髪を靡かせて、はやてをお姫様だっこし、こちらに背を向けるフェイト・Ｔ・ハラオウンの姿があった。

「大丈夫？　はやて」

「フェ、フェイト……ちゃん？」

はやては何が起こったのか分からない様な表情でフェイトの優しげな顔を見上げる。

フェイトは優しく微笑んではやてを下ろし空中に浮かばせると、キリッとした表情で振り返る。

「ここからは……」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ》

閃光の戦斧『バルディッシュ』がカートリッジを一発消費して金色の魔力刃を展開する鎌へ変形する。

フェイトはハーケンフォームに変形した愛機を振りかざし、アルに

向かって告げた。

「私たちが相手だ」

第七話　僅かに伝わった想い（前書き）

誇り捨てし星の子と真なる夜天の王と優しき金色の閃光と不屈の星光が相対す時、無慈悲なる星の力が彼の者たちを蹂躙す。

誇りを失いし星の子と不屈の星光が出会う時、悲しき運命に小さく僅かな亀裂が入る。

第七話　僅かに伝わった想い

フェイトが介入する五分ほど前。

アルの捕獲結界は丁度、高町家の直ぐ近くまで展開されており、その結界を覆う様に更に大きな広域封時結界が展開されていた。

フェイトとなのははデバイスを起動して防護服（バリアジャケット）を纏って結界の正面を飛んでいた。

「あの人が言ってた通り、本当に硬い」

なのはは先程から砲撃を結界へ遠慮なく叩き込んでいるのだが、アルの展開する強固な捕獲結界はビクともしない。

一応シャマルからは夕方に一度会い、今日一日、戦闘を出来る限り控えるのなら魔法を使っても良し。とめでたく完治を言い渡されていたので、魔力にセーブを掛けながらも全力で砲撃を使って――――ぶっ放していた。

いくら手加減して砲撃を放っているかと言っても、此処まで傷一つつかないのは一撃必殺の代名詞である砲撃魔導師のなのはとしても傷つく。なのは最大の魔法、スターライトブレイカーでも破壊できるかどうかすらわからない。

「解除できなくても一瞬だけ通れる様になりさえすれば……！」

フェイトが口惜しそうにぼやく。

フェイトの速度は管理局でも群を抜いて高い。一瞬でも結界に自分が通れるだけの穴が開けば、そこを潜って中に侵入できる。だがそれはなのはにも言える事。彼女の短距離加速は、一瞬だけではあるがフェイトの最高速度に匹敵する。が、連続使用と長時間の発動が出来ない。しかし結界内に入るだけならば一瞬で十分ではある。

そんなフェイトを見て、なのははもう一度、今度は本気で砲撃を放とうとレイジングハートを構えた。

その瞬間。

『その必要はなーいっ！！』

突如二人の前に開いたモニター。そこにはエイミィが映っており、その隣に防護服纏（バリアジャケット）って立っているクロノはエイミィの操作しているであろ手元と、画面を見て呆れ顔していた。

「エイミィさん？」

『なのはちゃん。このあたしを誰だと思ってるの？　このあたしが居れば万事ＯＫ！』

「あの……エイミィ？」

フェイトが思わず、支離滅裂で無駄にハイテンションなエイミィを見て顔の皮膚が引き攣った。

『ふふふ……。このあたしに掛かれば、こんな施錠された結界を解錠するなんて訳はない！』

『エイミィ。こんな時に言うのはどうかとは思うが……少し寝たらどうだ？』

『こんな時に寝てられるかぁ！　あたしがオペレートしなくて誰がオペレートするのよ！』

『誰が見ても異常なそのテンションでオペレートされてもな……』

『それにね、このあたしを舐めないでよね！　こんな結界、二十四時間あれば簡単に解けるわよ！』

『まだ十八時間ぐらいしか経ってないんだが……』

『あーはっはっはっはっは！』

クロノの台詞から察するに、エイミィはどうやら昨夜、なのはが襲われてからずっとこの目の前に展開されている結界を解除するパスコードを解析し続けていた様で、徹夜してこの状態ならしい。

溜息を洩らすクロノに、異常なハイテンションで会話能力も低下し

ているエイミィ。

なのはとフェイトは苦笑した。無理やり顔に張り付けた様な引き攣った笑みで。

「エイミィさん……なんて言うか……大丈夫かな？」

「さ、さぁ……」

ただ一つ言える事は、明らかにエイミィが壊れていると言う事だ。

因みに、一連の会話の様なモノを交わしながらもエイミィの指は止まる事無く動き続け、その目は下から上へとスクロールする沢山のモニターを凝視している。

だが次のエイミィの一言で三人は言葉を失う事となる。

『あ～、もう！　どうしても一瞬、しかも一部しか解除できない！　どうなってんのぉ！？』

『……』

「……」

「……」

そんな声なき声が四人の中で響いた。

そしてクロノはエイミィに飛び付かんばかりの勢いで問い詰めた。

―――は？

『今のはどういう事だエイミィ！？』

『へ？　今のって？』

首を傾げるエイミィにフェイトが身を乗り出して問う。

「一瞬でも解除できるって、今！」

『ああ、一瞬だけ解除できる様にはなったんだけど。ほんの数秒だし、入口も小さいし、通れるのも一人ぐらいだし』

「あ、あの！　それってどこにでも開けるんですか！？」

更になのはがすごい剣幕でモニターに迫る。

『え？　うん。何処にでも一瞬だけなら結界に穴を開けられるけど？』

『ああ、もう！　なんでソレを早く言わなかったんだ！』

『だってほんの一瞬だし、ちょっと時間掛かるし』

解析の結果が不満なのか、エイミィはやや頬を膨らませる。

『ちょっとってどれくらいだ？』

『一分』

『開いてる時間は？』

『五秒』

『今からなのは達の正面に開けるか？』

『お安いご用！』

さっさとエイミィはキーをカタカタと押して結界の解除に掛かる。

『二人とも、聞こえたな？』

「うん。こっちはもう準備できてるよ」

「私も」

クロノとエイミィの会話を聞いていたなのはとフェイトの二人は、入口が開くと同時に飛びこめる様に瞬間高速移動魔法を即座に発動できる態勢に入っていた。

『一度に二人は無理のようだからな、まずはフェイト、それからなのはが突入する。いいな？』

「はい！」

「了解！」

『二人とも、そろそろ開くよ。準備して！』

エイミィの言葉にフェイトは前傾姿勢になって力を溜める。後はタイミングを計って飛ぶ込んだけ。

『3……2……』

エイミィがキーを叩きながらカウントする。

『1……0！』

カウントが0になると同時にフェイトの目の前にそびえる結界の一部に穴が空き、大人一人が漸く通れる様な大きさの道が開く。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！》

道が開いている僅かな間、その瞬間を逃さぬ様にフェイトはその場からかき消えるほど速く加速し、エイミィの作った道を潜り抜ける。

次の瞬間、エイミィの作った道は消え、フェイトは結界の内側へと入る事に成功した。

「……行こう、バルディッシュ」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

フェイトは結界を抜ける成功したのを少し振り返って確認すると、直ぐにはやて達の所へ向かって空を駆ける。

自慢の速度で一気に駆け抜けて行くと、シグナムがアルに切り裂かれ、落ちて行くのが遠目に見える。そして、はやてに抜けて銃剣を向け、黒い魔力を収束させる。

（まずいっ！）

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

フェイトは、はやてが両手を広げたのを見て、シグナム達を守ろうと自分一人が犠牲になろうとしているのだと直感で感じ取り、一気に金色の閃光となって加速する。

「オレはぁぁぁあああああ！！」

その刹那、アルは発狂しながらはやてに向かってチャージした魔力を解き放つ。

間に合え！そう強く思うフェイトに応えるかのように、フェイトは更に加速してはやてを連れ去り、アルの砲撃を回避する。

「フェ、フェイト……ちゃん？」

「大丈夫？　はやて」

フェイトははやてに怪我がない事を確認すると、はやてを降ろしてアルに向き直る。

「ここからは……私たちが相手だ」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ》

カートリッジを一発消費しハーケンフォームに変形した愛機バルディッシュを振りかざし、アルに向かって告げた。

（まずい……。今のアルはシャドウモーメントの反動で、体力も反応速度も低下している）

アルの切り札とも言うべき驚異的な速度を得る身体能力強化及び超高速機動魔法。シャドウモーメント。

身体機能の加速と強化。そして思考加速。身体強化魔法と高速機動魔法をかけ合わせ、自身への負荷を無視した強化魔法。だが自身への負担を鑑みないそれは、言わば諸刃の剣。その反動は非常に大きく、今のアルは満身創痍。ゼェゼェと肩で荒く呼吸し、今にも倒れそうな体を無理やりに立たせている。

《しかし解せないな。どうやってこの結界内に入って来た？》

ウルフは少しでもアルの体力回復の時間を稼ごうと、フェイトに向かって結界内に入って来た方法を問いかける。

「アースラのオペレーターは、凄く優秀だから。一瞬でも、この結界を解除する事が出来る」

淡々と告げるフェイト。

《……この結界を解除できるのは……あの女ぐらいだと思ったのだが》

（……あの女？）

ウルフの呟きが聞こえたフェイトは、おそらくこの結界を創り出した人物であろうと判断する。

だが、今はそれを聞いている場合ではない。

「時空管理局執務官、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン。今ならまだ弁護と弁解の機会があります。武装を解除して降伏してください」

「誰が……降伏なんて……するかよ……」

息も絶え絶えの状態でもアルは降伏を選ぶつもりはない。こんな状態になってあっさりと降伏する様な、半端な覚悟は生憎とアルは持っていないのだ。

「獲物が一人増えただけだ……手間が省けたな……」

《アル、無理をするな。この事態は想定外だ。今からでも遅くない。直ぐに離脱を――》

「此処まで追い込んで……逃げる訳に行くか！　今を逃したら、また……イリアを助ける日が遠くなるっ」

ウルフの忠告も、冷静な判断が出来なくなっている今のアルには届かない。

だがこのまま戦えば確実にアルが負ける。いや、アルが“負ける”事はないだろう。心が折れた時、それがアルにとっての負けであり、例えどれだけ傷つこうと吹き飛ばされようと、心が俺に限りアルが負ける事はないという事だ。

だが、いくら精神的に負けないと言っても、それでも敗北しないという訳ではない。もし敗北してしまえば、アルは捕縛され、イリアを助けるという目的は果たせなくなる。

それにフェイトの言葉から、更に増援が来ることは容易に想像できる。そしてその増援が誰になるのかも。ウルフには想像できた。

《いいから離脱するんだ！　このままでは本当に後悔するぞ！》

「うるさいっ！！」

《アル！　チィッ！》

アルはウルフの忠告を無視して銃剣を構えて飛び出し、ウルフはすぐさまカートリッジを一発排出して銃剣を強化する。

フェイトに向かってウルフを振り被り、アルは思いっ切り銃剣を振り下ろすが、フェイトは高速起動魔法を発動してその場から消える。アルも高速起動魔法を発動してフェイトを追う。

しかし、その速度は先程シグナム達と戦った程の速度もなく、フェイトはアルの後ろに回り込んでバルディッシュを振り被る。

背後から気配を感じたアルは銃剣を後ろに向かって降り抜く。それと同時にガキィン！バルディッシュの金色の魔力刃とウルフの漆黒の刀身が組み合う。

《感情的になり過ぎだ、アル！　落ち着け、冷静になるんだ！》

「あああああ！！」

「……うっ」

アルはウルフの言葉も聞かず、力任せに銃剣を振り払ってフェイトを撥ね飛ばす。

だが、それは逆にフェイトに攻撃するチャンスを与えてしまう。

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

フェイトの周囲に金色の魔力球が八つ出現し、それぞれのプラズマスフィアに環状魔法陣が取り巻く。

「フャイヤ！」

一斉に金色の魔力槍が環状魔法陣から放たれ、アルに防御する間も与えず降り注ぐ。

「がっ……！」

なんとかウルフが防護服（バリアジャケット）の一部をパージしたおかげで直撃を免れたアルだったが、それでも受けたダメージは確実に身体に蓄積されていっている。

だが、フェイトは更に追撃する。

「ハーケン……セイバー！」

バルディッシュを大きく振り絞り、思いっ切り振り抜いてハーケンの金色の魔力刃を飛ばし、三日月型の斬撃となって高速回転しなが

ら円形状に変化するソレは、無防備なアルに襲い掛かる。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！》

ウルフが咄嗟に黒いバリアを展開する。が、元々防御力の低い魔法。フェイトのハーケンを受けても長くは耐えられず、ギリギリで相殺するがその爆風はアルを呑み込む。

アルは爆風に煽られて落下するも、すぐに体制を立て直してその場で浮遊する。

《Ｂｌｉｔｚ　ｒｕｓｈ》

バルディッシュがハーケンセイバーで放った魔力刃を再度展開する。

《アル、一体どうしたというんだ！》

ウルフがアルに呼び掛ける。だがアルはそれに応えようとしない。否、応えられなくなってきている。

フェイトもアルの様子のおかしさに気付き、攻撃の手が止まる。

「フェイトちゃん！　はやてちゃん！」

そこへ同じく結界を越えてなのはが合流し、フェイトの隣に並ぶ。

《くっ……。やはりあの少女が来たか。アル、これ以上は無理だ。速く撤退す――――アル？》

アルは深く俯き、表情がまるで読めない。ウルフはホログラムとなってアルの顔を覗き込むが、それでも見えない。

「あ、あの！」

なのはが声を上げてアルに向かって話しかける。

「知ってるかもしれないけど。私、高町なのは。貴方に聞きたい事があるんだけど……いいかな？」

「……」

《貴様らに話す事など何もない。それとも、話せば代わりにリンカーコアを渡してくれるのか？》

アルの代わりにウルフが答えるが、帰ってきた言葉は冷たかった。

先程まで声に籠められていた感情は消え失せ、ただ冷たく無関心なモノだ。

「そ、それは無理だけど……。じゃあ、なんで私のリンカ―コアを吸収しなかったの？」

なのはの言葉にウルフが詰まる。

「お前が……」

アルが小さく呟く。

「お前は……イリアじゃない癖に……イリアと同じ顔をしやがって……！」

《アル、お前まさかっ！？》

ウルフがアルの異変の原因に気が付いた瞬間。アルの懐から触手の様な黒い靄が溢れて来た。

「何、あれ……」

「……ロストロギアの能力？」

「なんや、凄く気味が悪い……」

なのはとフェイトとはやては、アルの懐から溢れ出た黒い靄を見て本能的な恐怖と不気味さを覚える。

「くっ……うぁぁッ」

《意志をしっかり持て！　雫に呑まれるな！》

黒い靄がアルを包みこもうとアルの身体を這い回り、アルはそれに抗うかの様に頭を抱えて苦しみ出す。だが抵抗も虚しく次第に黒い靄はアルを包みこんでいく。

《くっ……耐えてくれよ！》

「ぐぁあああ！？」

ウルフが魔法陣を展開し、アルに少し強めの電流を流して意識の覚醒を促すが、その判断はアルの身体にもダメージを与え、アルの身体が悲鳴を上げる。

直ぐに電流は止まり、アルは崩れる様に足下に魔法陣を展開された魔法陣に膝を突く。

「ぐぅ……。悪い、ウルフ。……助かった」

アルは呼吸を大きく乱しながらウルフに礼を言う。

だがこの方法を用いた事で、雫の侵食を止めてアルの意識を覚醒させる事は出来たが、本当にもう戦闘が出来なくなってしまった。

しかし元々これ以上の戦闘は限界だった身体だ。どちらにせよもう戦闘は無理だろう。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「あ、あの……」

荒々しく呼吸するアルに、なのはが改めて話し掛ける。

アルも、先程とはまるで違う態度で、しっかりとなのはの眼を見つめる。というより睨み付けるているが、頭はちゃんと冷静に戻っている。

「私、高町なのは。その、アル君……でいいかな？」

「……アル・スフィニール」

不安そうにアルの名を口にしたなのは。

ウルフが散々自分の事を呼んで、おそらく記録されているだろうこの状況。嘘を吐いてもすぐにバレると判断したアルは、肯定の意味も含めて本名を名乗る。

「聞きたい事があるの……あの時、どうして私のリンカーコアを奪わなかったの？」

この質問にアルは当然の様に口を閉じて答えない。いや、答えられる訳がない。

自分の妹になのはがそっくりで、身体が言う事を聞かなかった。そんな向こうが有利になるだけの情報を容易に口にする様な愚かな真似はしない。

「この結界の外には更に結界を展開しています。ですから、貴方はもう逃げられません。大人しく投降してください」

フェイトがバルディッシュをアルに向けて警告する。

確かにアルの展開した捕獲結界の外には更に大きな強装結界が展開されており、転移する事が出来ない。しかしそれがアルの投降する理由には決して成りえない。彼には、例え死んだ方が楽だと思える様な地獄を味わったとしても、果たすべき約束がある。

その誓いとも言える約束を果たす為に必要とあらば、どんな悪事でも成して、どんな犠牲でも対価でも払ってみせる覚悟がある。

だかこそ、

「断る」

倒れる訳にも、屈する訳にもいかない。最後の最後まで諦めるつもりは毛頭ない。

それに、逃げるだけなら不可能でもない。

「ウルフ」

《なんだ》

「オレ達は生きるぞ。生きて、イリアに会う為に……」

目的を果たす事。それがアルの最優先するべき事。だから――

「……今は逃げるぞ！」

《Ｒｏｇｅｒ！》

力強く応えて見せるウルフを頼もしく思いながら限界の近い身体に鞭打ってゆっくりとアルは立ちあがる。

それに対抗する様にフェイトとなのは、そしてはやての三人がデバイスを構える。

「もう一度言います。今ならまだ弁護の余地があります。投降してください」

「何度でも言う。断る！」

「なら、公務執行妨害ならびに管理外世界での魔法の無許可使用、及び事件の容疑者として拘束させて貰います」

アルもウルフを構え、緊迫した空気が流れる。

一歩でも動けばどちらかが魔法を使う。まさに一発即発の情況。

そして、アルが動こうと思った瞬間。

「こんな所で何を遊んでいるのかしら？」

女性の声が空から響いた。

全員が空を見上げて見れば、そこには銀色の長髪を後ろから肩にかけ、白衣の様な物羽織り、広辞苑の様に分厚い本型のデバイスを傍

に浮かべた、鮮血の様に鮮やかな紅い瞳の文字通り美女がそこに浮かんでいた。

突然の美女の登場に、なのは達の動きと思考が止まる。

「お前は……！」

しかしアルだけは違った。

アルは歯をむき出しにして女性を睨み付けて威嚇し、先程はやて達に向けられた以上の敵意。いや、殺意と憎しみを放つ。

女性はそれを見て少し口元を釣り上げると、ゆっくりとアルの正面に降りてくる。

「お前……よくもオレの前にノコノコと！」

今にも女性に跳びかかりそうな勢いで身構えるアル。しかし女性はそれを気にする事無くアルに話し掛ける。

「私に手を出したら、貴方の大切な大切な妹がどうなっても知らないわよ？」

女性は右手を上げてモニターを開く。

そこには銀髪の少女が倒れていて、それを見た瞬間、アルの表情が激変した。

「イリア！？」

《貴様……！　あの子に何をした！》

「別に何もしてないわ。そう……“何も”……してないだけよ」

何もしてない。それは詰まり傷つけてはいないがそれ以外の、つまり食事すらも与えていないという事だ。

映像からイリアの様子はよく分からいないが、ぐったりと倒れている。動く素振りすらもない。

意図的に食事を与えなかった。それは、虐待そのもの。

「――――ッ！？」

それを理解した瞬間。

ギリギリで堪えていた理性の糸が切れ、アルは女性に向かって吼えた。

「貴様ぁあああ！！」

今の自分の状態すらも忘れるほどに激昂したアルは、ウルフを大きく振り被って振り下ろす。非殺傷設定など無い。明確な殺意と怒り、そして憎しみの籠った一撃。

なのは、フェイト、はやてがその突然の行動に驚き、止めようと駆け出そうとした刹那。

「上位者に向かって剣を向けるなんて……コレはもう一度教育する必要があるかしら？」

「ぐっ……！」

アルの振り下ろした銃剣の刀身は、女性の頭部に触れる寸前で止まっていた。否、止められていた。

剣先には銀色のリングバインドで固定させられ、手元にはレストリクトロックと呼ばれる集束系の上位バインドで固定され、アルの背後の銀色の魔法陣から腕を絡め取る様にチェーンバインドが発動し、更にアルの足下の同じ魔法陣からストラグルバインドを掛けてアルの身体強化を強制解除し、アルの動きを完全なまでに封じ込められていた。

「フフ。ついでに此処で素顔でも晒してみる？」

女性がパチン！と鳴らせば、アルの身体が黒い光に包まれ、そして間もなく弾ける。

「え？」

なのはが黒い光の中から現われたアルの姿を見て目を見開いた。

そこに黒髪に紫色の瞳を持ったアルの姿はなく、女性と同じ綺麗で長い銀髪に、透き通った蒼い瞳を持ったなのは達と同い年ぐらいの少年が居た。

「相変わらず……純潔種の眼は本当に綺麗ね。……欲しいわ」

女性は少年の眼をじっと見つめ、舌舐めずりして見惚れる。

少年はそれを見て、怒りを通り越して逆に冷静になって来ていた。

「イリアの褒めてくれた眼だ。誇りを捨てた奴にやるモノは何もない！」

その声と言葉から、その少年がアルであるとなのは達は数秒かかって理解する。

今の今まで、彼はずっと変身魔法を使って目立つ銀髪を黒髪に。そして念を入れて瞳の色を蒼から紫へ。最終的に少し実際の年齢よりも年上にする事で、変身魔法を解いている時でも、もしくは全てが終わった時、管理局に襲われない様にする為に変身魔法を使っていたのだろう。

「ふふふ。でも私の欲しいモノはそれじゃないし、私は生命研究なんて興味ないもの」

アルをあざ笑うかの様にクスクスと気味の悪い笑みを浮かべる女性。

「“アレ”は器の中では絶対に死なないから安心なさい。それにどうやら動物たちが食べ物を運んできてる様だしね」

それを聞いたアルは肩から力が抜け、思わずほっと一息吐く。

と、そこへ。

「時空管理局執務官です。両名とも、速やかに武装を解除し、大人しくしてください」

フェイトが女性の間後ろでバルディッシュを突き付けていた。

更にその後ろではなのはがレイジングハートを女性に向け、その更

に後ろではやてが魔法の詠唱を完了させて待機している。

「ああ……そう言えば邪魔者がいたわね」

女性はそう言うとクルッと向きを変え、フェイト達に向き直る。

「いいわ。大体は消耗してるみたいだし。相手してあげる」

女性の足下に銀色の魔法陣が展開し、幾つもの魔力スフィアを形成する。

フェイトは至近距離で撃たれまいと、高速移動して距離をあける。

「ヒレン、貴方の好きにしていいわ」

《Ｂｅｃａｕｓｅ　ｙｏｕ　ｓｕｒｅ？》――よろしいので？

本型のインテリジェントデバイス『ヒレンジャク』から銀色の小鳥のホログラムが現われ、女性に問い掛ける。

「ええ。一応、殺さないようにね」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ》

ヒレンジャクは丁寧に頭を下げ、本と共に女性の前へ移動する。

《Ｓｔａｒ　Ｂａｒｒｅｔｔ》

翼を大きく羽ばたかせ、展開していたスフィアから銀色の光弾、誘導型射撃魔法スターバレットを放つ。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

フェイトは瞬間高速移動魔法を発動してヒレンジャクの魔力弾の射線上から退避、そのまま大きく回り込むように女性の側面へと駆ける。

しかし、ヒレンジャクの狙っていたのはフェイトではなく、その後ろにいるはやてだった。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「シュート！」

なのははカートリッジを消費して、放たれた魔力弾と同数の桜色の魔力弾を撃ち放ち、得意の制御でバラバラに動く銀色の光弾全てを

相殺する。
更に周囲に桜色の魔力スフィアを七つほど展開。

「シュート！」

なのはが杖を振るい、形成したスフィアから展開した魔力スフィアの倍近い桜色の光弾が女性を取り囲む様に飛び交う。

《Ｈａｋｅｎ　Ｓｌａｓｈ》

《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ，Ｄｏｕｂｌｅ》

フェイトがバルディッシュを振りかざし、バリア貫通能力を付加した魔力斬撃を女性に向けて降り抜くが、ヒレンジャクの展開した二枚重ねの銀色のシールドでその刃は止められ、ヒレンジャクのシールドとバルディッシュの魔力刃が激しく火花を散らせる。

《Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ》

「――ッ！」

フェイトの足下に銀色の魔法陣が展開し、そこから出現した魔力の鎖に絡め取って動きを封じる。その間にヒレンジャクは大きく翼を

広げ、それに連動する様に本が開き、ページがめくれる。
本のページがめくれるのが止まると、女性の足下に大きな銀色のミッド式魔法陣が展開される。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｂａｒｎ》

展開された魔法陣から極小の銀色の光の粒子が吹き上がり、逃げられないフェイトと銀色のバリアに包まれた女性を包み込んでいく。
そこへなのはの放った魔力弾が女性を目掛けて寸分の狂いなく跳び込む。
その刹那。
散布された光の粒子が一斉に爆発し、なのはの魔力弾をかき消す。
しかしそれだけでは終わらず、爆発した粒子が別の粒子を誘爆させて、フェイトを巻き込んで連鎖爆発を起こしてゆく。

「うあああぁぁぁぁ！？」

魔力粒子の爆発の規模こそ小さいものの、それが数百回も連続して絶え間なく続けば元々防御力の低いフェイトは例え防御していても耐えられるのもではない。
時間にして約十秒。

たった十秒だが、十秒も途絶える事のない魔力爆発。やはりと言っていいのか、フェイトは耐える事が出来ず、気を失って落下する。

『フェイトちゃん！！』

《Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｂｌａｓｔｅｒ》

再び本のページが数ページめくれ、ヒレンジャクの正面に銀色の閃光が収束する。

それを見たなのははレイジングハートを突き出して構える。

《Ｂｕｓｔｅｒ　Ｍｏｄｅ》

「ディバイィィン……！」

主砲形態（バスターモード）に移行するレイジングハート。カートリッジを二発排出して杖の先に桜色の魔力を集束させる。

更にその後ろで、はやてが最終詠唱を完了させる。

「遠き地にて、夜に沈め」

足下と掲げた十字剣の杖の前にベルカ式魔法陣を展開し、女性の正面斜め上で解き放つ。

「ディアボリック・エミッション！」

解き放たれた黒い闇は瞬く間に広がり女性を呑みこもうとする。

しかし、

《Ｂｕｒｓｔ》

ヒレンジャクは女性をバリアで包み込むと、収束した銀色の魔力球を全方位に解き放ち、砲撃から一転して広域空間攻撃へと変異させる。

はやてのディアボリック・エミッションとヒレンジャクのシューティングブラスター・バーストモードの空間攻撃同士が接触し、互いに展開が止まるも魔力を発散させて一進一退を繰り返す。

やがて二つの空間攻撃が消失し、視界が開く。

「バスター！」

その瞬間。間髪入れずなのはが溜めに溜めた集束型砲撃魔法、ディ

バインバスターを発射する。

女性の視界いっぱいに桜色の閃光が迫る中、女性は身動き一つせず何もかもをデバイスに任せ、次々と本のページがめくれ、ヒレンジャクは女性の足下に魔法陣を展開する。

《Ｓｔａｒ　Ｇａｉｎ》

女性を守る様に前面に銀色の六角形のマスの壁が幾つも折り重なる様にバリアが出現し、なのはの砲撃が直撃する。

直撃した砲撃は放射され続け、バリア諸共女性を呑み込む。と思いきや、砲撃はバリアに吸収されてなのはから無理やり魔力を吸い出す形となっている。

このままでは危険だと判断したレイジングハートが砲撃を強制解除する。しかし、それと同時にヒレンジャクの展開したバリアは眩い閃光を放ち、なのはとはやての眼を眩ませる。

《Ｒｅｖｅｒｓｅ》

バリアが砕け散ると同時に先程の砲撃で吸収した魔力を大玉の魔力弾として高速で撃ち出す。

「――ッ！？」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

レイジングハートが咄嗟にバリアを展開するが、先程使った魔力を丸々一発に凝縮して返されては防ぎ切る事は出来ず、はやてと共に桜色の魔力爆発に呑み込まれる。

「なかなか綺麗な終わり方ね」

《Ｉｔ　ｉｓ　ａｎ　ｈｏｎｏｒ》――光栄です。

桜色の閃光が薄らぎ、爆煙の中からなのはとはやての二人が重力に従って落ちてゆく様子を見ながら楽しげに微笑む女性を見て、アルは殺意の籠った眼で睨む。

他人の空似とはいえ、イリアと同じ容姿の少女がいい様に甚振られているのを見るのは、あまりいい気分ではない。

「にしてもこの程度の小娘に後れを取るようじゃ……私を倒すなんて一生かかっても不可能よ」

自分が此処まで苦戦した相手を自分も含めて見下す言葉と視線を受けて、アルはギリッと歯を食いしばって悔しい気持ちを押し殺す。

そんなアルに構う事無く、女性はウルフの中にある情報を転送する。

《む……これは》

「今度は此処に行くといいわ。そこなら、この娘たちを相手にするよりも効率良くリンカ―コアを集められるから」

「……わかった」

アルがそう頷くと、女性は再び指を鳴らしてアルを拘束していたバインドを解除すると、さっさと次元転移して去って行った。

自由になったアルは、まずウルフを１ｆｓモードの拳銃に戻す。ゆっくりとした動作で懐から星の雫を取り出し、眼下で倒れるシグナムやフェイト達を見る。

《……どうする？》

「どうするって……何を？」

《彼女たちのリンカ―コアを抜き取るも取らぬも、全てお前に任せるという意味だ》

ウルフはそれだけを言うと黙ってしまい、本当にアルの意思に全て任せる気だ。

アルはただ黙って雫を見つめ、そして……

「次の世界に行こう」

《了解した》

アルは雫をしまうと、踵を返して次元転移を始めようと魔法陣を展開しようとした瞬間。

「あ、アル……君」

背後から声が掛けられ、振り返ってみればそこには、地面に落ちたものだとばかり思っていたなのはが、自身も満身創痍の状態なのに気を失ってぐったりしているはやてを肩に担いで浮かんでいた。

防護服（バリアジャケット）も上部が完全にパージされて無くなり、スカートもかなり千切れてボロボロだ。

「……そんな状態でもまだ戦うのか？」

「にゃはは……。流石にちょっと無理……かな？」

苦しげに苦笑いするなのは。

アルはウルフを突き付けて対処しようかと思ったが、流石もう戦え

ないだろうと判断してやめる。だが自分もこれ以上の戦闘は避けたい。

「――ッ！」

アルの身体に痛みが走る。

女性が先程アルにしたバインドは全く手加減などなく、アルを拘束して解除するまでの間、ずっと思いっ切り締め上げていたのだ。おそらく防護服（バリアジャケット）の下の肌には蛇がまき付いた様な青あざが広がっている事だろう。

骨が折れていないだけでもよしとするしかない。

「あの、大丈夫？」

なのはが心配そうに尋ねてくる。

「ああ、別に平気だ。それより、お前は他人より自分の心配をしたらどうだ？」

痛む身体を片腕で抱える様に添えた状態でなのはに向かって話しかける。

なのはは、にゃははと誤魔化すように笑う。

「お前……なんで俺にかまう？」

アルはふと浮かんだ疑問を口にする。

どうせ適当な事しか言わないだろうと思いながらも、アルは次元転移の準備を始める。

「『すまない』」

「……！」

「アル君が最初に遭った時に言った言葉だよ」

「お前……聞いてたのか」

その後すぐ気を失っちゃったけどね、となのはは苦笑する。

直ぐに真剣な表情になってアルに向かって話す。

「なんでそんなに悲しそうに言うのか、なんでそんなに辛さそうに戦うのか……それを知りたい」

自分勝手だってな理由だって分かってるんだけど、となのはは付け足す。

「……」

「……」

両者は暫らく黙りこみ、アルの次元転移ばかりが進み、転送準備が完了する。

アルは何も言わずに次元転移を開始する。

「ぁ……」

なのはが小さく声を漏らす。何か言おうとしているみたいだが、上手く言葉に出来ない。

このままでは何も言えぬまま、何も変わらぬまま去ってしまう。

「あの！」

「リリス・ルキフェル」

「え？」

アルが突然口を開き、名前らしき言葉をなのはに伝える。

「あの女の名前だ。調べれば……色々出てくるんじゃないか？」

《Ｂｒｅａｋ》

アルは、なのはに向かって微かに微笑んで言う。

ウルフが捕獲結界を砕き、その余波がその更に外側に展開されていた強装結界をかき消す。

それと程同時にアルの身体は黒い光に包まれ、今度こそ完全に第９７管理外世界「地球」から消え去った。

第七話　僅かに伝わった想い（後書き）

第一部が終了です。

書けば書くほど文字数が増えて更新に時間がかかるようになってきました……。

ま、それでも一週間以内に一度は更新しますけど。

第八話　ヒントの意味（前書き）

不屈の星光に集う魔導の者達はただ一つの鍵を手に、細く長い星の糸を手繰る。

第八話　ヒントの意味

リンカ―コアを求めて、銃型インテリジェントデバイス『ウルフ』と共に魔導師という魔導師を刈るアル・スフィニール。

彼は星の雫に良質のリンカ―コアを食わせる為に第９７管理外世界に赴き、そこで時空管理局の『不屈のエースオブエース』高町なのはを圧倒的な実力でねじ伏せるが、彼女が自らの妹と酷似していたが為に、リンカ―コアを抜き取る事が出来ず、そのまま離脱する。

襲撃の翌日。アルはウルフの提案と今後の事を考え、その日は身体を休め、魔力の回復に当てる事とする。一方、地球の軌道上に待機していたアースラ。

艦内でなのはを始めとしたアースラチームは今後の方針を会議していた。その会議の結果、アルの迅速な身柄確保、ロストロギアの回収を決定したのだった。そして、襲撃されたなのはは、アルの去り際の辛そうな眼を忘れられず『彼の言葉に込められた本当の理由を知りたい』と、クロノ達に許可をもらう。

その日の夕暮れ時。アルは八神家に奇襲を仕掛け、ザフィーラと戦闘不能に追い込むも、『剣の騎士』シグナムと『鉄槌の騎士』ヴィータの活躍によってよって形勢は互角になり、途中参戦した『最後の夜天の王』八神はやて達の三人によって撃墜寸前まで追い込まれる。だが、切り札のフルドライブを起動し、諸刃の剣である『シャドウモーメント』で再び形勢は逆転する。

しかし、アースラオペレーター『エイミィ・リミエッタ』の不眠不休の解析の甲斐もあり、『優しき金色の閃光』フェイト・T・ハラオウンは突破不可能と言われたアルの捕獲結界内部に突入に成功し、間一髪の所ではやての救出に成功する。

予想外の乱入により、アルは再び撃墜の危機に陥る。そこへなのはまでが参戦し、情況がますます不利になる中、負傷して体力と抵抗力が弱っている所に星の雫によって精神を蝕まれ、危うく呑み込まれそうになるも、ウルフの機転のおかげでなんとか理性を取り戻す。

冷静に戻った事で、生きてこの場から脱出する事を決めたアルだったが、そこへ謎の女性が乱入し、銀髪の少女が倒れた姿を見せられ激昂。女性に向かって銃剣のウルフを振るうも、多種多様のバインドによって止められて拘束される。

その結果、アルの変身魔法が解除させられ、本当の姿である銀髪ポニーテールに透き通った蒼い瞳のなのは達と同い年の姿を晒す。

その直後、なのは達三人と女性――正確には女性の本型インテリジェントデバイス『ヒレンジャク』――が戦闘し、完膚なきまでになのは達を圧倒し、勝利をおさめる。

その後、女性はウルフにとある情報を与えて転移する。それと同時にアルの拘束は解けて自由の身になったアルは、地球を後にして別の世界に転移しようとする。

そこへはやてを背負ったなのはが声を掛け、僅かな間だったが会話する事が出来た。知りたい事が分かった訳でもなく、彼の辛そうな表情の理由も分からないままだった。

しかしアルは最後、なのはにヒントを残す。

それが『リリス・ルキフェル』という謎の女性の名前だった。

「――と、これまでの事と出来事を簡潔に纏めるとこんな感じだ」

襲撃から二日後、アースラの会議室には三日前のメンバー全員が集まり、これまでに得た情報と出来事を簡潔におさらいしていた。

特に深い傷を負ったシグナム、ヴィータ、ザフィーラ。そして比較的に傷の浅いフェイト、はやて、なのはの六人の怪我の回復を待ってから、この会議は行われているので、全員問題無くクロノの解説を聞いている。

「以上の事から分かる通り。彼……アル・スフィニールは自分の意志でリンカーコアの吸収行為を行ってはいるが……」

テーブルの中心に一つのモニターが開き、結界内に現われた例の白衣の女性魔導師が映し出される。

因みに今回は映像と共に音声がレイジングハートとバルディッシュのおかげで残す事が出来た。実に優秀なデバイスたちである。

「この白衣の魔導師――リリス・ルキフェルという女性によって自発的にやらされていると仮定して良いだろう」

クロノがピッ！とモニターを操作すると、場面が変わって女性と黒髪のアルが向かい合っている場面が映し出される。

『お前……よくもオレの前にノコノコと！』

『私に手を出したら、貴方の大切な妹がどうなっても知らないわよ？』

再びピッ！という音がして映像が一時停止する。

「……家族が人質、ね」

「おそらく彼女がこの事件の本当の黒幕でしょう」

リンディがテーブルに肘を突いて両手を合わせる様に口元を覆う。

「この直後、彼はこの魔導師に斬り掛かっている事から分かる通り。彼はこの魔導師に絶対服従という訳ではなさそうだ」

だがその直後に女性のバインドで雁字搦めに拘束され、変身魔法が強制解除されて本当の姿が顕わになる。

「銀髪……か」

「……似てんな」

「ああ」

シグナムが感慨深く呟いた一言に、ヴィータとザフィーラが重々しく頷いた。

「君らは何か知っているのか」

クロノがそう尋ねると、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルの四人はそれぞれ顔を合わせて頷き合い、シグナムを皮きりに話しだした。

「私たちが主はやての元に転移する十年ほど前、魔力を集める為にある世界に赴いた事がある」

今から大体二十三年も前の事。此処にいるメンバーの殆どが生まれる前。ヴォルケンリッターと闇の書と呼ばれていた頃の夜天の書の当時の主は、管理世界の経済と政治に密接に精通し、金の魔力に取りつかれ、権力に溺れる俗に言う成金や、金の亡者と呼ばれる人種の女だった。

他人とは利用し蹴落とす物。騙される方が悪い。金に出来ない事はない。の最低最悪な三拍子が揃った様なクズ人間だったが、その魔力は非常に大きかった。はやてには劣るものの、それでもＳ－ランクはくだらない魔力を保有する主だった。

その主は闇の書に選ばれた事を理解すると、ヴォルケンリッター四人にありとあらゆる手を使って早急に闇の書を完成させる様に命令を下した。

完成した闇の書を手にする者は、絶大な力を手に入れる。

その言葉を鵜呑みにし、自分が闇の書に侵食されている事すら気づかぬまま、そして知らぬまま、闇の書の完成を急いだ。

そしてヴォルケンリッターの四人は主の望みを叶える為、魔法生物、魔導師、魔力保有者。文字通り無差別に蒐集していった。

「そして我らはある世界に足を踏み入れた。その世界の名前はアルカディアという」

ザフィーラの口から世界の名前が出て、リンディは微かに眉を寄せて首を傾げ、どこかで聞いた様な……と記憶の引き出しを開ける。

すると、ハッと思い出した。

「思い出したわ。アルカディア」

「知ってるんですか？母さ――リンディ艦長」

「クロノ、貴方も一度は聞いた事があると思うけど？　星の降り注ぐ聖地のお話」

リンディがそう言うと、クロノも「ああ、あのお伽話か」と納得する。

それはミッドチルダでは小さな子供に語られお伽話で、ミッドでは有名な話である。

首を傾げる一同に、リンディとクロノは簡単に説明する。

その昔、ある世界に星の国という王国があった。

その星の国では星には力が宿るとされ、その力をその身に宿した者を星の王と呼ぶ。

そして星の王はその力で戦場という戦場を訪れては争いを止め、世界を平和に導いて行く。

しかし星の王の力を恐れた一国が、星を嫌う魔王に操られて星の国に攻め入り、殺戮の限りを尽くした。

それを嘆いた星の王は自ら魔王と戦うが、次第に追い詰められていく。

星の王は魔王を永遠に葬る為、自らを対価に究極の星の魔法を使う。

魔王の力は星の王の力に取り込まれ、魔王の肉体は星の王の肉体と融合し、魔王の魂は星の王の魂と同調した。

星の王は自らの肉体を器として全く別の物質に変えた。

星の王は己の力を鍵として我が子に受け継がせた。

星の王は残った自らの魂を雫と変えて魔王と共にこの世から消え去った。

残った器は命を受け止め守り、生み出された雫は災いたる存在を取り込み、受け継いだ鍵の子どもはその身を守って生き続け、その国は永劫の平和を手に入れた。

「――ていうありがちな魔王と英雄のお伽話さ」

「でも一応その世界はこう言うわ。アルカディア……星の降り注ぐ聖地」

ま、その話しは追々していきましょ、と話しを区切ると、ヴィータに話しの続きを促す。

「ええっと……まぁあたしらはその世界に入って直ぐに対象を探して、襲った。……けど正直言うと無駄に終わった、かな？」

「そうだな」

ヴィータが珍しく悔しがる事もなく余所を向きながら頬を掻き、シグナムは深々と頷いて肯定する。

勝負事や勝ち負けに関しては誰よりも敏感なヴィータとシグナムに、此処まで言わせる程の人物とはいったい何者なのか。とても気なる一同は焦る気持ちを抑えて続きを待つ。

コホンとシグナムが咳払いして話し始める。

「その世界にはたった数十人の少数民族の人間だけが生きて暮らす世界だった。だが、その民族は全員リンカーコアを保有し、資質も非常に高かった」

「使ってるデバイスもカートリッジ無しのミッド式だったしなぁ」

まさに恰好の獲物と呼べる民族だった。当時のシグナム達は殺す事を何とも思っておらず、半殺しまで追いつめ、そして魔力を蒐集する。余力があればトドメを刺すという方法をとっていた。

だが、その世界に行ったのは間違いだったと理解したのは民族に奇襲を仕掛けて直ぐだった。

その民族が高い魔力資質を持つという事はこの世界に来てすぐに理解はした。しかし、彼女たちは後悔する事となる。

「結論を言うと、我ら四人が揃って蒐集出来た人数は……たった二人」

ザフィーラの言葉にヴォルケンリッター以外のはやてを含む全員が驚愕し、言葉を失った。

リンディでさえも声を失って開いた口が塞がらない。

「き、君ら四人が揃ってたった二人しか倒せなかっただって!?」

一番早く反応したクロノが身を乗り出して声を荒げる。

クロノが此処まで驚くのも無理はない。彼女たちはそれぞれがＳ－ランク、ＡＡＡ＋ランク、ＡＡ＋ランク、の猛者たちだ。それが四人、前線のフロントアタッカーのシグナム、ヴィータ、ザフィーラに、フルバックのシャマル。このメンバーで落せない拠点などほぼ無いだろうと思われるほどの戦力だ。

「私たちも少してこずるだろうとは思ったけど……」

「まさか、たった二人でわたしら四人を押さえこまれるなんて思ってもみなかった」

「それだけ相手が飛び抜けて強かったという事か……」

「当たらずも遠からずだが、ハッキリ言ってそれは違う」

クロノがボソッと呟いた言葉をシグナムは否定する。

「だが君ら四人を抑え込める程の実力があったんだろ？」

カートリッジ無しのミッド式デバイスで、と付け加えるクロノ。

「倒した二人はいずれもＡＡランクあれば良い方程度の魔力しか持っていなかった」

「だが戦った時、確かにＳ＋の魔力があったのも事実だ」

シグナムとザフィーラがいった意味が誰も理解できなかった。

戦う前はＡＡで、戦う時にはＳ＋。何故そんな急激な変化が起きるのか、それに一番早く気が付いたフェイトがボソリと呟いた。

「……フルドライブ」

その呟いた言葉を聞いた瞬間、誰もが闇の書の闇を葬り去った時のなのはやフェイトのフルドライブを思い出し、ハッ！と息を呑む。

【フルドライブ】それは自分の限界に近い出力に強引に引き上げる

システムの事だ。それならば一時的なパワーアップも納得がいく。
しかし、フルドライブはあくまで自身の限界まで力を引きだす物。
それ以上の力を引きだす事はできず、ＡＡランクから２．５ランクもアップするというのは考えにくい。

これでは戦闘時にパワーアップするは説明できても、異常なレベルのパワーアップは説明できない。ＡＡがフルドライブを使えばせいぜいＳ－ランクに届くか届かないかと言う程度だからだ。

「その理由は保有する希少能力（レアスキル）にある」

「希少能力（レアスキル）……」

その答えを告げようとするザフィーラの言葉をはやてがオウム返しする。

シグナム達の古代ベルカ式、そしてはやての蒐集行使といった物は希少能力（レアスキル）と呼ばれ、魔力変換能力よりも希少で発現例も稀な先天的な才能、もしくは異能とも呼ばれる。

そしてそれはアルカディアに住むその民族の全員が発現させていた。

「その能力とは、限界を遥かに超越する力。リミットブレイク」

「リミット……ブレイク……」

「限界を遥かに超越する力……か」

シグナムの言った言葉を繰り返すフェイトと、意味深に呟くクロノ。
まだ漠然としか理解していない一同にシャマルが説明する。

「なのはちゃんやフェイトちゃん、ヴィータちゃんやシグナムの使うフルドライブが限界に近い魔力を引き出すのなら、リミットブレイクはその限界を超えた力を得る代わりに、使用者の命を削る程の負担が掛かる」

「まさに諸刃の剣やな。そんなハイリスクハイリターンな能力、聞いた事もない」

「まあ、ある意味でフルドライブの上位に位置する希少能力（レアスキル）だな」

はやてとクロノが各々の感想を呟く。

「あれ？　でも待って」

しかしエイミィがふと気になる事を口にした。

「希少能力（レアスキル）って誰もが持てる様な物じゃないよね？　って事はシグナム達が戦った相手って実質一人って事にならない？」

エイミィの言う事は尤もだ。誰も彼もが持てず、数が少ないから希少であり、人知を超えた能力だから希少能力（レアスキル）なのだ。だがシグナム達の言い方ではその戦った二人が全く同じ希少能力（レアスキル）を持っているかのように聞こえる。

しかしシグナムは首を横に振って答える。

「その民族の男は全員同じ希少能力（レアスキル）を保有しているらしい」

「戦った男が言っていた。まず間違いないだろう」

その言葉に再び驚愕する一同。

それはそうだろうその民族の男性が皆、全く同じ能力を持っている。それは希少能力（レアスキル）は遺伝しないという法則を無視している希少能力研究者の永遠の夢だろう。クローンを作っても発現するかどうかも分からない能力が親から子へ継承されているのだから。だがある種の呪いの様な物でもある。

かつてその民族と戦ったシグナム達は苦戦を強いられた。

戦ったのたった二人。その二人は家族を仲間を友人を逃がす為に殿（しんがり）を務め、見事にその役目を果たした。

シグナム達は一時間近く足止めを食らい、それでもやっとこさ倒しはしたものの魔力を殆ど消費し、カートリッジは全て使い切り、蒐集出来たページは二人合わせて二十ページ未満。これではあまりに

も効率が悪過ぎる。

そう判断したシグナム達はアルカディアを後にし、他の世界で蒐集行為を行った。それから余りと気も経たず、当時の主は闇の書に食われて死に、また別の主の元へと旅立って行った。

その話しを聞いている内に、クロノがハッ！と気が付いた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。その民族と彼に関係があるという事は……！？」

「ああ、クロノ執務官が想像している通りだ。私たちはあの少年があの民族の一人だと確信を持っている」

その民族の特徴は全員が“銀髪”である事。高い魔力資質を持っている事。異常なフルドライブの性能。

そして……

「その民族の持つデバイスは全てインテリジェントデバイス。しかも、デバイスは自らの意志をホログラムとして投影する事が出来る」

なのはとフェイトが所持するインテリジェントデバイス、レイジングハートとバルディッシュもＡＩはかなり高く、時にはアドバイスを与え、時には慰めてくれる良きパートナーではある。しかしそれでも彼らのインテリジェントデバイスほど感情豊かでＡＩも高くは

ない。

そしてアルとその民族のデバイスで共通する機能がデバイス自身の意志がホログラムとして投影される事だ。こんな機能は管理局のどのデバイスにも搭載されていないのだ。

これらの事からも、アルがこの民族と関係があるのは確実だろう。

だがそれだと引っかかる事がある。

「ならばこの彼女も同じ民族である可能性がある訳か……」

クロノが例の白衣の魔導師リリス・ルキフェルが本型インテリジェントデバイス、ヒレンジャクに戦闘を任せる場面を出し、その姿とデバイスを二つの画面でアップして映し出す。

彼女もまた銀髪であり、ホログラムを投影するインテリジェントデバイスを所持する推定S＋ランクの魔導師だ。全く同じ条件のアルがその民族の一人だというのなら、彼女もまた同じ民族の一人という事になるだろう。

「そう言えばクロノ君。この女の人に関しては何か分かったんか？」

はやてが思い出したようにクロノに尋ねる。

「まぁ……な」

「なんだ随分と歯切れが悪いじゃねぇかよ」

眉を八の字に寄せるクロノにヴィータがちゃちゃをいれる。

「……彼女の名前はリリス・ルキフェル。彼が言った通りの名前で実在する人物だった」

クロノはモニターをピッピッと操作すると、開いていたモニターがすべて消えて新たなモニターが開く。

そこには映像に移っていた時よりも若干若い先程の女性が白衣を羽織って映っていた。

「彼女は元時空管理局本局所属の遺失物管理課・新技術開発研究部でチームのチーフをしていた天才研究者だ」

遺失物管理課とは、他世界や裏ルートで流通するロストロギアを回収した局員からロストロギアを受け取って厳重に封印、管理する課である。そして新技術開発研究部とは文字通り新しい技術や機構を造り出す部である。

「遺失物管理課は分かるけど……新技術開発研究部って何？」

フェイトの疑問にクロノが分かりやすく説明をする。

「大抵のロストロギアは魔力を動力に変換して活動するのは知ってるな？　新技術開発研究部は、その魔力運用の効率アップを目的にロストロギアを研究、解析して、そこで得た技術で魔力運用の効率を向上させたより性能の高いデバイスを開発する。そう言う所だ」

「まぁ要するに、ロストロギアを解析するついでに使われてる技術をデバイスに転用しちゃえって事よ」

最後にリンディがクロノの説明をニコニコしながら非常にぶっちゃけた要約する。

しかし引っかかる事があるのか、なのはがクロノに尋ねる。

「なら“元”ってどういう事？」

「彼女は一年前に管理局を自分から退職している。理由は不明だ」

クロノは、モニターに映る璃リスを睨む様に見つめ、だが……と言葉を続ける。

「彼女は魔導師としても資質が高く、常に武装隊や次元航行艦船に

スカウトされていた」

「なるほど、その事実を考えればこれほど実力があるというのも十分うなずける」

シグナムが納得した言わんばかりに頷く。

しかし分かったのはこれだけ。これ以上の事はもっと深く調べてみなければわからないとの事だった。

「結果を言ってしまえば……正直分からない事が増えただけ、か」

クロノが深い溜息を洩らす。その気持ちは此処にいる誰もが同じだった。アルのなのは襲撃から色々な事がわかったが、分かったのは現状の情況の断片のみ。

アルの所持するロストロギアでリンカ―コアを集める本当の理由。イリアというアルの家族の事。そしてリリスの現われた理由。

もし後者がアルのリンカ―コアの回収の手助けだとすれば、なぜ自分より実力の劣るアルを使ってリンカ―コアを集めるのか、という疑問が生まれる。ただ自分の手を汚す事無く例の無限の力を手に入れるためなのか、しかしそれだと星の雫を手にしているアルが力を手に入れてしまえば無意味となる。

謎が謎を呼ぶとはこういう事を言うのかと、一同を悩ませるリリス・ルキフェルとアル・スフィニールの言動。

しかしそんな中、只一人だけは違う事を考えていた。

「アル君は……私たちに助けてほしんじゃないかな？」

その言葉を口にしたのはなのはだった。

今まで全く口を開かなかったなのははこの二日、ずっと一つの事を考えていた。

そう、自分たちにヒントをくれたアルの事だ。彼と話したのは本当に些細な事だったが、それだけで彼が本当は優しい人だという事は、なんとなくではあれどなのはは感じていた。

最後になのはへ向けて、リリス・ルキフェルという名前のヒントを告げた。それが何よりの証拠である。

「なぜそう思う？　映像からはそう言った感情は読み取れないが……」

クロノは再びアルが次元転移する時の映像を出すが、アルは助けて欲しいと思わせるような言動も表情もしていない。

しかしなのははは感じていた。一瞬の、本当に微かな微笑みには、そう言った想いが含まれていたと。

「家族が人質で、自分はその人を助けるだけの力がなくて、犯人には全く歯が立たない。それって、凄く辛いことだと思うの……」

助けたいのに助けられない。家族を奪い去った相手が目の前にいるのに手が出せない。家族に手を出させない為には言いなりになるしかない。それがいったいどれだけ辛く、苦しい事なのか。想像するだけで胸が締め付けられる様に痛い。

しかしそれがアルの抱えている辛さの一つなのだ。

「それでも……私がアル君だったら、諦めずに一人でも家族を助けようとすると思う。だって大切な家族だから……絶対に失いたくないから」

なのはも孤独だった事がある。

士朗が大怪我を負って長い間こん睡状態に陥り、始めたばかりの喫茶翠屋の切り盛りと父の看病の二つの両立で自然と桃子も恭也も美由紀も、なのはに構えなくなってしまった。

その間なのはは家族に心配かけない様、いい子でいる様に心がけ、無理やり明るく振舞っていた。その結果、更に孤独を感じる様になり、いつしか家族のぬくもりというモノを感じなくなっていた。

だが、士朗が眼を覚ました時。あの時ほど嬉しかった事はないし、あの時程泣いた時はなかった。

士朗は家族に今まですまなかったとか、辛い思いをさせたなと言って謝罪する。そんな士朗を桃子たちは泣きながら笑って許す。ただ生きていてくれる。それが、今まで頑張って来た彼女たちへの一番のお褒美だからだ。

士朗はなのはを見た瞬間、今だ痛む身体でなのはを力一杯に抱きしめて言った。今まで一人にしてすまないと、辛い思いをさせてしまったと謝った。

そして最後に言った。

――今まで、本当によく頑張ったな。

たった一言。しかしそのたった一言でなのはの涙腺は決壊し、今いる場所が病院だというのにも関わらず大きな声で泣きじゃくった。父、士朗の胸の中で泣き声を上げた。寂しかったと、辛かったと、一人ぼっちだったと、今まで溜めこんでいた物を全て吐き出した。

いつも夜遅く疲れて帰ってくる家族に自分が寂しいからと迷惑を掛ける訳にはいかないと、幼いながらに状況を理解していたなのはの辛い選択だった。その事に気づいた高町家の一同は、なのはを抱き締め、心からの感謝の言葉を口にした。

それからというもの、高町家の面々は近所でも有名な仲良し家族として評判になった。

その出来事があるからこそ、なのははアルの家族を想う心が痛いほ

ど理解出来た。

「きっと……ずっと一人で戦って来て、頼るって事を忘れちゃってるんだと思う。だからあんな風にヒントを残す事しか出来なかったんじゃないかな？」

一体いつから独りで戦っているのかは分からない。だがずっと独りで戦って来てしまったが為に誰かに頼ったり、助けを求めるという行為を忘れてしまっているのだろうと、なのはは思う。

なら、手を貸してあげたい。独りで戦うのは辛いから。だからこそ手を貸してあげたい。彼の大切な家族を共に助け出してあげたいから。

もうリンカーコアを抜き取らなかった理由などどうでもいい。

ただアルを孤独から助けたい。そうすればきっと彼の家族を助けだせる。力を合わせれば、出来ない事はないのだから。

「私、アル君とお話したい。一対一で」

「それは話し合いか？　それとも、決闘か？」

クロノが真剣な表情でなのはに向かって問い掛ける。

今までのなのはの一対一でお話したい言った時、パターンは二つあ

る。

一つ目は相手が素直に話し合いに応じ、知りたかった事が全て分かるパターン。二つ目は相手が話し合いに応じず、力技で話しをせざる負えない状態にするパターン。

前者は今まで全くと言っていいほど実践された事はなく、どちらかというと後者の方が良く実践されている。フェイト然り、ヴィータ然り、リインフォース然り。

「出来れば話し合いで終わらせたいけど……」

おそらく、いやきっとアルは対話には応じないだろう。

ずっと独りで戦って来たのだ。今更誰かの手を借りようとは思わない筈だ。ならば後は戦って勝ち、その後で話をすればいい。

今までの様に、今回も。

「そうか……だが自体が事態だからな、一度だけだ。一度だけなのはだけで出撃して貰うが、いいか？」

クロノが皆に尋ねるが、心配してはいる様だが誰も反対をしようと思わなかった。

なのはの頑固さは此処にいる誰もが知っている事だ。反対した所で

きっと一人で戦おうとするだろう。どうせなら一度だけと制約を付けて、失敗すれば今度は全員で出ればいい。確実にアルを確保する為にも、なのはの言うお話の為にも。

しかしアルへの対処を考える一方で、アルが今どこにいるのかが分からない事も問題だった。

彼は最後に女性からデータを受け取り、別の世界へ転移した。

転移したのは結界内で、エイミィも追う事が出来ず、なのはもまた去って行く彼を見つめるだけに留まった。

彼が今、一体どこで何をしているのか。

それを知る術は、此処にいる誰にも無かった。

第九話　星の雫（前書き）

誇り失いし星の子は、約束を果たす為に咎人の道を行き、他の命を奪い世界を渡る。

第九話　星の雫

人間が一人も済んでいない第２１無人世界「ネイチャ」。特に人が住めない理由はないが、何故か人の繁栄がなくありのままの自然が残っている世界だ。

人が住んでおらず、危険な動植物も、希少種の生物も居ない事から時空管理局の武装隊の演習場所として昔から度々利用されている。

「ではこれより、集団戦闘の模擬戦を行う。全員配置に付け！」

『はい！！』

そして今日も武装隊の団体が、大きな山に東西を囲まれた都市が丸々入りそうに広い森の南北に十人ずつのメンバーで分かれて飛んでゆき、その上空では彼らの指揮官と思われる人物が一人残る。

その様子をネイチャの遥か上空、軌道上付近に停船している次元航行船官から見守る上官と、そして状況をモニタリングして伝えるオペレーターが一人。総勢二十名の二部隊がこれから集団戦闘訓練を行うらしい。

北側のチームは援護・支援の射撃型の魔導師五名を中心とした前衛六名による防衛線を張る陣形で待ち構え。

南側のチームは二人一組となって四方から攻める拠点攻略を主軸とした陣形で待機する。

指揮官が両方の準備が終わったのを確認し、両チームにモニターを開く。

「では……始め！」

高らかと告げた模擬戦開始の合図と同時に、南側のチームが動き出す。

四組が四方から囲う様に移動し、正面からチームのリーダーが派手に砲撃を撃ち込む。勿論当てるつもりで撃ったわけではなく、少しでもこっちへ注意を引いて自分たちに有利にしようとしているのだ。

しかし、北側のチームも負けてはいない。別働隊の動きを瞬時に察知して全員に通達し、同時に中央の援護部隊が正面の一組に向かって支援射撃を撃ち、牽制して別働隊への牽制射撃を行う。

戦力は拮抗しており、どちらとも誰も撃墜されず三分が経過した。

その様子を山の中腹から見つめる黒い影が一つ。

「アイツ……ここで演習が行われるから行けって言ったのか」

変身魔法で再び黒髪に紫色の瞳の十五～六歳となったアルだ。

その両手には黒光りする漆黒の拳銃が二丁握られており、その視線は森の上空で戦闘を繰り広げている武装局員達に向けられている。

《二十人か。今までよりも倍の数を相手にしなければならないが…いけるのか？》

「問題ない。今まで通りにやればいい」

此処に彼女たちはいない。今の自分にブレーキを掛けさせる存在もない。

ならば今まで通りの戦い方をするだけ。目の前の敵を落とす。そしてリンカ―コアを吸収する。

ただそれだけの事。

「結界を最大領域で展開」

《Ｏｐｅｎ》

銃のコアが光って、谷全体を覆い尽くす結界の壁がせり上がっていく。

突然の結界の展開に局員達の動きは止まり、この場にいた全員を結界内に閉じ込めた。

「な、なんだ？　結界？」

「誰か展開したのか？」

一人の局員が全員に問い掛けて見るも全員が首を横に振る。

誰一人として結界を展開した者はいない。ならばなぜ広域に結界が展開されたのか。元々この世界に魔法の要素はない。

となれば可能性は一つ。

「まさか！　敵か！？」

一人の局員が敵の存在に気付いた瞬間、彼らの側面にそびえる山の中腹から黒い閃光が幾本も放たれた。

『全員回避ー！！』

指揮官が念話で緊急回避の指示を飛ばすも、集中でもしていない限り彼らが不意打ちの砲撃をかわすなど五割と出来ず、空中で幾つも爆発が起きる。

十人近いの魔導師が砲撃の直撃を受けて気を失い、地面へと落ちて

いく。

指揮官が急いで艦船に連絡を取ろうとするが……。

「つ、通信が出来ない！？」

念話もメールも通信も、外部への連絡手段の全てが遮断されるこの捕獲結界。その情報を全く持っていない彼らが動揺するのも無理はない。

そして指揮官の動揺は部下たちへと、静かな水面に落ちた雫の波紋の様に広がって行く。

その動揺に拍車を掛けるかの様に一人の魔導師が爆発し、爆煙に呑まれる。

――星は目覚めて闇を断つ。我、力を欲す。汝、その力を我に差し出せ。

全員が爆煙を注視する中、煙の中から少年の声が響く。

風に乗って晴れていく煙の中で薄黄緑色の一点の光が現われ、次第に消えていく。

まるで何かに喰われていくかの様に。

――掌握。

その言葉と共に断ちこめていた煙がブアッと吹き飛んで晴れる。

そして煙の中から出て来たのは、黒いリングバインドで空中に十字架を思わせる形で磔にされている局員と七色に輝く雫を手にするアルだった。

局員は手足の先から次第に石化していき、アルはバインドを解除して空中に放りだす。

その後、星の雫に環状魔法陣で取り巻いて自分の周囲に浮かべる。

「貴様……まさか最近話題になっている連続魔導師襲撃事件の犯人か？」

指揮官の男は錫杖の様な槍――錫杖槍に青白い光球を作り出してアルに向ける。

しかしアルがビビる訳もなく。ただただ口元を横一線にして黙り続ける。

そんなアルを見て、指揮官は沈黙を肯定として受け取った。

「投降する気はないのか？　見た所まだ子供の様だが……」

指揮官はジッとアルの紫の瞳を見つめる。

「止まる様な奴じゃないな」

指揮官は底し口元を歪ませてそう呟くと片手で部下たちに指示を出し、アルを取り囲ませる。どうやらこの指揮官は少々バトルマニアの気があるようだ。

アルはそれを目を動かすだけで確認すると、ゆっくりとした動作で二丁の銃を構える。

「お前らのリンカーコア……こいつの糧になって貰う」

アル対武装局員の戦いの火蓋が切って落とされる。

「フォーメーション、G‐Fだ!!」

指揮官らしい奴が指示を飛ばしてオレを全方向から包囲してデバイスを構える。

しかし、自分よりも弱い相手が束になったからといって焦る必要はない。それにこの程度の相手なら……とアルは普段あまり柄はない

武器を使用する。

「ウルフ……牙を出せ」

《Ｆａｎｇ，ｏｐｅｎ》

ウルフが牙――銃剣状態のウルフの半分の大きさの遠隔操作機『ファングビット』を二つ展開する。これはアルの意思で操作できるが、ウルフがコントロールする事も出来る。

「そ、そんなこけおどし！」

アルはビットに思念を飛ばして周りをヒュンヒュンと飛ばし、一気に散開させる。

同時に両手に持つウルフを交差させて側面にいる二人に銃口を向けて引き金を引く。

《Ｓｈｏｏｔ》

更にウルフがアルの上下にいる局員に至近距離からレイズショットを使って直撃を喰らわせる。

四人に銃弾が浴びせられたと理解した局員達が一斉に魔力弾を杖か

ら放つ。

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ》

しかしアルは空いた頭上の空間を突っ切って全員を視界に捉える様に真上を取る。

標的を失った魔力弾は先程までアルがいた位置で衝突し合って誘爆する。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

ウルフからそれぞれ一発ずつのカートリッジが排出され、銃口に黒い光球が生まれる。

更に自分の意思で動くビットを操って少し離れた位置から同じように黒い光球を切っ先に宿して真下の魔導師達を狙う。

「ダークネスバスター！！」

ビット含めた四つの銃口から黒い閃光が放たれ、数人の魔導師に直撃。更に直撃の余波が周りの魔導師を襲う。

《Ｓｌａｓｈ　Ｆａｎｇ》

局員達の意識が外れた刹那。ビットの刃が黒い魔力刃を纏って、砲撃の直撃を食らって落ちていく魔導師に向かって高速移動で空を駆ける。

二人の局員の胸を、ビットが突き破る。

だがその身体に傷は一つも残っていないのにも関わらず、局員達は気を失い、バリアジャケットすらも解除されて落ちていく。

更に二人の局員を貫いてアルの下へと戻る。

その切っ先の先には四色に輝くリンカーコアがそれぞれ二つ付いている。アルはそれを封印解除状態の星の雫に取り込む。

四つのリンカーコアを喰らって、星の雫の輝きが増し、灰色の部分が一段と少なくなった。

「ヒッ……」

その様子を見ていた一人の局員の表情が恐怖に染まる。自分の仲間の命が喰われる場面を見れば、誰だろうと恐怖を感じるモノである。

そして同じ様に石化しながら落ちていく仲間を見ていた局員達から先程までの気合が失せていく。

「チィ……やってくれたな、このガキ！」

指揮官が錫杖槍を振りかざして突進し、アルもビットで応戦する。

二方向から襲ってくるビットを見事に避ける指揮官。だがアルはしっかりとその動きを見極め、そして。

「ぬっ！」

指揮官は両手を広げてシールドを展開し、左右から襲ってくるビットを食い止める。

しかしそれは、アルにとって最高の的になる行為だった。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

片方の拳銃からカートリッジが二発排出され、魔力が収束されていく。

「お前ら援護しろ！」

指揮官が焦って周りにいる局員を怒鳴り上げる。その声に漸く我に

返った局員達がアルに魔力弾を放ち始める。

しかしアルは大きく弧を描く様に宙返りをして放たれた魔力弾を避け、指揮官の正面へと移動。

チャージした魔力球を宿したままの銃口を指揮官に突き付ける。

《Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｂａｓｔａｒｄ》

「まっ――――」

そして間髪入れず引き金を引いて砲撃を発射。

放たれた砲撃は指揮官を呑みこみ、地上に落ちて魔力爆発を起こす。

「ファング！」

《Ｏｐｅｎ》

アルの周りに更にファングビットが出現する。

残り六人の局員を狙い撃つかの様に四つのビットと二丁の銃口が向けられる。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

二発のカートリッジを排出してそれぞれが魔力を収束する。
指揮官が落され、外との通信は出来ず、勝ち目のない相手。その状況は指示系統を失った彼ら局員にとって絶望的だった。

「ぅ……うあああああああ！！」

一人の局員がアルに背を向けて飛び去って行く。
それに釣られた様に他の局員も散り散りになって逃げる。

「ダークネス……フルバーストォ！！」

アルは引き金を引いて、砲撃を放つ。
放たれた砲撃は一直線に局員を撃つ抜いた。

「……」

アルは地上に落ちていく局員達を見つめ、表情が強張る。
逃げていく者を後ろから撃つというのは非常に心が痛んだ。それは

彼らが逃げる理由を彼は考えてしまったからだ。

怖い。死にたくない。大抵の人間はそんな感情で逃げる。だが、それは人として生き物として当たり前の感情。だが中には、どれだけ醜く逃げようと、例え無様だと言われようと、生きたその先に大切な物がある。その為に生きる。

それを一番よく知っているアルだからこそ苦しい。だが此処で撃たなければならなかった。その為に半年も苦しみながら傷つきながら前へ進んできたのだから。

（あいつらの所為……かな）

それに、ここ最近は自分と思考がよく似ている者達と沢山で会い、感化されていたのだろう。ようやく慣れたと思ったこの感覚も今は始めて人を襲った時の様に感じる。

《アル……》

ウルフがホログラムとなってアルを優しく促す。

「わかってる」

自分の周りに浮いている星の雫をアルは高らかに掲げる。

掲げられた星の雫は結界の中いっぱいに七色の光が溢れた。

「――――掌握」

その一言で落ちていった局員達からリンカ―コアが現われ、星の雫の中に吸い込まれていく。

一つ、また一つ。そして二つ、三つと魔導師の命が喰われていく。

小さく輝く星達が消えていく様に。二十人の“命の輝き”が喰われていく。

そして全てのリンカ―コアを喰らい終えた星の雫はほぼ全体が七色の輝きに染まっていた。

「星は静かに眠り光は昇る」

アルのキーワードで星の雫は元の輝きを失った姿に戻る。

それを強く握りしめる。

アルは俯いて小さく呟いた

「……ごめん……なさい」

その言葉と共に結界が砕け、アルの足下に黒い魔法陣が広がり、アルはその場所から消えた。

第九話　星の雫（後書き）

次話の事を考え、いつもよりも少々短くなってしまいました。

次は出来るだけ早めに更新出来ればいいなぁ……

第十話　静かな夜に（前書き）

星に願いを籠めて星の皇女の紡ぎし歌は、交わらぬ運命を次第に結びつけゆく。

星の生まれる地。始まりと終わりを閉じ込めし聖地なり。

第十話　静かな夜に

空が夕焼けの茜色に染まりつつある頃。

西の空は明るすぎるほど紅く染まり、東の空から夜の闇が迫りくる。

辺りは何処までも広がる広大な森と、その森を挟む様に悠然とそびえ立つ山々、その広い谷を西に進めば雄大な青い海が広がっている。

此処は誰もが知っている世界。しかし誰もが知っていながら、誰も知らない。此処はそんな星の生まれる場所。

しかし地球よりも豊かな自然に恵まれたこの世界は、星の恵みを受けた世界。生きる為に命が命を犠牲にし、新たな命を紡いでいく命の輪廻のみが支配する世界。

そこに住む動物たちは日が沈むのに合わせて自分たちの住処へと帰って行き、森の一角で咲き乱れていた花たちは太陽が沈むと共にゆっくりと花を閉じ、夜が訪れると共に森から生き物の気配が少しずつ消えていく。

海は太陽を呑み込んで辺りに闇が落ちて、あらゆる命が夢を見る。

楽しい夢、怖い夢、辛い夢、幸せな夢。様々な夢をそれぞれの命は抱き、東の山の向こうから新たな日の始まりを告げる太陽が昇るのを待ちわびる。

世界を優しく夜の闇が包み込む。しかしその夜の暗闇を無粋に切り裂く光はこの世界のどこにもない。

あるのはただ夜空に瞬く満天の星の煌めきと、優しく命を照らし癒す大きく丸い、月の光のみ。

雑音も何もない。人の居ない世界はただただ命と安らぎに満ち溢れている。

そんな世界に、優しく女の子の声がまた響きはじめる。

「――――――」

優しい歌だ。まるでこの世界の眠りゆく命たちへ歌っている子守唄の様に優しい歌だ。

歌声の響く方には、人工の物であろう建物が空を突き刺す様に天辺は雲を突き抜けて立っている。しかしその外観は寂れ、長い年月人の手が加わっていないかの様に蔦が建物を覆い尽くしてボロボロだった。

これはかつてこの世界に住んでいた人が造り上げた、星の意思と力を祀る神殿だ。

声は神殿の中から響き、動物たちは歌声の響いてくる神殿の入り口の周辺に何処からともなく集まってくる。ただこの歌を聴き来る。

神殿の中に光は無く。ただ向こう側の見えない闇が広がっている。その闇の更に奥。神殿の中で最も高い位置、そして最も神聖なる場所で、少女は歌っていた。

天井は吹き抜けとなっていて、満月の光が吹き抜けから部屋の真ん中で歌っている少女を儚げに、けれども女神の様に美しく輝かせる。

床に無造作に広がり月の光を受けて煌めく長い銀髪。そして真っ白なワンピースに身を包んだ少女は歌う。胸の前で手を合わせ、床に膝を着き、祈る様に想いを籠めて。

十字架に六亡星を重ね、この世界の文明の使っていた文字が刻まれた魔法陣が描かれ、半径二mはあるでろう台座の上で少女は膝を折り、この世界で最も星空に近い場所で歌っていた。

それは此処の動物たちに聞かせる為だろうか、それとも、自分の為に歌っているのだろうか。ソレは少女にしか分からない。だが、これだけは言える。

歌を歌う少女の表情は決して暗くなど無い。ただ悲しげで、ただ辛そうで、けれども希望を失っていない。そんな表情だった。

この歌はかつて少女の母が子守唄の様にいつも歌ってくれた歌。優しく包み込み、癒してくれるこの歌を歌う事で、少女はたった一人の夜をいつも過ごしている。

少女は顔を上げ、吹き抜けから覗く月を見上げて歌う。その瞳は鮮やかな瑠璃色をし、悲しそうに見える。

唯一残った大切な人のただ一度見せた泣き顔が、少女の脳裏を過る。

――必ず……必ず、助けに来るから……。だから……それまで……！

後悔と自責の感情に押し潰されそうな表情で、自分と同じ銀髪に蒼い瞳をした少年の辛そうな姿が。

自分の想いを籠めて、少女は歌う。

たった一人の、最愛の兄に届けと。

次元を超えて歌は響く。

「……ッ」

演習中の局員を襲撃した日の夜。

人の住んでいない管理外世界の一面を覆う自然が溢れる森林の中、夜が更けるのをじっと待っていたアルが、突然弾けれた様に跳び起きた。

《どうした？》

ウルフがホログラムとなってアルの肩に現われる。

「……イリア」

しかしアルはウルフに応える事無くフラフラと立ち上がり、夜空に広がっている星空を見上げ、右手を伸ばす。

何かを掴もうとしたのではなく、ただ近づきたいという感情から出た行動だった。

《アル？》

「歌ってるんだ……イリアが……」

《イリアの歌だと？》

ウルフが耳を澄ませて聞き取ろうとするが、聞こえるのは森に流れる風の音ばかり。

「聞こえるよ……イリア……」

だがアルには確かに聞こえている様で、自分からもイリアに語りかけるかの様に呟く。

「イリアの歌が……優しい……歌が……」

アルは悲しそうな、けれども非常に優しい笑顔を浮かべ、瞼を閉じる。

次第にアルの目に涙が溢れ、頬を伝って滴り落ちる。

イリアも一人で頑張っている。悲しくて寂しくて筈なのに。今こうして自分を想って歌を届けてくれている。その事がアルには嬉しくて、愛しい気持ちが溢れてきて、涙と共に流れ出た。

念話でもテレパシーでもない。“絆”を持つ者同士のみが許される心の共鳴。

かつてアルの両親も使う事の出来た、お互いの心が同じになった時に想いを伝え合う事が出来る能力。今ではアルとイリアにだけ許された絆。

（星の絆の共鳴（ステールラ・ノードゥス）……か）

星の絆（ステールラ・ノードゥス）。ウルフはテトとルルから、絆を持つ者がお互いの存在を心の底から愛おしく想い、けれども遠く離れて会えない時に発現すると教えて貰った事がある。この条件から、二人は発現させる事は無かったらしいが、発言した事は二人にしか分からないので断言はできない。

しかし、これがアルとイリアの二人が発現させるという事は、お互いにお互いを求めているのに、会う事も出来ず。片方は疲れ傷つき、片方はいつまでも待ちつづけて孤独を感じる。

その事を思うと、ウルフはイリアの歌声を聴いて嬉しそうに夜空を見上げるアルを見て、デバイスではあるけれど、胸が張り裂けそうな程に悲しい気持ちになる。

「――――――」

アルにだけ聴こえるイリアの歌声に乗せて、アルもイリアに歌を届ける。それがイリアに届いたかどうかは分からない。

たった一言、口にした歌は夜空の冷たい風に乗って森に響く。

しかし、その声はどこにも届く事なく……

夜の森に呑み込まれた。

◆◇◆◇◆◇◆

翌日。

なのは達の通う小学校は、終業式の真っ最中である。今日で一学期が終わる。明日からは夏休みという訳だ。

式の最中であっても、明日から――正確には今日の午後から――学生たちの特権である夏休み。嬉しくない訳もなく、これからどんな風に遊んで過ごそうと考えてにやける者。沢山でる宿題をどうやって速く終わらせようと悩む者。早く終わらないかな～っと欠伸をする者。様々なこれからを思い描いて式が終わるのを今か今かと待ちわびる。

「つまり私が言いたい事は、一人一人がマナーを守り――――」

校長先生のお話が体育館に響き、周囲の生徒達がそんな風に浮かれている中。なのは、フェイト、はやての三人は真剣な面持ちでこれからの事を考えていた。

彼女たちは日本の労働基準法を無視して管理局という組織に勤務している。もっともそれは彼女たちの友人二人、そして家族以外の誰も知らない。

その彼女たちは次元世界で起きている事件を追う事となっており、強から本格的にアルの追跡に出るのだ。

「そっか、なのはちゃん達これから仕事なんだ」

「ごめんね、すずかちゃん」

終業式が終わり、各教室で担任から出された沢山の宿題と荷物を持ってクラスメイトが帰宅する中。なのは達はすずかとアリサと、これからの予定を話していた。

「ううん。しょうがないよ。それがなのはちゃんたちのお仕事だもん」

「それに、どうせあんたの事だからそのアルって子の事も放っておけないんでしょ？」

首を横に振って笑うすずかと、微かに微笑みながら言うアリサ。
そんな二人になのはは、にゃはは と頬を掻く。

「でも途中までは一緒に帰れるんでしょ？」

「うん。それは別に構わないって」

「クロノさんが言ったの？」

フェイトの肯定に、アリサはその台詞を言った人物を推測し、フェイトは頷いて肯定。

「じゃあ、いつもの公園まで来るまで行くか？」

はやてがそう言うと、全員賛成の声を上げる。

それから、海鳴市全体を眺める事の出来る風芽丘に着くまでの間。
一同は事件後は全員で一緒に遊ぼうと約束したり、なのは達がいない間の面白い出来事や笑い話。

そしてなのはは無理無茶禁止と只一人忠告されたりとつかの間の楽しい時を過ごした。

その後、風芽丘に着いたなのは達はアリサとすずかに別れを告げてアースラへと転送された。

アースラに乗艦したなのは達は、待っていたシグナムに連れられて会議室へ集まる様に伝えられ、それぞれの管理局の制服に着替えて会議室へ行く事に。

「すいませーん。遅れました」

「いいえ。別にそれほど待ってないわ」

なのは達が入室すると、リンディが柔らかくお出迎えしてくれた。

とりあえず座りましょ、と言うリンディの言葉に従い、空いている席に座る。

「さて、コレで全員揃ったな」

クロノが立ち上がり、早速だがと今回の会議について話し始める。

「今回は会議というより、報告だ。いい知らせと悪い知らせがあるんだが……どっちから聞きたい？」

いい知らせと悪い知らせ。二つの報告があると聞かされたリンディとエイミィの二人以外は表情をやや強張らせた。

いい知らせは確かに聞きたい。だが、悪い知らせはなんとなく予想が出来るのだ。

クロノはそんなみんなの考えが伝わったのか、悪い知らせから話し始めた。

「じゃあ悪い知らせから。一昨日から第２１無人世界『ネイチャ』で武装隊の演習が行われている。まぁこの演習は昔からよく行われているんだが、今回は二十人弱の大体二部隊が演習を行った」

クロノの報告に、リンディとエイミィ以外のメンバーは首を傾げる。が、クロノはそんな事に構う事無く話を続ける。

「だが昨日、この二部隊の演習中に何者かに襲撃され、全員撃墜されたらしい」

クロノの口調が一気に真剣みを帯びる。

「そして全員……リンカーコアを抜かれて石化しているとの事だ」

中には砕け散っている者もいるらしい、と付け加えて言うと、なのは、フェイト、はやての顔色が悪くなる。

どうやら石化した人間が粉々になっている場面を克明に想像してし

まったらしい。

「リンカ―コアが抜かれている時点で、アル・スフィニールの犯行と見てまず間違いない」

リンカ―コアを抜き取るなんて事が出来るのはアルぐらいしかいない。

それに今、彼の居場所が全く分からない状況ではなおの事その可能性を高めていた。

「此処からネイチャは結構離れている。アースラでも飛ばして丸々一日は掛かるだろう。今回は諦めてその世界の周辺で待機する事になった」

クロノは、これで報告は以上だと言い終え、次にいい知らせの方を話し出す。

「さて、次はいい知らせだが……ユーノ、頼んだ」

クロノの呼び掛けでモニターが一つ開く。

『みんな、だいたい一週間ぶりかな？』

そこには以前とはまるで違って顔色の良いユーノが映っていた。

「ユーノからいい知らせって事は……ロストロギアについて何かわかったの？」

フェイトがそう尋ねれば、ユーノは笑顔で頷いた。

『そうだけど……そっちも大変だったようだね。クロノに聞いたよ』

「あはは……けど誰も死んどらんし、それなりに進展もあったから結果オーライや」

はやてが苦笑しながら答え、守護騎士たちも苦虫を噛み潰したような表情をする。

しかしユーノは、そうだね、全員無事だったんだし。と納得して相槌を打つ。

「オホンッ」

そこにクロノが軽く咳払いする。

『じゃあクロノが煩いから報告を始めるよ』

ユーノは苦笑いしながらモニターを幾つか開いてこれまで調べて分かった事の報告を始める。

『まず、星の雫から』

雫の形の宝石が大きく映っているモインターを拡大し、全員が見える様にしてユーノが説明に入る。

『前にも話したように、これは人のリンカ―コアを取り込む能力と、持っているだけで所持者に魔力を少しずつ譲渡する二つの能力がある』

一つ目の能力はアルがリンカ―コアを集めるのに使っている能力だ。そして二つ目の能力は所持者の魔力強化だ。

この能力は所持者の魔力資質を強化するのではなく、所持者に魔力を貯蔵する能力である。つまり自身の魔力が回復する速度が倍近くになっているだけで、実際の所は使ったら使った分だけ魔力を失っているのだ。

しかし、星の雫の能力の恐ろしさはこれではない。

『星の雫が本当に恐ろしい理由はこれだよ』

ユーノは新しいモニターを二つほど出現させる。

一つは円グラフと棒グラフのモニターで何らかのエネルギー値を示しているらしい。もう一つは何かの文献の一ページの様だ。

『これは過去、星の雫が使われた時の資料。これからすると、星の雫は取り込んだリンカ―コアをそのまま自身の中で利用して絶えず魔力を生み出し続けているらしい』

「え？　それじゃあ、今まで取り込まれたリンカ―コアは……」

フェイトが頭に思い浮かんだ推測を口にする。

「今もずっと、あのロストロギアの中で生き続けてる。って事？」

「そうだ。フェイト」

クロノがフェイトの考えを肯定する。

「あのロストロギアの中で、今まで取り込まれたリンカ―コアは未だに活動している。リンカ―コアは周囲の魔力素を吸収して蓄積し、

それを魔力として僕らは使う」

「けれど、魔力の放出が蓄積が間に合わなくなるから、魔力の枯渇が起こる」

クロノに続いてリンディが全員が知っている事を改めてこの場で解説する。

『一つのリンカーコアだと魔力の蓄積速度は、個人差もあるけど非常に遅い』

「けれどもし、リンカーコアが二つ、三つあれば……話は変わってくるわ」

もしもリンカーコアが二つ以上あれば、魔力の蓄積と放出を二つのリンカーコアで交互で行う事で魔力の枯渇を起こしにくくなる。

かつてなのはが守護騎士たちに魔力を蒐集された時も、三日がかりで漸く完全回復した事がある。なのはは魔力の集束が得意で、回復速度も他の魔導師とは飛躍的に高い。それでも、三日かかったのだ。

なのはほどの魔力資質はなくとも、それなりに資質の高い魔導師のリンカーコアが幾つもあれば、その魔力の蓄積効率は飛躍的に上昇する。

『完成すれば、間違いなく魔力供給の永久機関になるね』

魔力供給の永久機関。それは違い無く、以前ユーノが言っていた「無限の力」と言えるだろう。なぜなら、持っているだけで誰もが魔力量を気にする事無く、そして際限なく魔法が使えるようになるのだから。

「この事から彼、アル・スフィニールの高い魔力値はこれによる影響が高い」

まだ完成していないとはいえ、星の雫の影響がない筈がない。

「あれ？　でもおかしくないか？　所持者に魔力供給するんやし、アル君って凄く強いやん？　せやからもっと魔力量あっても良い気がするんやけど……」

「それは……確かに……」

はやての疑問にクロノも思わず納得してしまう。そしてある疑問が浮かぶ。それは、自分達がアルの魔力資質を元から高いと思い込んでいるのではないかというモノだ。

星の雫の犠牲者は百を超えるほどだ。なのにまだなのは達の魔力量よりやや多い程度というのは、はやての言う通りおかしい。ならば本当は彼の魔力量は自分たちよりも少なく、その為に力を求めているのではないか。

だがどちらにしても本人の本当の魔力資質がどれぐらいかは分からない。しかし、間違いなくこの力を頼っていると考えても良いだろう。

『次に星の器だけど』

ユーノが言ったん話しを切って次の話題へと進める。

今まで開いていたモニターを閉じて、代わりに六亡星を二つ重ねた様な陣を二重の縁で結んだ魔法陣が描かれた大きな台座のモニターが拡大されて表示される。

『コレは前に話した通り、星の雫の力をより効率良く自分の中へ取り入れる為の物でもあるみたいだ』

星の雫の魔力供給。それをもっと効率良くさせる為の物なのだ。

しかし、ユーノの説明はこれでは終わらない。

『でも本当の用途は別にある』

「別に？」

なのはが首を傾げる。

魔力供給の効率アップだけでも十分な能力であるのに、まだそれ以上の能力があるのかと思う。

『この星の器は本来、星の鍵を守る為に生み出された絶対防壁だったんだ』

「……そう言えば、その星の鍵に着いて何かわかったのか？」

クロノが思い出したように言うと、ユーノはあからさまに顔色を変え、頬が引き攣っていた。

『……一応』

小さく呟く様な声で絞り出した一言だったが、クロノは聞き逃す事はなかった。

「じゃあ分かった限りで良いから教えてくれ」

『鍵は王家にあり』

「は？」

クロノが間の抜けた声を出す。

『だから、鍵は王家にあり、だよ』

「意味が分からないんだが」

ユーノの言葉の意味を理解できなかったのはクロノだけではなく、ほぼ全員がその言葉を理解できていなかった。

『星の鍵についてはこれ以上探しても出てきそうにないんだよ。で、分かったのは多分鍵の在処を示したヒントの様な碑文だけ』

これ以上は流石の無限書庫でも出て来ないよ、そう言うユーノの表情は本当に疲れていて、かなり根気よく探したみたいだがユーノ程の力量があっても分からない事はあるようだ。

「全く、それだから君はいつまでたってもフェレットもどきなんだ」

『もどきって何だもどきって！　大体僕はフェレットじゃなくて人間だ！』

「はいはい。わかったよフェレットもどき、もとい元人間のユーノ・スクライヤ」

『全然分かってない！』

というクロノとユーノの喧嘩――――正確にはクロノがユーノを弄って遊ぶ行為――――が始まり、その掛け合いが続く中、なのは達は漸く緊張から解放された様に楽しげに笑うのであった。

星の雫の完成が刻一刻と迫っているとも気付かずに。

第十話　静かな夜に（後書き）

小説を読もうで歌詞の無断掲載を禁止されたので歌詞を綺麗さっぱり削除しました。

でも一応イメージとして、堀澤麻衣子の「Ｌａ　Ｌｕｎａ」を聞きながら読むことをお勧めします。

第十一話　加速する物語り（前書き）

星の巡りは時と共にその姿を変え、新たな未来を照らし出す。

星の加護はいつも、誇りを抱き続けて光輝く者にあり。

第十一話　加速する物語り

一面が荒野に覆われ、巨大な岩山がそびえ立つ無人世界。

アルはそこで見つけた巨大な洞窟の中に魔力を隠して身を潜めていた。

「はぁ……はぁ……」

別の世界から此処に逃げ込んできたアルは、乱れた息をゆっくりと整える。

アースラがアルの確保に本格的に乗り出し、アルが演習中だった武装隊を襲ってから一日に最低一度はアースラメンバーにはアラートが響いて緊急出動の要請があった。しかしいずれもアルを取り逃がし、事態に進展はない。

彼らにしてみれば、一応アルの犯行を邪魔する事が出来ているのである意味で本懐は遂げている。

「くそっ……。今日も殆ど集められなかったっ……」

ガッ！と洞窟の内壁に背を向けたまま拳を打ち付ける。

「あと少し、あと少しで……イリアを助けられる力が手に入るのにっ！」

アルは今まで以上に行動範囲を広げ、更に寝る時間すらも裂いてリンカ―コアを集めているにも関わらず、焦っていた。

星の雫の完成は目前とはいえ、此処一週間のリンカ―コアの収集率は今までの半分程度に落ちているのが原因だ。

それはアースラがアルを追う事で、アルのリンカ―コアの収集も困難になっているから。その理由は、アルの絶対的な自信とこれまでの戦闘を可能にし、外からの解除は不可能とされてきた捕獲結界が完全に攻略されてしまったからだ。

これまではこの捕獲結界があったからこそ、安全無事にリンカ―コアを集められて離脱も楽だった。しかしその結界が意味をなくした今、アルはおいそれとその場に長いする事は出来なくなり、リンカ―コアを収集して即座に離脱する為に対象の命を直接奪う程の不意打ちをせざる負えなくなった。

個人の次元転移の移動距離はあまり遠くなく時間もかかる。よってこの近くの世界を一気に離れて全く別の世界でリンカ―コアを集めるというのは無理だ。が、不可能ではない。

しかしそれには慎重に転移を繰り返す為、時間が掛かるのだ。そして、このあたりは局員の魔導師が多く滞在している世界が多く存在している。この場所を立ち去ればこれまで以上にリンカ―コアを集めるのは困難になり、またイリアを助けられる刻が先延ばしになっ

てしまう。

《これ以上時間を掛けるのはあまりよくないな。只でさえ半年も掛かってるんだ。何かしらの報復があってもおかしくないだろう》

「くっ……」

ウルフの言う通り、これ以上の先延ばしはイリアの精神力や心労を考えると得策ではない。いくら自分を信じて待っていてくれるとしても、あの女――リリス・ルキフェルが何もしないという保証もない。

しかし、アルは今まで以上に行動範囲を広げ、更に寝る時間すらも裂いてリンカーコアを集めている。最近の睡眠時間と休息時間の減少に比例して、襲撃にアルの体力の回復が追い付かなくなり、射撃の精度も少しずつ少しずつ落ちていた。

《……やはり助けを求めた方がいいのではないか？》

ウルフはアルの正面に現われてアルに提案する。

それはアルの今の体調を考えての発言だったが、今のアルがそれを理解する事はなく反発する。

「管理局の助けなんかいらない！　オレとお前だけでイリアは助け

られる！」

今までずっと一人と一機で戦って来た。半年も時間は掛かったが、後少しという所までリンカーコアを集められた。たった一人で、誰の助けも借りず、相棒であるウルフと共に生きて、罪人の道を歩いて来た。なのに今更助けを求める事など出来るものか。

それがアルの想いだった。

「ずっと俺たちだけでやって来た。やって来れた。なのにどうして他人なんかに助けを求めないといけない！」

《今まではこれほど酷く消耗する事も無かった。だが彼女たちほどの魔導師と頻繁に戦闘を繰り返していたらお前の身体は……》

「リンカーコアを集める度にオレの力は強くなってる！　アイツらに届かないならもっとリンカーコアを集めて力を付ければいい！　そうすれば――」

《彼女たちの力は私たちの様な紛い物とは違う！》

アルとウルフの口論は、ウルフの怒声が洞窟に響き渡る事で一時的に止まる。

《お前の力は確かに大きくなった。以前とは比べ物にならないほどにだ》

「なら！」

《だが彼女たちの力はお前の力とはまるで違う。お前の力はどんなに強くなったとしても所詮借り物。本当の力を持つ彼女たちには……遠く及ばない》

「……ッ」

アルはグッと唇を噛む。

しかしウルフの言う通り、自分の力はどれほど強く大きくなっても所詮は仮初の力。その仮初の力も星の雫の恩恵によるもので、ただ魔力を蓄積させて魔力量を無理やり増やしているだけ。本来の魔力など彼女たちに比べれば微々たるもの。

だが彼女たちは生まれたその時から、巨大な力を持っている。そしてその力に奢る事なく鍛練を繰り替えして、その『才能』という力を『実力』をいう力に昇華させた。実力を伴った才能は本物の強さなる物を宿している。「誇り」とも「信念」とも「覚悟」とも言うべきそれは、それを持つ者と持たぬ者に差を生みだし、捨てた者では絶対に越える事は出来ない壁となる。

《覚悟は確かに人を強くする。だが、誇りはその強さをより強靭な物にする。誇りを捨てた者に、誇りある者は倒せない》

アルはかつて「誇り」を捨てた。

両親の息子に生まれた事に、この一族に生まれた事に、その身に流れる血に、人を守れる力に誇りを持っていた。

誇りある者は強い。それを一番よく知っているのは他ならぬアル自身。誇りを捨てたからこそ、その誇りを持っていた時の自分の強さというのを自覚した。だがその誇りも捨てた。一度捨てた物は、もう二度と戻らない。

「どの道……オレはもう人殺しだ。何百人も殺したんだ」

アルは懐から星の雫を取り出し、それをウルフとアルの間に浮かべる。

「コレに取り込まれたリンカ―コアはもう元に戻る事はないんだ。それは始めから分かってた事だ」

星の雫に取り込まれリンカ―コアはもう二度と外に出る事はない。それはつまり、リンカ―コアを星の雫に奪われた者の死を意味する。魔導師の第二の命とも言うべきリンカ―コア。それを喰らう星の雫はその魔導師の魂すらも喰らう貪欲な宝石。

そんな物を持って半年の間、魔導師を襲って回っていたのだ。管理局からすれば、アルは魔導師の身という限定はあれど、無差別殺人の凶悪犯だ。助けてくれと言った所で言う事を聞いてくれる筈もない。

「誰も……助けてくれる訳ない……」

《アル……》

膝を抱えて座り込むアルをウルフが下から覗きこむ。そこに見えたのは「諦め」の表情。誰かに希望を抱くという事を忘れてしまった光りなき眼。

それが、この半年の間に他人を頼る事を忘れ、誇りすらも捨てて戦って来たアルの感情。

ウルフはそれを感じつつも、アルの他人を頼らない感情の奥底にアルの小さな意地を感じていた。

（お前はまだ……誇りを捨て切れていないんだな）

誇りを捨て、自分自身である事すらもやめてしまったアル。

だが、これまでの半年。血反吐を吐き、泥水を啜り、何度も死にそうな目に遭って、漸くオーバーSランクの魔導師を相手にできるほどの力を手に入れた。そして、イリアを助けられるあと一歩まで来た。ならば、自分の力で助け出したい。それはアルのほんの少しだけ残った誇りだ。

捨てた誇りはチンケなプライドに成り下がり、そして今では惨めな

意地となってしまった。惨めだろうと、辛かろうと、馬鹿だと言われようと。自分の家族は自分で助け出す。

「……」

《……》

二人の間に沈黙が広がり、ビュォォ！っと洞窟を抜ける風の音が響く。洞窟の奥はどこかに通じているらしいが、今の二人にはそんな事はどうでもいい。

アルはおそらくイリアの事を考えているのだろう。ウルフも彼女に会う以前ならアルの事を考えていただろう。

これからの戦いと出会い。そしてその度にアルの心は疲弊し、荒んで行く。それを解決するには自分以外に頼れる人物がいればいいのだが、生憎と両親も友達も親戚たちも皆、既にこの世にはいない。

だがウルフにはたった一つだけ、アルが心を許すだろう人物を知っている。

今日まで何度も戦い。その度にアルに話しかけ、少しずつアルの心に踏み込み始めている人物。

（高町なのは。彼女なら……アルの疲れ果てた心を救えるかもしれない。そして、おそらくイリアも……）

彼女たちはそれが可能となりうる力を持っている。この星の雫を渡し差しなければ、リリス・ルキフェルにも勝てるかもしれない。

彼女が何を考えてこの星の雫を渡して来たかは分からないが、この雫の力と彼女たちの力を合わせれば可能だ。

しかし、その為にはアルが彼女たちに心を開き助けを求めなければならない。だが意思の硬いアルが一度言った事を簡単に曲げる筈もない。

どうすればいいのか。ウルフがそう考えている時、一通のメールが届いた。

アルはそれを黙って開く。自分に連絡を寄こす相手など、今は一人しか居ない。

「……ッ！？」

差出人は勿論、リリス・ルキフェル。

アルはメールの内容に目を通して声を失った。

「……ぁ」

目は大きく見開かれ、小さく口元が震えている。

ウルフはそんなアルの様を不審に思い、自身もメールを読む。

《なっ！？》

そして同じように驚愕する。

そこに書かれていたのは、時間の猶予はないという報せ。

これ以上時間を掛けるようなら……貴方のお姫様には眠って貰おうかしら。

永遠に、ね。

その言葉はアルの良心を潰させるには十分で、

アルの瞳から光が消えた。

◆◇◆◇◆◇

所変わってアースラ内部の食堂。

「はぁ……」

「元気出して、なのは」

深い溜息を吐いて落ち込むなのはをフェイトが慰める。

なのはが落ち込んでいる理由は、アルと戦っては話し合えず逃げられ続けているのが理由である。

「私、嫌われてるのかな？」

ボソっと言ったその一言に、フェイトは答えられずに苦笑する。

なぜなら彼がなのはから逃げる時は、自分達が相手になった時と必死さがまるで違う。フェイト達の時は仕方ないという感じで適当に相手をしながら逃げるのだが、なのはの時は一目散に逃げ出しているのだ。それはもう必死で。

アルとなのはの今の関係は、なのは襲撃→アル離脱→なのはとアルの砲撃戦→アル逃走といったを流れを繰り返し、全く何の発展のなし。

「まぁ、焦らずじっくりやっていければいいんやけど。そうは言ってられんやろうな」

「はやてちゃん……」

二人の前にお茶を注いだガラスコップを三つ載せたお盆を持ってはやてが現われる。

はやては二人の向かいの席に座り、持ってきたお茶を二人に分ける。

「うちらが介入してるとは言え、完全に妨害し切れてへんし……」

「あまり猶予は無い、かな？」

「無いやろね」

フェイトの言葉にはやては重々しく頷いて同意する。

アルは少しずつだが、確実にリンカーコアを集め、星の雫の完成に近付いている。だが自分達は一向に事態を進展させる事も出来ず、同じ事の繰り返し。

しかし彼女たちも完全に後手に回り、指をくわえて見ている訳ではない。

「でもエイミィさんのおかげだよね。ここまでアル君の介入ができるようになったのも」

エイミィがアルの結界を解析し、解除コードを作成したおかげでアルの結界が展開されていても直ぐに結界内に突入できるようになったからだ。これによって星の雫の犠牲者を一気に減少させる事が出来た。

ここ一週間で一番の進展とも言うべき出来事だが、それはあくまでも結界の解除が出来る様になったというだけで特にこれと言って成果は出ていない。

「まぁ、流石に今日はアルくんも動かへんよ」

はやてがそう言うと、なのはもフェイトも、そうだねっと頷いて席を立った。

まさにその時。

『キャアア！！』

アースラ艦内に轟音が響き渡り、船が大きく揺れた。

直後、船内は緊急事態を知らせる赤いランプが点灯し、アラートが響き渡る。

「な、何!?」

「一体何が……!」

『緊急事態発生!　何者かが艦内に侵入した!　繰り返す、何者かが――』

アースラ艦内全体に緊急の放送が流れる。続いて連続して爆発音と悲鳴が食堂にも届いて来た。

三人は少し呆けていたが、直ぐに正気に戻って先程の放送にあった侵入者という言葉を思い出し、それぞれのデバイスをセットアップする。

「シグナムたちも向かってる。ウチらも急ぐで」

「うん」

「了解」

三人は頷き合って食堂を飛び出すと、警報が鳴り響く現場へと走る。

途中逃げてくる局員と何度かすれ違いながら情報を集め、襲撃犯の特徴を集める。

一人はアレは悪魔だと言い。一人は少年だったと言う。そして一人は黒髪だったと言った。

これらを総合すると、思い浮かぶのはたった一人だ。

「こ、これは……！？」

現場に駆け付けた三人の目に飛び込んできた光景。それは……。

七色に輝く星の雫を手にしたアルの姿だった。

第十二話　喰われる命（前書き）

星の子は心を殺して鬼と化す。されど鬼にもなり切れず、星の子は迷い苦しむ。

運命は涙となって心を喰らう。されど誇りは消えず、胸の内で小さく灯り続ける。

第十二話　喰われる命

アルはリリス・ルキフェルからのメールを読んでから、アースラへと向かっていた。

それはもう時間がないから。もう手段を選んでいられる暇はない。ならばどうする？

一刻も早く星の雫を完成させなければいい。でもどうやって？

質の高いリンカ―コアを持つ魔導師を狙えばいい。なら何処に向かう？

そんなの目の前にある。自分を捉えようとして追っているアースラだ。そうと決まれば後は簡単だ。

――アイツらを襲ってリンカ―コアを手当たり次第に奪えばいい。

それがアルのアースラ襲撃に至った思考だ。

そして、アルはアースラの居住区を襲撃した。

襲撃の混乱に乗じて目につくリンカ―コア持ちを手当たり次第に襲い、設備を破壊しながらリンカ―コアを星の雫に吸収していった。

「……あと……三つ……」

駆け付けてくる武装局員の顔面を狙って魔力弾を放って昏倒させてリンカーコアを抜き取る。

「あと……二つ……」

ウルフのフルドライブを起動させて漆黒の刃を持つ銃剣で斬りつけ、致命傷を与えて反撃をさせずにリンカーコアは抜き取られて星の雫に取り込まれる。

「……あと……」

アルの手には七色に光輝く星の雫が浮かんでおり、もはや完成しているのではないかというぐらいに眩い、けれども見ていると寒気がしてくる様な輝きを放っている。

その足下には、リンカーコアを星の雫に喰われて石化して死んでいる局員達の姿があちらこちらに転がっていた。

「こ、これは……！？」

そこへ、騒ぎを聞きつけてなのは達がやって来た。

「……一つ」

アルは駆け付けて来たなのは達を見て、ウルフを握る右手に力を籠もる。

「あ、アルく――」

「なのは！」

なのはがアルに話しかけようとした時、アルはウルフを振り上げてなのはに向かって一直線に駆け出した。それに真っ先に反応したフェイトがなのはの前に躍り出て振り下ろされた銃剣をバルディッシュの柄で受け止める。

デバイスに込められた魔力がお互いに反発し合って火花を散らす。

「アル君、やめて！　どうしていきなりこんな事！」

「もう……時間がないんだ！」

「うぁっ！？」

「フェイトちゃん！」

アルは力任せにウルフを振り切ってフェイトを吹き飛ばす。
続けてなのはに向かって返す刀の勢いで銃剣を振るう。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

レイジングハートが咄嗟に桜色のバリアを展開して受け止める。
防がれたと分かったアルは直ぐに剣を引き、今度は上から叩き付ける。

「時間がないって、どういう事……！？」

「教える訳、ねぇだろ……！」

なのはのバリアとアルの銃剣が激しい火花を散らして拮抗する。しかし、ウルフはカートリッジを一発排出して刀身を強化してバリアに食い込み始める。

「く……レイジングハート！」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

なのはも負けじとカートリッジをロードしてバリアを強化する。
再び拮抗するバリアと銃剣。その激突の余波は周りにいたッフェイトやはやてをも巻き込んで突風となって吹き荒れる。

「あ、アカン！　こんなに狭かったらウチの魔法が使えへん！」

はやての魔法は広域の空間攻撃が主体である為、接近戦はおろか、こういった狭い空間での戦闘では使えない。

いや、使えなくはないのだが、味方も巻き込んでしまう上に此処はアースラの内部。はやての魔法を使うと反って被害が大きくなってしまう。

「ぐっ……」

「く……はぁあああ！」

アルは一歩前に踏み込んで銃剣をバリアに押し付ける。更にそれに呼応するかの様に左手に持つ星の雫の輝きが増してアルの魔力が急激に増大する。

その輝きに押されるかのようにアルの銃剣は徐々にバリアに食い込んでいき、遂になのはのバリアを砕き割る。

「ぁ……」

「……ぅらぁああ！！」

アルは深く踏み込んで身体を捻り、左下から思いっ切り銃剣を降り抜いた。

なのははレイジングハートでギリギリ直撃を避けたが、その勢いと力を受け止めきれずに後方に斬り飛ばされる。

「なのは！　くっ」

なのはが吹き飛ばされるのを、入れ替わる様にフェイトがバルディッシュを振りかざしてアルに攻撃を仕掛ける。しかしアルはそれを正面からウルフで受け止めて対抗する。互いにデバイスを弾いて再びぶつけ合うが、今度は組み合う事無くお互いに衝撃を受け流す。

二人が動けば二人の長い黒髪と金髪が動きに合わせて宙を舞い、まるで演武を行っているかのように見えてくる。

フェイトはクルリと一度回って勢いをつけて斜め下からバルディッシュを振り上げ、アルは一旦ウルフを大きく振り上げてから思いっ切り振り下ろす。しかし重い激突音を響かせて二人のデバイスが激突するが組み合う事はなく、互いにデバイスを真正面から弾いた反動で二人の体制が崩れてよろける。

アルは崩れた体制を無理やり立て直して身体を捻り、ウルフを一気

に振り払う。フェイトは軽くジャンプして体制を整え、水平にバルディッシュを薙ぎ払う。振るわれた二つのデバイスは甲高い金属音を響かせて互いにデバイスを弾き、互いに一歩下がる。

そして両者は同時にカートリッジを一発ロードしてデバイスを強化し、デバイスを振り被る。

「はぁあ！」

「せぇえ！」

フェイトとアルは同時に一歩踏み込んでお互いのデバイスを叩き付けあい、カートリッジで強化されたデバイスの一撃は力は拮抗し、火花を散らして組み合い、鍔迫り合いへと持ち込む。

（くっ……強い。これが……星の雫の力？）

フェイトはスピードには自信があった。シグナムとの模擬戦で、以前よりも接近戦の技術は上がったと自負している。だが、アルはそのスピードと接近戦に追い付き、フェイトと拮抗している。

元々彼は中距離（ミドルレンジ）の射撃型魔導師のはずだ。なのにこれほどの接近戦の技術があると、本来は接近型なのではないかと錯覚してしまう。

「あと一つで完成する。もうこれ以上……俺の邪魔をするな！」

アルの叫びに星の雫が反応し、より一層輝きが強くなる。

星の雫から流れてくる魔力を、アルはそのまま身体強化に回してフェイトを圧倒し始める。

徐々にフェイトの体制がのけぞり始めたと思ったその時、アルが突然力を緩めてウルフを引く。

「うぁっ！？」

突然力を抜かれてつんのめるフェイト。そこへ一回転して勢いを付けたアルの銃剣が斬りつけられる。

円運動で斬撃の威力を高めた一撃はギリギリで防御されるも力任せに振り切り、フェイトを吹き飛ばす。

「きゃあっ！」

吹き飛ばされたフェイトに巻き込まれる形で、はやてまでが通路の奥に薙ぎ倒される。

「ダークネス……」

アルはウルフを構え、カートリッジを一発排出し、銃剣の切っ先に黒い魔力光が収束させる。

なのは達がアルの砲撃体勢に入ったのに気が付くも、通路は狭く逃げられない。

そして、砲撃を放たれようとした刹那。

「紫電一閃っ！！」

アルの背後からシグナムが紅蓮に燃え盛るレヴァンティンを手に襲いかかる。

「くっ……！」

アルは咄嗟に横に跳び、振り下ろされた鋭い斬撃をかわす。

だがシグナムは直ぐに身体を回転させて再度レヴァンティンを叩き付ける。アルはなんとかウルフで受けるも、その威力を殺し切れきれずに後ろに押し飛ばされる。

「おらああ！！」

シグナムの後ろからヴィータが入れ替わる様に現われ、四つの紅い魔力光に包まれた鉄球を撃ち放つ。

「ウルフ！　ブレード・オン！」

《Ｓｈａｄｏｗ　Ｂｌａｄｅ》

「はぁあっ！」

ウルフはカートリッジを一発消費して銃剣の刀身に黒い魔力刃を展開し、アルは魔力刃を展開したウルフを×字を描く様に振るい、ヴィータの鉄球を四つのとも斬り裂く。

「シグナム！」

「ヴィータちゃん！」

はやてとなのはが助けに来てくれたシグナムとヴィータを見て安堵する。

「主はやて、ご無事ですか？」

「なのはもフェイトも無事みてぇだな」

二人ははやて達の安否を気にしながらも、目の前のアルに対してデバイスを構える。

なのは、はやて、フェイトの三人が無事だと分かり、シグナムがアルに視線を戻したその瞬間。アルはウルフを大きく振り被って飛び込んできた。

「ぬっ……」

シグナムは咄嗟にレヴァンティンを盾にして黒い魔力刃を展開したウルフの刀身を受け止める。不意打ちだった為にシグナムは足を一歩引く形で受け止める事となり、一瞬の隙が生じる。その瞬間にアルは身体を捻り、回し蹴りでシグナムの剣を弾く。

「しまっ――!?」

ガードが開いた所に、振り払う様にウルフを振り抜く。

が、

「あたしを無視すんじゃねぇ！」

ヴィータのグラーフアイゼンが割り込んでアルの斬撃を文字通り弾き返す。

「チッ……」

アルは体制を整えて着地するとすぐさまウルフを構えて再び突っ込む。

シグナム達が攻撃範囲に入ると共にウルフを短く振るい、左右に別れさせる。

「はぁ！」

シグナムが横薙ぎにレヴァンティンを振るうと、アルはウルフでシグナムの斬撃を受け止める。

「はっ！」

アルはシグナムの剣を防ぎながら背後に向けて蹴りを蹴り出す。

「ぐっ……！」

ヴィータは繰り出されたアルの蹴りをグラーフアイゼンを盾にして受け止める。が、これは防いだというよりアルによって攻撃を未然

に防がれたとも言える。

こんな狭い通路で壁側を向いていては、後ろに飛び退いて反撃というのは無理だ。

このまま硬直した状態が続くのかという考えが二人の頭を過ったその時、アルの左手に浮かぶ星の雫がまた一段と強い輝きを放ち始め、輝きが一瞬終息したかと思った。

その次の瞬間。

ドン！！という衝撃波と共に星の雫から光が溢れて、アルを中心に辺り一面を吹き飛ばす。

密着状態だったシグナムとヴィータは壁に叩きつけられ、床に転がっていた局員の石化した遺体は衝撃波で砕け散り、なのは達は衝撃波に煽られて再び床に倒れ込む。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

膝に手を置いて大きく乱れた息を整えるアル。

まだ完成はしていない星の雫の力を使って戦うのは、やはりかなりの体力を消耗する様だ。

先程の衝撃波で床は凹み、壁には罅が走り、戦闘の影響で近くの部屋の扉は吹き飛んでいた。

「あと……一つ」

アルはゆっくりと歩き出し、最後のリンカ―コアを抜き取ろうとこの中で最も魔力の大きいなのはの下へと歩き出す。

だがその途中。アルは視界の端に動くナニカを捉えた。

動くナニカは此処に来た時に吹き飛ばした部屋の中にいた武装局員の一人だった。おそらくアルが襲撃した時、打ち所が悪くて気を失い、倒れて気が付かなかったのだろう。

それを見た瞬間。アルの頭にある考えがよぎった。

（アイツのリンカ―コアを奪えば……こいつらのを取らなくて済む？）

星の雫をいり早く完成させるには、より質の良いリンカ―コアを与えるのが手っ取り早い。だがどの道、星の雫はあと一つのリンカ―コアで完成する。それにはもう質がどうのこうのは、もはや関係ない。

ならば、反撃される可能性の低い相手を狙う方が確実だ。

アルは方向を変えてその局員の所へと近づいていく。

そして……

「――掌握」

最後のリンカ―コアを取り込んで、星の雫は完成した。

完成した星の雫は燃えるような七色の光を纏い、アルの身体に魔力が溢れてくる。

「はぁ……はぁ……これで……完成だ。……あとは」

やや息が荒く、アルはゆっくりと自分が空けた外壁の大穴に向かって歩いて行く。

星の雫は完成した。後はイリアを助け出すだけだ。

「アル……君……」

床に伏したままゆっくりと外に向かって行くアルの姿を、なのはは捉えた。

その姿は酷く弱々しく感じる。彼の傍らに浮かんでいる星の雫は不気味なぐらいに静かで、燃えるようなその輝きがアルの身体を呑み込みそうな、そんな錯覚を覚える。

「イリア……今、助けに行くからな」

アルは転移の魔法を展開しながらアースラの外、次元空間に身を投げる様に落ちていき、黒い光に包まれてアルは別に世界に転移した。

◆◇◆◇◆◇

アルが去ってから約一時間後。漸く艦内が静かになって来た。

あの襲撃で亡くなった者は十人。

遺体が殆ど粉々になってしまっているので数なんて数えられたものではなかったが、アースラ乗艦名簿の中で居ない者が十名ほどいたので、その者たちが犠牲者となったのだろうと判断したのだ。

そして難を逃れたなのは達はと言えば、今は医務室でシャマルの治療を受けていた。だがその怪我自体は酷くなく、かすり傷の手当て

と言った方が正しいか。

「はぁ……」

そこに疲れた表情のクロノが入室してくる。

「あ、クロノ君」

「なんや、凄くお疲れ気味やな」

クロノの入室に気が付いたなのはとはやてがクロノに声を掛ける。

「一度にこれほどストレスを感じた事は今までにない。彼も君達と同様……とんでもない事をしてくれたよ全く」

愚痴るクロノだったが、その台詞には若干刺々しい。どうやらなのは達の突拍子もない行動の事も、未だに根に持っていたりするみたいだ。

まぁ彼はアースラ所属の執務官であるし、実質この艦のナンバー２なのだからそれなりに後始末や事務的な仕事も多いのだろう。それがアルの襲撃によって以前の倍以上に膨れ上がった。その事が疲れの原因であるという事は言うまでもない。

「ま、とにもかくにも君達の怪我が大した事無くて良かったよ」

愚痴の捌け口にされているなのは達にとってはあまり良くはなかったが、これからの事を考えるとこの程度の怪我で済んで良かったのは確かだ。

アルは星の雫を完成させ、何処かの世界へ転移した。何処に行ったかの検討などつく筈もない。

「だが、結果的に私たちは奴に敗北したという事になる」

「そうよね。星の雫は完成されて、行方も分からない……」

シグナムとシャマルが揃って言うが、皆アルが所は分かっていた。

宿敵リリス・ルキフェルと、妹イリア・スフィニールのいる次元世界。

「彼は必ず妹を助ける為に、リリス・ルキフェルの所へ行くだろう。だが、その為にはまず体力を回復させなければならない。彼は相当体力を消耗している様だからな」

クロノがなのはを見ながら言い、なのははそれを肯定する様に頷く。

彼女は見ていた。アルがアースラから脱出する時、苦しそうに胸を終えながらフラフラと歩いていたのを。アレは限界ギリギリまで体力を消耗している証拠だ。

そんな状態になりながら、彼女ほどの強敵を相手にするほどあるも馬鹿ではない筈だ。

「あの状態だとそんなに遠くまでは行けない筈だからな。今はエイミィが近くの世界を捜索してくれている」

「でも、そんな都合よく見つかるかな？」

クロノの考えにフェイトが口を挟む。

そう思うのも仕方ないだろう。なぜなら今まで同じような捜索をしては、空振りに終わるか、やり過ごされるかのどちらかだったのだ。

それに今回は今まで以上に襲撃されるのを恐れている筈。であれば今まで以上に慎重になって隠れる筈。見つかるとは思えない。

「それについては大丈夫だ。彼が此処で完成させた星の雫。アレはバカでかい魔力を内包しているから、その魔力反応はどれだけ隠しても隠しきれない」

身を隠すには結界を張れば一番いいのだが、それは魔力波長を知られていないことが前提となる。それにアルの結界は大きさの調整が

出来るとはいえ、その反応は非常に分かりやすい。
どんなに小さく展開したとしても、何度も何度も接触してきた自分たちならその反応を見逃す筈もない。

「だから……」

『クロノ君！　クロノ君！』

「なんだエイミィ」

クロノの下に突如モニターが開いて、焦った様子のエイミィが映し出された。

『例の結界の反応を感知したよ！』

「本当か！」

エイミィの報告に、クロノを始めとした一同が注目する。

『うん。でも……』

「なんか都合が悪いのかよ？」

突然歯切れが悪くなるエイミィに、ヴィータが訊ねる。

エイミィは戸惑いつつも、クロノ達に反応をキャッチした場所の映像を見せる。

「なっ！？」

「こ、これは……」

映し出されたその映像に、その場にいる全員が驚愕させられた。

映し出された場所は、広大な森が広がる世界。

そしてその広大な森全土を覆い尽くさんばかりに、あの捕獲結界が展開されているのだ。

その様子はまるで、何かを閉じ込める檻の様だった。

◆◇◆◇◆◇

「ぜぇ……ぜぇ……ぜぇ……」

《アル、大丈夫か？　酷く辛そうだぞ》

アルはアースラから逃げだしてきて、先程とは別の無人世界に逃げ込んでいた。

今いる所は深い森の中。日の光が木々に遮られ、木漏れ日程も降り注がない。薄暗い森だ。

「大丈夫だ。……少し休めば良くなる」

アルは近くの樹にもたれ掛かる様に座り込み、銃剣のままのウルフを傍に立てかけて浅い眠りにつき始める。

《……》

ウルフは自身を投影させてアルの傍に浮かぶ星の雫を睨み付ける。しかしそんな事で星の雫に変化が起きる訳もない。

ただ、ウルフは感じ取っていたのだ。このアルの急激な衰弱は星の雫にあるだろうと。

星の雫は完成した。此処まで大きな魔力は、今までの比ではないぐらいだ。確かにこれほどの力があればリリス・ルキフェルにも勝てるかもしれない。

そう考えていた所に聞きたくもない声が頭上から響いた。

「ようやく完成したのね。星の雫」

《っ！？》

ウルフが身を翻して頭上を見上げると、そこには自身のデバイスと共に空に浮かぶ銀髪の美女、リリス・ルキフェルの姿があった。

《な、なぜここに……》

「なぜ？　そうねぇ……強いて言うなら……知っているからよ」

リリスはウルフの動揺をあざ笑うかのように言葉を紡ぐ。

「知っている……だと？」

元々浅かった眠りから、アルが目を覚ましてリリスを睨み付ける。

だがその姿から感じられる気迫はいつもよりも薄い。

「どういう……」

「『すまない』」

突然リリスが謝罪の言葉を口にした事に首を傾げるアル。

「『誰も助けてくれる訳ない』」

《……貴様っ！　ずっと“見て”いたな！？》

ウルフが怒気を含んだ声が森に響く。

「だって暇なんだもの。暇潰しの“星見（ほしみ）”だったけど。思ったよりも面白かったわよ」

クスクスと可笑しそうに笑うリリス・ルキフェル。

その目を見て、アルの怒りが一気に湧いた。

ギリッと歯を食いしばる。今すぐに飛びかかって息の根を止めてやりたい。だが必死にその感情を抑えつけ、ウルフを握りしめる。

「けど……ダメじゃない。星の雫が完成したなら直ぐに渡してくれないと」

リリスはその右手に七色の輝く星の雫を浮かばせて、妖艶に微笑む。

そう、アルの傍にある筈の星の雫を持って、だ。

「なっ……！？」

思わず自分の周りを見回して確認する。

そこには何も無く、再びリリスを見れば、そこに星の雫はある。

「第二の覚醒は迎えた。後は、対価を払うだけ」

「対価……？」

「そう、最後の覚醒を行う為の対価」

リリスは片手で星の雫を弄びながら、アルも知らない星の雫について話し始める。

「星の雫には多重の封印が施されていてるの。そのままだとただの

石ころと同じぐらいにね」

何重にも施された星の雫の封印。それはその物自体に厳重に何重にも掛けられ、星の雫は絶対に砕けない“ただの石ころ”となる程の品物だった。

しかし、それすらもリリスは破り捨てた。

「第一の目覚めに必要なのは、幾多の星の命。その命は文字通り、人の生命（いのち）そのもの」

「命……。……！　まさかっ」

アルの表情が強張る。

星の雫の目覚めに必要な対価。幾多の星の命。沢山の人の命。一度に手に入れ、そして星の雫に食わせる事の出来た機会。

それらの言葉がアルの中で答えをはじき出す。

妹は知らない。自分だけが知る事実。

「そうよ、貴方が思ってる通り。目覚めの為の対価は……貴方達の種族に払って貰ったわ」

リリスの頭の中を舐められているかのような気持ち悪さを覚える声がアルの耳に届く。

こいつは、今なんて言った？星の雫を目覚めさせるだけの為に……みんなを殺したって言ったのか？

そんな想いがアルの心を埋め尽くす。思考を単純にする。

「そんな……そんな事の為に」

「そして第二の覚醒の為に必要なのは、雫を一杯にする程のリンカ―コア。貴方のおかげで私は全く苦労せずに完成した星の雫を手にできた」

リリスはアルの言葉に耳を傾ける事もせず、ただ淡々と説明するだけ。まるで自分に酔っているかのように。

「そんな物の為に俺の家族を殺したのかぁ！！」

アルは頭に血が上り、ウルフを振り被って空へ舞い上がり、リリス目掛けて振り下ろす。殺傷設定での本気の一撃だったが、いとも簡単にバリアで止められた。

ついで二人を中心に捕獲結界が、リリスの手で超広域に展開される。

結界範囲内の生き物は全て排除される。

「あら？　皆殺しにしたのは貴方達を利用する為だけだとでも思ってたの？　だとしたら貴方は馬鹿ね」

「だまれっ！　この裏切り者！」

「それ、貴方が言えた事？」

「な、何……」

戸惑うアルに、リリスは口元を大きく引き上げて笑いながら告げた。

「イリアちゃんはこの事を知っているわ。勿論、貴方が人殺しだという事もね」

「なっ……！？」

アルの手から力が抜ける。

イリアに知られていた？確かにイリア程の力を持ってすればいつでも自分の事を“見る”事が出来る。だがそれは覚悟していた筈だ。

例え人殺しと呼ばれようと、イリアを助け出す。その思いは変わらない。その覚悟を思い出して再びウルフを強く握りしめる。

「だからどうした！　俺はそれでもイリアを助ける！　お前を殺して！」

再びウルフを振りかざしてリリスに向かってウルフを振るうアル。だがリリスは全く動じる事なくそれを涼しい顔をして受け止める。

「あ、そうそう。忘れていたわ」

アルの斬撃をバリアで受け止めながら、リリスはアルに顔を寄せる

「星の雫はね。第二の覚醒を終えると、所有者の命を貪る様になるの。勿論、死ぬまで」

《なんだと！？》

命を貪る。それは詰まり、持ち主の生命力を奪っているという事だ。

だが今のリリスからはそんな風な様子は窺えない。

「でもね。それを克服できる方法もあるの。それはね……」

リリスはアルの両腕をバインドで拘束すると、耳元に口を寄せて小さく囁いた。

「雫を完成させた者――つまり貴方の生命力を根こそぎ奪う事よ」

その囁きと共に、アルの意識が遠くなっていく。身体から力が抜けていって支えていられない。ゆっくりと自分の懐を見て見ると、そこには七色に輝く星の雫が身体に吸い付いて、何かを吸収している光景が飛び込んできた。

「ぁ……」

少しずつ身体が傾いて行く。視界が暗くなっていく。

今、自分がどんな風になっているのか分からない。もうじき死んでしまう。殺してやりたかった相手に殺されてしまう。でもそれは仕方ない。だって今まで沢山の人の命を奪って来たんだから。コレは報いなんだ

そんな想いでいた所に、再び耳元にリリスの声が届く。

「貴方の役目はもう終わり。後は……妹さんの役目」

（……イ……リア）

遠くなっていく意識の中。記憶に残るイリアの姿を思い出す。

だがもう殆ど思い出せなくなった。過去の姿は思い出せても、今の姿はわからない。

――お兄ちゃん！

「……！」

――お兄ちゃん。イリア、信じてるよ。

（イリ……ア……）

――お兄ちゃんは必ず、イリアを助けに来てくれるって！！

落ちていく瞼の裏に、ボロボロになった服で叫ぶ銀髪の少女――イリアの姿がはっきりと映る。

ハッとして目を開けば、そこには森が広がり、今自分は空にいるという事を理解する。

そして、自分の願いを思い出す。

「……イリア」

「……？」

「そうだ、オレは……」

動く筈のないアルの腕が、リリスの星の雫を押し当てている左腕を掴み取る。

「なっ！？　まだ動けっ！？」

「……倒れないって、決めただろうがぁあああ！！」

ドンッ！とアルから黒い魔力が噴き出し、リリスと星の雫をはね飛ばす。

数十メートル吹き飛ばされたが、彼女は体制を整えてアルを睨み付ける。

「くっ、流石は星王の直系ね。正統後継者ほどではないとはいえ、これほどの力を持っているなんて……」

リリスは額に汗をにじませながら、先程アルにつかまれた左腕を右手で支える。

どうやら左腕の骨を砕かれる寸前まで握りしめられていたらしく。

「でも星の雫は真に完成を果たしたし、邪魔になりそうなモノは消しておくべきね」

リリスは右手をアルに向けて翳し、その掌に銀色の光子を収束させる。

「く……そぉ……」

アルも気が付いているが、身体を支えるだけで精一杯でとてもじゃないが避けられる余力はない。最後の切り札であるリミットブレイクを使う体力も残ってない。

「シューティング……！」

そしてリリスは砲撃の収束を終え、一気に解き放とうとしたその瞬間。

リリスの捕獲結界が唐突に砕け散った。

「なに！？」

「ディバインバスター！！」

「……ッ！」

その声と共に桜色の閃光がリリスを襲う。

リリスは収束した魔力をシールドに転換して凌ぎ切る。

「そこまでや！　大人しく投降しぃ！」

リリスとアルが見上げた先には、アースラチームのエース達。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての三人が揃っていた。

「ふぅ……管理局のみなさん。貴女達の相手をしている暇はないの。それじゃ」

リリスは次元転送の魔法陣を展開する。

「逃がさない！」

「捉えられるとでも？」

フェイトが一気に肉迫するが、一歩届かず、リリスは転送されて逃げられてしまう。

「くっ！」

フェイトがリリスを取り逃がした所で、アルの意識が限界を迎えて途切れて落ちてゆく。それと共になのはが飛び出す。

「アル君！」

手を伸ばす。
その伸ばされた手に答えるかの様に、アルの手がわずかに差し出され……

「――――」

アルの口元が僅かに動き、落下するアルの手をなのはが掴み、一気に上昇して落下速度を和らげる。

なんとか間に合った。そう思って安堵の息を吐くなのは。

「よかった……間に合った」

そう呟き漏らした時、アルの意識が完全に途切れた所為でアルに掛かっていた変身魔法が解除され、元の銀髪に戻る。

その表情はとても疲れ果てたモノで、とても十二歳前後の少年とは思えないぐらいだった。

第十三話　流れ星の希望（前書き）

夜空に瞬く星は自らの世界を変える事ならず。

されど流れ星はその世界に変化をもたらす希望の星となる。

第十三話　流れ星の希望

リリス・ルキフェルを撃退し、アルが気を失ってアースラに運び込まれてから数時間が過ぎた。

今は、なのはを始めとしたアースラの主要メンバー一同がいつものように会議室でテーブルを込んでそれぞれの席についていた。

「漸く彼の処置も済み、本艦の修復もひと段落した。ようやく一息つ付つきたい所、集まって貰って悪いな」

「そんな事ないよ。あたしらは船の修理にはほぼ無関係だったんだからさ」

クロノの謝罪に、フェイトの使い魔であるアルフが応える。

なのは達はあくまでもこのアースラの主力戦力。船の修理は修理班＝技術者達の領分なので、彼女たちはその機材の運搬の手伝いを僅かにしたぐらいで、特に疲れる事をやっていた訳ではないのだ。

「シャマルさん。あの、アル君の容体は……」

なのはがシャマルにアルの容体を心配そうに尋ねる。

「大丈夫。身体の至る所に痣やかすり傷はあったけど大きな怪我はなかったし、今は眠ってるわ。物凄く疲労が溜まっていたみたい」

シャマルが問題ないというと、なのははホッと胸を撫で下ろして安堵する。

今、アースラの医務室で怪我の処置が行われたアルは、その処置が終わっても未だに気を失ったまま目を覚まさないでいる。これまでの無茶苦茶な戦いと睡眠不足が、元々極度の疲労状態だったアルの限界を超えてしまったのだ。

《出来ればもうしばらく眠らせてやってほしい。まともな睡眠を取るのは一週間ぶりなのだ》

突然誰でもない声が会議室に響いた。

その場にいるクロノ、リンディ、エイミィの三人以外のメンバーは首を傾げ、声の出所を目で探す。

すると、リンディがおもむろにテーブルの上に漆黒の指輪を置いた。

それを見たなのはが、ハッと気が付いた様に呟いた。

「もしかして……ウルフ、さん？」

なのはの呼び掛けに応えるかの様に、テーブルに置かれた指輪から狼の姿のウルフが投影される。

《私はウルフ。アルのデバイスであり、奴の半身だ》

お座りした状態の漆黒の狼のホログラムが突如出て来た事に、一部の人が驚きつつもウルフが丁寧にお辞儀をしてきたため、反射的にお辞儀し返した。

「あの、ウルフさ――」

《高町なのは》

なのはが何か訊ねようと口を開いた瞬間、ウルフに有無を言わさぬ雰囲気を纏って話しかけられて思わず口を閉じる。

《まず、お前に礼が言いたい》

「お、お礼……？」

《ああ。あの時、アルは自分でも気が付かない想いが口に出ていた》

ウルフの言葉に心当たりがあったなのはは、直ぐにウルフの言葉が指し示すアルの言葉を思い出す。

――リリス・ルキフェル。あの女の名前だ。調べれば……色々出てくるんじゃないか？

誰も宛にも頼りもせず、ただ独りで戦い続けたアルの、小さく一息吹けば聞こえなくなってしまうくらい微かなロウソクの火の様な、小さな小さな助けを求める気持ちが籠った言葉。

《それに気づいてくれて……ありがとう。あのままでは、アルは確実に壊れていた》

誰の助けも借りず、ただ独りで戦い続けた少年、アル・スフィニール。

もし、なのはに出会う事無く戦っていたなら、あの時、心が折れてリリスに生命力を奪われ死んでいただろう。出会い方はどうあれ、なのはとの出会いは確実にアルに変化を与えた。

決して変わる事無くあり続ける夜空に現われた流れ星のように、一瞬ではあれど、それはこれまでの世界を全く別の物に塗り変えてしまうくらい眩しい輝きを持った流れ星だった。

「そんな、私何もしてないよ。ただなんで……謝ってくれたんだろうって気になっただけだから」

《それでも構わない。お前が熱心に何度の接してくれたおかげで、アルも気が付かない内にお前達との絆を求めていたからな。私が言いたかっただけだ。気にするな》

ウルフがそう言うと、なのははにゃははと照れた笑いを浮かべる。

その様子を微笑んで眺めていたリンディは、話しの区切りが付いたと判断して真剣な表情でウルフに語りかける。

「では、ウルフさん。教えてくれますね？」

《ああ、アルを“保護”してくれたからな。私たちも全てを知っている訳ではないが……知りうる限りの情報を提供しよう》

リンディの問い掛けに素直に従うウルフ。だが元々話しはするつもりであり、恩を仇で返す様な真似は絶対にしない。

「では、貴方達の身に起きた事について聞いても良いかしら。封印世界『アルカディア』で起きた惨劇を……星の民さん？」

《……！　なるほど、もうそこまで調べが付いているのか。流石はアースラ艦長リンディ・ハラオウンだな》

リンディとウルフの間で行われた会話に出て来た聞き覚えのない単

語に、クロノ意外のメンバーが首を傾げる。

「あの、リンディ艦長」

「ん？　何？　フェイトさん」

「封印世界って、何？」

恐る恐る手を上げたフェイトの疑問に、リンディが、まぁ知らないのも無理ないわねっと苦笑して答えた。

「封印世界っていうのは、管理局が出来る前から存在している巨大なロストロギアを次元世界ごと完全封鎖された世界の事よ」

「因みに」

リンディの説明に聞き入っていた全員の顔がクロノへと向けられる。

「その封印世界は暴走の危険が極めて少ないが、悪用されれば世界を滅ぼしかねない様なロストロギアがある世界にのみ行われた」

「でも、そんなんしたら現地の住民すべてがその世界に閉じ込められて、ロストロギアが暴走したらみんな巻き添えや」

はやてがクロノの説明に意見を言う。

「ああ、そうさ。封印世界は、管理局の手に負えないロストロギアを破棄するゴミ捨て場。封印とは名ばかりの、一つの世界を見捨てる行為さ」

「そんな……！」

なのはがクロノの言った言葉に、身を乗り出さん勢いで反論しようとするが、リンディに窘められて留まる。

《確かに、私たちの世界は管理局によって徹底管理された世界だった》

だがあくまでもその世界の出入りを禁止しているだけであり、その世界の中では自由に暮らして居てもかまわなかった。

それに、管理局に封印世界に指定される前から、アルカディアは魔法文化のアル次元世界でありながら、他世界との交流を断ってきた世界だった。だから実質何一つとして変わらない。ただ、外部から来る侵略者などの危険がなくなり、悠久の平穏が約束されただけだ。

《そんな世界でも、私たちは幸せに暮らしていた》

自分の元持ち主でアルとイリアの実の父であるテトと、王の証と鍵を受け継いだ実の母のルル。そして二人の息子であり星の力を受け継ぐアルと、同じく娘であり母から王の証と鍵を受け継いだイリア。そして、同じ星の血筋である仲間達。

彼らは共に世界中を歩いて旅をしていた。永住の地を求める訳ではなく、ただ先祖代々そうしてきたから旅を続ける。目的はなく、終わりない旅だったが皆が笑顔で幸せだった。

「あの～、もう一つ質問良いですか？」

遠慮がちに手を上げたなのはが、ウルフに向かって質問する。

「さっきリンディさんが言ってた星の民って？」

《星の民は、かつてアルカディアにある国全てを統治していた一族の子孫たちの事だ》

「統治……って事はその世界を征服してたって事かい？」

《いや、そう言う事ではないようだが……詳しい事は分からん》

そうかい、と呟いてアルフはあっさりと下がったが、ウルフは星の民について説明を続ける。

《星の民は本来、王家の人間の事を示した総称だった。だがいつの間にかそれはアルカディアに住む移住民の事を示すようになった》

星の民の証は、夜闇に映える銀髪に宝石の様美しい様々な色の瞳を持ち、男女で全く異なる能力を持つことの二つ。

男の場合は攻撃や速度といった能力に特化し、リミットブレイクを持ち、保有する魔力は全体的に低い。女の場合は治癒や補助・結界に特化し、レアスキルは持たず、有魔力は全体的に多い。等という特徴がある。

アルのバトルセンスが高いのは、もはや遺伝としか言い様がない一族の男子の証だ。そしてリリス・ルキフェルもまた同じ一族の女性であり、結界系と補助系に秀でている。それは、彼女が開発した結界魔法の完成度からも見て取れる。

《そして、イリアは王家の最後の末裔であり、唯一王位を継げる正統継承者だ》

「……ちょっと待ってくれ」

クロノがウルフの説明に待ったを掛けて質問する。

「今、イリア……彼の妹だけが王家の末裔と言ったが、彼も王家の血を引いているんじゃないのか？」

彼とは今は医務室で寝ているアルの事である。

確かに、彼も妹と同じ血を引いている。だが、彼が王になる事はないのだ。

《星の民の王、星を詠み、闇に光を灯す者。星を統べ民を導く王、星王（せいおう）になれるのは女性のみだからだ》

そう、星王になれるのは王家の血族であり、鍵を受け継いだ女性のみ。よって男であるアルには王位を継ぐという事は出来ないのだ。

《まぁ、もっとも王位を継ごうとも、もう既に星の民はアルとイリアの二人のみ。ましてや人間など、あの世界にはもう一人も居ない》

ウルフはやれやれと肩を竦めるかの様に首を横に振る。

いくら王族の末裔で、王位を継ぐ事が出来るとしても、統べるべき国や民が居ないのでは意味がない。

だがウルフの言葉に疑問を抱いたリンディが訊ねた。

「星の民が二人しかいないって、どういう事かしら？　彼女、リリス・ルキフェルも同じ星の民ではないの？」

《アイツは星の民ではない！！》

初めてウルフが大声あげて否定した。まるで吼えたかの様な衝撃が歯のは達の身体を振るわせる。

《あの女が……星の雫の第一の封印を解く為に、アルの両親も、友人たちも、自らの肉親すらも殺した……！　皆殺しにしたんだ……！》

目を伏せ、歯を食いしばって話すウルフ。その事実を知ったのは、ほんの数時間前。未だに彼女の掌で踊らされていた事の悔しさが消えない。

だがその悔しさを無理やり押し殺し、続きを話し出す。

《あれは、いつも通りの日常を送り、日没が近づいて来た夕暮れだった……。突然、アイツが襲撃して来た》

唐突に降り注ぐ銀色の雨。銀色の雨が降り注ぐ度に爆ぜる大地とテント。銀色の閃光に呑み込まれていく仲間達。

銀色の雨を降らせているのはもちろん同族のリリス・ルキフェル。彼女は笑いながら銀色の魔力光の剣で次々と人々を斬り裂き、その血肉を封印状態の星の雫に与えた。

ある者は腕を斬られ、ある者は首を飛ばされ、ある者は胸を貫かれ、ある者は身体を真っ二つに引き裂かれ、ある者は内側から吹き飛んだ。

《アル達は、皆が時間を稼いでいてくれる間にその場からできるだけ遠く逃げた。だが……》

リリス・ルキフェルの魔力と魔法資質は一族の誰よりも優れており、例えリミットブレイクを使っても時間稼ぎが精いっぱいだった。

そんな彼女が本当の目的である王家の血筋を逃がす筈がなかった。

『お前達だけでも逃げろ！』

『そんなっ、父さんは！？』

『私とルルはアイツを食い止める。その間に遠くへ逃げるんだ！』

キャンプ場の方から銀色の閃光が飛んでくる。

それを純白の光のバリアが食い止める。

『管理局に助けを求めろ、そうすれば管理局の人が保護してくれる』

『でも、それじゃあ！　父さんと母さんは……！？』

気を失ってしまったイリアを抱き締めながら、幼きアルは自らの盾となる両親を見つめて叫ぶ。

『せぇえええ！！』

父テトはその身から魔力を解放して銀色の砲撃を薙ぎ払い、リリスに向かって漆黒の銃剣を持って挑みかかる。

『アル』

それまでバリアを展開していた母ルルがアルを優しく抱きしめる。

だが直ぐに身体を離し、ルルはアルが抱きしめるイリアの頬にキスをする。

『ごめんなさい。あなた達には過酷な運命を背負わせてしまう』

『そんな……ならオレも一緒に戦う！』

ルルはアルの口を人差し指で塞ぎ、ゆっくりと首を振る。

『イリアを守れるのは、あなただけ』

ルルは優しく我が息子に話しかける。

『あなたたちならきっと……私たちの宿命に打ち克てる。お母さんは、そう信じてる』

これが最後の別れの言葉になる。

それを頭ではなく心で理解したアルは、歯を食いしばりながら涙を流した。

ルルもそんなアルの気持ちを理解しつつも、気丈に振舞って涙は見せずに語りかける。

『誇りを忘れないで……あなたの誇りは、イリアを守る力になるから』

アルはただただ頷いた。

声もなく。

何度も何度も。

『……ッ！』

そんな息子の姿を見たルルは、自分も涙を堪える事が出来くなって二人の我が子を抱きしめる。

『ごめんね……！　ごめんね！　アル、イリア……！　せめて……逃げきって！　幸せになって！』

『母、さん……！』

ボロボロと大粒の涙を流して別れを惜しみ、抱き合う二人の母と子。その背後で大きな爆発が数回起き、その衝撃が三人の身体を突き抜ける。

ゆっくりと身体を離した二人は、未だに涙を流しながらも立ち上がり、アルはイリアを抱き抱えて全速力で飛んだ。

そしてルルは飛んで行く我が子を見送って、最愛の夫の下へと飛んだ。

愛すべき我が子を守るために。

《その後、二人は殺され、アルもイリアも子供がでデバイスも持たず逃げたとは思えないほど遠くに逃げたが……最終的には捕まって

しまった》

逃げている間に管理局に助けは求めていたようだが、この世界の軌道上に待機していた局員はアルの救援を無視した。その結界、アルとイリアは抵抗むなしく、リリスに捕まってしまった。

捕まってしまった二人は引き離され、イリアは星の器の中に。アルは地下の牢獄のような場所に閉じ込められた。そして数日後、リリスはアルに第一の目覚めを迎えた星の雫と、父のデバイスであるウルフを渡し、魔導師のリンカ―コアの収集の旅に出した。コレ一杯にリンカ―コアを集めれば、妹は返すと言って。

それからというもの、アルは魔獣退治で戦闘技術を磨き、自らの姿を偽って魔導師のリンカ―コアを刈ったりと、自らを犠牲にし続けた。

何度も倒れては血反吐を吐き、他人の命を直接奪う事も時にはあった。無関係な人に力を振るった事もあった。

《誇りを捨てた。目的（イリアの救出）の為なら命を奪う事はいとわない。そんな言葉をいくら並べても、アイツはまだ子供だ。たった十二歳の少年だ。もうこれ以上、独りでは耐えられない……》

だが、一族の事を誰よりも誇りに思い、誰よりも家族を大事に思っていたし、何よりもイリアの事を想っている。

だからこそアルの心は強い。誰かを大切に想い、その者の為に一歩

前に踏み出せる勇気は何よりも強く、輝いている。そんな気持ちも、アルにとっては誇りだった。大切な人の為に自分の全てを賭けられる。例え、自分がその人より劣っているとしても、その人を守れる事に誇りを抱いていた。

それはもちろん、イリアの兄であるという事にも。

イリアを助けたい一心で、アルはこれまでの半年を戦いの中で生きて来た。けれど、それも彼女、リリス・ルキフェルの予定の内。計画の中に組み込まれた事だった。

心の底から憎い相手を楽しませるかの様に彼女の掌の上で踊らされ、その上でイリアも助けられず、無様に再び敗北した。

《今まで私たちがしてきた事が、決して許される事はないという事は分かっている。だが！》

ウルフはなのはに向かって深く頭を下げる。

《アルを……イリアを……どうか、助けてくれ》

ウルフの声は嗚咽を含んだかの様にノイズが入り、とてもデバイスが発する様な声ではなく、人間が土下座をして頼んできているかの様な錯覚を覚えた。

その様子に、誰もが言葉を失う。

助けてくれ。

誰よりもアルと共に過ごし、誰よりもアルの事を理解しているウルフが誰かに助けを求める。それはもう本当に、、これ以上アルとイリアが傷つくのは見たくないからこその言葉だった。

だが、それは何もウルフだけではなかった。

「大丈夫だよ、ウルフさん」

誰もが言葉を失って沈黙する中、只一人だけが口を開き、ウルフに向かって約束する。

「絶対私が、私たちが……」

なのはがいつもの笑顔で言う。

「アル君も……イリアちゃんも……絶対に助けるから！」

その笑顔には、確かな決意が秘められており、ウルフはその笑顔に希望を見た気がした。

本当にアルの心を嫌せるかもしれない。本当にイリアを助ける事が

出来るかもしれない。本気ですそう思った。

（アル……彼女は……本当に私たちの希望の星となるかも、しれないな）

きっとアルも心を許すと信じて。

◆◇◆◇◆◇

この世で最も神聖なる場所であり、汚れの無い世界アルカディア。
ただただ自然の営みが永久に繰り返される場所。

その世界に陽が昇る。それまで世界を覆っていた夜の闇が、東の山々の間から注ぐ朝日が広がって行くと共に、西の空へと過ぎ去って行く。

太陽が徐々に天に昇るにつれて、天を貫かんばかりの巨大な建造物に太陽の輝きが当たり、古びたその姿が光り輝ている様にも見える。

その建造物は星を神として祀り、かつて星の王が祈りを捧げた星の神殿。その神殿の尤も神聖な場所になるホールに少女はいる。

「……」

床に横たわり、自分の腕を枕にして小さく蹲る様にして眠る少女、イリア・スフィニール。

少女を包み込むようにして広がる長い長い銀色の髪が、天井の吹き抜けから差し込む朝の日差しで美しく煌めき、少女の顔をゆっくりと照らしてゆく。

「……ぅ」

イリアは朝日を感じて小さく呻き、ゆっくりと瞼を開く。目を覚ましていつも彼女がする事は、自分の周りに兄がいないか探す事。

居る訳がないと本当は分かっている。しかしそれでもイリアは何度も何度も繰り返す。

もう一度目を覚ませば、大好きな兄が傍で優しく微笑んで居てくれる。

ただそれだけを待ち続けて。

「お兄ちゃん……」

ゆっくりと瞼を閉じて、もう一度夢を見る。

夢の中ならば、星を通じて兄の今を見る事が出来る。しかし、それでも見る事しか出来ない。

どんなにアルが傷ついても、触れる事は出来ず。

どんなにアルが弱っていも、声を掛ける事すら出来ない。

最愛の兄の身体が、兄の心が傷つき、疲弊していく姿を見るのは辛い。けれど、今よりはずっと近くに居られる。

だから夢を見る。兄がいつか、優しい笑顔で迎えに来る日を夢見て。

しかし、その眠りは廊下から響いて来た音によって遮られた。

カツーン、カツーン。

「……」

明かりのない廊下に広がる暗闇の向こうから、床を打つ乾いた音が近づいてくる。

イリアはムクリと身体を起こすと、その音がする方へと鋭い視線を向ける。

やがて見えてきたのは、七色に輝く星の雫を左手に浮かべて歩いてくるリリス・ルキフェルだ。

「おはようございます。イリア・スフィニール王女殿下」

わざとらしくリリスがイリアに向かって頭を垂れる。

イリアはそれに返事を返すでもなく、ただただ無言で睨み返すのみ。

しかしふと、真っ白なマントに隠されてはいたが、リリスの右腕が包帯で巻かれて固定されている事に気が付いた。

その視線に気が付いたリリスだったが、別段気にする様子はなくイリアに教える。

「王女殿下のお兄さんに折られちゃったのよ。流石に治癒しきれなかったわ」

リリスはそう言いながらコツコツと音を響かせながらホールの祭壇前に歩いて行く。

祭壇には巨大な灰色の石碑が安置されて、そこにはイリアを入れている星の器の魔法陣と同じ紋章が掘られており、更にその周りには今は既に使われていない古代ミッド語で碑文が記されている。

「ここまで来るのに結構掛かったけど……ふふふ」

リリスは左手に浮かべている星の雫を石碑に向かって高らかに掲げる。

すると、星の雫の七色の輝きが強くなり一点に集中したと思ったら、一直線に石碑へと注がれ、石碑に刻まれた紋章が七色の光を放って浮かび上がる。

「我、星の加護を持って生れし星の子。力を求める者なり」

リリスが唱え始めた呪文に反応するかのように、星の雫がゆっくりとリリスの手を離れて浮上する。

「雫の闇が目覚めし時、星の輝きは消え失せん」

ドクン

星の雫が心臓の様な脈打つ。

「輝き消えし闇黒の星、我が意思と求めに応え……我に染まれ」

リリスの足下に銀色の魔法陣が広がり、魔法陣から溢れた銀色の魔力が吸い込まれる様に星の雫に注ぎ込まれていく。

星の雫から七色の輝きが薄れ、少しづつ銀色の輝きに染まって行く。

「さて、王女殿下。貴女の出番ですよ」

「……ッ」

リリスがイリアに振り返って左手を翳し、イリアは思わずビクリと身体を振るわせる。

イリアに向かってリリスが翳した左手に銀色の魔法陣が展開しし、更にその前に、三日月の中に☆が描かれ、それを円で囲い、更に二重にクロスした輪っかで閉じた、純白の王家の紋章が現われる。

「な、なんで……」

イリアの目が大きく見開かれる。

なぜなら王家の紋章は、王家の直系の人間に流れる血が持つ証であ

るからだ。リリスは確かに同族としての血を引いてはいる。がしかし、彼女は王家の血族ではない。それなのになぜ証を持っているのか。それがイリアには分からなかった。

「ふふ、これは私の研究成果よ。貴女の血液サンプルから再構成して、記録するのには苦労したわ」

おかげで半年も時間が掛かっちゃったわ。と妖艶に笑いながら付け加えるリリス。

彼女は元々時間のかかる作業だと理解していた。だからこそ、それまでの時間を有効に活用する為に、アルに気長にリンカーコアを集めさせていたのだ。

そして、王家の紋章を彼女は手に入れた。だから彼女はアルに最終警告としてさっさとリンカーコアを集めさせて星の雫を完成させたのだ。

「我、王の証を此処に啓示せん」

リリスの左手に展開された紋章がひと際強く輝いて、全く同じ紋章がイリアを中心に大きく展開される。

「夜を纏い、光り輝く星よ。我の力となれ、天と我が身を重ねよ！」

イリアの足下に出現した紋章が純白の輝きを放ち、天井に向かって光が立ち昇る。その光を追って顔を上げれば、天井の吹き抜けに蓋をするかのように同じ紋章が写る。

天井に紋章が出現したのを確認したリリスは、振り返って石碑に向かって紋章を翳す。

「天に集う星々の輝きを、我に！」

リリスが呪文を唱えると、それまで七色の光で輝いていた石碑の魔法陣が純白に染まる。

魔法陣が純白に染まると共に、紋章の輝きが強まり、イリアの身体がゆっくりと宙に浮かぶ。

「ぁ……ぐっ……ぁぁ！」

その途端、イリアが苦しそうに胸を押さえて呻き声を上げる。

リリスはそれを薄っすらと笑みを浮かべて見つめ、左手を振り払う様に魔法陣と紋章を取り消し、イリアに向かって左手の人差し指を突き出す。

すると、イリアの両手と両足を銀色のリングバインドで固定し、両手を頭上へと移動させる。

「あぅ……ぐっ……」

上から吊り上げられた体制にされたイリアの胸から、ホールを純白に塗りつぶさんばかりに眩く光り輝くリンカ―コアがゆっくりと現われる。

「ぁぁぁあああ！！」

強制的にリンカ―コアが外に抜き出される感覚に、イリアが悲鳴を上げて動かせない身体で悶える。

そして、イリアのリンカ―コアがひと際強く輝きを放ったと思った瞬間。イリアを包み込むように環状魔法陣が幾重にも展開され、封印が現われる。

「さあ、貴女の騎士様は間に合うのかしら」

リリスは苦しみ悲鳴を上げるイリアを見つめながら、不敵な笑みを浮かべる。

「新たな星王の誕生の時に……ね」

響き渡るイリアの悲鳴。リリスの力に染まりゆく星の雫。

そして、それを楽しげに頬を釣り上げて眺めるリリス。

終わりなき夜は、もう背後まで忍び寄っていた。

第十四話　漸く紡がれた絆（前書き）

力に染まりし星の輝き、天空の星を総べる星王は、明けぬ夜を導く魔王となろう。

失われし世界は、星の巡り共に蘇り、歴史は再び繰り返されん。

第十四話　漸く紡がれた絆

曇りない夜空の様に無数の小さな光が漂い、暗い世界が幻想的な雰囲気を醸し出している空間。

暗い。とても暗い空間。だがそんな空間で、オレはただ一人浮かび漂っていた。何も聞こえない。自分の鼓動でさえも。そんな無音の世界に。

ゆっくりと瞼を開いて周りを見渡しても、此処がどこなのかはわからなかった。だがそれでも不安や恐怖はない。

わかるのは、ただ母さんの腕に抱かれているかの様な、安らぐような安心感だけだった。その安心感に酔いしれていると、この幻想的な空間に声が響いた。

――此処は星の力の中枢となる空間ですよ。我が血筋の末裔よ。

女の声が頭に静かに響く。意識の底？　ってことは此処はオレの中なのか？　でも、なんで……。

そう思っていると再び同じ声が聞こえる。

――もう一人の末裔の身に封じられた鍵が、星の民の手によって開けられようとしています。

もう一人の……末裔？　星の……っ！？　イリア！

姿の見えない女の言葉が誰の事を示しているのかを理解し、さっきまでぼんやりしていたオレの意識は一気に覚醒した。だがそれと共にこの空間が遠のいていくのがわかる。

――忘れないで。星は、一つでは小さな光ですが……

待ってくれ、まだ聞きたい事が！

――貴方はもう独りでは無いのです。

その言葉を最後にオレの意識は浮上していく。

☆　★　☆　★　☆　★

「う……」

アースラの医務室のベットに横になって眠っていたアルは一瞬、苦しそうに眉を顰めるてゆっくりと瞼を開ける。

まだ夢から覚めきっていない頭で、頭を動かし周りを見回す。だが、そこは見た事のない場所だった。

徐々に頭が覚醒してくるに従って、自分の身に何が起きたのかを思い出す。

（そうだ。オレはアイツに命を奪われそうになって……それで……）

意識を失う寸前、暗くなっていく視界の中。自分に向かって駆け付けたなのはが必死に手を伸ばしてきた。アルはそれに僅かながら手を伸ばした。助けてくれと願うかの様に。

「……っ！？」

アルは漸く自分が置かれた状況を理解して跳ね起きる。

自分が無事にこんな所で寝ていたという事は、此処はなのは達の船のアースラの中。つまり管理局につかまってしまったという事だ。その証拠に、自分の手が届くところにウルフはおらず、今の自分は病人が着る様な真っ白でゆったりとした服を着ている。おそらく身体検査を受けた後なのだろうと、アルは検討つける。

今度は部屋の隅々まで見回してみる。自分が寝かされていた白いベッド。そして近くに見える医療道具。そして此処の部屋の主であろう者の白衣が掛かった椅子と自分のカルテらしき物が置かれた机。そして独特な消毒液の匂い。それらから、アルは此処が医務室であると判断する。

だがしかし、部屋の中には勿論の事。部屋の外にすらも見張りが誰一人としていない。意識を失って倒れたアルを治療し、見張りも置かずに部屋を後にするなど犯罪者の自分に対して理解できない行動である。

「……舐められてるのか」

アルはグッと歯を食いしばり苛立ちを抑える。

確かに今のアルの魔力値は半年前の、まだ星の雫を持たず魔力の譲渡すらも受けていない状態に戻っている。いや、むしろ以前よりもだいぶ減っている。

それがリリス・ルキフェルにほぼ全て奪われてまだ完全に治っていないからか、元々これが自分の魔力値なのか。それはアルには判断できなかった。

だが一つだけ言える。

もうリリス・ルキフェルに勝つ手段は残されていない、もうイリアを助ける事は出来ないという事が。

だがだからと言って諦められるほどアルは潔い人間ではない。たとえ刺し違えてでもイリアをリリス・ルキフェルの魔の手から救い出す。その為の力はなくても、その覚悟はある。

だがその為にはどうにかしてウルフを取戻し、此処から脱出しなければならない。見張りがおらず、警備が手薄になっている今しかチャンスはない。

アルがそう意を決して医務室から出ようとベットから降りたその時。医務室の扉の向こうに数人の人の気配を感じた。

「……」

アルは息を殺して扉の数歩前に立ち、やや前傾姿勢になっていつでも飛び出せる体制をとる。

逃げ出すならば扉が開いた瞬間だ。そう思って医務室の扉が開くその瞬間をじっと待つ。たった一度、それも一瞬のチャンス。それを逃せばもう二度とチャンスは訪れないだろう。久しぶりに感じるギリギリの緊張感がアルの額に汗なって浮かぶ。

そして、その時はやってきた。

プシュッと扉が開く音が耳に届いた瞬間、アルは床を蹴って開いていく扉に向かって跳んだ。

《止まれ！！》

「っ！？」

突然響いた怒声にアルはとっさに足を床に着けて止まろうとするが、溜めに溜めて解き放った勢いは止めきれず。

「うわぁ！？」

開き切った扉の真正面にいた局員を床に叩き伏せる形で倒れた。

「あ、アル君？」

《全く、私が止めなければまた罪状が増える所だぞ》

もう既に増えている気がするが、そこは誰もが気にしない事にした。

「う、ウルフ？」

アルは倒れた際に打った額を抑えながら体を起こす。そして顔をあげて見てみれば、そこにはウルフを片手に乗せているなのはの姿だった。それだけではない。医務室の主であるシャマル、アースラの艦長であるリンディ、そしてフェイトとはやてにヴィータも一緒で

ある。因みに此処にザフィーラ、シグナム、エイミィ、アルフの四人はそんなに大勢が医務室に入れるわけではないからと、ともに行く事をやめている。

なぜ彼女たちがここにいるのかというと、アースラの会議室で一通り話し終わった時にウルフがアルが目を覚ました事に気づいた事が始まりである。

ウルフのアルが起きたという台詞に、なのはが会いに行きたいと言い出したので、どうせ会いに行くならをリンディ達も連れて行った方がいいだろうという事になり、医務室の前まで来たらいきなりウルフが大声を張り上げ、アルが飛び出して先頭を歩いていたクロノを巻き込んで倒れ、現在に至る。

《……敵意を収めろ。お前は保護されたんだ。逮捕されたんじゃない》

「保護……？」

アルが眉間に皺を寄せてウルフの言った言葉を怪訝に思いながらも、見張りもおらず、拘束具すらもされていない現状を考えればウルフの言ったことは本当だろうと納得する。

「でも、何してたの？」

《大方、起きたはいいが扉が開いた瞬間を狙って脱出しようとしていたんだろう。魔力も無い身で無茶をする》

「……」

アルはウルフに図星を突かれて顔をそらす。

だがふと気づく。

「なんでお前がウルフを持ってる」

そう、なのはが指輪のウルフを持っている事だ。

ウルフは滅多な事がない限り待機形態にはならない。そのウルフが待機形態なんて無防備な姿で管理局員であるなのはの手にあるのだ。

驚くには十分だろう。

《それが私の答えだ、アル》

「……！」

アルは多く目を見開き、ウルフに反論しようとした時、アルの真下から発せられた声に遮られた。

「なぁ、そろそろ降りてもらえないか？」

アルは自分の真下に目を向ける。だがすぐに視線をウルフへと戻す。

「ウルフ、どういうつもり――」

「無視するな！」

下敷きにされていたクロノが叫んだ。だがアルは徹底的に無視して話を続けようとする。それに対してクロノがまた叫ぶ。

これを数回繰り返している内に、次第になのは達は笑みを零していた。

それから数分後。

ようやくクロノの上から移動したあると共に、医務室に戻った一同は、シャマルによるアルの身体検査の結果を待っていた。だが検査する時にアルは無言の抵抗をシャマルとくり広げ、ウルフとなのはの説得によって漸く検査ができたのだ。

「……うん。魔力値がかなり低くなってる事以外は至って健康そのもの」

最大魔力値の低下。それは星の雫に頼ってきたアルから星の雫を奪えば、この結果は当たり前であり、この状態がアルの本来の姿なのだ。

フェイトに負けず劣らずの長い銀髪に、見惚れるてしまう程に美しく透き通った蒼い瞳を持つなのは達と同年代の少年。因みに髪が長いのはこの半年、まったく髪を切っていないからである。

「今の魔力値は大体どれくらいなんだ？」

「……多く見積もってもＡランクって所ね」

クロノがシャマルにアルの現在の状態を聞く。

「これでもよく回復した方よ。本当ならもっと低くなっててもおかしくないもの」

シャマルの言うとおり、リリスによって魔力も生命力も根こそぎ奪い取られていた状態だった。本来ならＢランク以下になっていてもおかしくはない。だがアルはそんな状態から、ほんの数時間で此処まで回復した。もっとも、これは星の民の男性の血がなせる業だが。

その説明は既にウルフから受けているため特に驚く様子はないが、体力、魔力ともに完全とは言い切れないものの殆ど回復している事には内心では驚きを隠せない。

「さて、一折の検査が終わった所で聞きたいんだが……いいか？」

「……」

クロノがアルに向かって尋ねてみるがアルは無言を返す。

しかしそれはクロノも予想していたようで特に気にすることなく、無言を肯定と受け取って話し掛ける。

「まず……君たちの身に起きた事、君たちの血筋の事、そして彼女の目的。大体の事情は君のデバイスから聞いた」

まだアルは無言。

「リリス・ルキフェルの目的が君たちの王族の血が必要だったから君たちの集落を襲った」

「……」

「だが必要とした筈の君を彼女は切り捨て、君の妹を利用しようとしている。覚醒した星の雫を手に入れ、おそらく他の……星の器と鍵を揃えている。僕はそう考えているが……君はどう思う？」

クロノに尋ねられても、アルは此処ではないどこかを見詰めているかの様に全くの無反応でピクリともしない。

そんなアルに溜息を吐きつつも、クロノは話を続ける。

「沈黙は肯定と受け取る。さっきも言った通り、彼女は『無限の力』とやらを手に入れる準備ができているだろう」

アルから星の雫を奪った事からも、それは明白である。

「管理局は彼女を逮捕しなければならない。その為に、アースラは封印世界『アルカディア』に向かって移動中だ」

「……」

「君が無理やり事件の実行犯を無理やりやらされていた事もわかっている。彼女がこの事件の真犯人だという事も既に証明済みだ」

クロノはアルの反応を気にしながらも話を続ける。

「彼女が管理局で研究主任をしていた時、星の王の伝説を熱心に調べていたという記録がある。だが核心に迫る部分は完全に抹消されていてわからない」

クロノは依然ユーノが調べてくれた資料をその場で開示する。

「星王の事。王族の血の秘密。彼女の本当の目的。ウルフにもわか

らない事があると言っていたが、君なら知っているとも言っていた」

「……」

「だから君の知っている事……いや、君たちしか知らない事を欲しいんだが」

しかしアルは微動だにせず無反応。

クロノの声に若干苛立ちの声が混じり始める。

「教えてくれると……」

「……」

クロノのこめかみに青筋が浮き出る。

「凄く助かるんだが……」

「……」

クロノの言葉に全く耳を傾ける気のないアルの無反応な態度に、クロノがこめかみを抑えて頬を引きつらせる。

その様子を眺めるなのは達はいつクロノが爆発するかとハラハラしてしょうがない。

そしてついに……。

「いい加減、僕の話に反応しろ！」

クロノがキレた。

デバイスを起動して殴りかかりそうな勢いのクロノをなのは、フェイト、はやて、アルフの四人が羽交い絞めにして止める。

「クロノ君、落ち着いて！」

「そうだよクロノ！　ちょっと無視されただけなんだから落ち着いて！」

となのはとフェイトが宥めるが、クロノを苛立たせている当人のアルは目を閉じて口を堅く閉ざし、一切関わろうとしない。

「君はさっきからさっきから……僕に何か恨みでもあるのか！？」

クロノが羽交い絞めにされたままアルに向かって吠える。だがアルははやり無言で無反応を貫くばかり。

その様子にガクリと肩を落とし、怒りを通り越して脱力するクロノ。

「ねぇ、アル君。クロノ君の話、聞いてもらえないかな？」

「断る」

なのはの頼みもアルはきっぱりと断った。

「なんで？」

「名乗らない奴にする話なんかない」

「ならクロノ君が名前を言えばお話をしてくれるの？」

「あんな奴にする話なんかない」

後ろでなんでなのはとなら会話するんだ、と頭を抱えているクロノの呟きになのはは、にゃはは……と苦笑する。

そんな様子のアルを観察して、はやてがうむっと頷いてアルに「ならクロノくん以外なら話してくれるん？」と首をかしげて尋ねるが、帰ってきたのはやはり無言だった。

「……やっぱりな」

「まぁ、これはまた随分と我儘な子だわ」

はやてが納得したといった表情で頷き、その隣でリンディが困った様に、けれども楽しそうに呟いた。

「はぁ……胃が痛い」

「クロノ、ドンマイ」

その後ろではクロノが胃がある辺りのお腹を摩りながら深い深い溜息を吐き、そんなクロノにフェイトはクロノの肩に手を置いて苦笑いしながら励ましの言葉を投げかける。

「へ？　ふぇ？」

「ははは……」

そしてただ一人事態を把握し出来ていないなのはと、そんななのはを見てヴィータは失笑する。

「それじゃ、私たちはお邪魔みたいだし……出ましょうか」

とリンディはなのは以外を連れて医務室を後にしようとする。

「え？　あの、ちょっとま――」

「じゃあね～。あ、ウルフさんにはもう少し聞きたい事があるから連れて行くわね♪」

なのはの伸ばした手を逃れるかの様にリンディ達はさっさと出て行ってしまう。因みに、その途中でリンディがなのはとアルに向かって「後は若い者同士、ごゆっくり♪」と言い残していい行ったのは余談である。

「……」

「……随分と自由な局員だな」

手を伸ばしたままで固まるなのはと、リンディに対しての感想を小さく呟くアルであった。

☆　★　☆　★　☆　★

「――それでなのはを置いてきた。という訳ですか」

医務室を後にしたリンディ達は、アースラの廊下でシグナムたちと合流し、管制室への道中に事の説明をリンディから聞いていた。

「アイツがなのは以外と全然口訊かねぇからな」

はやての隣で頭の後ろで両手を組んで歩いているヴィータが言う。

「今まで強情な相手の聴取は何度かやってきたが……あそこまで完全に無反応と無言を通され続けたの初めてだ」

クロノが疲れた表情で溜息を漏らす。

「クロノ、溜息吐いてたら幸せが逃げるってアリサが言ってたよ」

「溜息も吐きたくなるよ。まったく……」

語りかけた言葉の端々に反応するだろう単語を混ぜて長々と話し掛けたが、あれだけ完璧に無視され続けていれば流石に執務官としての自信を無くしてしまう。

そんなクロノの苦労をあざ笑うかの様に、アルはなのはとはまだまだ固くはあるが普通に受け答えをしているのだから。

「ウルフさんは、なんでかわかるんちゃう？」

はやてがリンディの手に乗るウルフに尋ねると、ウルフは少し考えるかの様に首を傾げる。

《おそらく……高町なのはがイリアに似ているからだろうな》

「へぇ……なのはちゃんがねぇ」

クルリと首だけを今しがた出てきたばかりの医務室の方を振り返る。

《まぁ一番の理由は、アル自身が彼女に心を開いているからだろうがな》

「ん？　なんか言った？」

《いや、ただの独り言だ》

そんなウルフとはやての短い会話を聞いていたリンディは、ふふふっと微笑むのだった。

☆　★　☆　★　☆　★

「……」

「……」

リンディ達が出て行った医務室では沈黙が続いていた。

（ふぇ～！　なんでみんな出て行っちゃうの～!?　私一人でこの空気の中で話すなんて無理だよ～!?　……み、見られてるよ～！　何か話さないと……）

なのは必至に頭を捻って話題を探す。
だが……。

（にゃぁー！　何も思いつかないよー！）

結局見つからないまま椅子に座りジッとしてはいるが、心の中で絶賛パニックに陥っていた。
そしてなのはに視線を向けているアルはというと……。

（……こいつ……バカなのか？）

アルは目の前で冷や汗を流しているなのはを呆れた目で見つめながら思った。

（ウルフがいれば会話に困ることはないんだが……）

同じようにどうすればいいのか分かっていなかった。

ウルフならばアルが何か聞かなくても勝手に話し掛けてこの沈黙をなんとかしてくれる。だがその肝心のウルフはリンディ達と共に出て行ってしまった。

（アイツは一体何がしたいんだ？）

此処に連れてこられてからのウルフの考えが全く分からなくなったアルだった。

しかしずっとこのままではいかないと、なのはは意を決してアルに話し掛ける。

「あの――」

「おまえさ……」

「え？」

意を決して話し掛けようとしたなのはの出ばなを挫くように、アルがなのはに話し掛けてきた。

「なんで俺を助けたんだ？」

ほかに何の意図もない、素直な疑問だった。

薄れゆく意識の中、必死に手を伸ばして落下する自分を追いかけてくるなのはが、本当に純粋にわからなかったからアルは尋ねた。そして尋ねられたなのはは思わずポカンとして眼をパチパチさせる。

次いで小さく噴き出した。

「……何がおかしい？」

「だ、だって……あはは！」

なのはの笑いは次第に大きくなっていき、目に薄らと涙が浮かぶ。

「むぅ……」

その様子が面白くなく、アルは気が付かない内に眉間に皺を寄せて不満一杯だと言わんばかりの表情になっており、それがなのはを更に可笑しくさせる。

こんなに和んでいてもいいのかという状況なのだが、戦いの前には休息を取るもの。こんな風に心を休ませるのも必要な事なのだ。

「は～……おかしかった♪」

「……」

なのはは可笑しかったかも知れないが、アルにとっては全く面白くも可笑しくもない。

不愉快だ。そう体現するかの如く、アルはなのはからプイッと顔を逸らした。

「あ、ごめんね。でも凄く当たり前なこと聞くから」

なのはは目尻に浮かぶ涙を拭いながら言う。

「だって、アル君が言ったんだよ？　助けてって」

「……！」

その言葉を聞いた瞬間。脳裏になのはに助けられた時の情景を鮮明に思い出した。

――――助けて。

そう小さく漏らした事を。

「助けてっていう子は……絶対助けるって決めてるんだ。だからアル君を助けるのも当たり前だよ♪」

屈託の無い笑顔で言い切ったなのはに思わず見とれてしまうアル。

その姿に初めてアルは、なのはにイリアの影を重ねる事無くなのは自身を見た。そして眩しく思った。自分にあった筈のモノを彼女は持っている様に感じたから。

「……フッ」

捨てた感情を持つなのはを羨ましく思うこの感情が、今までの様に不愉快なモノに感じなかった。その変化がどういったモノなのか、今のアルにはわからない。

だが、今言うべき言葉なら、ずっと敵対してきた自分でもわかる。

「ありがとう。……なのは」

「どういたしまして」

微かながら、柔らかな笑みを浮かべて言ったお礼の言葉は、冷たくなったアルの心を温める満面の笑みと共に返ってきた。

第十五話　聖地　アルカディア（前書き）

我の罪は呪いとなり、我が愛しき子たちに脈々と受け継がれしまった。

我が罪が呪いとなり、我が愛すべき子たちの宿命を運命としてしまった。

第十五話　聖地　アルカディア

ただ独り戦い続けたアル。一族以外で初めて心許せる相手、高町なのはを見つけて、たった独りの孤独な戦いを漸く終えた。

しかし、それがアルにとって馴れ馴れしくする理由にはならなかった。

「……」

「……」

アースラのブリッチで、アルとシグナムが険悪な雰囲気をまき散らして睨み合っていたのだ。

「なのはちゃん、これ……どうにかならへんかなぁ？」

「にゃはは……無理、かな？」

はやての呟く様な質問に、なのはは苦笑しながら否定した。というか自分にどうしようもできない。それがなのはにも、勿論はやてにもわかっていた。自分たちが何を言おうと、今のこの二人には無意味だと。

「ってか、呼び出しがあってあたしらが来るまでの間に何があったんだよ」

ヴィータがそう尋ねると、その隣に立っていたフェイトもうんうんと頷いて同意していた。

因みに此処にいるのはアルとシグナムとなのはとはやてを始めとして、ヴォルケンリッターの御三方にフェイトとアルフ、そしてクロノとリンディだ。

ことの原因は数分前、目的地の封印世界の近くまで来たという事でブリッチに呼び出されたなのは達とアル＋ウルフ。なのはがアルを連れてブリッチに着くと、そこにはすでにシグナムとはやてがおり、適当に会話を交わしていた。

しかし「リリス逮捕にお前も同行するだと？　その程度の魔力で満足に戦えるのか？」のシグナムの一言でアルの雰囲気がやや軟化した優しげなモノから、爆発寸前の爆弾の様にピリピリしたモノへと一変したのだ。

「そこからはもう売り言葉に買い言葉や」

勿論シグナムはアルの魔力の低さをバカにしたつもりはない。むしろそんな状態で戦闘を行って大丈夫なのだろうか、と心配しての一言だった。

だがアルにとっては侮辱の一言にしか聞こえなかった様で、「その魔力のない奴に負けて惨めな思いをした奴に言われたくないな」と言ったのだ。

それに反応したシグナムが「だがあれは偽りの力。お前自身の実力ではないだろ」と言い返してしまい、「だが事実だろ？」とアル突き返した。

不敵な笑みを浮かべるアルにシグナムは「ならば今此処で試してみるか？」と投げ掛け、アルは「こんな所で戦ろうなんて局員の台詞とは思えないな」と打ち返し、シグナムは「だろうな。お前の非力さが露呈するからな」と更に叩き返した。

そしてそれから沈黙とにらみ合いが続き、その間にリンディ達が訪れ、現在に至る。

「……」

「……」

二人の睨み合いを見る者からすれば、二人の視線の間には激しい火花を散らしているように見えた。

ただ無言で睨み合うシグナムとアル。そしてそれを見守るしかない一同。

「今、此処で決着をつけるか？」

シグナムが首から下げる剣型のペンダントのレヴァンティンを掴んで半歩引く。

「いいぜ。今此処で消し飛ばしてやる」

アルの体から黒い魔力光の魔力が溢れ、僅かに長い銀髪がふわりと浮き上がる。

いかに魔力総量が低くなろうとアルたち星の民の男性にとってそれは弱体化した内には入らない。そう思わせるには十分は威圧感を醸し出していた。

一触即発の雰囲気の中、リンディが二人に待ったをかけた。

「はいはい。そこまでよ、二人とも。これ以上は艦内での無許可の戦闘行為として逮捕します」

リンディにそう言われてシグナムはすぐに手を引っ込めたが、アルは未だに魔力を身に纏って戦闘態勢でいる。そんなアルを説得しようと、リンディがアルの肩に手を置いた刹那。

アルは体を捻って反転し、回転の反動を利用して左手でリンディの手を振り払い、魔力を集中した右手を銃の様な形にしてリンディの眼前に突き出した。

思わず全員がデバイスに手をかけて身構える。だがリンディはそれを片手で制して、アルにあくまでも笑顔で向き合う。

「ひとまず落ち着きましょ」

「……」

宥めようとするリンディの言葉に無言で微動だにせず無視するアルは、ただただジッとリンディの眼を見詰める。その眼の奥に秘められた考えを読み取るかのように。

そしてそのまま数秒、いや数分経った辺りでアルが漸く右手を降ろして魔力を収める。

思わずホッと胸を撫で下ろすなのは達だったが、その瞬間を狙ったのようなタイミングでアルがリンディに向かって言い放った。

「オレはもう誰の命令も聞かない。死にたくなかったら二度と俺に命令するな」

その言葉は遠まわしに協力する気は無いと言っているようにも聞こえる。だが、ウルフだけが沈黙する一同の中で溜息を漏らしていた。

「オレのやるべき事は初めからたった一つだ。それ以外で無駄なエ

ネルギーは使えない」

それだけ言うと、アルはブリッチの隅っこに歩いて行って背を預け、頭を立てた足の間に抱えて座り込んでしまった。

「……なんだよあの態度。なのはが助けなかったら死んでたってのによ」

ヴィータが愚痴る。

「ヴィータちゃん、私は別に恩を着せたくて助けた訳じゃ……」

アルの態度にイライラしているヴィータを宥めるなのは。だがその中で、リンディだけはある意味で安堵していた。

「一応は信用してくれた……と受け取っても構わないのかしら」

《ああ、やる事は始めから決まっているからな》

「あの態度はどうかと思うが」

《ま、アレがアイツなりの協力の姿勢なんだ。諦めろ》

ウルフのホログラムが肩を小さく揺らして笑う。

「アレのどこが協力の姿勢になるんだよ」

微動だにせず蹲るアルを横目で見ながら呟くヴィータ。

ウルフはヴィータの視線を追ってブリッチの隅に座り込むアルを見詰める。そしておもむろに口を開く。

《あれは星の民の武技の一種であり星の民の武技は多岐に渡る。だが、その中でも“極み”と呼ばれる技法がある。それが星点(せいてん)だ》

「星の民の……」

「……武技？」

「なんなん、それ？」

なのはとフェイトとはやてが首をかしげる。

《星点は、自分の周囲に存在する魔力素が自身のリンカーコアに取り込み、蓄積する速度を引き上げる技法。今アルが行っているのがまさにそれだ》

ウルフの言葉に、その場にいた全員の視線がブリッチの隅にいるアルに注がれる。

そしてウルフの説明は続く。

《アレは発動中、魔力を急速に回復させる。そして余剰分はそのまま蓄積されて擬似的に星の雫の譲渡状態になれる》

「そんな急速な魔力の蓄積は肉体に多大な負担がかかりますよ！？寿命を縮める気ですか！」

ウルフの説明にシャマルが大声を上げて抗議し、アルの瞑想をやめさせようとする。

《無駄だ。その状態になったアルは何をしても気づきはしないし、これからの戦いの事を考えると邪魔をしてもらいたくないな》

ウルフはシャマルを止める。

アルの魔力はなのは達と戦った時の様に乱用できるほど残ってない。だからなるべく多くの魔力を溜めて、リリス・ルキフェルとの戦いに備えている。

イリアを助けるために手段を選ばないという半年を過ごしてきたアルにとって、最早自分の身体の事など二の次、三の次なのだ。

シャマルが大きな声を出してもまるで聞こえていない風のアルを見詰めるなのは達。その眼には心配と、何がアルをそこまでさせるのかという疑問が混じっていた。

だがそんな疑問を抱きながらも、その答えは至極単純だというのもなんとなくわかっていた。なぜなら此処に居る者、全員が同じだからだ。

家族を守る。ただそれだけ。けれど、それをなす為にアルは自分に残っている手段を全て余す事無く使う。ただ“それだけ”だ。

《それに最悪の場合、リリス・ルキフェルが星王になった場合に対抗できるのは、正統の血を引くアルとイリアの二人だけだからな……》

星王の力の最大の特徴は同じ血を引く者以外の魔力を殆ど受け付けないという、ある種の絶対防御がある事だ。だが逆に同じ血筋の者からの魔力は防げないという大きなデメリットも存在する。

そしてこのウルフの一言を聞いたのはリンディだけだった。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

一同がブリッチに集まり、リリス・ルキフェルの逮捕およびイリア・スフィニールの救助の作戦と情報整理をし始めてから約一時間が経った頃。

次元航行艦船アースラは、封印世界「アルカディア」の軌道上にまでたどり着いていた。

ブリッチの転送ポートの前にはギリギリまで魔力を溜めようとアルが膝を抱えて瞑想し、その前になのはが立つ。そしてその両隣にフェイトとはやてが並び、更にそれを囲う様にシグナム達が立つ。

ブリッチの中央、艦長席にリンディが凛と背を伸ばして座り、その隣にクロノが控え、全員が防護服（バリアジャケット）を展開してデバイスを握りしめて、いつでも出撃できる体制でいる。

一同の視線はブリッチの窓から見える宇宙空間に浮かぶ青い星。アルカディアに集中している。

だが、太陽の光が当たっていない夜の側の一点に、夜である筈なのに宇宙からでも視認できんばかりの巨大な純白の輝きを捉える。

「拡大して表示します」

スタッフの一人がキーボードを操作してブリッチに光の拡大映像を巨大スクリーンで表示する。

そこには純白の光を放ち、ゆっくりと反時計回る見た事もない魔方陣が描かれていた。

「あの魔方陣は一体……」

「星式（せいしき）だ」

リンディの呟きに答えたその声に、全員が後ろを振り返る。

振り返った先でアルがゆっくりと立ち上がり、俯いていた顔を上げてその蒼い双眼を開いてスクリーンに映る魔方陣を睨みつける。

「星式は、星の王女を星王として覚醒させる為の儀式魔法の術式。王家の紋章と星王の莫大な魔力がなければ発動できない。星王にのみ許された王位継承魔法」

「王位継承魔法？」

アルの星式の説明にクロノが繰り返す。

「星王が次の星王に星王の証と自分の持ち得る魔法。その全て譲渡する特別な魔法だ」

つまり今目の前で発動中の魔法がその王位継承魔法で、この儀式が成功した場合、それはリリス・ルキフェルが新たな星王となるという事だ。

それだけは回避しなければならない。

「だが焦る必要はない。まだ天(そら)に術式しか出てない。術式はまだ完成していない」

この儀式は、完成するまでもかなり時間がかかる。それに術式が完成しても儀式が成功するまでにもかなりの時間がかかる。

しかし頭の切れる彼女の事だ。何かしらの短縮化の手段を使うつもりかもしれない。油断は禁物だ。

「先に言っておく。オレはお前たちの作戦に従う気も、お前らと協力する気もない。お前らはお前らの好きにしろ」

アルはそう言って転送ポートに向かって歩き出し、ウルフと共に一足先に宿敵の下へと飛んだ。

「さて、アルさんから同行許可も出た事だし、クロノ執務官」

リンディは隣に控えていたクロノに流し目をして合図を送り、クロ

ノはそれに、はいっと答える。

「これより僕たちはリリス・ルキフェルの逮捕に向かう。こちらが持っている対抗戦力のアル・スフィニールを護衛しつつ、あの儀式魔法の中心へ殴りこむ！」

『はい！』

「行ってきます、艦長」

「気を付けてね、みんな」

リンディに見送られながら、クロノ達は転送ポートからアルカディアへと降り立った。

クロノ達がアルの後を追って転送されて来た所は、数百メートルほど先に巨大な建造物が天空を貫かんばかりに高らかにそびえ立つ様子が見える森の開けた場所だった。

「こ、ここが……アルカディア？」

しかし一つ違うのは、今はこの世界の時間で夜中であるにもかかわらず、まるで昼間の様に天から降り注ぐ純白の光に照らし出されている事だ。

まるでこの世界には一点の曇りも影もない清浄な世界なのかという錯覚に陥りそうなほどの神々しさ、故にこの世界には自分たち以外の命は存在していないのではないかというほどの静寂。

その二つがなのは達の精神を侵略する。

「な、なに？　この……感覚？」

気づかずフェイトは自分を抱きしめ膝をつく。それに釣られる様にしてなのは達も次々と膝をつき、小さく体を震わせる。

「ま、まるで」

立ち上がる事が出来ない。なのはは自分で自分の体を動かす事が出来なかった。

自分たちがここに居てはいけないのだと自分たちは異物だと世界に

拒絶されているかの様な恐怖と嫌悪が混じったかのような違和感が、彼女たちに立ち上がる事を許さない。

言葉では言い表せない感覚がなのは達の精神を蝕み、ここに来るまでに抱いていたリリス・ルキフェルの逮捕の意志が薄らぎ、逆に早くここから逃げ出したい恐怖に駆られる。

なぜこの場所にいるのかが分からなくなり、吐き気がするほどの嫌悪感を抱き始める。

「夜の帳（とばり）を持って清浄を奪い去れ」

《Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ》

なのは達を漆黒の光が包み込みむ。

そしてなのは達を包み込んだ漆黒の光は、弾けて無数の黒い光の粒子となってなのは達の周りを漂う。

それと同時に、なのは達の精神を蝕んでいたあの感覚が嘘の様に消え去った。

「あ、あれ？」

全員が正気を取戻し、次々に立ち上がる。

キョロキョロと辺りを見回して、今自分たちが何に包まれているのかを確認する。

「その光をデバイスに取り込め」

その声に反応して全員が正面を向くと、そこには黒衣の防護服（バリアジャケット）を身に纏い、フルドライブを起動させた銃剣状態のウルフを持ったアルが立っていた。

「この世界は星の民達が生まれ、育ち、死んでいった世界。星降り注ぐ聖地だ。他世界（よそもの）の人間はあまり歓迎されない」

「聖地……か」

「それに今は“星王の魔法”が発動している。星の力が活性され、同族以外を自分から退ける効果が強くなっているんだ」

「そうか、それであの違和感なのか」

クロノがアルの説明に合点がいったように頷く。

《その光は星の民の印。デバイスに取り込んでバリアジャケットにインストールしろ。それでかなり緩和されるはずだ》

なのは達はデバイスをそれぞれ光に向かって掲げ、その光を取り込んで防護服（バリアジャケット）を構成するデータにインストールする。

それぞれの防護服（バリアジャケット）に黒い光が一瞬宿り、それがそれぞれの魔力光に染まるとフッと消える。

それをインストール完了と判断したアルは、なのは達を包んでいた魔法を解除する。それと共になのは達の表情が一瞬だけ歪んだが直ぐに元に戻る。

「たしかに先ほどよりは楽になったが……」

「気を引き締めてねぇとまた呑まれそうだぜ」

シグナムとヴィータが視線を交わして話し合い、その意見に全員が頷いて同意する。

「急いだ方がいい。思ったよりも術式が出来上がってる」

アルはそう言って浮き上がり、目の前にそびえ立つ建造物に向かって飛んで行く。

その後を追ってクロノ達も飛び上がる。

「あ、あのアルくん！」

「……？」

アルの隣に並ぶように並行飛行するなのはがアルに話し掛ける。

「あの建物って何？」

あの建物とは、なのはが示す先にある巨大な建造物の事だ。

アルはその建造物について知っていることを語り始める。

「アレははるか昔の星の民が、星に祈りを捧げるために作られた。この世界で最も星に近く、そして神聖なる土地に造られた星の神殿だ」

かつての星の民が造り上げ、それから代々の星王が祈りを捧げてきた場所である。それ故に星の民にとってここはとても神聖な場所であると同時に、自分たちにとってとてもゆかりのある地でもあるのだ。

国が滅び、世界から文明が失われ、それでも今日（こんにち）までその姿を残し続けた星の民のシンボルともいえる神殿。

数百メートル離れていたその神殿との距離も、空を飛べばものの数分で入口まで辿り着く。

「我、星王の血を引きし夜也」

アルは一人神殿の固く閉ざされた扉の前に立ち、キーコードを唱える。

「その証を此処に示さん」

ウルフの刃を左手に押しつけてサッと軽く引き、傷をつける。

その行動になのは達がざわつくが、アルは気にせず深紅の血が滴る左手を扉に添える。

「アルカイド・コンストレー・スフィニールの名の下に、我を迎え入れ賜え」

刹那。アルが添えた左手を中心にして扉に黒い光が縦横無尽に駆け巡り、ズズズ！と音を上げて六方向に向かって扉が開く。

扉が開き切ると、通路の外壁の溝が白い光が走って明かりが灯る。

アルは躊躇する事無くその中に足を踏み入れ突き進んでいき、なのは達もその後を追って入っていく。

「ね、ねぇ、アルくん。今のって……」

走るアルの隣に並走して尋ねる。

「あれがオレの真名。アルカイド……先導者という意味だ」

「先導者……」

本名として名乗るのが名前。それとは別に儀式や今の様に神殿の鍵として使うのが真名である。

王家の人間において真名とは、その人間そのものを表すモノとして付けられ、親と自分以外誰も知らない。

「……こっちだ」

アルが走るスピード上げて駆ける。

その姿はまさしく真名の通り、先導者のようだった。

「思ったんだけどよ……壁ぶっ壊して入った方がよかったんじゃねぇか？」

アルの後をついては走りながらヴィータが疑問を漏らした。

だがそれをクロノは否定する。

「確かにそれだと数回飛ばして突入できるかもしれないが、それだとメリットが少ない。自分たちの侵入を知らせている様な物だ。ただでさえ相手はオーバーSの魔導士なんだからな。できるだけ有利な状況にいる事に越したことはない」

それに要救助者がいるんだ、無暗に神殿を破壊するべきじゃない。と付け加えたクロノの理由にヴィータは「ふ～ん」っと納得した。

しばらく走っていると、上に抜ける吹き抜けのに縦穴に出る。アルは走りながらその縦穴に飛び込み、上に向かって飛び上がり、その後に続いてなのは達も飛び上がる。

元々この神殿は星王とその臣下、そして王家の人間以外が入らなかった事もあり、階段は存在しない。代わりに上の階に行くための吹き抜けがあるだけなのだ。

縦穴を抜けて一つ上の階に出ると、そこは部屋を支えるための数本の柱があるだけの大広間になっていた。

だが下の階と違って辺りに明かりはなく窓もない。漆黒の闇が部屋中を覆い尽くしている。

「……」

「……何かいるな」

アルとシグナムが一歩前に出てデバイスを構える。

静寂が支配する空間で、全員にエイミィからの通信が入る。

『みんなの今いる所に複数の魔力反応を確認！　数は六！』

その一言で全員がデバイスを構える。

それと共に暗闇の奥から複数の物音が迫ってくる。

ズルッズルッと何かを引きずって歩く様な歪で生々しい音だ。

「……獣でも魔獣でもない。なんだ？　これは……」

アルが大勢を低くしていつでも飛びかかれるように待機する。

刹那。

アアアアアアアアアア！！

『ッ！？』

耳に纏わり付くような妙に生々しい悲鳴の様な雄叫びが響いた。

迫ってくる何かが吼えたのだろう。釣られる様にして他の何かも高低の差はあれど同じような悲鳴のような雄叫びが上がる。

「な、なに！？」

「来るぞ！」

アルは叫ぶと同時に前方に黒い魔力光の魔力スフィアを展開して弾幕を張る。

放たれた魔力弾は何かに当たって炸裂する。

魔力弾の爆発による一瞬だけの明かりで相手の大きさを確認すると、アルは体重を前に傾けて思いっきり踏み出す。アルが踏み出すと同時にシグナムとヴィータもそれぞれ物音を頼りに別方向に駆け出す。

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

三機のデバイスが同時に一発カートリッジをはじき出す。

ヴィータはグラーフアイゼンを強化して殴りかかり、シグナムはレヴァンティンの刀身に紅蓮の炎を宿して斬りつけ、ウルフは銃剣の刀身に黒い魔力刃を展開して突く。

「ふっ……！」

それぞれの攻撃はクリーンヒットしたらしく、大きな生物を殴り飛ばす様な鈍い重低音が響き、炎の軌跡と共に暗闇で蠢く何かの身を切り裂いた切り傷に残り火が宿り、黒い刃が何かを刺し貫いて引き裂くように引き抜く。

アアアァァアアアアアァァ！！

次いであの耳を塞ぎたくなる様な悲鳴が響き渡る。

その悲鳴に流石のアルやシグナムでも表情を歪ませる。

「はやて、この部屋を照らせるか！？」

「やってみる」

クロノの指示にはやてが応え、照明に利用できる儀式魔法を詠唱し

始める。

だが低レベルの魔法故に詠唱も短く終わり、はやては杖を天井に向けて掲げ、魔法を唱える。

「この場に光に照らせ！　ライト！」

杖を掲げた先の天井付近に白いベルカ式魔方陣が展開され、その中央から白い魔力光が部屋全体に降り注いで部屋を包んでいた暗闇を照らしていく。

「なっ……！？」

「うっ！」

照らされた部屋に現れた“それ”に全員の顔が歪んだ。

蠢くそれは人の様な肌色の皮膚を持ち、四本の腕があったり、人の様な顔が二つ捻じ込まれたかのような漫画や神話などに描かれる様な異形そのものを体現するかのような怪物が照らし出されたのだ。

「これは……！」

「見た所、人……に見えるが……」

「じゃあ……この怪物は、元々人だったって事？」

シャマル、クロノ、フェイトがそれぞれ言葉を交わす。だがその視線は目の前の異形達から離してはいない。

動揺するなのは達だが、ただ一人。アルだけは怒りを覚えて震えていた。

「あ……あ……！」

ザワリとアルの銀の髪が浮き上がり、黒い魔力光がアルの体を薄く包む。

カタカタと音が程に強くウルフを握りしめ、ギリッと歯を食いしばり、そして――

「あの女ぁあああああ！！」

吼えた。

「よくもっ……よくも仲間をっ！」

ガシュッガシュッ！とウルフから二発のカートリッジが排出され、

アルの足元に黒いミッド式魔方陣が広がる。

「許さねぇ！！」

アルの体から溢れる魔力がアルの正面で光球を作り出す。

光球とアルの間にミッド式の魔方陣が展開される。

「非殺傷設定解除！　全てを撃ち抜け！」

《Ｄａｒｋｎｅｓｓ――》

「フルバーストォ！！」

光球に魔方陣を押し付けるように左手を突出し、光球から幾本もの砲撃が溢れ、一体も残らず撃ち貫く。

非殺傷設定を解除した攻撃は怪物の肉体を容易く食い破り、風穴を開ける。

「はぁ……はぁ……」

肩で息をするアルにクロノが駆け寄る。

「非殺傷設定を解除するなんて、何を考えてるんだ君は！？」

「一時も早く楽にさせるには、殺すのが一番だ」

「だからと言って――」

「アレは元々人間だった。それはお前らにも直感的に感じていたはずだ」

アルの低い声に思わず全員が言葉を失う。

僅かな沈黙の中、アルが口を開いた。

「アレは……星の民のキメラだ」

クロノ達が息を呑むのがわかった。

「オレ達は同族を感じる事ができる。それに、ここは星の民の印を持つ者以外は排除させられる場所なんだ。星の民以外の存在が此処に居るはずがない」

星の民は星の民を感じる事ができる。探知の類ではなく、出会った相手が同族かどうかを判断する能力だ。

そして儀式が行われてなのは達が味わったように、精神汚染がこの神殿には常に発動している。それは外部の侵入者を排除する効果があると同時に、星の民を守る最後の砦でもあるのだ。

だからこそ、此処に居るのは星の民以外は絶対にありえない。アルの様に自分の印を分け与えてもらった者以外は。

「じゃあ、この人達はアルくんの……」

知り合い。と続くはずの言葉を飲み込んだなのは。

元々星の民は少数民族の一族だという事を思い出したからだ。全員が遠縁ではあれど血の繋がった家族。それをこんな風にされればアルが激昂するのも無理はないと思ったのだ。

アルは王位を継ぐ資格がないとはいえ、それでも王家の直径に当たる人間だ。誰よりも一族に誇りを持っていたアルだからこそ、身内をこんな風に扱われるのが許せなかった。

行動不能にしたとしても、理性もなくただ暴れて他の生き物を襲うだけならば、いっそのこと死なせてあげた方がいい。そう思ったアルは一思いにその命を奪う事で、楽にしたのだ。

『みんな。ちょっといい？』

エイミィからの通信が入り、全員耳を澄ませる。

『みんなのいる所からずっと下にね、さっきの魔力反応と同じ反応がいくつもあるの……』

まだ下にアルの仲間で、人だった人達がいる。

それを聞いてなのは達は自然とアルを見詰めていた。

よく似た。ではなく同じ反応。それはこの下には先ほどのキメラの様に改造され、怪物となった星の民が蠢いている。

「あ、アルくん……」

「あそこに地下に抜ける縦穴がある」

「え？」

アルはウルフを右へ向け、その先にある地下への道を示す。

「みんなオレの身内だ。オレが助けるべきなんだが……オレにはやるべき事がある」

イリアを助け、リリス・ルキフェルを倒す事。その為にアルは此処まで来た。その気持ちは今も変わらない。だがしかし仲間を生き地

獄から救ってやりたいと思っているのも事実。
だが二つを同時にはこなせないし、これ以上の魔力の無駄遣いはできない。

「だから……オレの代わりにみんなを……救ってくれ」

「アルくん……」

「アル……」

本当は自分が行きたいのだろう。道を示すウルフの切っ先が小さく震え、押し堪える怒りが感じ取れるようだった。

「ああ、わかった」

「シグナム」

「主はやて。ここは我々にお任せを」

シグナムが一歩前へ出る。

「はやて達は先に上に行っててくれ」

ヴィータも一歩前に出る。ザフィーラとシャマルも二人の続く。

「ならうちも……」

「いえ、主はやては上に行ってください」

「こっちはあたしらだけで十分だからさ」

トコトコとグラーフアイゼンを担いでヴィータはアルの示す先へ歩き始める。

「彼らを助ける事は不可能だ。……だが、救う事はできるだろう」

ヴィータの後を追う様にザフィーラが続く。

「だからはやてちゃん達はアル君を手伝ってあげてください」

シャマルもシグナム達に協力して地下へ行く事を示す。

「……わかった。みんな、気を付けてな」

「いくぞ」

アルはなのは達を連れだって正面にある上へ抜ける縦穴へ向かって走り出し、それ続いてなのは、フェイト、はやて、クロノが続く。

それを見送ったシグナム達は視線を交わすだけで合図し、地下へと向かって走り出す。

『みんなを頼む』

そんな念話を頭の片隅に聞きながら。

第十六話　蘇る過去の星（前書き）

天に瞬く星が見せる未来の構図。我の最も恐れる結末、我が心より望む終結。星が見せる未来はどれか。

世界の未来。それは星のみが知り、星の子のみがその未来へ誘う。

我は終わらせなければならない。この宿命を……この運命を……

第十六話　蘇る過去の星

星の神殿の最上階。今まさに新たな星王を産み出そうとしている儀式が発動している場所。

この神殿の中で最も神聖な場所にして星王が星詠みやお祈りを行なう祈祷場で、星王の直系である少女、イリアが苦しげに呻いていた。

「く……っ」

宙に固定されているイリアの胸元には純白の光を放つリンカーコアが光り輝いていた。だがその周りを『星の鍵』を封印している環状魔方陣がいくつも取り巻いている。

儀式が始まってもう数時間が経とうとしている。一向に終わる気配のない拷問の様な苦痛に、イリアは疲労の色を隠せなくなっていた。

そんなイリアを笑みを浮かべながら眺めるリリス。しかしその傍らでは彼女のデバイスが封印の解析と儀式魔法の展開を同時並行で行い、リリスの周りには儀式魔法の図解や封印術式の数式、そして魔力のパロメーターらしき円グラフなど様々なモニターが開いていた。

「あら……」

ふとリリスの表情から笑みが消える。だがそれも一瞬の事。先ほどよりも口角を吊りあげて楽しそうな笑みを浮かべる。

クスクスと薄ら笑いを漏らしながらイリアを見上げる。

「王女様、やっと来たようですよ。貴女の騎士様が」

そう言いながらリリスはモニターを一つ、現在最上階に向かって移動中のアル達の姿をイリアに見せつける様に開いた。

そこには夢で幾度となく戦っていた少女たちが一緒に映っていた。

それはアルが自分を助けるために変わり始めた——いや、かつての自分を取り戻し始めたのだと、イリアは直感で感じた。

「……」

イリアの瑠璃色の瞳から一筋の涙が流れる。

約束通りに助けに来てくれた。もうすぐ兄が来てくれる。大好きな兄が。

そう思うだけでイリアの瞳から涙が溢れる。状況は何一つとして好転していない。だが兄が近くまで来ている。ただそれだけで心が強くいられるのだ。

「ふふふ……」

リリスが強さを取り戻したイリアを見て不気味な笑みを浮かべる。

「さて、じゃあ御持て成ししないとね」

リリスがヒレンジャクに視線を送ると、ヒレンジャクは小さく頷く。

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏｒｄ》

ヒレンジャクが地下の扉の鍵を解除し、開放する。

それをモニターで確認したリリスはイリアの目の前にモニターを開く。

そこには真っ暗な広間で身構えるアル達の姿があった。

「ねぇ、王女様。王女様から鍵と王家の証を抜き取るには安全と万全を規す必要があったのよ？」

突然語り始めたリリスに、イリアはモニター越しに見える彼女を怪

訝な表情で見つめる。

「その他には実験は必要不可欠だったの。だってたった一人の王位継承者なんだもの……失敗は許されないわ」

元々高い技術を持った技術者であった彼女は、ありとあらゆる所から資料をかき集め、そして利用できる技術は何でも利用してきた。

そしてそれは禁断の領域にはで及んだ。

「でもまさかここまで苦労するなんて思わなかったわ。だって私やあなた達以外の星の民はもう全員死んでしまったから」

自分が殺したくせに。そう叫びたいのをイリアは必死に堪える。

だが同時に疑問が浮かんだ。

リリスの話し方だと、鍵と証は同時に取り出すしかなく危険度が高いという事に気づいたのは自分たちを捉えた後のように聞こえる。

「さあこれからと思った矢先に難題が浮き彫りになるなんて……ついてなかったわ」

アルを星の雫の覚醒させるために送り出した後、その事に気が付い

たリリス。

どれだけ精密な術式を構築しても、その実験ができなければ安全性は確立できない。

「でも便利よねぇ……あの技術。アレを考えた人はかなりの狂人ね。まぁあの変人ほどじゃないでしょうけど」

狂人やら変人やらと呼称している人物がどんな人物なのか、それは流石にイリアにはわからなかった。だが、その人たちも今目の前にいるリリスとなんら変わらぬ、命を命と思わぬ人間なのだという事は自然と理解していた。

「でも漸く私が星王となる術式が完成したんだものね。感謝しないと」

おかげで実験体がたくさん手に入ったのだからと付け加えていうリリス。

どういう意味なのだろうかとイリアが思っていると、突如モニターから生々しい悲鳴が響き渡った。

びっくりしているとモニターに映る広間に明かりが灯り、部屋の様子が明らかになる。

「あ……ぁぁ……」

そこには、人の様な肉塊の様な、醜い怪物が蠢いていたのだ。

そして不意にイリアの脳裏に先ほどリリスが言っていた言葉がよみがえる。

「実験……体……」

それを聞いたリリスの口元が吊り上る。

「そうよ。アレは私の魔法の実験を受けた実験体（ほしのたみ）の成れの果て」

「……どうして。同じ……星の民の人間なのに……」

イリアはついに俯き、ぽたぽたと涙を流す。

同じ血を引いていながら、なぜ家族ともいえる同族にこんな非道が行えるのか、イリアには理解できなかった。

「私にこそわからないわ。全次元世界を支配できるほどの力を持っていながら、なぜこんな退屈でしかない平和な箱庭の中で生きていくのか」

リリスは星の民の歴史を知っている。知っているにもかかわらずわからないと言ってのける。

それを聞いてイリアは思い出した。かつて母と父が生前に「リリス・ルキフェルは星の民に災いを齎す」と話し合っていた事を。

「だから私は管理局に入った。幸い私は一族の女たちの中でも指折りの大きい魔力を持っていたからあっさりと入局できた」

それから彼女はぞの才能をいかんなく発揮し、様々な魔法を習得し、更に技術者としてありとあらゆる技術を身に付けていった。

そしてある時、彼女は『星王伝記』を見つける。星王伝記は星の民の繁栄から衰退までを綴った歴史書。

リリスはそれを読んだ事で、王家の人間にしか受け継がれない星の民の歴史を知ったのだ。

「愚かな事だと思わない？　全世界を支配できる力も、資格も、権利もあるのにそうしないなんて」

「それは……星の民の誇りに反する」

それに……とイリアは続ける。

「それに……私たちに世界を好きにする資格なんか無いよ。世界は、星は……みんなの物だよ。それを守る事こそが、星の民の誇り――」

「くっ……あはははははは！！」

弱弱しく紡いだ言葉も、リリスの嘲笑うような高笑いでかき消された。

そして――

「下らない」

――冷たく低い声色で否定した。

「そんな絵空事で私が揺らぐとでも？　残念。私はね、世界を憂いてるわけでもなければ、世界に絶望しているわけでもないの」

イリアの前に開いていたモニターを消し、一瞬の瞬きの間にイリアの目の前にリリスが現れる。

「私には世界を支配できる力があるから私は世界を支配する。ただそれだけよ」

悲願でもなければ野望ですらない。際限のない欲望からくる望み。
できるからやる。リリスにとってそれだけの理由で十分だった。
しかしそのたった一言で、イリアは悟った。
目の前の女性が既に星の民の誇りを微塵も残さず捨て去ってしまっている事を。説得など無意味である事を。

「さてと……そろそろアレを使ってみようかしら」

リリスはイリアから離れると、歪んだ笑みを浮かべてイリアに見えないようにモニターを一つ開き、魔法を発動させる。
その魔法は召喚係の魔法。

「此方より彼方へ。人ならざる者を汝の下へ」

転送が完了したのか、モニターに向かってかざした手を下げる。

「私からのプレゼントよ。喜んで受け取ってね。ふふふ」

何をアルに向かわせたのかイリアにはわからなかったが、それが非常に危険な事なのだと本能で察知していた。

（お兄ちゃん……）

イリアの兄への心配をあざ笑うかのように、リリスの不気味な笑いが部屋中に響いていた。

☆　★　☆　★　☆　★

アル達と別れたシグナム達は、地下でリリスの実験体とされ怪物と化した星の民の掃討に向かい、漸くすべて倒し終わった所だった。

「これで全部……か？」

ヴィータが額に滲んだ汗を拭いながら言う。

『うん。反応なし。全部倒したよ』

エイミィの一言を聞いて、シャマルは漸く安堵の息を吐く。

「ふぅ……なんとか終わったわね」

「ああ……」

シグナムは辺りに転がっている血まみれの肉塊を見詰める。

キメラと化した星の民は全部で十五体もこの地下に蠢いていた。更にその一体一体がAランク近くの魔力を持ち、それらが次々に襲ってくるので、さすがのシグナム達もかなりしんどい戦闘だったようだ。

命を奪うという行為には慣れていたはずだった。だが、この二～三年の平和に慣れ切ってしまい、ほんの数年前まで当たり前のようにできていた行為に酷く嫌悪感を抱くようになっていたのだ。

それがシグナム達にとって一番精神的に疲れた要因だろう。この程度の敵で体力を消耗するなど、歴戦の戦士である彼女たちではありえないのだから。

「後味の悪い戦いだな」

その隣に並ぶように人間形態のザフィーラが立つ。

「同族の人間をこんな風にしちまうなんてな……」

「目的の為ならいかなる手段を使おうとも、どれだけの犠を出そうとも厭わない。そういう事だろう」

ザフィーラとシグナムの隣にヴィータが並び、すでに物言わぬ肉塊と成り果てた星の民を憐みにも似た視線を見向ける。

一体どんな魔法や実験をすればこんな風に人間を怪物にできるのだろう。仮も同じ血を引く同族という仲間にどんな気持ちならばこのような外道の行為ができるのか、さすがのシグナム達にもそれはわからなかった。

『っ！　転移反応？　気を付けて、何か来るよ！』

エイミィの警告にシグナム達は即座に臨戦態勢を取る。

四人が身構える先で銀色のミッド式魔方陣が展開され、ショートカットされた銀色の髪と空色の瞳を持つ男性の顔が魔方陣からせり上がる。

その姿は太すぎず細すぎずの無駄な筋肉のない綺麗な物で、その身にはアルの防護服（バリアジャケット）ととてもよく似ている防護服（バリアジャケット）を着込み、その手には銀色の拳銃とまっすぐ伸びる両刃の片手剣が握られていた。

「……」

男は無言でシグナム達を見つめ、フッと笑った。

「何がおかしいんだよ」

その様子にヴィータが不機嫌そうに問い質す。

「いや、ベルカ式の使い手と戦うのは十年ぶりだなって思っただけさ」

男は軽快に答える。

「貴方はリリス・ルキフェルの仲間ですか？」

シャマルの問いに男は少し首をかしげて思考し、首を振って答える。

「……いや、仲間のつもりはない。でも、奴隷と同じようなモノではあるかな」

「奴隷……。でしたら私たちと協力しませんか？　私たちは管理局です。リリス・ルキフェルの逮捕に来ました」

シャマルは彼が無理やり此処で利用されているのだと判断し、協力と同行を申し出る。

しかし、彼はそれも首を横に振った。

「無理、だな。私は――」

スッと右手に持った銀色の刀身を持つ片手剣をシグナム達に向ける。

「君たちを本気と全力を持って排除しろ、と命令を受けているから」

言い終わる寸前、既に男は駆け出していた。

それにすぐさま反応したシグナムがレヴァンティンで男の剣を迎え撃つ。

「何故だ。これほどの剣を持つ様な人が、何を恐れている？」

「……たった一撃で私の心を読む、か」

両者は弾かれる様に飛び退け、距離を取る。

「恐れてる、か。そうだな。私は恐れているよ。息子を手に掛けてしまわないかってさ」

「息子？」

ザフィーラがファイティングポーズを取りながら呟く。

「ああ。私には死に別れた息子と愛娘がいる……その二人を殺してしまわないか。それが怖いんだ」

「どうして殺す必要があんだよ。やりたくなけりゃやらなきゃいいじゃねぇか！」

ヴィータが叫ぶ。

彼女にはわかっているのだ彼が誰なのか。いや、それはこの場にいる全員がわかっている。

「今の私はあの女の傀儡だ。命令には逆らえない。体が勝手に動くんだ」

そして今、彼の左手に握る銀色の拳銃はシグナム達に向けられてい

る。

それが自分の意志でなくとも、そうしなければならない。
それが今の彼の存在であるからだ。

「私はテト。テト・スフィニール。ルルの夫であり、アルとイリアの父。そして――」

体制を低く、両手の武器を目の前の敵に向けて名乗る。

「星王家に仕えし魔導の銃士。行くぞ」

ダンダン！銀色の拳銃の引き金が二回引かれ、漆黒の魔力弾が放たれる。

シグナム達四人は散開して魔力弾を回避。

正面にザフィーラが身構えてその後方にシャマル。そしてテトの右側からヴィータ、左側からはシグナムがテトにレヴァンティンとグラーフアイゼン振りかぶって襲いかかる。

「テートリヒシュラーク！」

「せぇえええ！」

「シャドウダイブ」

左右を挟まれたテトは焦る事もなく魔法を発動させ、漆黒の光に包まれて床に沈む。

勢いよく振るったシグナムとヴィータの武器はテトの頭と足元を捉える事無く空を切る。

「なっ――」

「――にっ!?」

「ほら、もっとよく見ないと。レイズバレット――シュート」

いつの間にかシグナム達の向こう側へ移動していたテトの周りに漆黒の光球がいくつも浮かび、その全てが放たれる。

デバイスを振り切っている状態のシグナムとヴィータはかわせない。防御も間に合わない。

全弾受ける覚悟で騎士甲冑に魔力を回す。

「おおおお!!」

だがそこへザフィーラが飛び込み、ライトペリウィンクルの障壁を

右の拳を殴りつけるかの様に展開し、障壁と接触すると同時に全ての魔力弾が爆ぜる。

「サンキュー、ザフィーラ」

「礼は後だ。アイツ、相当手強いぞ」

爆風も全て防ぎ切ったザフィーラは、グッと拳を握り直して構える。

「うん。いい連携だ。ウチの子にも見習わせたいよ。それじゃ、今度はこっちから行こう」

テトは微笑を浮かべ消える。

続いてドン！と音が響き、ザフィーラの目の前に右手の剣を振り上げたテトが現れる。

「ふっ！」

「くっ」

テトの剣を両手に装着していた金属製の籠手でガードする。

だがその懐にテトは左手の拳銃を差し込み――

「しまっ――」

「エクスプロード」

しまった。と言い切るよりも早く拳銃の引き金が引かれ、漆黒の光がザフィーラの胸元で爆ぜる。

「ザフィーラ！」

「よそ見していていいのかな？」

シャマルの方へ吹き飛ばされたザフィーラを目で追っていたヴィータの耳にテトの声が届く。

慌てて正面に向き直ると、そこには既に右手の剣を振りかぶっているテトの姿があった。

「シャドウブレイド」

刀身から漆黒の光が溢れ、魔力でコーティングされる。

それを思いっきりヴィータに向かって振り切る。

が

「おお、存外速いな」

テトと肩を並べるように横からレヴァンティンがテトの剣を止めていた。

「これ以上、仲間に手は出させん」

「その言葉に実力がついてくるかな？」

テトは剣を引き、シグナムに向かって振り払う。

シグナムはそれをエビぞりになってその斬撃をかわしてすぐに元の体制に戻り、同時にテトは剣を振るった勢いのまま回転し、再び剣を振るう。

ガキィン！と金属同士が衝突して金属音を響かせ、シグナムは籠手返しの要領でテトの剣を払い、テトはその動きに合わせて剣を引き、両者が再び振りかぶって振り降ろし、刃が組み合う。

そして互いに弾きあって離れ、テトは拳銃を向けて三回引き金を引く。

「はぁっ！」

シグナムはレヴァンティンを振り上げ一発目を弾き、振り下ろして二発目も斬り伏せ、三発目も横に薙いで消し飛ばす。

「おお。言うだけの事はある、か。だが随分と激しい剣だ。まるで猛る炎を相手にしてるみたいだ」

テトは拳銃をシグナムに向けたまま軽快に言う。

「貴方も。まるで変幻自在な風でも相手にしているかのようだ」

「おお、真正ベルカの騎士に褒められるとは思わなかった」

「だが忘れているぞ。我々は一人で戦っているわけではない」

シグナムが一言を言い切った刹那。テトの足元からライトペリウィンクルの光の牙が床を突き破る様に出現し、テトの動きを制限する。

「おらぁぁあああ！！」

身動きの取れないテトに、ヴィータがグラーフアイゼンを振り被って襲いかかる。

「っ！」

テトは拳銃のカートリッジを一発は排出し、左手を捻って魔力弾を発射。

放たれた魔力弾はテトの左手を拘束していた光の牙を砕き、僅かに空いた隙間から左腕を抜いて盾代わりにしてミッド式のシールドを展開する。

しかし破壊力に長けるヴィータの一撃を受け止めきれる訳もなく、シールドを砕かれて後方の壁に叩き付けられる。

「ははは。確かに一対一と言った覚えはないなぁっ！？」

テトが壁から這い出ようとした時、突然胸に違和感を感じて呻き声を漏らす。

視線を下に落としてみると、そこには自分の胸からか細く白い女の手が突き破っており、その掌には漆黒に輝く小さな光球が浮かんでいた。

「……リンカーコアの抽出、か。なるほど、今までのは全て時間稼ぎという事か」

顔を歪めながら現在自分がどういう状況に置かれているのかを把握する。

「これ以上抵抗すれば、貴方のリンカーコアを破壊します。おとなしく投降しなさい」

シャマルが投降を勧告する。

が、テトはそれでも首を横にする。

「だから出来ないと言っただろ？　私を止めたければ殺すしかない」

「だがお前はアル・スフィニールの父親だろう。息子の為に生きようとは思わないのか？」

ザフィーラがテトを説得するが、テトは三度首を横に振り――

「私に残された道はただ一つ。この身体の命を絶つ事だ」

そう悲しそうに言った。

「それにな」

テトは歪んでいた表情を元の余裕のある笑みを浮かべた表情に戻す。

「この程度で優位に立って気でいるのは危険だぞ？」

刹那。

漆黒の光がテトの胸元から放たれた。

☆　★　☆　★　☆　★

白い光に照らされる廊下を走り、上に抜けた縦穴を潜り抜け、罠らしい罠もなくちょうど四十階を超えた所で十字路に差し掛かった。

「はぁ……随分と登ってきたけどまだあるん？」

アルが道を探っている間、はやては愚痴を漏らしていた。
無理もない。神殿に入って早十分。特に罠も迎撃もなく黙々と最上階を目指して登ってきた五人だったが、まだ先は長そうだった。

『今、ちょうど半分まで来たって所かな』

アースラのオペレーションルームからの通信ではやての疑問に答えるエイミィ。

外からの神殿の大きさとはやて達の魔力反応を現在位置としてスキャンすると、内部構造こそわからないものの現在位置ぐらいは特定できる。

それを聞いたはやては思わず溜息を漏らした。

「言った筈だ。ここはこの世界で“最も星に近い場所”だと」

アルが道を探り終わったのか、はやてに今自分たちがいる場所がどういう場所なのかを淡々と告げた。

天を貫かんほどに天高くそびえ立つこの神殿。まだまだ続くと間接的に云うとアルは十字路を左へ曲がる。なのは達もその後を追う。

「ここまでまったく出迎えがないが、どういう事なんだ?」

クロノが走りながらアルに尋ねる。

「星の神殿で最も重要な場所はどこだ？」

「えっと……一番上？」

フェイトが遠慮気味に言う。

「そうだ。そしてこの神殿は地下を含めて百十階ある」

「……うそやん」

はやては走りながらがっくしと肩を落とした。

「なるほど。この神殿は星の民の象徴であると同時に、上に登り切るまで体力を削るようにもなっているのか。それなら無理に罠を仕掛ける必要もないな」

クロノはアルの僅かな言葉からこの神殿の罠の少なさを推測し、更にこの神殿の構造に納得する。

そんな会話を交わしている間に再び縦穴を潜り抜ける。

この先に何が待っているのかも知らずに。その階に足を踏み入れる。

「……止まれ」

やや広く幾本もの太い柱が規則正しく並ぶホールの様な部屋に入った一同は、アルの突然の制止に戸惑いを感じつつも歩みを止める。

この中で最も此処に詳しくて感覚の鋭いアルがわざわざ制止を掛けるほどだ。おそらくよほどの何かが隠れているのだろう。

アルは何も言わずに、いつでも撃てるようにウルフを構える。

「……そこか！」

前方の左側にある柱に向かってウルフの引き金を引き、黒い魔力弾が柱を砕く。

砕け落ちた柱の粉塵が舞う中、何かがこちらに向かって歩いてくる。

「……ア……ル」

「っ！？」

アルの体が強張る。
まるで凍り付いたかのように微動だにせず目の前に現れた人物を見詰める。

「アル……」

床や壁に走る白い明かりに照らされて粉塵が晴れていくにつれて露わになっていくその姿。
腰まで届くほどの銀色の髪を揺らし、碧眼（へきがん）の両目でアルを見詰め、ゆっくりとした歩調で一歩、また一歩とアルに近づいていく。
その顔は――

《ルル……か？》

『えっ！？』

なのは達が驚きの声を上げる。

「アル」

――アルの殺されたはずの母そのものだった。

「な、なんで……」

アルは思わず一歩下がる。

恐怖にも似た何かがアルの身体を突き抜ける。

目の前の得体の知れない何かから逃げろと本能がそう囁いている。

「あの人って、アル君のお母さんなの？」

「バカな、あり得ない。だって……」

なのはの質問に、アルは余裕のない声で即座に否定する。なぜなら、アルは母の死体をリリス・ルキフェルと共に見ていたのだから。

「母さんに止めを刺したのは……オレなんだ」

『……え？』

再びなのは達四人の声が重なる。

アルが云った言葉の意味を理解しきれなかったからだ。

「勘違いしないでね。アルは私を救ってくれたのよ」

アルの母ルルはアル達を逃がしてからテトと共にリリスに挑んだが、テトは殺され、自身も瀕死の重傷を負った。

だがその場では殺されず、止血だけをされてこの神殿の地下に捉えられていた。

そしてアルが旅に出る前の日。アルはリリスに連れられてその地下に行き、両手両足と首を鎖で壁に捉えられ、重傷の傷で生死の境をさまよっていた母の姿を見た。

リリスは自分は彼女を救う事はしない。そしてアルが彼女を殺さなければイリアは二度と外には戻らないと脅し、アルにルルを殺させたのだ。

だがルルはアルに自分を殺すよう自分から促した。そうする事でいつかイリアとアルが幸せに暮らせるのならばと思って。

しかし……

「彼女は面白いからという理由で私たちを生きかえらせたの」

「これまで星の民の独特な魔法を見てきたが。まさか、死者蘇生の魔法までもあるとでも言うのか？」

「いいえ。死者の蘇生なんてこの世の理を崩壊させかねない魔法は

ないわ。でも、よく似た魔法があるでしょ？」

「よく似た……魔法？」

クロノがルルの言葉に首を捻る。

そこで、フェイトがハッと何かに気付いた。

「……使い魔の、契約魔法？」

フェイトの答えにルルは黙って頷いた。

「彼女はあなた達を――いえ、アルを弄ぶために私たちの体に使い魔の契約を施しました」

「そんなっ！？」

フェイトが驚愕の声を上げる。

使い魔とは、魔導師が自分で作成し使役する魔法生命体の事だ。

動物が死亡する直前または直後に、人造魂魄を憑依させる事で造り出す事ができるが、普通人間を使い魔にするなど考えない。いや、実際には不可能だとされている。

だがリリス・ルキフェルは成し遂げた。人間を使い魔に仕立て上げたのだ。

しかし使い魔の呪法で生まれた命も、少しなら生前の記憶が残る可能性があるが、ここまではっきりと人格まで同じなのは前例に無かった。だが、人の体が素体なのだから前例など元より無い。何が起きていても不思議ではないのだ。

「アル」

ビクリとアルの肩が震える。

「私を……殺して」

「っ――」

ルルの言葉に、アルが息を呑むのがわかる。だが驚いている様子はない。

なんとなくそう言ってくるのだろうなと予想していたのだろう。

《アル……》

「アル君……」

俯き奥歯をギリギリと噛み締めるアルを心配そうに見つめるなのは達。

勿論クロノも心配そうに見つめているが、その眼はアルの出す答えが一つしかないとわかっていて、同情にも似た視線だった。

「……っ」

アルの出すべき答えは一つしかない。それはアルにとって親殺しをもう一度やれと言っているようなものだ。

しかし既に一度母親を殺している。二度やるのも同じだ。アルはそう自分に言い聞かす。だが、そこはアルも人の子だ。親を殺すなんて簡単に云える精神はしていない。

だが言わなくてはならない。

「わかった……」

アルは小さく息を吐くように言い、ウルフを構える。

「オレが……もう一度、殺す」

「ありがとう、アル」

ルルの手に銀色の魔導の杖が出現する。

リリスに命令され、その命令に絶対服従である今のルルの状態ではあまりにも自然な行動ではある。

「この半年で得たモノを……私に見せてください」

「見せるよ。オレがこの旅で得た事、全部！」

二人の親子の間で白と黒の閃光が爆ぜた。

第十七話　死せる守護者との死闘

天と地。塔の上層と下層で、死んだはずのアルとイリアの両親がアル達とシグナム達の前に立ち塞がる。

歴代の後継者の中でも屈指の魔力資質を持つ魔導師と呼ばれ讃えられた母と、代々星王家に仕えてきた中でも最強とまで称された銃剣士の父。

例え親や友という関係がなくとも、どちらも強敵である事には違いない。

地下ｓｉｄｅ

「この程度で優位に立って気でいるのは危険だぞ？」

そうテトが呟いた瞬間。彼の漆黒のリンカーコアから溢れる異常なほどの発光が部屋を漆黒に染め上げる。

爆発的に膨れ上がるテトの魔力。それは衝撃波となってシグナム達を突き抜ける。

その衝撃を最も近くで受けたシャマルの手は遠隔操作で相手のリンカーコアの抽出する為に繋いだ空間から押し出され、その衝撃に体勢を崩して床に尻餅をつく。

「これがレアスキル。……リミットブレイクか」

シャマルの手が引き抜かれた事でテトのリンカーコアはテトの中に戻り、吹き荒れていた魔力の衝撃波が弱まる。

「よく知っているな。ああ、そういえば君たちはアルの協力者だったな」

だったら知っていて当然か。そう満足げに付け加えるテト。軽快に言っているが、その雰囲気は先ほどまでの余裕綽々と言った雰囲気から本気の殺気が迸る戦士の物へと変わっていた。

現に何の構えもしていないにも関わらず全く一分の隙もない。

「知っているなら話は早い。では、さっそく行かせてもらおうか。何分(なにぶん)、この状態は長く持たないのでね！」

テトが荒れ狂うような魔力で身体能力を極限まで強化し、シグナム達の正面へ跳ぶ。

シグナムはカートリッジを一発排出し、レヴァンティンの刀身に紅蓮の炎が宿る。

「せぇ！」

「ふっ！」

それをテトの斬撃に合わせて振るい、漆黒の魔力で強化されたテトの剣と激しく打ち合う。上、下、右、左、正面とテトとシグナムは互いの剣を振るっては弾き、また振るっては弾きを繰り返し、互いの剣が弾かれるとほぼ同時にテトは回し蹴りをシグナムの脇腹に叩き込む。

「がっ！？」

防御の間に合わなかったシグナムは脇腹に力を込めるが、あまりにも重い一撃に身体をややくの字に曲げる形となった。だが直ぐに両足を床に着けて踏ん張り、レヴァンティンを振るいテトと鍔迫り合いに持ち込む。

「シグナムだけが相手ではないぞ！」

そこへザフィーラがテトの背後からシグナムと挟み撃ちにする様に肉薄する。

「狙いはいい」

が、その策はテトの格好の餌食だった。

「詰めが甘いな」

テトはふわりと剣から力抜き、半歩引く。

その唐突に前からの支えを失ってバランスを崩す、が直ぐに一歩踏み出して前のめりに倒れるのを防ぐ。しかしその一瞬の隙を突いてテトはシグナムの背後に回り込み、足を払ってその体を宙に浮かせた後、ザフィーラに向かってシグナムを思いっきり蹴り飛ばした。

「くっ……」

蹴り飛ばされたシグナムをザフィーラが受け止めると同時にテトから漆黒の魔力弾の嵐が飛んでくる。

ザフィーラは即座に障壁を展開して魔力弾の嵐を防ぐ。一発一発の威力は低い、が一発たりとも逸れる事無くザフィーラの障壁にまるでマシンガンの如く注ぎ込まれて反撃の隙がない。

「喰らえっ！」

二人を相手にしているテトに向かって、ヴィータがテトの死角とな

る背後の頭上からラケーテンフォルムに変形させたグラーフアイゼンを振り下ろす。

テトは振り返る事無く剣を背に、グラーフアイゼンのハンマーヘッドの頭についているスパイクに逸らすように宛がい、グラーフアイゼンの軌道を僅かにずらして受け流す。

「なっ!?」

思いっきり振り下ろしたグラーフアイゼンは受け流され、振り下ろすのを止める事も出来ずにテトの僅か三十センチ右の地面を陥没させる。

その隙にテトは振り返って剣を大きく振り上げ、振り下ろす。

『させん!』

シグナムとザフィーラの声が重なる。

振り下ろされた剣の軌道にレヴァンティンが割り込み、更にヴィータの背後からザフィーラが障壁を展開してテトの剣と激しい火花を散らす。

一瞬の攻防にヴィータが呆けていると、シグナムとザフィーラの二人掛かり僅かに押され始めている事に気づき、その場から飛び去る。

「防ぐだけじゃ……勝てないよ？」

テトは小さく笑みを浮かべて右腕に更に力を込めてレヴァンティンをザフィーラの障壁に押し付ける。

そのままシグナムの胸元に左手の銃を突きつけ、カートリッジをロードする。

「なっ！？」

「シューティング――」

魔力をチャージし始めるテト。

シグナムはレヴァンティンを引いて反撃しようとするが、完全に固定されていてピクリとも動かない。ザフィーラもザフィーラで障壁を解けば自分が斬られる事がわかっている為に解除できない。

「ブラスター」

シグナムが放たれると思った刹那、唐突に銃口が逸れてシグナムのこめかみを掠める様に漆黒の砲撃が放たれた。

よくよく逸れた銃を見てみると、テトの左手にミントグリーンの魔

力光の紐で繋がったペンダント――シャマルのアームドデバイスであるクラールヴィント――が巻き付いおり、その紐は弧を描くようにシャマルによって引っ張られていた。

だがテトは即座に引っ張られていた腕を思いっきり地面に向けて振り下ろす。

「きゃっ！」

その動きがクラールヴィントの紐を伝ってシャマルを床に引き倒し、その行動によってレヴァンティンを押さえつける力が一瞬だけ僅かに緩んだ。

（今だ！）

シグナムはその僅かな隙を逃すまいと強くレヴァンティンを握り、大きく体を捻ってテトの剣を思いっきり弾く。

しかしテトは始めからわかっていたかのように力を受け流して斬り返す。が、その寸前でザフィーラが体勢を崩したシグナムの手を取って後ろへ跳んだ。

テトは空を切った剣を下げ、代わりに自分の周りに漆黒の魔力弾を形成し、四人に向かって放つ。が、それぞれ障壁を展開して直撃を避けた。

楽しそうな余裕の笑みを四人を相手にしていながら浮かべるテト。
それに対する四人は苦悶の表情を浮かべてテトを睨みつけながら思う。

強い、と。

剣豪たるシグナムと同等の剣技。拳士たるザフィーラと同等以上の体術。そしてヴィータ以上の腕力とシャマル並みの冷静さと判断力。そして四人の誰もを超えているその実力は生半可なものではなかった。

いくら希少技能（レアスキル）だからと言っても、これは反則的すぎる程のパワーアップだ。

「確かにコンビネーションはいい。まさしく阿吽の呼吸だな。だが、全力じゃないね」

本気ではあるみたいだけど。と付け加えるテト。

「君たちは私を倒したらアルの手助けに行かなければ、とでも思っている」

シグナム達は黙る。

思わぬ乱入があったとはいえ、リリス・ルキフェルとの決戦には出来るだけ戦力は多いに越した事はないのだ。そうでなければとっく

の昔に全力で戦っている。

「君たちの判断は正しい。彼女は強敵だ。消耗した状態では勝ち目はない。だが今の私には全力を出し、本気で来なければ止められない。そうしないのなら――」

シグナム達に向かって剣を構えるテト。

「私が君たちを此処で殺すけど……どうする？」

シグナム達の前に現れてから一度も絶やさなかった余裕の笑みは消え、代わりに真剣な表情が浮かぶ。そしてその変貌ぶりは確かな殺気となってシグナム達に襲いかかる。

ビリビリと伝わってくる殺気の中に、信念の様な焦燥の様な苦しみにも似た何かが混じっているのを四人は感じ取った。一人の人間の父としての証明であり、テトがまだテトである証を。

「みんな……本気でやろう」

シャマルが渦巻く殺気の中で立ち上がる。

「一秒でも早く。この人を救い出そう」

「おう」

ヴィータはシャマルの呼び掛けに答えるように、改めてグラーフアイゼンを正面に横に寝かせるように構える。

「アイツと約束したからな。全員、救ってやるってよ」

「そう、だな。　スフォニアの信頼に応えてやる事が……今の私たちに出来る事だからな」

「ああ」

シグナムとザフィーラが床についていた膝を上げて立ち上がり、シグナムはレヴァンティンを、ザフィーラは握りしめた拳を構える。

ヴォルケンリッターの四人には、と同じ感情を味わっていた時期がある。闇の所の一部として、そして八神はやての騎士として、彼女を救いたい一心でリンカーコアを求めて魔導師を襲っていた時期が。

その理由は大切な主を――八神はやてを闇の書の浸食から守り、これからをひっそりとけれど平和に生きてく為に。それはアルと同じ理由だった。彼もまた唯一の残された大切な家族を救い出す為、力を求めて人を襲っていたから。

だから彼の辛さの一部ぐらいは彼女たちもわかっている。そしてそれがテトにも当て嵌る事も。

彼はリリス・ルキフェルの傀儡となり、自らの意志で戦いを止める事すらできず、大切な教え子であると同時に息子であるアルの仲間を、そしてイリアを助けようとしてくれている協力者を襲っている。あまつさえアルが自分の意志で星の民の印を分け与えた“友”を殺そうとしている。それがどれだけ辛く苦しい事か。

他人を全く信用しなかったアルが初めて、それも険悪だったあのシグナムに託してくれた。遠回しではあったが、それが彼なりの信頼の証。「みんなを頼む」たった一言ではあったが、その一言には様々な想いが詰まっていた。だからこそ、自分たちの事を信頼して託してくれたその想いに応えない訳にはいかない。

ただの一人も残さず救う。それがアルとの初めての約束だから。

「行くぞ、レヴァンティン！」

《Ｊａ！　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！》

シグナムの呼び掛けにレヴァンティンは力強く答え、カートリッジを一発排出する。

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！》

シグナムがレヴァンティンを振るうと、刀身が分割されて連結刃（チェーンエッジ）となってシグナムの周りに蜷局（とぐろ）を巻く。

「アイゼン！　あたしらも本気で行くぞ！」

《Ｊａｗｏｈｌ！》

シグナム続いてヴィータもグラーフアイゼンに呼び掛け、グラーフアイゼンもレヴァンティン同様に主の思いに応えようと力強く答える。

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！　Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ！》

ハンマーの柄が伸びて一発のカートリッジを一度押し込んでから排出し、もう一度カートリッジを排出する。続いてヴィータの身の丈を軽く二倍の大きさの超える巨大な角柱状のハンマーヘッドに変形する。

「私も本気行こう。だから、君達の本気を見せてくれ！」

テトは足元にミッド式魔方陣を展開する。より強い魔力で剣を強化し漆黒の輝きが増す、更に自分の周りに八つの魔力弾を形成する。

「ヴォルケンリッターが将。剣の騎士シグナムと、炎の魔剣レヴァンティン」

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータと、鉄(くろがね)の伯爵グラーフアイゼン」

「同じく湖の騎士シャマルと、風の指輪(リング)クラールヴィント」

「同じく盾の守護獣ザフィーラ」

友の為に、今目の前で苦しんでいる友の父の心を救う。

テトもまた、今のテトの友人たちの本当の実力を知りたい。

「代々星王家に仕えし魔導の銃士テト・スフィニール。真名をテルト・サダルメリク・スフィニール」

もう迷いはしない。

後はただ――

『押して参る!!』

本気と全力を持って戦うのみ。

「レイズバレット。シュートッ！」

テトが真っ先に先制を取り、周囲に生成されていた魔力弾が二発ずつ四人に向かって勢いよく放つ。

三人は跳んで回避し、シグナムは横一線にレヴァンティンを振るって連結刃で放たれた魔力弾を切り裂く。

「せぇい！」

レヴァンティンが大振りに振るわれ、その剣閃が蛇の様にうねりテトに襲いかかる。

薄暗い地下空間で、素早く縦横無尽に駆け巡る剣閃は流石のテトでも完全には捉えきれず

「くっ！」

首を狙った一閃を紙一重で避け首の皮一枚を切っただけで留まる。

だが、間髪入れず真上からヴィータの手加減など微塵もない一撃が容赦なく振り下ろされていた。

「てりゃぁあああ！！」

「シャドウブレイド！」

剣を素早く引くと剣に纏う漆黒の輝きが強く鋭くなり強化され、その切っ先を振り下ろされたグラーフアイゼンに鋭く突き立てる。

力と速度の衝突で衝撃波が轟音と共に二人の間で弾け、剣先とハンマーヘッドが激しい火花を散らして鬩ぎ合う。

「ぐぅ……」

テトはギリギリまで腕を引く。

「……！」

テトが息を呑むと同時に足元に漆黒のミッド式魔方陣が展開され、強い輝きを放ち始める。

「させるかっ！」

テトの動きを察知したシグナムがレヴァンティンを振るい、テトをレヴァンティンの連結刃が取り囲む。

だがそれがテトを襲うよりも早く、テトは一歩力強く踏み出して踏ん張った力を足から腰へ、更に腰を捻って腰から肩へ送り足元から練り上げた力を腕へ伝え――

「はぁあああああああ！！」

「ぅわっ！？」

全身を使って剣を突き出し、真正面からヴィータもろともグラーフアイゼンを跳ね返し、その衝撃で自身を取り巻く連結刃を取り払う。

だがそれは大きな隙を生む。

「うぉおおおお！！」

ヴィータを突き飛ばした事で生まれた隙を逃さなぬと言うかのように、ザフィーラが拳を握って肉迫してくる。

テトは先ほどの硬直から解かれず目の前に迫ってくるザフィーラに対処が間に合わず、なんとか銃で応戦するも角度と動きが八割ほど制限されているこの体制ではザフィーラの突進は止められない。

「ふっ――」

一気にテトの懐まで入り込んだザフィーラはテトの腹目掛けてアッパーを入れる。

「ぐっ……！」

「はあああ！！」

アッパーによって浮き上がったテトの身体を回し蹴りの要領で更に蹴り上げる。

「縛れ！　鋼の軛（くびき）！」

ザフィーラの足元にライトペリウィンクルのベルカ式魔方陣が広がり、その周囲から二等辺三角形状の棘が無数に出現し、テトの両手両足の動きを止める様に交差してテトを縛り上げる。

いつの間にか連結刃を戻したシグナムはレヴァンティンを鞘に戻し、カートリッジを一発使用する。

「飛龍……」

シグナムの周りに薄紫色のベルカ式魔方陣が展開され、更にその魔方陣から薄紫の炎が発生してシグナムを中心に渦を巻く。

更にテトを挟んだ向こう側にヴィータがバレーボールぐらいはありそうな巨大な鉄球を片手に持ち上げていた。

「喰らえ！」

《Ｋｏｍｅｔｆｌｉｅｇｅｎ！》

ヴィータはそれを軽々と真上に投げ上げ、円運動をしながら上昇し、空中で失速して僅かに停滞する鉄球を思いっきり叩き、文字通り流星を描くかのように紅い光を纏った鉄球がテトの背後から迫る。

同時にシグナムがレヴァンティンを抜刀し、二～三回ほど円を描いて思いっきり横一線に振るう。

「一閃！！」

放たれた連結刃は薄紫の炎を宿し、その剣閃は烈火の如く燃え盛って荒々しくも鋭くテトに襲いかかる。

正面と背後から迫るシグナムとヴィータの一撃。ヴォルケンリッターの中でも攻撃力で前線に立つ二人からの攻撃。どちらが当たっても無傷で入らない。

「見事だな……。だが！」

テトの眼が見開かれ、前後にミッド式のシールドが展開される。と同時にその両面にそれぞれの攻撃が着弾。

うねる剣閃は渦を巻いてシールドを削り、迫る鉄球はシールドと火花を散らして押し込まれる。

「うぉおおおおっ……！！」

だがテトはリンカーコアから更に魔力を練り上げ、自身の身体に漆黒の鎧の様に身に纏う。

そして――

「はぁああぜぇえろぉおおおおお！！」

身に纏った魔力は衝撃波となってテトを中心に解き放たれる。

『うぁあああああ！？』

解き放たれた衝撃波はシグナムとヴィータの攻撃を跳ね除けただけでなく、テトを拘束していたバインドまでも砕け散り、床と天井を諸共吹き飛ばしてしまう。

三階分の仕切りが無くなったこの空間は非常に広くなり、更に戦いやすい状況へと変化する。

「シャドウダイブ」

テトの姿が漆黒の光に包まれて暗闇に消える。

「っ！　――――そこか！」

テトの姿が消えた事に気づいたシグナムは即座にレヴァンティンの連結刃を戻し、片刃の長剣となったレヴァンティンを虚空に向かって振るう。

ガキィン！と甲高い金属音が響き、シグナムと剣を合わせて向かい合うテトの姿が現れる。

「よく……見切ったな」

「一度見れば……この程度の目晦ましは通じん！」

シャドウダイブは暗闇で自身の魔力光である漆黒の光を纏う事で瞬間的に姿を晦まし、同時に高速移動を使う事で瞬間移動したかのように見せる一種の幻覚系の移動魔法。また消費魔力量はかなり増えるが、短距離瞬間移動と掛け合わせる事でまるでその場から溶ける

様に移動することができる。

「流石……良い目をしている。最後にこれほど強い君たちと戦えるなんて嬉しいよ」

テトは剣を弾いて距離を取り、四つの魔力スフィアを形成する。

「ダークネス……フルッバースト！」

銃を持つ左手を振り払い、四つの魔力スフィアから漆黒の砲撃が四人に向けて放たれる。

「クラールヴィント、防いで！」

シャマルが手を掲げ、自分と他の三人の前にミントグリーンの光の壁を出現させて漆黒の砲撃を受け止める。

砲撃は長くは続かずほんの数秒で止まるが、その瞬間にテトは跳び出していた。

「え……？」

テトはシャマルに高速で接近。そして剣を振り上げ思いっきり振り下ろす。

「させっかよ！！」

がそこにヴィータがグラーフアイゼンを振るって割り込み、テトは仕方なく剣の軌道を変えてヴィータのグラーフアイゼンと相打つ。

しかし前と違って足元に踏ん張りが効かないため、テトはタメージは無いものの再び部屋の中心部分へ弾き飛ばされる。

「レヴァンティン！」

《Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ！》

「っ！？」

テトが顔を上げた先で、レヴァンティンの柄に鞘を当て、弓形態に変形させてこちらに向かって構えているシグナムの姿があった。

しかしテトは焦る事はせず、逆に口元を吊り上げて呟いた。

「決戦技か。なら、こちらも相応の技で出迎えよう！」

銃をシグナムに向けて構え、カートリッジを二発排出し、テトの足元に漆黒のミッド式魔方陣が展開する。

キーン！と耳鳴りの様な音を響かせながら銃口に漆黒の魔力が集束し、更に圧縮されていく。

テトと向かい合うシグナムも、弓形態となったレヴァンティンからカートリッジを二発同時に排出する。

鋼鉄の矢を持ち、薄紫色の弦を引き絞る。足元に展開するベルカ式魔方陣から紅蓮の炎が後方へと流れるように吹き出し、シグナムの引き絞る矢に渦を巻く。

「駆けよ、隼！」

「撃ち抜け、閃光！」

シグナムの矢に薄紫色の魔力光が集束し、テトの銃口にも魔力の渦ができる。

《Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ！》

「シューティングブレイカー！！」

シグナムの手から薄紫色の魔力光を宿した矢が紅蓮の炎の二重螺旋を描きながら飛来し、テトの銃口からは圧縮された一筋の漆黒の砲

撃が放たれ、シグナムの矢と正面から衝突した。

真正面から寸分違わず衝突した二つの砲撃と炎の矢は、互いに引かず一進一退の鬩ぎ合いを見せる。

「ぐっ――ぅおおお！！」

テトは銃に残った最後のカートリッジを使い、砲撃を強化。更に魔力を流し込んでシグナムの炎の矢と相殺爆発させる。

凄まじい爆発がこの空間を覆いつくし、爆発の黒煙が辺り一帯を包み込む。

「ぐっ！？　しまったっ」

突如胸に違和感を覚えたテトは、反射的に自分の胸から生えた腕を掴もうとする。

が――

「させんっ！」

「がぁっ」

ライトペリウィンクルの棘がテトの四肢を貫くようにその場に縫い付けて動きを封じ込める。

そして、胸から突き出した手が開き、その掌から漆黒の輝きを放つリンカーコアを押し出すように突き出す。

「シグナム！」

シャマルが合図を出した、次の瞬間。

シグナムが黒煙から飛び出し、テトの頭上を取る。

「紫電……！」

片刃の長剣に戻ったレヴァンティンがカートリッジを一発吐き出し、その刀身に紅蓮の炎が包み込む。

それを思いっきり振りかぶり、テト目掛けて落下。

「一閃！！」

一切のブレも無く、レヴァンティンでテトを一刀両断。

紅蓮の軌跡が尾を引き、一瞬の静寂の後。

「……ありがとう」

パーン！とテトのリンカーコアが弾け、漆黒の粒子を辺りに飛び散らせながら消えていった。

それを見届けて、シグナム達は構えを解き、既に動かなくなったテトを見詰める。

「はぁ……はぁ……終わったな」

「ええ。もう……動く事はないわ」

人が使い魔である事は前例がなく、どんな現象が起こっていたのかはわからないが。使い魔にとって魔力は命そのものであり、その魔力の供給が立たれれば死あるのみ。

それは人のみで使い魔であるテトも例外ではない。

「アイツの父親……強かったな」

「ああ。死ぬ覚悟と……己の信念を貫く意志。それが、今の此奴の力の源なのだろう」

死ぬ覚悟には息子と娘を助ける事ができるだけの力がある者達ならばという思いがあり、信念を貫こうとする意志には戦士としての矜持と意地。そして使い魔としではなく、一人の人間、テト・スフィニールとして最後の戦いをしたかったという願い。

ザフィーラが鋼の軛を解除すると同時に、シグナムがテトを抱きとめる。

「エイミィ」

『うん。その人はこっちで回収するから、もう少しそのままで』

「わかった」

今の今までヴォルケンリッターの四人と互角の激戦を繰り広げた彼に相応しい最後を送るために、テトの亡骸はアースラに送られた。

「……行くぞ」

「おう」

「ええ」

「ああ」

シグナム達はテトの生き様を脳裏に焼き付け、友を助けに自分たち

も最上階を目指して飛んで行った。

☆　★　☆　★　☆　★

シグナム達がテトとの戦闘に決着がついた頃。

自らの母と再会したアル達は、地下と負けず劣らずの激戦を繰り広げていたのだが――

「アル……」

「母……さん……」

ルルは地面にうつ伏せて自身を見上げるアルに、寂しそうな微笑みを向けて言う。

「よく……頑張りました。これが……あなたが“得たモノ”なのね」

それは別れの言葉。

もう二度と交わす事の出来ない親子の会話。

「母さん！」

アルが叫ぶ。

しかし、ルルは先ほど寂しそうな微笑みとは違い。とても嬉しそうに、けれど悲しそうな笑みを浮かべ――

「お母さん！！」

白い光がアルを包み込んだ。

第十八話　蘇る星王

「この半年で得たモノを……私に見せてください」

「見せるよ。オレがこの旅で得た事、全部！」

そう言って始まった白と黒の閃光の応酬。

「輝きよ、撃ち抜け！　シューティングブラスター・マルチレイド！」

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ！》

白い砲撃が文字通り雨の様にアルに襲いかかる。だがアルも高速機動魔法を発動して黒い軌跡を描いて飛び回って次々に飛んでくる砲撃を避ける。

アルが回避した砲撃は床や壁に衝突して爆発し、この階だけではなく上下の階や柱まで次々に破壊していく。そんな中を縦横無尽に飛び回るアルは、反撃のチャンスを狙ってカートリッジを二発排出する。

「アサルトバスター！！」

ルルの砲撃が止んだ瞬間を狙って、三連射の黒い砲撃を横にスライドしながら撃つ。

しかしルルは杖を前に突き出して白いミッド式のシールドを展開し、連続で放たれた砲撃を一発一発、順々に弾き飛ばす。そして弾き飛ばされた砲撃はルルの放った砲撃と同様に部屋の壁や天井を破壊する。

そんな様子を見守るなのは、フェイト、はやて、クロノの四人のアースラチーム。

「なんて戦いだ……。なのはやフェイトの比じゃないぞ」

クロノが傍で同じくアルとルルの戦いを見守っている。この二人は出会った頃に、海鳴市の沖合二キロに渡って設置したシュミレーターの建造物のレイアウトを木端微塵に吹き飛ばすほどの大規模戦闘を繰り広げた事がある。

だが今目の前で繰り広げられている白と黒の光の応酬はあの時の比ではなかった。

方やなのはに負けず劣らずの圧倒的な魔力量による雨の様な砲撃の嵐。方やフェイトと同等以上の高速機動による回避と斬撃で応戦する演武。

「おおおおおお！！」

「星よ、集い輝け！　アストラルブレイザー！」

アルはウルフの刀身に魔力を発生させ、ルルの放った殆ど溜め無しの白い砲撃を受ける。だが溜め無しの砲撃は長くは続かず、僅かにアルを後退させただけで斬り払われる。

どちらも一歩も引かず譲らずの攻防を魅せる母のルルと息子のアル。本来戦う必要のない二人が命と誇りを賭けて戦っている。

「すごい……」

誰からともなく呟かれた一言。

「凄い……ほんとにすごい戦いなのに……。なのに……なんでこんなに悲しいんだろ」

フェイトが胸に手を当てて呟く。

かつて母と分かり合えぬまま死別してしまった彼女だからこそ、母と子で戦い合うその辛さ、その苦しみ、その痛みがまるで自分の事の様に感じるのだろう。

ルルは使い魔としての抗えぬ宿命で殺したくもない愛する息子を殺そうと戦い。アルもまたそんな苦悩に苦しむ母を救おうと殺すつも

りで戦う。

フェイトと状況と理由は違えど、確かに今、目の前で激戦を繰り広げる二人は互いに愛し合っていた家族であり、唯一無二の肉親だ。なのにお互いに殺し合っている。憎しみ合っている訳でもないのに。

「こんな状況でなければ、誰もが絶賛する模擬戦になった筈だが……」

クロノも拳を作って握りしめる。

手伝いたい。クロノもそう思っているだろう。だがアルがそれを許すかどうか、なのはなら分からないがおそらくクロノやフェイトだと拒絶されてアルの方から攻撃が飛んでくるかもしれない。

「……間違ってるよ」

「なのはちゃん？」

はやてはなのはの顔を覗き込むが、レイジングハート握りしめて俯くなのはの表情はうかがえない。

だが、そこには確かに強い感情を感じられる。

「……！」

なのはは弾かれるように顔を上げ、レイジングハートを構えた。

「光あれ！　スターバレット！」

《Ｓｈａｄｏｗ　Ｂｌａｄｅ！》

「レイズバレット！」

白い光弾の雨の中を黒い閃光が駆け、黒い光弾が飛ぶ。

そんな白と黒の交わり弾ける世界に、桜色の閃光が乱入する。

『ッ！』

アルとルルはとっさに身を引いて突如放たれた桜色の砲撃を回避する。

揃って桜色の砲撃が撃ち込まれた方向に目を向ける。するとそこにはバスターモードのレイジングハートをこちらに向けて構えているなのはと、その様子に唖然としているフェイトたちの姿があった。

「お前……！」

アルの顔に怒りが満ちていく。

ルルとの戦いを邪魔されただけではなく、次に彼女が何を言うのか直感的に察知したのだ。

「やっぱりこんなの間違ってるよ」

「間違ってる、だと……」

アルはなのはの予想通りの一言に激怒する。

「母さんはあの女に使い魔にされたんだ！　どうあっても助けるなんて出来やしない！　なら、殺して救うしか方法はないんだ！　それが間違ってるっていうのか！」

「確かにそれしか方法はないのかもしれない……。でも、それでも――」

「母さんは死ぬことを望んでる！　あんな女の操り人形に成り下がるぐらいなら死んだほうがずっとマシだ！」

「だからどうしてお母さんを殺す事ばっかり考えてるの！」

此処でアルはなのはの言葉に反論するタイミングを失って黙ってしまう。

「確かにアル君のお母さんはもう助けられないのかもしれない。でも、親子で殺しあうなんて間違ってる！」

「なら……」

なのはの言葉が正しいのはアルにもわかっている。だからこそ実の母と戦う事がこんなにも苦しく辛い。

「なら、どうしろっていうんだ！　代わりにお前が戦うとでもいうのか！？」

アルが声を張り上げる。

「誰もアル君の代わりなんてできないよ！　アル君のお母さんを救うのはアル君にしかできない事だよ。でも――」

なのははレイジングハート下げてアルに向けて叫ぶ。

「独りで戦うなんて間違ってるよ！」

「……ッ！」

アルが息を呑む。

独りで戦う。それはずっと独りで戦ってきたアルにとって最早当たり前となってしまった状況。だが、ここに来た時点で彼はもう独りではなかった。

「私たちも戦うよ。だって……仲間だもん。アル君は、もう私たちの大切な仲間なんだから」

アルはなのはを、その周りのフェイト、はやて、クロノを順々に視線を移す。アルと目が合うと、彼女たちはなのはの言葉を肯定するかのように強く、はっきりと頷く。

自分に対して常に全力でぶつかってきたなのは。そしてそのなのはを慕う仲間たちであるフェイト、はやて、クロノ。そして今この場にはいない自身の仲間を任せたシグナム達。

「一人の戦いは……ここで終わりにしよう。これからは……」

一人と独りは違う。

独りはどれだけ周りに人が集まってもずっと孤独だ。でも一人は、一人また一人と集まれば二人にも三人にもなれる。

「私たちも一緒に戦うから」

例え信頼できる相手はいなくとも、信用できる相手が傍にいれば心が楽になる。独りでは耐えられない苦しみにもいつか耐えられるようになる。

それをアルに教えたい。長い間独りで戦ってきて忘れてしまった信頼するという事。それがアルを助けてから、なのはが次に教えてあげたい事だった。

「ウチの子へのお説教は終わりましたか？」

「……はい」

ずっと見ているだけに務めてくれていたルルがなのはに話し掛ける。

「なら……やるべきことは一つ」

ルルが杖を構える。それに合わせてなのは達も自分のデバイスを構える。

「……ウルフ、残りは？」

《……突入時が百二十パーセントと仮定して……この戦闘で既に八

十パーセント以上を浪費した》

「残りは半分以下か」

此処に突入する前に数時間の間に魔力を溜めていたが、それももう残りは少し。

これ以上の魔力消費は望ましくない。だがルルを倒さなければ、救わなければこの先に進む事すら叶わない。

だから――

「母さんを救う為に……力を貸してくれ、なのは」

それはこれまでたったの一度しか口にしていなかった言葉。自分を助けてくれた少女の名前。

たった一言、名前を読んだだけだったが、それでルルとなのはには確かに伝わったのだろう。なのはは嬉しそうに頬を僅かに桜色に染め、ルルも優しい笑みを一瞬浮かべ、二人ともすぐに真剣な表情に戻った。

「うん！　勿論。アル君、一緒に戦おう！」

「私も、手伝う」

「わたしもや」

「此処で戦力を消耗するべきじゃないんだが……早々に終わらせて上に行くためにも、僕も手伝わせてもらうよ」

なのはの後に続くようにフェイト、はやて、クロノが次々にデバイスを構える。そしてアルもウルフを構え、カートリッジを一発ロードする。

「全体の指揮は僕がやる！　はやて！」

「わかってるよー！　出し惜しみはせぇへんよ！」

「なのはとフェイトで左右から弾幕を張れ！　アルは正面から迎え撃て、僕がサポートする！」

はやては夜天の書を復元した本型ストレージデバイスを左手に持って広げ、金色の剣十字の杖――シュベルトクロイツを右手に持って詠唱を始める。

クロノの指示でアルがルルの正面に飛び出し、なのはとフェイトは左右からルルに回り込む。

「三面で抑え込んで強力な魔法の一撃……。なるほど、シンプルだけど一番有効な方法ね。アルの癖を的確に見抜いてる」

ルルは迫るアルとなのは達を身ながらも、クロノの即席のフォーメーションの組み立てに関心を覚えていた。

アルは昔から自我が強く、周りを置いて突っ走る傾向があり軽傷をよく負っていたが、それでいて相手を上回る動きを見せる事が時折あった。それを可能としているのが高い状況分析能力と最も有効な行動選択ができる判断力。そしてあの驚異的な動体視力だ。

それはどれだけ魔力量が多くても、どれだけスピードが速くても、どれだけ空間把握能力が優れていても、刻一刻と状況が移り変わる戦闘という状況下では圧倒的な優劣が生まれる。

しかし誰もアルの動きに着いて行けず、アルは一人の戦い方を確立させるしかなく、オールレンジとしてどんな距離にでも対応できる様になったが、それ故にアルと共に戦うにはアルと同等以上の状況分析力が必要となってくる。

だがそこは流石はクロノ。執務官として、そして器用貧乏の徒名（あだな）は伊達ではない。

「けれど――――舞え、光よ！　シューティングレイ！」

ルルは杖を振るっていくつもの白い軌跡を描いて自由自在に飛ぶ誘導型射撃魔法を発動させる。

「チィ……！」

アルはそれを見て舌打ちし、攻撃から回避に移った。

「あの子の癖や弱点は、私がよく知っている」

アルは誘導系の射撃魔法は使うのも使われるのも苦手だ。いくら状況判断力が秀でていても自分と同等以上の実力を持つ者にはすぐに対処されてしまう為、その意思が直接反映される誘導系は彼が苦手としている分野なのだ。

息子の苦手なモノは全て把握している。その上で戦っている。

母親という大きなアドバンテージはそう簡単には覆らない。

「星よ、弾けよ！　スタースプラッシュ！」

ルルは左手に持つ杖を頭上に掲げて無数の小さな白い魔力光の光球を杖の先端一点に集中させ、右から左へとゆっくりとした動作で振り払うと共に白い魔力弾の礫を驟雨の様に解き放ち、アル達に襲いかかる。

今まで一度も似た事のない魔法だ。だが――

「シールドじゃ弾き切れない！　バリアで受け止めろ！」

この魔法の特徴を誰よりも把握しているアルがいる。そのアルの指示通りに、なのは達もカートリッジを一発消費して強化したバリアでルルのスタースプラッシュを受け止める。

シールド系の防御魔法は範囲こそ狭いがその分強固な防御を誇るのが特徴で、バリア系の防御魔法は防御範囲はかなり広くがその分防御力そのものはシール系の防御魔法よりは低くなる。だがそこをカートリッジで補強するとなれば話は別となる。シールド系は正面の一面からの攻撃には強いが、背後や左右からの攻撃には対処できない。

スタースプラッシュはその魔法名の通り、夜空に瞬く星の如く“拡散”する。つまりシールドの防御面積だけでは足りないのだ。更に魔力をチャージした魔力量と時間に比例して段数が倍増するという特徴があり、物体――もしくはエネルギー体に接触すると破裂するという特性まで持っている凶悪な魔法だ。

だがカートリッジで強化したバリアならば前面をだけでなく全面を守る事ができる。それにアルもそうだが、フェイトは防御魔法が得意ではない。それをちゃんとアルは理解し、その上でバリアの展開を指示したのだ。

「ぅう……」

「ぐっ……！」

詠唱していて無防備なはやてを守る為、なのはとクロノが縦一列となってはやての前でバリアを展開し、はやてに直撃しないように守る。だがバリアに接触した白い魔力弾の礫たちが絶え間なく小さな爆発を起こして確実にバリアを削っていく。

しかしそれほど長く続く事はなく、炸裂する白い礫の驟雨は唐突に止み、アル達は再びその場から駆けだす。

スタースプラッシュは弾幕こそ厚く避けにくい魔法ではあるが、逆にチャージ時間が短ければ短いほど礫の量も威力も必然的に少なく弱くなる。つまりルルがスタースプラッシュを使った瞬間から、アルはこうなる事を知っており、なおかつこのメンバーで最も有効な回避の手段を導き出したのである。

「貴女が彼の癖を知っているぐらい知ってる。だけど、それ以前にこちらには彼がいる。お互いの手の内が知れているのなら、数で勝るこちらが有利だ」

「ふふ、見た目に反して食えない子」

ルルが母親であるというアドバンテージがあるのなら、アルには息子というアドバンテージがある。それをクロノは逆手に取り、ルルの知らない戦力と数で勝るという点で勝負に出ていた。

圧倒的な魔力量と物量によるゴリ押し。だがそれができるからこそルルは強い。魔導師同士においてこれほど有利な条件、そして理不尽な相手はいない。

だがそれを覆せるだけの戦力は今此処に揃っている。有無を言わせぬなのはの砲撃。素早く翻弄するフェイトのスピード。ルルと同じく物量にモノを言わせるはやての魔法。相手の手の内を知っているアルの判断力。そしてそれを纏め上げるクロノの指揮。

これだけ揃っていれば負ける事はあるまい。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「シュート！」

なのはの周りにいくつかの桜色の魔力スフィアが生成され、そこから桜色の魔力弾が勢いよく放たれた。

《Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ》

「ファイヤ！」

更にフェイトもなのはに合わせて金色の魔力の短槍を、環状魔方陣と共にいくつも浮かべ、凄まじい速度で撃ち放つ。

それを見てルルは天井に向かって上昇していく。それを追って桜色の魔力弾が滑らかな曲線を描いて追尾し、金色の魔力槍が一旦停止してフェイトの「ターン」の掛け声で今度は垂直に撃ち上がる。

ルルはそれを一瞥して小さく微笑を浮かべると、天井に右手を添え

る。

「砕け散り、舞い飛べ。スターダスト……」

ルルの呪文と共に天井にいくつもの亀裂が入り、僅かに天井が落ちる。

「フォール！」

途端。天井が砕け、その瓦礫がルルを中心にグルグルと円を描いて飛び回り、真下から迫ってくる桜色と金色の射撃魔法を全て砕けながら受け切り、今度はアル達に向けて降り注ぐ。

だが――

「まとめて消したる！　ディアボリック――」

同時にはやての詠唱が完了し、はやての眼前に白いベルカ式の魔方陣が展開され――

「――エミッション！」

黒い波動が爆発するかの勢いで部屋全体に展開していき、降り注ぐ瓦礫を飲み込んで木端微塵に破壊する。

アル達ははやての魔法が発動すると共に直ぐに部屋の端の方まで飛んでいき、ディアボリックエミッションの範囲からギリギリ逃れる事が出来た。

「今だ、フェイト！　なのは！」

そして息つく間もなく、クロノの掛け声でなのは達の反撃が開始される。

「サンダー……！」

「っ！？」

いつの何かルルの背後――砕けた天井のその向こう側――に回り込んだフェイトが金色のミッド式魔方陣と共に呪文を唱えていた。

「ディバイィィン……」

フェイトの隣ではなのはが砲撃をチャージしている。

「レイジ！！」

バルディッシュを魔方陣に叩き付け、魔力変換された金色の雷がルルに降りかかる。

「バスター！！」

更になのはの砲撃がフェイトの金色の雷を纏ってルルに襲いかかる。

「――っ！？」

逃げようとしたルルの体に、何本もの水色のバインドが巻き付いてルルを拘束する。

クロノのストラグルバインドだ。対象の動きを拘束しつつ、対象が自己にかけている強化魔法を強制解除する捕獲魔法。これでルルがいかにバインドを引きちぎろうとしても、解析されない限り強制解除されることはない。

このタイミングで使われては、なのはとフェイトのコンビネーション砲撃を避ける事が出来ない。

ならば――

「星よ、我に加護と庇護を。フォースフィールド！」

ルルの周りに四つのバレーボールほどの大きさの白い光球が出現し、それぞれがバリアを発生させて多重防御膜を張り、フェイトの広域攻撃の雷を纏ったなのはの砲撃を受け止め、それでいて耐える。

「惜しかった」

フェイトの魔法の中でも光威力を誇る広域攻撃魔法を受け止めながらも笑みを受けべるだけの余裕を持つルル。

フォースフィールドは星の民が使う防御魔法の中でも最高の強固さを誇る魔法だ。そこにルルの大量の魔力を込められればちょっとやそっとでは突破できないほどの防御力を持つだろう。

だが――

「どんなに強固でも、弱点はある！」

ルルの背後でアルがウルフを構え、魔力を収束していた。

それを背中越しに見たルルの表情が驚きに染まる。

「撃ち抜け！」

《Ｓｔｒｉｋｅ　Ｂｕｌｌｅｔ！》

たった一発だけ放たれた黒い魔力弾は、鋭く加速してルルを覆っているフィールドのど真ん中を捉えた。

一層、また一層と食い破っていく黒い魔力弾。その周りからフェイトの放つ雷が更に魔力弾の威力を増幅させ、三層目を突破する。

ストライクバレットは誘導性能を捨てた単発型の射撃魔法で、速度と威力を底上げした強力な貫通力を持っている。それがフォースフィールドの唯一の弱所となる、四つある魔力球の中心点を寸分の狂いなく撃ち抜く事で、一気に二層も突破できたのである。

さらに勢いが落ちた所にフェイトの雷が加わる事によって威力が倍増し、続けて三層を突破したのだ。

「くっ……！」

ルルはフィールドが破られると悟って砕かれた瞬間、無理やりバインドを引きちぎって、砲撃を避けながら階下に向かって下降する。

だがそれを見逃すアルではない。

「はあああ！！」

ウルフを振り被ってルルの後を追いかけ、思いっきり振り下ろした。

《Ｉｍｐａｃｔ！》

「バースト！」

ガキィン！とウルフの刀身とルルの杖が組み合い、お互いの魔力が反発しあって白と黒の眩い閃光が走り、凄まじい衝撃波が轟音と共に発生。

『きゃあああ！？』

あまりの衝撃に比較的に近くにいたクロノとはやて、そしてフェイトとなのはまで魔力爆発に巻き込まれる。

轟音が止んで閃光が落ち着いてくると、なのはは階下に広がった光景に唖然とする。

「ぐ……ぅ……。はぁ……はぁ……」

そこには、床に伏せってルルを見上げるアルの姿があった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

対してルルも完全に無傷という訳にはいかず、杖を持っていた筈の左腕には袖の内から血が流れ、とてもデバイスが握れる状態ではなかった。今は右手で杖を持って左腕を庇うように添えている。

お互いに肩で息をしている。最早お互いにこれ以上の戦闘継続は厳しくなっているのだ。

「アル……」

「母……さん……」

ルルは地面にうつ伏せて自身を見上げるアルに、寂しそうな、けれど満足した様な微笑みを向けて言う。

「よく……頑張りました。これが……あなたの“得たモノ”なのね」

「母さん……」

アルが悲しそうに顔を歪める。

決着はついた。もうこれで最後なのだと理解しているからだ。

けれども頭ではわかっていても、やはり心では認めきれない。しかしアルは受け止めなければならない。それが父と母に送れるせめてもの手向けだから。

「この半年で、あなたは凄く強くなった。でも、それも……彼女に出会えたからこその強さを見れて、感じる事が出来て……」

ルルの体から白く輝くリンカーコアが抜け出てくる。

だがその輝きは弱い。まるでもう限界だと言っているかのように。

「母さ――」

「最後に……可愛い息子と全力で戦えて――――」

ルルは先ほど寂しそうな微笑みとは違い。とても嬉しそうな笑みを浮かべ――

「楽しかった」

一瞬の瞬きよりも短く。ルルのリンカーコアが白い光を放ち、ガラスが砕ける様な音を響かせて砕け散った。

「お母さん！！」

砕け散ったルルのリンカーコアの欠片がアルの体を包み込む。

暖かいようで冷たい光は、名残惜しむ間もなく、完全に消えてなくなった。

ルルの体は糸が切れた人形のように崩れ落ちる。

「あ……」

しかし、ルルの体が床に叩き付けられることはなかった。その体をなのはが、フェイトが、はやてが支えてくれたからだ。

アルはゆっくりと起き上がると、三人からルルの体を受け取って優しく床に横たえる。

「……」

「……」

アルは母親の亡骸をじっと見つめて跪いたまま。誰もが今は口を開くことを躊躇って、重苦しい空気が漂っている。

たった今、二度目の死をアルの母親が迎えたのだ。口を開きたくて

も開けない。励ましたいがなんて声をかけたらいいのかわからない。叱咤したくても今はやめておきたい。そんな気持ちだった。

『ちょっといい？』

そこへエイミィからの通信が入る。

「どうした、エイミィ」

『つい今しがた、地下で戦ってたシグナム達の戦闘が終わったよ』

「……そうか」

『それでね……言いにくいんだけど』

「地下には父さんがいたんだろ」

エイミィの台詞をアルが奪う。だがエイミィはそれを責める事はせず、ただ弱々しく「うん……」と頷くだけ。

自分たちの前に母が現れた時から、アルはなんとなく気づいていた。もしかしたら、地下には父さんが言ってるんじゃないのかと。

その間は当たっていた。そして、今さっきシグナム達の手で母と同じく永い眠りについたのだ。

『ルルさん……こっちであずかろうか？』

エイミィが父と同じようにアルに提案する。

『こんな所で晒しておくより、ちゃんと供養した方がいいよ』

「エイミィの言う通りだ。彼女もこんな所を墓標にしたくないだろう。全て終わるまでアースラで保管しないか？」

クロノはなるべく優しい口調でアルに話し掛ける。

アルはしばらく無言だったが、ゆっくりと立ち上がり、まっすぐクロノの目を見て言った。

「頼む」

「ああ。エイミィ」

『ＯＫ。任せて』

ほどなく、ルルの周りに白いミッド式魔方陣が広がり、ルルの体がアースラに転送される。

それを見届けた後、アルはキッとキツイ目つきで上を見上げた。

「行くぞ」

その声に、なのは達はただ頷いて答えた。

ルルとの戦闘で数階近く吹き飛んだ階層を一気に抜けて最上部へ急ぐ。

☆★☆★☆★

「ふふふ、ははははは」

星の神殿の最上部。今まさに星王の王位継承魔法が発動している場所。その場に抑えきれていない笑い声が響いていた。

声の主はリリス・ルキフェル。この王位継承魔法を発動させ、新たな星王となって世界を支配しようと考えている人物だ。

「……」

そしてこの部屋の中心に力無く吊るし上げられた少女こそが、正しき星王となるべき王女であるイリア・スフィニール。

既に儀式魔法に抗う気力を失っている状態で宙に縫い付けられている。

この状態になってからもう数時間が経過している。そろそろ儀式が完全に発動する頃だ。

「もうすぐですよ、王女様」

リリスがゆっくりとイリアに歩み寄る。

「もうすぐ私が星王になる。そして世界を支配できる力を手に入れる事ができる」

上機嫌に話しだすリリスだが、イリアは何も答えずただただ俯いて黙るばかり。

「そうなれば一体世界はどうなるんでしょうね？　混沌？　暴虐の嵐？　それとも魔王を倒す勇者でも現れるんでしょうか？」

クスクスと笑みを漏らして楽しそうに呟くリリス。その眼は既に力に酔っている。目の前にあり、今まさに流れ込んでくる圧倒的な力の存在感に。その様は、狂喜と狂気が混じったかのような禍々しいモノへと変貌していた。

しかしそれでも自分という根源を失わない辺り、彼女の根底にあるモノが闇であるというこれ以上に無い証拠だ。闇に魅入られし者は理性も人格も失って闇に酔いしれる。

だが彼女は違う。魔道に堕ちながら、しれでもそんな自分をリリス・ルキフェルとして受け入れ、更にその先へと進もうとしている。

正真正銘の魔王として。

「リリス・ルキフェールッ！！」

突然その場に響き渡った怒声。

その声の方に顔を向ければ、そこには自分と同じ銀髪をした少年とほんの少し前に落とした管理局の少女たちが立っていた。

「お……兄、ちゃ……」

「ああ、漸く来たの？　あまりにも遅かったから儀式が終わっちゃうかと思ったわ。王女の兄上様」

「黙れ！　イリアを……イリアを返してもらうぞ！」

《Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｏｖｅ》

アルがリリスの下に駆ける。

しかし――

「がっ……！」

右手を翳すだけでアルを吹き飛ばした。

掌から魔力を放出し、その衝撃波だけでアルを吹き飛ばしたのだ。

「もう暫く大人しくしていないさい」

リリスは吹き飛ばされて床に膝をつきながらこちらを睨みつけるアルを見て言う。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。リリス・ルキフェル、

貴女はもう逃げられない。武装を解除して、大人しく投降しろ」

「まさか、そんな事をすると？」

「思ってはいない。だが、これが仕事なんだ」

「そう、そうだったわね。あ、そういえば気に入っていただけだ？」

思い出したように話し始めたリリス。

「この神殿で最初の歓迎……。一応、もう使い道のない怪物達をけしかけてみたんだけど……。……その様子だと不評みたいね」

なのは達の反応を伺いながら尋ねるリリスだったが、その答えは聞くまでもなく彼女達の顔に「否」と書いてあった。

「当たり前だ。あんな、あんな酷い事を、よくも平然と！」

フェイトがまるで自分の玩具を自慢するように、実験に使われて怪物にされてしまった星の民の事を言うリリスを激しく睨みながら言うと、リリスは一層可笑しそうに笑う。

「あは！　ははははははは！」

「何がおかしい！！」

思わず大声で怒鳴るフェイト。

しかしリリスはそんなモノに怯える様な奴ではない。

「はぁ～、可笑しかった。だって、作り物の命にそんな情なんか掛ける訳がないじゃない」

「作り物……やて？」

リリスの言葉に反応したはやてが繰り返す。

「そう、作り物。此処に居た、アル。貴女の両親以外は……」

にやり、と頬を釣り上げて、リリスは言った。

「全員私が作り出したクローンよ」

その言葉にアルとイリアでさえ言葉を失った。

しかしリリスはそんな彼らに構うことなく話を続ける。

「貴方たちが片づけたあの怪物は……私がある技術を使って産み出した替えの効く実験道具」

「ある技術、だと。……まさか！」

クロノの脳裏につい最近の出来事がよみがえる。

それは特別なクローンを生み出す技術。それはある人物が大切なモノを取り戻そうとして立ち上げたプロジェクト。けれど本当に取り戻したいモノを取り戻す事はできない夢の結晶。

「ま、まさか……」

フェイトもその技術を思いついてしまった。

そう、それは――

「記憶転写型特殊クローン技術計画。プロジェクト『F．A．T．E』。私は一時期その技術開発にあの変態と狂人と一緒に携わってたの」

「ど、どうして……」

フェイトが震える声で呟いた。

まさかこんな所でプロジェクトFという技術を、その言葉を耳にするとは思わなかったからだ。

「記憶を持っていてくれた方が便利だから。洗脳してしまえば色々言うこと聞いてくれるし」

死体処理とかね、と付け加えるリリス。

「適当にいろんな薬が溶けた溶液に投げ込ん放っておいたの。もう用済みになったから」

「そんな……それだけの理由で……あんなにたくさんの人たちを犠牲にしたんですか!?」

なのはが今にも砲撃を撃ちそうな勢いで叫んだ。

「そうよ。むしろそれ以上の理由が必要かしら」

僅かに微笑を浮かべて言い切ったリリス。

彼女には何を言っても無駄だ。全員がそう悟った。

「お前が……」

リリスの含み笑いが木霊している中、アルの声が響いた。

「お前が仲間をどう言おうと……どうでもいい」

ウルフを杖代わりにして立ち上がるアル。

「あら？　どうでもいいの？　あんなに怒り狂ってたのに」

「何をどう言おうと、オレがやるべき事は変わらない」

しっかりと両足で立ち上がると、ギリッと鋭い視線をリリスに投げつける。

此処まで来るのに沢山のモノを背負ってきた。時にはその重みに押し潰されそうにもなった。だがその度に思い出したのは妹のイリアの笑顔。あの笑顔を取り戻す為ならば、死んでいった母に応える為に、後の事を託してくれた父の想いに報いる為にも。

今まで自分が犠牲にしてきた沢山の魔導師の命を無駄にしない為に――

「イリアを助けて、お前を倒す。ただ――それだけだ！」

最愛の妹イリアを助け、怨敵リリスを倒す。絶対に揺るがない意志が、アルの蒼い瞳には宿っていた。

それが、それこそが、この半年の旅の中でアルを支え、そして強くしてきた覚悟。たった一つ残った、兄としての誇りなのだ。

「そう……私も本気でやらないと――――――って言いたい所だけど」

ニタァっと不気味な笑みを浮かべるリリス。

「残念だったわね。もう時間切れ(タイムアウト)よ」

その言葉と共に、イリアの悲鳴が神殿に響き渡った。

「アアアアアアアアア！！」

「イリア！」

イリアの胸元に露出していた純白のリンカーコアからおびただしい程の光が溢れ、その光が一点に集中して正面にあった星の雫に注がれる。

全てはあと僅かだった時間稼ぎの為の行動だったのだ。

「我は新たなる星王の証を持つ者。我に宿り、我に星王の力を！」

リリスの体が浮いて、その胸元に星の雫が虹色の輝きと共に飛び込む。

「ぐ、あああああ……！！」

メキメキと音を上げてリリスの体にめり込んでいく星の雫。融合しているのだ。

掌に収まる程とはいえ、大きな宝石が身体の中に入り込んでくるのはかなりの苦痛になっているはずだ。

だがリリスは表情を苦痛に歪ませていれど、融合を止める事はしない。

「あああああああ！！」

そして銀色の閃光と共にリリスの悲鳴が轟き、再び静寂が訪れる。

不気味なほどの静寂。そして徐々に納まっていく銀色の光。

「ふ、ふはははは」

銀の光の中心から女の笑い声が響いてくる。

銀色の光に隠れてシルエットしか見えないリリスは、おもむろに右手を天に向けて掲げ――

「ハァッ！」

特大の銀色の砲撃を放ち、神殿の天井を丸々綺麗に消し飛ばしてしまった。

『……』

そのあまりの威力に言葉を失うなのは達。

なんて出鱈目な魔力。なんて出鱈目な威力。それが星王。これが星王の力。

「これこそが星王。これこそが最強。私こそが世界を総べる事ができる唯一の王！　ふはははは――」

消し飛んだ神殿の天井と衝撃に巻き込まれて吹き飛んだ壁からは、雲一つない満天の星空が広がり――

「はーっはははははは！！」

新たな星王を歓迎しているかのようだった。

第十九話　星王ＶＳアル＆管理局

アルはイリアを空中に縛りつけていたバインドが解け、落下し始めた直後に反応して受け止めに走る。

「イリア！」

力無く落ちてくるイリアを、アルは両腕を大きく広げて床を蹴って空中に飛び出し、イリアの体を抱き止めた。

「イリア」

床に降り立ったアルは、床に片膝をついてイリアの体を抱き起す。

なのは達も駆け寄ってその様子を見る。その身体は同い年の少女の平均的な体型と比べると若干痩せていて、肌の色は前よりも色白になっていた。

その様は綺麗だと言えば綺麗だが、アルの目には酷く憔悴しているように見えていた。

「イリア……」

優しく頬を撫でるアル。

「ん……」

するとイリアは少しだけ眉間に皺をよせ、ゆっくりと重い瞼を開く。

その様子になのは達は息を呑んで見守る。

やがて完全に瞼が開き、その吸い込まれそうな程透き通った瑠璃色の瞳がアルを捉える。

「お兄、ちゃん……」

嬉しそうに頬を綻ばせてアルを呼ぶイリアの姿に、一同はほっと胸を撫で下ろした。

「よかった……本当に、よかった……」

「お兄ちゃん、苦しいよぉ」

アルは押し上げてくる歓喜と涙を隠そうともせず、イリアを強く、ただただ強く抱きしめる。

イリアも苦しそうにしている様だが、兄との半年ぶりの触れ合いにイリア自身も涙を流しながらアルを抱き返している。

アルとイリアの長い銀髪が交わりあっていて、それがまるで銀色の繭に包まれているかの様で、二人の涙が星の光を反射して淡く輝き、完成された天使の絵を見ているの様な錯覚を覚えてしまうぐらい、とても絵になっている。

時折聞こえてくる二人の嗚咽に、なのは達も釣られて涙目になりながら二人を見守る。

「ずっと、夢見てた。目を開けたら……一番最初に見るのはお兄ちゃんなんだって」

まだ若干涙目でアルに抱きついたまま言ったイリアに、アルは僅かに体を離してイリアの目を見ながら言った。

「……半年も時間が掛かった。ごめんな」

申し訳なさそうに言うアルに、イリアは首を横に振る。

「お兄ちゃんはちゃんと約束を守ってくれたよ？　だからそんなこと言わないで……お兄ちゃんだって、イリアよりもずっと悲しい想いしてきたのに……」

「イリアの方が辛かっただろう。ずっと独りでこんな所に……」

「そんなことないよ。お兄ちゃんががんばってること、イリア……見てたから」

「そんな事あるさ。お兄ちゃんは……まだ自由があった。でも、イリアはそれすらなかった……。こんな所で……あんな女と……！」

「イリアは大丈夫だから泣かないでお兄ちゃん。それに、それを言ったらあの人の言いなりに――」

「いや、お兄ちゃんの事はいいんだ。お兄ちゃんが自分で望んでそうしたんだ。でもイリアは――」

『ストォーップ！！』

どちらがの方が辛かったかと言い合いの繰り返しがこのままだと延々と続きそうだと判断した、なのはとフェイトとはやてが大声を出して制止を掛ける。

「それじゃいつまで経っても終わらないよぉ！」

「二人共、無事に会えたんだから。それでいいと思うよ」

「それにや。まだ全部終わったわけじゃないよ」

なのは、フェイト、はやてがそれぞれの言葉で半ば言い争いになりかけていた二人を止める。

イリアは目をパチパチさせてなのは達を見、逆にアルはフェイト達を睨みつける。その中になのはが含まれないのは御愛嬌。

「あ、あの！」

イリアがアルに抱き抱えられたまま、なのは達に話し掛ける。

「イリア・スフィニールです。お兄ちゃんを助けてくれて、ありがとう。栗色のお姉ちゃん」

満面の笑みを浮かべてお礼を言ってきたイリアに、なのはも同じく笑顔を浮かべ、イリアの前に片膝を折ってそれに応えた。

「どういたしまして。私、なのは。高町なのは。よろしくね、イリアちゃん」

アルに抱かれたままなのはに笑みを浮かべるイリアと、杖を支えに片膝を床について笑顔を浮かべるなのは。

その身一つ後ろへ並ぶようにフェイトとはやてが、なのはと同じく片膝をつく。

「なのはの友達の、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

「同じく八神はやてです。会えて光栄や。星の王女様」

その様子はまるで、王女と王女に仕官する女騎士達の様にも見える。
敵の目の前だというのにも関わらず、此処だけが中世時代に時間が巻き戻ったかのようだ。

「でも、本当になのはちゃんにソックリやなぁ」

イリアをまじまじと見ていたはやてが感慨深くつ呟いた。

「そ、そうかな？」

はやての興味津々な視線に戸惑いながらアルに視線を送るイリアに、アルは少し眉間に皺を寄せ不満そうにしながらもコクリと頷いた。

身長、髪の長さ、髪の色、目の色、声と違う所は多々あれどイリアの顔立ちは本当になのはとソックリだった。何も知らない人に「二人は双子です」と言ってもあっさり信じそうなぐらいだ。

そんなどこか和やかな雰囲気もクロノの咳払い一つで霧散する。

「ゴホン。君たち、今どういう状況にいるのかちゃんと理解しているのか」

クロノはそう言うと掌を仰向けにして時空管理局のエンブレムをイリアに見せる。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。この三人も管理局員だ。イリア・スフィニールさん、ですね？」

「は、はい」

真剣な声色で話し掛けるクロノに、イリアは若干ビビりながらも受け応える。

「この事件の要救助者という事で、貴女を保護します。暫くはその魔方陣――星の器の中で大人しくしていて貰います。その中なら怪我をする事はないでしょうし」

「は、はい。わかりました」

クロノはアルに目配せし、アルは無言で頷くと、イリアを抱き上げて王家の紋章とミッドチルダの魔方陣が重なった陣へ向かい、その中央へ座らせる。

二〜三度イリアの頭を撫でるとアルは小さく微笑んで立ち上がり、背を向けて陣を出る。

するとアルは再びイリアの方へ振り返ってウルフの刀身に左手の親指を押し当てて軽く切り、血が流れ出るその左手を陣の淵に押し当てて血を流し込む。

「我、星王の影となる者。アルカイド・コンストレー・スフィニールの名において命ず。守護の器よ、王の命を脅かす物より王を護れ」

アルの呪文と共に、星の器の陣が黒い光と共に魔方陣と紋章を浮かび上がらせ、次の瞬間それは純白に打って変わってイリアをドーム状の光が包み込む。

「お別れの挨拶は終わったかしら」

全ての準備が整ったのを見計らってか、ずっと口を挟む事無く空から傍観していたリリスが声を発した。

一同が顔を上げれば、そこには金色の刺繍を施された、肩から腰にかけて降りる二枚に別れた真っ白なマント。胸元を大きく露出させ七色に輝く星の雫を強調させる白い装飾されたコルセット。前から後ろにかけて斜めに切り取られた白いスカート。両腕には白いロンググローブに包まれ、そして長い銀の髪を背に流し、鮮血に染まったかのような紅い瞳と王家の紋章が浮き出た額。

まさに覚醒した星王が、圧倒的な存在感と威圧感を持ってそこにいた。

「ああ。後はお前をぶっ倒して、地面に這い蹲らせるだけだ」

ふわりとアルの銀髪が黒い光を纏って不気味に浮かび上がる。それと共にアルの魔力が急激に上昇していく。因みに、アルの口調がかなり悪くなっているのはイリアを助けた事による感情の制御まで気を回す余裕が無くなっているからだ。

それを聞いたリリスは可笑しそうに笑う。

「あはははは！　貴方が私を？　以前の私でさえ、まともに戦えなかった癖に？」

「前みたいにはいきません！」

アルをあざ笑うリリスになのはが反論する。

「レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》

レイジングハートとは主の掛け声に応える様に一発のカートリッジを

消費する。

「フルドライブ！」

《Ｅｘｅｌｉｏｎ　Ｍｏｄｅ》

先ほどまでのバスターモードから一転、紅いコアを包み込むように金色の槍となったレイジングハート。杖の柄は更に伸びて長くなり、なのはの魔力値が増大する。

「バルディッシュ！」

《Ｙｅｓ，ｓｉｒ》

バルディッシュがリボルバーを回転させて二発カートリッジをロードする。

「ドライブ・イグニッション！」

戦斧だったバルディッシュは大剣の柄へと変形し、金色の半実体化した魔力刃を刀身として生成する。

「へぇ……少しはマシになったのかしら？　まぁどちらにせよ、頑

張ってもらわないと」

リリスが右手を翳すと、そこに本型インテリジェントデバイス「ヒレンジャク」が現れる。

「この力に慣れるまでの間はね！」

リリスの前にいくつも銀色のミッド式魔方陣の砲門が展開され、そのそれぞれに銀色の魔力光が集約されて掌大ほどの光球が生成され、銀色の光線が幾本も放たれた。

アル達はイリアを残し、その場から一斉に飛び上がる。

直後、銀色の砲撃がイリアの周りに落ちて連続して爆発する。しかし、光の壁に守られたイリアには爆発の熱も爆風も砕けた床の欠片も届く事はない。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「シュート！」

なのはがレイジングハートを振るい、桜色の魔力弾を十発近く撃ち放す。

《Ｓｔｉｎｇｅｒ　Ｓｎｉｐｅ》

「スナイプショット！」

更になのはに合わせてクロノが白い魔道の杖ストレージデバイスの「デュランダル」を振り、青い光線が蛇の様に蛇行しながらリリスを襲い、アクセルシューターがリリスを取り込む。

しかしリリスは動く事はなく、ただ左手を前へ突き出す。

「掌握（ブレイク）」

グッと左手で拳を作ったかと思うと――

「え？」

「なに！？」

なのはとクロノの魔法が前触れもなく砕け散ち、魔力が霧散する。

「これが……“星王の特権”か」

「星王の特権？」

アルの呟きに近くにいたフェイトがオウム返しする。

「星王はその特別な力で、星の民の血を引かない者の魔法を打ち消す事ができる。それが星王の特権と呼ばれてるんだ」

「そんな！　それじゃ、私たちの攻撃は効かないの！？」

「いや、違う」

アルとフェイトの話しを聞いていたクロノが割って入る。

「特権を行使する時、奴は左手を握っていた。これからわかる事は一つだ。相手の魔法を認識して尚且つ握りつぶしている。文字通りな」

つまり、星王の特権を行使する為には最低でも今発動している魔法を認知し、更に特定の行動（トリガー）を引かなければ相手の魔法を打ち消す事が出来ないのだ。

相手がどれほど強力な魔法を使ってこようと、“発動している魔法”を視認すればいつでも強制解除する事が出来るのだから。一対一の戦いほど効果を発揮する能力はない。いや、むしろ一対一まず負ける事はないだろう。

「それってつまり、認識できていない魔法は消せないって事？」

クロノの確認の意味を含んだ説明になのはが

「ああ。これほど一対一での戦いほど有利な能力はない。が、言い換えればアレは一対多の戦いであるほど無意味になってくる能力だ」

「そっか。一気に全部消せる訳やないから、こっちが一斉にあらゆる方向から消しきれんほど沢山魔法を使えばええと」

分かりやすく解析したクロノの言葉を、更にはやてが噛み砕いて分かりやすくする。

「それなら！」

「これで！」

「どうや！」

なのは、フェイト、はやての三人がそれぞれ桜、金、白の魔力弾を無数に放つ。

放たれた三色の光弾はリリスを覆い尽くさんと左右と正面から襲いかかる。

その様はまさに魔力弾の壁。

「一度見ただけで看破したのは褒めてあげる。でも――」

《Ｓｔａｒ　Ｂｕｌｌｅｔ　Ｂｕｒｓｔ　Ｓｈｉｆｔ》

リリスは左手を突出して銀色の光球をいくつか生成し、流れるような動作で優雅に左手を振り払い、左右正面から来る三色の魔力弾に向かって撃ちこむ。

放たれた銀色の魔力弾が三色の魔力弾の壁に接触した瞬間。三色の魔力弾を巻き込んで銀色の閃光を伴うエネルギー爆発を起こし、すべて消し去る。

その光景に唖然とするなのは達。

「希少技能（レアスキル）だけが星王じゃないのよ」

「はぁああ！」

爆発の閃光に紛れ、アルは高速機動魔法でリリスの背後にウルフを振り被った状態で現れ、間髪入れずウルフを振り下ろす。

だがその刃は銀色のバリアに阻まれてリリスには届かず、火花を散らすばかり。

「もう魔力なんてほとんど残ってないくせに、よくやるわね。どうせ勝てないのに」

「それでも、お前を倒さない限りオレ達に安息なんかないっ」

ウルフを持つ腕を曲げ、反動をつけてその場から下がる。

続けてウルフの切っ先をリリスに向け、カートリッジを一発排出して黒い光球を生み出す。

《Ｓｔｒｉｋｅ　Ｂｕｌｌｅｔ》

強力な貫通効果を持った黒い弾丸が放たれ、銀色のバリアがと接触して爆散すると共に銀色の光の破片が辺りに飛び散り、硝煙（しょうえん）がリリスを覆い隠す。

「お前を倒す。そして平和な日常を取り戻す！」

アルはウルフを両手で持ち、正眼の構えを取る。それと共に身体から黒い魔力光が溢れ出る。

リリスを隠していた硝煙が晴れ、その姿が再び露わになる。

「その自信と眼……気に入らないわね」

ヒレンジャクが本を開き、バララとページがめくれる。

「圧倒的な力の差で――」

ヒレンジャクのページがめくれるのが止まり、リリスの足元に銀色のミッド式魔方陣が展開され左手に銀色の魔力光が宿る。

「感じさせてあげるわ」

《Ｓｈｉｎｉｎｇ　Ｒｅｙ》

銀色の光を宿した左掌をアルに向ける。アルはそれに弾かれる様にウルフの切っ先を向け、一発だけ魔力弾を生成して即座に放つ。

刹那。銀色の閃光がまたいたと思ったら、二人の間の空間が爆ぜた。

「絶望を」

その言葉を合図に、アルとリリスの戦闘が本格的に始まった。

互いに上昇しながら、アルは高速移動を用いて翻弄させながらウル

フを振るい、リリスが銀色に輝く左手で受けて弾いてタイムラグ無しで砲撃を放ち、アルはそれを寸での所で回避してリリスの背後に回りカートリッジを消費して斬り掛かるが、銀色のバリアで食い止められる。

「バスター！」

そこへ桜色の砲撃がリリスに向かって撃ち込まれて着弾する瞬間にアルは離脱し、再びリリスは左手を突きだして拳を作って桜色の砲撃を消し去る。

《Ｓｔａｒ　Ｂｕｌｌｅｔ　Ｒａｉｎ　Ｓｈｉｆｔ》

続けてヒレンジャクが開いた五つの砲門から、銀色の魔力弾を雨の如く連射する。

それぞれ自分のタイミングでシールドを展開し、直線的に放たれる銀色の雨を耐える。

しかし――

「疾風迅雷……！」

リリスの背後からフェイトが金色の大剣バルディッシュを振りかぶ

って現れ、バルディッシュがカートリッジを一発消費する。
半実体化した金色の魔力刃に紫色の雷が帯電する。

「スプライト、ザンパー！！」

フェイトはバルディッシュを思い切り振り落とす。
振り落とされた雷を纏う斬撃はリリスの銀色のバリアを砕き割る。
だがその攻撃もリリスの銀色に輝く左手に捉えられ、激しく火花と電気を迸らせてピタリと停止する。

「貫け、漆黒の槍！」

リリスの背後から、アルがウルフをまっすぐ構えて飛んでくる。

「シャドウランス！」

槍の様に長く黒い魔力刃を纏ったウルフの刀身が、リリスの身体に突き刺さる。その寸前の所で銀色のシールドで防がれて激しい火花を散らす。
本来この魔法は防御貫通に主軸を置いた魔法のはずだが、リリスのシールド一枚に込められた魔力が異常な程濃かった。それで反発を

起こして貫通できなかったのだ。

左にフェイトの大剣を受け止めている左手。右に発動中の攻撃魔法。背後にアルの突きを防いでいるシールド。普通なら動けない状況で、リリスは左手に握るバルディッシュ諸共フェイトを振り回し――

「うぁあ！」

「あぐっ！」

アルに投げつけて引き離す。

そして間髪入れず左手に一発の魔力弾を生成。続けてフェイトと大剣のバルディッシュを受け止めて動けず吹き飛ぶアルに向かって放つ。

アルが気が付いた時にはもう既に撃ち落とす距離ではなく、回避も難しいところまで銀色の魔力弾が迫っていた。

「くっ……」

間に合うかどうかわからないがバリアの展開を試みる。

だが――

「何っ！？」

目の前まで迫っていた魔力弾は視界の外から突如現れた鋼の連結刃（チェーンエッジ）によって切り裂かれ、バリアの展開は不要となった。

「これは……まさか！」

アルと共に目を丸くしていたフェイトがシュルシュルと戻っていく連結刃（チェーンエッジ）を追って視線を下に落とす。

するとそこには、薄桃色の髪を持ったポニーテールの騎士が三人の仲間と共に立っていた。

「シグナム！」

「シグナム、みんな！　よかった無事やったんやな」

はやてがシグナム達に駆け寄る。

「はい。かなり苦戦しましたが」

「アルの父親、無茶苦茶強かったんだ。こっちも全力でやってやっとこさ」

シグナムとヴィータが簡単に地下での戦いをはやてに報告をする。

「三人とも。今は報告してる場合じゃないですよ」

「ああ、かなりの強敵だ。気を引き締めろ」

シャマルとザフィーラの注意で、三人は再び武器を構えて上空でこちらを見下ろしているリリスを見上げる。

「はっ！　これだけの戦力があって負ける訳がねぇ！」

高らかにグラーフアイゼンを振り上げるヴィータ。その気合の入れた一言を合図に、はやて達も空中へ舞い上がる。

『とりあえず簡単に状況を説明する』

戦闘が一時中断されている間にクロノが、四人に念話で簡潔に状況説明しだす。

『リリス・ルキフェルは星王となった。それに伴って認識する事で相手の魔法を強制解除する能力を得ている。これは星の民以外の人間の魔法すべてが対象だが、一度に全方位の魔法を消せる訳ではな

い事は確認済みだ』

『了解！』

『流石だな、クロノ執務官』

ヴィータとシグナムがデバイスを構える。

それを見て、リリスは笑みを更に深める。

「いくら増えても同じ事だけど……これからの為の練習台にぐらいには――」

リリスの前に銀色の魔方陣が現れ、左の掌に銀色の光球が発生する。

「なってくれそうね！」

それを魔方陣に叩き付け、銀色の砲弾がランダムに放たれる。

嵐の如く降り注ぐソレをアルとフェイトは高速で避け、なのはは強化したバリアで耐え、はやては詠唱しながらシグナム達によって降り注ぐ銀色の砲弾を防いでもらい、クロノは降り注ぐ砲弾の弾道を予測して無駄なく回避する。

『はぁあああ！』

アルとフェイトが銀色の砲弾の嵐を抜けて左右から同時にリリスに斬撃を叩き付ける。

それをシールドで受け止めると共に砲弾の嵐が止み、シグナムとヴィータ、更になのはが上がる。

「せぇえ！」

「くらえ！」

シグナムは第二形態シュランゲフォルムの連結刃（チェーンエッジ）を振るい、ヴィータは四つの鉄球をギガントフォルムのグラーフアイゼンで打ち飛ばす。

だがリリスの左手が握られると同時にヴィータの鉄球が消え、シグナムの連結刃だけがリリスに迫る。しかしそれもリリスのシールドの前に無残に跳ね飛ばされる。

「エクセリオォォン……」

レイジングハートの杖の先に桜色の魔力が急速にチャージされていく。

リリスがそれを見て左手を握ろうと準備する。

しかし――

「――！　チッ」

舌打ちと共に視線を胸元に落とす。

そこには緑色の穴がポッカリ空き、白く細い腕が銀色のリンカーコアを持って突き出ていた。

「小賢しい真似を！　掌握（ブレイク）！！」

グッと左手を握り、空間結合を強制解除する。

「キャアア！」

空間結合される旅の鏡を強制解除されたために、突っ込んでいた腕から弾き飛ばされてしまう。

だが十分に時間は稼いだ。

「バスター！！」

チャージ完了したなのはの砲撃が炸裂する。
リリスが再び左手を握ろうとした瞬間。水色の帯がリリスの身体を締め上げる。クロノのストラグルバインドだ。

「くっ……うざい！」

リリスが左手を握り、バインドを解除する。
しかし、その直後。桜色の砲撃がリリスを直撃した。

「はやて！」

「来よ、白銀の風。天より注ぐ、矢羽となれ！」

フェイトの合図に、詠唱していたはやてが杖を振り上げ、ベルカ式の魔方陣を小さく四つ、更にその中央に大きく一つ展開する。

「この距離や。はずさへん！　フレースヴェルグ！」

はやてが金色の十字剣の杖を下すと共に、小さい魔方陣から白い光線が順に四発放たれる。

一つ一つが巨大な上に連射された光線は、リリスがヒレンジャクを押す形で遠隔生成したシールドで進路を変更されるが、リリスの近くを通ろうとしたを所で大爆発。

白い光のエネルギーが四つ爆散し、リリスを巻き込む超長距離砲撃魔法が炸裂する。

「トドメ！」

金色の十字剣の杖を横に振るって中央の魔方陣の中心から閃光が走り、更に大きな砲撃を解き放つ。

白い砲撃は一直線にリリスのいる爆発の中心へと撃ち込まれ、更に巨大なエネルギー爆発を引き起こす。

しかし、その爆発は唐突に停止する。

爆発が終わったのではなく、爆発して濃縮されたエネルギーが弾けて広がっていく途中のままの状態で、まるでＤＶＤの一時停止を使ったかの様に停止したのだ。

「え……？」

はやてが自分の魔法が急に停止したことに動揺する。はやてだけではなく、アルもなのはもフェイトもクロノも眼を見開いて動きを止

める。

次第に停止していた爆発が、まるで巻き戻しを見ているかのように一点に集束していく。

どんどん小さくなっていく白い光。

「ふふふ。私に向かって魔力の塊を叩き付けるなんて酷い事してくれるじゃない」

不敵な笑みを浮かべるリリスの身体には、一点の傷も汚れもない。そして翳した左手の掌にはやての魔法が手のひら大ほどの大きさとなって圧縮されている。

「まさか、あの砲撃を受け止めた上で無理やり展開を抑え込んで魔力を圧縮したのか！？」

クロノがあまりにも無茶苦茶な力の使い方に戦慄する。

「ただ消すだけじゃ貴方達の心は折れない。でしょ？　だから避けられない振りをして直撃を受けた上で、渾身の魔力を込めた攻撃を破ってみせたのよ」

そうリリスははやての砲撃から身を護っただけではなく、その自身

の有り余る星王の魔力ではやての魔法の術式に直接干渉して展開を止め、更に魔力で無理やり魔力を練り込みながら更に圧縮させていき、今の状態まで持って行ったのだ。

最早、魔法理論など無いに等しい滅茶苦茶な力技。それを可能にさせるほどの魔力量と魔力コントロールの高さ。

はやての魔力は管理局でも他に追随を許さないほどの膨大な魔力量を誇る。そんな魔力を込められた渾身の一撃がまるで通用していない。

まさにリリスの言う絶望に等しいモノがクロノ達の心に生まれる。

「これが星王である私と……」

左手に浮かべる白い光球に銀色の魔力光が混じり、白銀の輝きに変わっていく。

「貴方達との……」

白銀に輝く光球を指先に留め、右肩へ向かって引いて勢いよく白銀の光球を正面に突き出す。と同時に白銀の光球は激しい閃光を放ち始める。

その輝きがより一層強くなって、リリスと同じぐらいの高度にいるアルとフェイトは出来る限り距離を取ろうと駆け出し、神殿付近に

いるなのは達は多重のシールドと強化した広域バリアを重ね張りして次に来る衝撃に備え、シグナム達ははやて達を護るように前に躍り出る。

「覆す事の出来ないーー」

《Ｂｉｇ　Ｂａｎｇ》

だが、刹那の瞬間に白銀の閃光が瞬きーー

「力の差よ」

音もなくアル達をその光の内に取り込み、軌道上に停泊するアースラのブリッチからでも見えるほどの強烈な白銀の光が神殿を丸ごと飲みつくした。

バリアなど意味をなさなかったなのは達は無残に地に伏し、必死に距離を取ろうとしていたアルとフェイトも力なく落下していく。

ただ一人。

器に守られたイリアを残して。

「お兄ちゃん！」

《Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ》

水色に光る鎖が力無く落下するアルとフェイトを絡め取り、神殿の最上部へと引き寄せる。

それを受け止める者はおらず、ただ床に叩き付けられる金と銀。

「ぐ……」

「くはっ！」

だがそのおかげで意識が戻ったらしく、苦しげに二人は呻く。

「はぁ……はぁ……。みんな、無事か？」

クロノが僅かに顔を上げてアルとフェイトに尋ねる。

「ぅ……もう少し、優しく引っ張れ」

「ちょっと……立ち、上がれない……かな」

ボロボロの防護服（バリアジャケット）ではあるが、アルもフェイトもなんとか無事のようだ。

「はぁ……はぁ……だい、丈夫……や」

「この……くらい……。なんてこと……ない」

はやてもなのはも強がってはいるものの、満身創痍だ。その周りでヴォルケンリッターの面々も伏している。

圧倒的で無慈悲な力の差。覆しようのない圧倒的な格の違い。まるでなのはとアルが初めて戦った時の様に最初から圧倒されっぱなしだった。

だがこれでも彼女、リリス・ルキフェルにとっては星王の力の慣らし運転に過ぎない。

「これが絶望。これが貴方達の限界。これが私と貴方の差。これが絶対の力を持つ星王」

上空から囁くその姿は、まさしく魔王。その圧倒的な力で全ての命を蹂躙する魔王。天を支配する絶対の王。

「まだ……だ……まだ終わって、ない」

「お兄ちゃん……」

ダメージの大きい身体にムチ打って立ち上がろうとするアルを心配そうに見つめるイリア。

そんな状態でも、その瞳に宿る意志は全く衰えを見せない。

「諦めて……たまる、か……！」

「魔力も残ってないくせによくやるわね」

リリスの口から呆れた声が漏れる。

「もういいわ。もう十分この力は試せたから」

左手の輝きを一つの魔力球へ昇華させる。

バチバチとエネルギーが弾ける。

「さようなら。愚かでお莫迦なお兄ちゃん」

リリスの目の前に出現した銀色の魔方陣に銀色の魔力球を叩き付け、銀の光が瞬く。

次の瞬間。

「刹那の輝きに時を見よ！　アストラルレイザー！」

夜の世界を銀色に染める砲撃が放たれた。

なのはのディバインバスターにも似たその砲撃は、まっすぐアルに向かって落ちていく。

「アル君！！」

「お兄ちゃん！！」

なのはとイリアの悲鳴にも似た叫び声が上がる。

それでも何かができる訳でもなく、銀色の光がアルに迫る。

「くっ……ぉおおおおおお！」

そして、アルを飲み込んで爆散した。

全員が息を呑む。

爆発の余韻が尾を引く以外に何も聞こえない静寂が続く中。

リリスの背後に黒い閃光が走った。

「はぁああ！！」

「くっ！」

リリスが銀色の光剣を生成して背後から斬りかかってきた一撃を受け止める。

受け止められた瞬間、アルは即座に離れてウルフを構える。

「あれは……リミットブレイクか」

伏せたままのシグナムが空を見上げて呟く。地下で戦ったテトと同じ現象が、今まさにアルに起こっている。

リンカーコアの活動を限界を超えて加速させ、魔力素の吸収、圧縮、放出の限界を極限まで高める事で一時的にフルドライブ時以上の魔力に増幅する事ができる。だが、その出力はコントロールできないのだ。テト程になれば程度にはコントロールできるが、殆どの星の民はコントロールできない。

コントロールできない力は自分自身を壊してしまう。そしてアルはリミットブレイクのコントロールができない。だから使わなかった。イリアとこれからも生きていく為に。

しかし、その想いは砕け、今のアルはリミットブレイクの命を対価に産み出す限界を超えた力でリリスと上空で激しく激突しあって死闘を繰り広げる。

「その能力って、もしかして！」

「だめぇえ！　お兄ちゃん！！」

イリアがアルに向かって叫ぶが、激しくぶつかり合うアルには届かない。

「リリス・ルキフェルーー！！」

「ははははは！　命を燃やしてまで私と刺し違えようというの？」

ガキィン！と銀色の光剣と漆黒の魔力刃を宿すウルフの刀身が衝突して火花を散らす。

「でも死ぬのは貴方ただ一人なのは変わらない！」

「いや、お前も道ずれだ！」

「出来るのもならね！」

互いに剣を弾いて距離を取る。
しかしアルはすぐにリリスに向かって駆ける。

「うぉおお！！」

リリスの振るう光剣を躱し、傍に浮遊するヒレンジャクに黒い魔力刃を突き立てる。

「ヒレン！　よくも……！」

ビリビリに引き裂かれたヒレンジャクだが、リリスが魔法を使う分には問題はない。

しかし、アルの怒涛の攻撃はこれで終わりではない。
ヒレンジャクに突き立てたウルフを、弧を描くようにまっすく縦に振り切り、リリスの左腕を真っ二つに切り落とし、鮮血が迸る。

「あああああああああ！！」

夜の空にリリスの断末魔が木霊する。

リリスはあまりの激痛に身を引いて左腕をかばう。

「はぁあああああああ！！」

ウルフを引き構えて思い切り突き出し、リリスの懐へ突進する。

「が……ぁ……」

胸に深々と突き刺さる刀身が身体を食い破り、その刀身に赤い血が伝って剣先からぽたぽたと滴り落ちるのは、アルの身体から突き抜ける銀色の光剣からだった。

「お兄ちゃぁん！！」

「アル君！！」

「そんな……！」

イリア達が悲痛な悲鳴を上げてアルの名を叫ぶ。

「ふふふ。ちょっと遊んであげただけで調子に乗るんだから」

アルの身体から貫く銀色の光剣は、リリスの斬り落とされたはずの

左手で突き刺されている。

全て初めからリリスの演技だった。切り落とされた左手も幻術で、あの断末魔でさえも演技だったのだ。

だが、アルは絶望するどころか血を流しながらも不敵な笑みを浮かべていた。

「何を――」

考えているの。そう続けられたはずの言葉は、突如として展開された黒い王家の紋章によって阻まれた。

「私の知らない紋章？」

リリスが眉を寄せてアルの広げた紋章を観察していると、お互いの体に異変が起きた。

突如お互いのリンカーコアが露出したのだ。

「こ、これ……は！？」

リリスが初めて苦悶の表情を浮かべる。

「これは、オレ達王家の人間の……長女以外の人間にのみ、伝えられてきた秘術……だ」

「ぐっ」

リリスは必死に体を動かそうとするが、ピクリとも動かない。

アルも胸を貫く光剣を掴みながら血を吐き、ゴホッゴホッ！と苦しそうに咳き込む。

「これは……星王の力を抑え込み、使用者と星王の命を奪う秘術。血の縛鎖・相殺陣」

「ば、かな……。そんな魔法が……」

「あるんだよ。星王が……道を誤った時、その道を正す為に、その星王を倒す為の……唯一の、魔法だ」

信じられないと言った風にアルを睨みつけるリリス。

“血の縛鎖・相殺陣”それは文字通り、使用する者と使用される者の星の民の血に作用してお互いの体の自由を奪い去り、リンカーコアを露出させ、二人のリンカーコアを強制融合させて融合事故を誘発させる。つまり、動きを止めて魔力反発を利用した魔力融合による物理的なエネルギーを生む魔力爆発を起こさせるという恐ろしい秘術だ。

しかし、このアルの言葉が正しければ、アル自身の命もないことになる。

「い、いの？　このまま続行すれば、貴方も死ぬのよ？」

「ゲホッ！　フ……この秘術は、使ったが最後……もう、誰にも、止められない」

「まさか……最初から死ぬ気？」

リリスが目を見開いて驚き、アルは血に塗れた口元を吊り上げて笑みを浮かべる。

そう、レアスキルを解放した時からアルは、今この瞬間を狙っていたのだ。自分とリリスが零距離まで接近するこの時を。

「く……くそ……！　漸く、これからだというのにぃ……！！」

どんなにリリスが悔しがってもがいても、術者の命を対価とした秘術が破れる事はない。

「無駄、だ。もう、逃げられない……」

そう言うアルの視線の先では、リリスの銀色のリンカーコアとアルの黒いリンカーコアがゆっくりと近づいていき、それに伴って展開された王家の紋章が黒い光の輪となって二人を取り囲む。

それを見たリリスの表情に初めて恐怖が宿る。

『お兄ちゃん？』

イリアから不安そうな声で念話が届き、アルは返事を返す。

『もう……大丈夫だ、イリア。これで、全て終わる。さよならだ』

『え？　なに？　さよならって、どういうこと？』

イリアがより不安な声を出す。

アルは念話を個人から広域へ変換して話し始める。

『今、発動中の魔法は、星王を殺す王家の秘術だ。もう止める事は出来ない』

『星王を、殺す？』

『ちょっと待て！　それじゃあ君は！？』

クロノがアルに必死な形相で問いかける。
それをアルが見ている訳はなく、ただ背中で念話越しに語る。
『オレも、巻き添えになって死ぬ』
『そんな！　駄目だよ！　漸くイリアちゃんにも会えたのに！』
なのはが叫ぶ。
『お兄ちゃん。嘘だよね？　イリアの事、からかってるだけだよね？』
イリアは信じたくないと、嘘だと言い聞かせるように震える声でアルに問う。
だがアルから帰ってきたのは、無情な一言だった。
『嘘じゃない。この魔法は、星王を倒す事の出来る、唯一残された方法だ。その対価として、術者の命を奪う』
『そんな……！　今すぐ止めて！　みんなでやれば絶対勝てるよ！』
『止められない。この魔法は、発動させたが最後……もう誰にも解

除できない』

アルの目の前で銀と黒のリンカーコアが融合を始める。

「ぐっ……ぁああ！」

『アル！』

『アル君！』

『お兄ちゃん！』

リンカーコアの融合が進めば進むほど、アルの体に耐えがたい激痛が襲う。

（は、ははは……。これが……リンカーコアを、食われ、る……感覚、か）

今まで自分がしてきた事の報復なのだ。そう思うアルは、ふとリリスの方を見る。

彼女にも同じ感覚と激痛が襲っているのだろう。先ほどから悲痛な悲鳴が喰いしばっている口元から洩れている。

頭の片隅でイリアがなのはが、フェイト達が何か叫んでいる。だが

もう既にあるには何を言っているのか、激痛に遮られてわからない。

そして、一瞬体から激痛が消え、頭の中がクリアになる。

今まで生きてきた時間。家族と過ごした記憶。災厄にも似た虐殺の瞬間。その後の力を求める戦いに明け暮れた日々。そして、なのはに助けられた時の感情。イリアと再び会えた感動。

全てが走馬灯として頭の中でリプレイされていく。

（ごめんな、イリア。一緒に生きて、あげられなくて……）

一番たくさん思い出すイリアの笑顔。イリアと過ごした沢山の思い出。

だが最も脳裏に焼き付いているのは、なのはとの出会った時だった。

彼女ならきっとイリアとよくやっていけるはずだ。そう思ってアルは掠れた声で呟く。

「あとは、頼む」

届いたかどうかはわからない。

だが、きっと届かなくても彼女はイリアによくしてくれるだろう。

アルはそう思っていた。

「なのは」

刹那。

黒と銀の入り混じった光が、光の輪の中で弾け――

『――――――！！』

――空を白銀に染め上げるほどの魔力が爆発が上空で起こった。

その凄まじいほどの轟音と衝撃、そして目を開けていられないほどの閃光に、なのは達は思わず目を逸らす。

その瞬間は一瞬だったのかそれとも数分だったのか分からないが、これだけはわかった。

アル・スフィニールが死んだ。リリス・ルキフェルを道ずれに。

「……」

爆発の閃光が消え、何もなくなった虚空を見上げるイリア。

たった一人となってしまった。星の民の王女。愛していた家族が殺

され、信じていた兄も消し飛んだ。

もう誰もいない。一族の人間も、家族も、仲間も、友達も、誰一人――

いない。

「……！」

イリアの目の前にカランと音を立てて何かが落ちてくる。

視線を落としてみてみれば、それはリリスに取り込まれた星の雫だった。

「どう……して……」

イリアの口から冷たい声が漏れる。

自分の兄が命を懸けた最後の魔法にもかかわらず、全ての元凶たる星の雫は傷一つ付いていない。

これでは何も変わらない。何も終わらない。命を懸けて終わらせようとした兄の命が無駄になる。

「う……そだ」

陣に両手をついてポロポロと涙を流すイリア。

現実を信じたくなかった。

大好きだった両親が死に、両親以上に大好きだった兄も自らの命を懸けてリリスを倒した。

だが、星の雫はそんなアルを、イリアをあざ笑うかのように無傷。

「う……うぅ……」

イリアの口から嗚咽が漏れる。

そして――

「うぁあああああああ！！」

堰を切ったような泣き声が溢れ――

世界が黄金に包まれた。

第二十話　絶望の後には希望を、希望の先に未来を

兄が死んだ。

掌に落ちた雪の様に、手に入れたと思ったらあっという間に消えてしまった大好きな兄。

あまりにも無情で無慈悲な現実が、イリアを心に突き刺さる。

もうどんなに願っても兄は帰って来ない。もうどれだけ待っても兄は迎えに来ない。もういくら呼んでも兄は応えない。

兄が死に、両親も死に、一族は滅亡。残ったのは星王の成り損ないの自分、ただ一人。

そしてその原因となった宝石は無傷で、見る者を虜にする幻想的な七色の光を放って、そこにある。兄が命を懸けて星の民の因果を終わらせようとしてくれた行為をあざ笑うかのように今、目の前に転がっている。

イリアの心に悲しみが広がった。

イリアの脳裏に兄との思い出がよぎった。

イリアは自分の非力に怒りが湧いた。

イリアは自身の無力に憎しみを持った。

だがそれ以上に、イリアは兄のアルの最後。あの爆発の中で一瞬、微笑みながら自分の頭を撫でた様な気がして、余計にこれが最後だと言われた気がして、寂しかった。

これまで孤独に耐えて来れたのも、ひとえに兄との約束があったから。その約束を心の支えにしてきたからだ。

そして兄は、最後まで兄としてイリアの前に立ち続けていてくれた。約束を果たし、最後の最後で、大切な思い出を残して逝ってくれた。本当にこれが最後なのだと。理解している自分を一番、自分が理解したくなかった。

しかしそれはイリアだけではない。ここまで短い間だったが共に戦ったなのは達も同じだった。

大切な仲間が死んだ。絶望的な力の差がある相手を道ずれにして、これからの次元世界の平和を守ってくれた。これから訪れたであろう自分の幸せを対価として支払って。

泣くべきではない。此処は感謝しなければならない。そう思いながらも、涙が止まらない。

星の民の王家の人間に生まれた男の子。先導者の名を持った子供。アル・スフィニール。真名をアルカイド・コンストレー・スフィニール。

たった一人の妹の為に自分の誇りまでも捨てて戦い続けた誇り高き兄は、もうこの世にはいない。

現実を受け止めきれなかった絶望の叫びが、悔しさを滲ませた悲しい雄叫びが、冷たい夜の世界に響いた。

刹那。

世界は金色の輝きに包まれた。

床が消え、宙に浮いている感覚。そして周りの光景はキラキラと輝く金色一色。

まるで別世界放り込まれたような感覚に、なのはを始めイリア達は困惑していた。リリスは倒され、アルが死に。星の雫だけが残った今。まだ何か起こるのか。

シグナムやヴィータ、ザフィーラやクロノはデバイスと拳を構えて身構える。しかしいつまで経っても何も起きない。ただ眩く煌めく金色の世界以外は。

「……何か……来る」

ポツリと呟かれたイリアの一言に、なのは達がデバイスを構えてイリアを中心に包囲陣を展開して辺りを警戒する。

しかし現れたの人ではなく、色取り取りな小さな光の球体だった。しかも十や二十ではない。百、もしくは二百に届くであろうという相当な数だ。

金色の世界でもはっきりと輝いていて、まるで夜空に瞬く数多の星達の様にも見える。そのあまりにも幻想的な光景に、なのは達は一人、また一人とデバイスを下げていく。

『まさか外から意識だけで来るなんてね。……暴走でもしたのかな？　だとしたら色々と終わりだね♪』

突然響いてきた軽快な男性の声。

イリアがふと頭上を見上げると、そこには青白く輝く光球がゆっくりと降りて来ていた。

優しく両手を差し出してお椀を作ると、青白い青色に輝く光球はフワリとそこに浮かんだ。

「あなたは……？」

イリアはまだ涙に濡れた顔のまま光に問いかける。

『私の名前はサイガ・アルベルトだよ』

光は瞬くように声を発した。いや、声を発する器官は無いので頭に直接響いたというべきだろうか。

だが、この光の言葉にクロノが首を捻った。

「サイガ……アルベルト？」

「どうした？　クロノ執務官」

「いや、どこかで聞いた名前だなっと」

クロノの回答に、声を掛けたシグナムは首を傾げる。

見た所危険はないようだが、しゃべる――もとい意志を持ち念話を使う光の玉など聞いたことがなかった。そんなモノの名前に聞き覚えがあるというクロノの言葉が理解できなかった。

「えっと、サイガさん」

『何かな？　金髪電気ちゃん』

「金髪電――フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

『フェイトちゃん、だね』

おそらく自分の事を示したであろう呼称に自己紹介して訂正してもらうフェイト。

気を取り直してフェイトは改めて尋ねる。

「ここは、何処なんですか？」

『信じられないと思うけど……此処は星の雫の中の空間だよ』

サイガと名乗る光の言葉に、なのは達は絶句した。

まさかここが星の雫の中だとは思わなかったからだ。

「こ、此処が星の雫の中！？　こんなに綺麗なのに！？」

『そうだよ。なのはちゃん』

ややズレた驚き方をするなのはに肯定を示すサイガという光。

「な、なんで私の名前……」

『皆さんの事は知ってます。雫の中から見てましたので』

今度はキリリとした滑舌のいい女性の声が響き、薄紅色の光が降りて来てくる。

『申し遅れました。自分は、クリスティア・ノートンと言います』

まるで声の主の女性が敬礼しているかのような光景が、響いてくる声からイメージできるほどはっきりした自己紹介だ。

そしてその女性の名を聞いた瞬間。クロノが声を上げた。

「そうか！　サイガ・アルベルト。クリスティア・ノートン。二人とも星の雫にリンカーコアを抜かれて死んだ犠牲者の名前だ！」

そのクロノの言葉になのは達に動揺が広がる。

『ははは。流石最年少で執務官になったクロノ・ハラオウンだね。そうだよ。元が付くけど執務官やってて魔導師ランクは空戦ＡＡＡランクだよ』

『自分は三等空士で、空戦Ｂランクです。右に同じく、元が付きますが』

二つの光が改めて自己紹介をし、なのは達の動揺が少しずつ落ち着いてくる。

「二人が此処にいるって事は、まさか……」

フェイトが若干震える声を抑えながら、先ほどから気になっていた事を二つの光に尋ねる。

『そうだよ、フェイちゃん。此処にいる光は全てリンカーコアだ。それも、全てそれぞれリンカーコアを抜き切られる寸前までの意識から継続して存在しているよ』

サイガの回答で、フェイトの疑問は核心へと変わった。

『私を含め、此処にいる者は全員肉体的に死んだ。そして星の雫の中で永遠に生き続ける魔力生成機関の一部にされた者達だよ』

今此処で輝いているのは全て、アルの手によって星の雫に吸収された魔導師たちの命そのものだった。

なのは達は先ほどまで綺麗だと思っていた光が人の命の輝きなのだと知ると、途端にその美しさが消え失せていくように感じた。

「ごめ……ん、なさい……」

イリアは二百に届くぐらいの数の命の光を見て、胸を押さえて深々と頭を下げる。

「イリアちゃん……」

なのははその光景を目の当りにして、改めてアルの罪の重さを思い知った。

たった一人殺すだけで重罪だというのに、それを二百人近くの人の命を奪っているというのは、途轍もなく重い罪だ。死刑を言い渡されてもおかしくない程の。

そんな途方もなく大きく重い罪を、アルは始めからたった一人で背負うつもりだったのだ。それがアルの決意であり、覚悟だったから。

だが、この事件の真犯人であるリリスも、実行犯のアルはもういない。代わりに罪を背負うのは妹であり、星の民の王女でもあるイリアだ。

それはイリア自身もそう思っていた。

だが――

『それは……何に対しての“ごめんなさい”？』

二人とは別の光から、女の人の声が響く。

「……みなさんを、自分勝手な理由で巻き込んでしまったこと……

です」

『なんだ、そんな事か』

「そんなことって……！　巻き込まなければ――」

『確かに巻き込まれなければこんな事にはならなかったね』

サイガの一言に反論しようとしたイリアを遮って、サイガは言葉を続ける。

『でもね。私たちはもうそんな下らない事……気にしてないんだよ。イリアちゃん』

「……え？」

一瞬、イリアはサイガが云っている言葉の意味を理解できなかった。

それはなのは達も同じで、なぜそんな言葉が平然と当然の様に出てくるのか、まるで理解できなかった。

『確かに貴女のお兄さんにリンカーコアを奪われなければ、いつも通り管理局で仕事をこなしながら生きていたでしょう。ですが――』

クリスティアが言葉を区切ると、また別の女性の声が響いてくる。

『あたしは此処で一番最初に吸収された魔導師、リチアさ。あたしは半年間ずっと……あの子、アル・スフィニールの心を感じてきた』

リチアと名乗った女性は一旦言葉を区切ると、とても優しい声で語りかけてきた。

『あの子は夜になると必ず、あたし達の命を奪ってきた事を謝るんだ。この半年間ずっと片時も欠かさずに、心の中で』

『決して声には出さなかったけど……此処には届いた。私たちを殺してしまった事を本当は後悔して、一人一人に謝っていたよ。毎晩毎晩。何故かわかる？』

イリアは首を横に振り、なのは達も同じく首を傾げる。

『それはね。イリアちゃんの為だ』

「わた……し？」

『そ。例えどれだけの犠牲を払っても、例えどれだけの恨みや憎しみを背負っても、例え……一緒に生きていけなくても、イリアちゃんを助け出す。そんな強い想いを私たちはいつも感じていた』

リンカーコアを吸収した後、必ず心の中で後悔していた。

きっと彼ら、彼女らには、きっとこれから沢山の人生を歩んだであろう未来を奪い、自分の目的の為に利用する。リリスと同じ外道の道を歩く事にはきっとかなりの苦痛を感じていただろう。

しかしそれでも彼は前を向いていた。最愛の妹を助けるという目的を遂げる事を目指して。それが今まで自分が奪ってきた命に報いる唯一の方法だと自分に必死に言い聞かせて。

それはなのは達と出会ってからも変わらなかった。

――我が愛しき子。

突然、声が響いた。

柔らかな女性の声だ。

一体どこから聞こえてくるのかと全員が辺りを見渡していると、金色の世界に漂っていた光の粒子がイリアの目の前に集まり始める。僅かに金色を含んだ純白の光が、イリアの目の前で人の像を結んでいく。

始めはリンカーコアよりも小さな光だったそれは、手のひらサイズの人形の様に手足が光が集まる程に構築されていき、瞬く間にイリアと同じサイズになり、更にそれを超えていく。

それは次第に大人の女性の輪郭をしていき、防護服（バリアジャケット）を展開するかの

様に同じ光の粒子で構築されていく。

完全に人の形を成したと思った瞬間。

その光が足元から火花が散るかのように弾けていき、その下からは人の肌と純白の衣服の姿が現れる。

その場の全員が呆然と見つめる中、ついに頭まで弾けた光はより一層強い輝きを放ちながらスパークし、その眩しさに思わず目をつむる。

少ししてゆっくりと瞼を開き、そこで見たのは――

「我が愛すべき子よ。漸く会えた」

イリアと同じ煌めく銀色の長い髪に足先も見えない真っ白なロングスカート、そして雪の様に白い肌の欲しくも健康的な腕と女性らしい凹凸のハッキリした身体に、その身体を包むローブの様なマント。イリアの事を愛おしげに見詰める青みがかった灰色の双眸。どこかイリアと似た顔立ちの美人な女性だった。

「我が名は、セイリ・コンストレー。真名を、セイリオス・スピカ・コンストレー」

女性の名を聞いた瞬間、イリアはハッと息を呑む。

「もしかして……初代星王、セイリ様……です、か？」

ゆっくりと一字一句噛み締めながら確かめる様に尋ねた。

セイリと名乗った女性は、はっきりと首を縦に振って答える。

「しょ、初代……せ、星王って……え？」

「ほ、本物……なん？　でも、あれ？　ここって星の雫の中で……」

フェイトとはやては口をポカンに開けたままなんとか声を捻りだすが、噛んだり途切れ途切れになったりでいまいち何が言いたいのかわからない。

「如何にも。我が全ての星の民の母であり王。初代星王セイリです」

威厳と風格が滲み出る様な、けれど優しい綺麗な鈴のような声が言葉を紡ぐ。

「あの、聞いてもいいですか？」

おずおずと手を上げるなのは。

セイリはそれを笑顔で「構いません」と許可する。

「どうして、此処にいるの――いるのですか？」

慌てて敬語に言い換えるなのはを見て、セイリはなのはに微笑む。

「それは、我がこの雫そのものだからです」

セイリが何を言っているのか理解できなかった。

クロノ以外は。

「星の王は残った自らの魂を雫と変えて魔王と共にこの世から消え去った」

クロノがボソリと呟いた一文。それを聞いたセイリは微笑を浮かべる。

「我はこの雫は我の魂そのものであり、雫は我の魂の形でもある。故に我はこうして生前の姿をとれるのです」

「じゃあ、魔王っていうのは……」

「魔王は……」

セイリは言葉を区切って一瞬悲しそうに顔を歪める、直ぐにさっきまで浮かべていた微笑を浮かべて言葉を続ける。

「我自身です」

そこからはセイリの生前の出来事を語り始めた。

「全ての因果は、私が生まれてから始まりました」

時は遡る事、約五百年前。古代ベルカでまだ戦乱の起きていない頃。

この世界に名前がなかった時代。星の民は決まった土地を持たないただの流浪の民であった。

彼らはアルカディア中を星の巡りと共に旅し、星の輝きを道標として世界を巡る。一族人間はみな宝石のような瞳と美しい銀髪の髪を持ち、男女問わず整った顔立ちをした美形で、多少なりとも魔力を持つ数少ない民族だった。

だが、それ故に星の民は奴隷商人や人身売買の人間狩りや、盗賊に狙われていた。

魔力は持っていても、それが必ずしも勝ちに起因するものではない。数で攻められれば魔法で戦う者の数で負け。質で向かい討てば魔力量で負ける。星の民は、このアルカディアでは魔力を持つ民族として最弱と呼ばれていたのだ。

そして盗賊に襲われれば女は犯され、人狩りに会えば男女問わず奴隷として売られ、奴隷商人は子供を貴族や王族の人間の玩具として裏の市場で売買されていた。それ故に星の民は数少ない少数民族へと急速に数を減らしていった。

しかし、そんな中。一つの奇跡ともいうべき一人の女の子がこの世に生を受けた。

その女の子の持つ魔力は一族の誰よりも強く、その量は残っている一族全員を集めても足りないほどの膨大な魔力量だった。

当時の一族の長は、この子が星の祝福を受けて生まれ、そして自分たちの希望の光となるように願いを込めて、真名を授けた。

光り輝く者「セイリオス」と。

一族の人間は少女を惜しみない愛情と共に、大切に大切に育てた。

そのおかげかセイリはすくすくと育ち、一族の人間に大切にされながらも誰かを想う心を持った心優しい少女へと育っていった。

そして幾年かが過ぎ去り、二十歳となったセイリは少女から女性へと成長した彼女は、星の民の長という役目を受け継いだ。

長になって彼女は世界各地に散らばっていた星の民を一つに束ね、襲ってくる盗賊や人間狩りの連中を片っ端から追い払った。やがて彼女は、たった一人で同族が捉えられている一国に攻め入り、滅ぼした。

奴隷とされていた同族は彼女の手によって助け出され、同じく奴隷にされていた者達を開放し、安住の地を探すと約束して旅の仲間として向かい入れた。

星の民の人々も、その人たちを温かく向かい入れた。同じく虐げられ、弄ばれ、辛い目にあってきた同類を慰める様に。

それを幾度も繰り返していく内に、様々な噂が流れ始めた。

曰く、星の民の長が同族を助けに国を滅ぼしに来る。

曰く、銀髪の悪魔が各国の王族を皆殺しにしている。

曰く、彼女は苦しんでいる人を助け、どんなに身分が低くても隔てなく接する人だ。

曰く、彼女は悪を討つ正義の化身だ。

噂はどんどん尾ひれが付き、星の民を奴隷にしている小国の王族の人間は殺されたくないと、次々に奴隷を解放していった。そしてそれは奴隷商人にも波紋を呼び、どんどん商人の数は激減していき、さほど時も経たず奴隷商人という言葉自体が消えていった。

しかもそれだけでは収まらず、噂を聞きつけた難民や、各国の国民がセイリの下に集まっていった。誰もが望んでいたのだ。この世界

に平和を齎す王の存在を。そして人々はそれをセイリに求めた。

セイリは迷い戸惑いながらも、それが一人でも多くの人を助ける事に繋がるのならばと人々の声に応じる決意を固めた。

星の民の家族達も「貴女の好きにすると良い。私たちはそれについていく」と言い。彼女の意思を尊重した。

そしてセイリは星の民の発祥の地に国を作った。

星が昇る理想郷　アルカディア

国はどんどん大きくなっていき、この世界を一つに統一していった。

大国も対抗したが、セイリを始めとしたアルカディアの圧倒的な力の前に成す術なく。更に民衆の心は既にセイリを主君として見ており、反乱が起こった事も世界統一を速めた原因の一つとも言える。

こうして統一されたこの世界は、統一を成した国に準(なぞら)えてアルカディアと呼ばれるようになった。セイリが星の民の長になってから僅か一年の出来事である。

セイリは星の民の出身。故にこう呼ばれ讃えられた。星の如く闇の中で輝き民を導く美しき王こと、星王と。

そして、セイリが使う魔法を紋章と呼び、その紋様を王家の紋章として彫師に作ってもらった。

それから二年の月日が流れた。セイリは二十三歳になった。

統一されたアルカディアは、当時魔法が発達し始めたばかりのミッドチルダからミッド式の魔法が伝わり、星の民のみならず魔力を持つ人間すべてに浸透していった。

そうして得た魔法で、人々は国の中心である首都から山を一つ越えた先に一つの神殿を建てた。

それを平和の象徴として、そして星の民を王家の人間として、星々を祀る神殿を建築した。

天をも突きつけるその巨大な塔を中心に城の様に建てられた神殿は、太陽の光を浴びて真っ白に輝いていた。

セイリはその天辺から見る世界の光景をよく見ていた。そして、この世界をもっとより良い世界にしようと、彼女は自らの心を半分に分け、その半分の心を捨てた。

俗にいう陰と感情と陽の感情だ。人を想う陽の感情だけを自らに残し、憎しみなどの陰の心をほんの少しの魔力と共に切り捨てた。

それから百年。アルカディアは悠久の平和を謳歌していた。小さな事件は各地で起きていても、紛争や戦争など大きな戦いは一度たりとも起きた事はなかった。

セイリは自分の魔力と心を半分切り捨てた事で、擬似的な不老を実現させ、百年の間二十三歳の姿のまま生きていた。その間に結ばれ、子を生み、星の民はこの世界で最も大切にされる命となっていた。

人々はそんなセイリを現人神（あらびとがみ）と崇めて、そしてセイリに連なる星の民たちを讃えた。

だがそんな平和も、次第に陰りを見せ始めていた。

町や村、集落が何者かに襲われて次々に潰されて、そこに住んでいた人々やそこへ立ち寄った旅人が皆殺し身されているという噂が流れ始めたのだ。

セイリの魔力資質を受け継いだ子孫たちで構成された、二十～四十歳の星の民で構成された総勢二十一名の精鋭部隊が原因の解明に向かった。

だが帰ってきたのはわずか三人。しかもその内の一人は帰ってきて力尽きてしまった。そして戻ってきた三人は口を揃えてこう言った。

アレは魔王です。と。

そしてこうも言っていた。セイリ様とそっくりな姿をしていました。と。

その言葉でセイリは何が起きているのかすぐに理解した。

町や村、そして彼らを倒したのは間違いなく、自分がかつて切り捨てた負の心。そして今、その心が百年の間に力と自我を持って暴れている。

セイリは直ぐに自らの影を封印しに向かった。だが、影は思っていた以上に力を付けていて、その戦闘は熾烈を極めた。

自分と完全に拮抗した力、自分と同等の実力、自分と同じ思考と戦

闘方法。全てが自分と同じ。決着が付かない所ではない。お互いに魔力の消費以外全くダメージを与えられず、封印もできず、三日三晩が過ぎた。

そして全ての始まりにして運命の四日目の朝。

セイリはもう一人の自分。かつて切り捨てた心をもう一度自分の中に取り込むことを決意し、その心に掛けた分離の紋章を解除した。

だが紋章を解除しても、もう一つの心は自分の中に帰って来ない。

何もかもが遅すぎたのだ。時が経つ事で確立していった自我。そして本体に対抗しうるだけの力。これだけあれば不安定な頃と違って一つに戻ろうとする必然の現象は、どちらかの意志が弱まらない限り起きない。だから、セイリは自分も一緒に封印することにした。

二つの力を一つに融合させて体内に取り込み、二つとなった心は再び一つとなって一つの体に宿った。だが、あまりにも強大に膨れ上がった力と意志の情報量にセイリの肉体は耐え切れず再び二つに分かれる。

一つとなった意志は互いに交じり合いながらも溶け合う事はなく、一個の雫の形をした宝石へと姿を変えた。

二つに分かれた意志無き体は男と女の赤子となり、男の子の方には希少能力（レアスキル）が、女の子の方には強大な魔力とセイリの紋章が残った。

これが後に星王家の根底となる出来事だった。

そしてそれから数百年。セイリのいなくなったアルカディアは荒れ、

王位を巡って起きた戦争で文明は滅んだ。

たった数人の星の民と、分かれたセイリの子供ともいうべき子孫、星の雫、そして戦争中に作られた星の民を護るための星の器を除いて。

「我の犯した罪が、我が愛すべき子達の……無数に存在する未来を一つに決めてしまった。我の罪が、呪いとなって……お前達をこの場所に永延と縛りつけてしまった」

セイリはイリアの前で両膝を折り、頭を下げる。

「謝っても謝りきれない。我の封印が弱まったこの時代で、我が血に宿っていたもう一人の私の意志が彼女の心を漆黒に染めてしまった」

セイリはおそらくリリスの事を言っているのだろう。

星の民は言わばセイリの血を受け継いだ新たな星の民。だから不思議と男に希少能力（レアスキル）として、女に大きな魔力という特徴としてＤＮＡに刻まれた。そしてセイリの直系に当たる長女に。代々星王の証ともいえる紋章が受け継がれていったのだ。

「未来は、我が視た通りの結末を迎えてしまった」

セイリは、星詠みと呼ばれる星王のみができる未来を視る力を使い、星から未来を知った。

リリスが倒されても、アルが死に、星の民の呪いも消えず、星の雫も破壊されない。最悪な結末を迎えた未来。

セイリは望んでいた。この悲惨な未来を打ち破り、リリスが倒されて二人の体に刻まれた呪いが消え、更に星の雫も破壊される。

最高の終結を迎える。そんな未来を。

だが、未来は変わらなかった。どれだけ想っても未来は変えられなかった。

「けれど、我も思いもしない事態が起こりました」

そう呟くとセイリは顔を上げ、イリア達をぐるりと見渡して言った。

「貴女達が此処に来た事です。こんな未来を我は見ていなかった」

セイリは嬉しげに言う。

あのままイリアの心は癒える事無く。なのは達の心にも深い傷を残したまま終わるはずだった。

だが僅かに未来は変わった。そして――

「これならば、未来を変える事ができます」

それはイリアたちにとって衝撃的だったが、それ以上に魅力的な提案だった。

この未来を変えられるかもしれない。それは希望以外の何物でもなかった。

「ど、どうすればいいんですか！？」

なのはが身を乗り出してセイリに尋ねる。

セイリはなのはに急かされながらも、躊躇いなく言い切る。

「過去へ戻るのです」

とセイリの口から言われても、なのは達にはまたわからなかった。

過去へ戻る。口にするのは簡単だが、タイムトラベルなど魔法でもできない。

なのにセイリは軽々と口にする。星王と呼ばれていた彼女だからこ

その方法でタイムトラベルを行うのだろうか。そう考えたのはクロノやはやてぐらいで、残りのメンバーはまるで見当がついていないようだ。

「過去に戻るなんて夢物語としか聞こえないが、本当にできるのか？」

クロノいつにも増して真剣にセイリに尋ねる。

それだけクロノもアルが死んだ事を悔やんでいるのだ。全くと言っていいほど言葉を交わした事はなくとも、彼もアルを仲間と認めている仲間の一人という事なのだろう。

セイリははっきりと頷く。

「意識を数刻前の貴女達の身体へと送ります。その前に、イリア。彼女の手で中途半端になった星王へ昇華を完成させ、真の星王として目覚めてもらいます」

「はい」

あの時、戦っていたのはリリスの力の影響を受けないアル一人だった。だが星王となったイリアの力を借りる事が出来れば、リリスの力を無視して自分たちの戦いをする事ができる。出来なかった魔法も、切り札も使う事ができる。

なのは達の中に生まれた希望が更に大きくなっていく。

「けれど我一人では無理です。なので……貴女方の力を貸して貰う事になります」

セイリは周りに浮かぶ様々な光のリンカーコアに向かって話しかける。

そして、返答はすぐに帰ってきた。

『無論。喜んで力を貸させてもらうよ』

『寧ろ無理やりにでも力を貸させてもらいます』

『あたしら全員あの子の力になりたい。それだけだよ』

「良いのですか？　此処で貴女方の力を使うと云う事は貴女方の消滅を意味し、本当の意味で死を迎えますよ。それでも宜しいのですね？」

セイリは恐怖心を煽るように言い、彼らの意志を試す。

今の彼、彼女達はリンカーコアに魂が宿っているような物。そんな状態でもう一度死を体験すれば、まず魂そのものが耐えられず命の輪廻の中に戻れなくなってしまう。

だが――

『無駄無駄。私たちの想いはずっと前から決まってるよ』

『自分達の為に毎日毎日謝る彼に、わたしたちが未だに恨みを抱いているとでも？』

『はっ！　それこそありえない。あたし達はあの子の幸せの為ならこの命。喜んで差し出すぜ！』

『勿論です！』

『その程度でアイツを救えるならいくらでも力を貸すぜ！』

『あんな小さな子が頑張ってるのに、私達が何かしなくてどうするんですか！』

次々と溢れてくる同意の声。

全て、ただアルの力になりたいからという一心からくる心の底からの言葉。自分たちを殺した相手をこれほどまで思う彼らは、一体半年の間、どんな思いでアルを見た来たのかのだろう。

きっとそれは、至極単純な感情（モノ）のハズだ。

なぜなら――

『俺達(私)の命を使って、アイツ(あの子)を……アルを救ってくれ！』

彼、彼女たちはアルに幸せに生きてほしい。ただそれだけだから。

アルを想う彼、彼女たちの心からの言葉に、胸が熱くなるのを感じるイリアは、ポロポロと涙を流して頭を下げる。

「あり、がどう……ございまずっ……！」

笑いながら涙をボロボロと流しながら礼を言うイリア。その姿はとても滑稽だが、それでも今の彼女はとても嬉しそうで、見ているこっちまで涙が溢れそうになる。

そしてなのはもまた、イリアの様に泣く事はないが同じぐらい嬉しかった。アルが本当は独りでなく、こんなにも沢山の彼を思う人達がいた事が。

それと共に、絶対にこの思いに応えなくてはと決意を新たにする。

「時間が無いので、直ぐにでも始めます」

『はい！』

なのは達が力強く返事を返す。

イリアもまた涙を拭いて立ち上がる。そこにはもう先ほどまでの泣き顔はなく、アルと同じ決意を秘めた眼差しで前を見ていた。

それを見たセイリは、ああ、やはり兄妹なんだな、と心の中で思う。

「いきます」

セイリが目を瞑り、両手を上を見上げる様に両手を広げる。それと共に辺りに輝いていたリンカーコアの輝きが強くなる。

イリアを星王とする儀式が始まった。

「我、時間と空間の狭間に残されし古(いにしえ)の星王。今この時より継承の儀を」

セイリの言葉と共に、セイリの足元に蒼白の王家の紋章が現れる。

「汝、次代の星王よ。我は汝の奪われし証を与え、汝、我が力を継承せし覚悟はありや」

イリアの瑠璃色の瞳に、セイリの灰色の瞳が鋭い視線を向ける。

「我、次代の星王。先王の力を継承せし覚悟はここに」

イリアの足元に、この金色の世界でもハッキリ見えるぐらいに輝く純白の紋章が広がった。

「我が力に汝が意志を」

「一族の誇りを持ち、我らが因果を絶ち、未来を変える！」

自らの意志を示したイリアに、セイリから蒼白の光が流れ込む。

その勢いと現象に一瞬驚くも、直ぐにそれが星王の力なのだと理解すると、両手を大きく広げて目を瞑り、流れ込む力に身を任せて全身で受け止める。

光の奔流はどんどん勢いを増し、イリアの身体に濁流の如く流れ込む。その度に身体の奥から満たされていくような感覚が広がっていく。

その感覚に体が満たされた時、イリアに注ぎ込まれていた光の本流が勢いを失って収まっていく。

「これで、継承の儀が終了しました」

その声を合図にイリアが目を開けると、そこには身体が白い光の粒子となって霧散していくセイリの姿があった。

「セイリ様！？」

その現象に驚き、イリアが声を上げる。

「今の我は星王の力が具現化した物。故にその力を継承すればこうなるのは必然です。貴女が気にする必要はありません」

「で、でも……」

「此れで良いのです。これで、我は漸く眠る事が出来る。さあ、時間がありません。此処は私が消えてると壊れて消失します。その前に早く。遣り方は、分かっている筈です」

セイリは消えながらイリアに優しく微笑む。

イリアはその微笑みを心に焼き付け――

「……はい」

と言って彼女に背を向けた。

「……行きます。みんな、輪になってください」

イリアの言葉に従い、なのは達はイリアを囲む様に輪を作る。
イリアは深呼吸を一度すると、頭の中に浮かんでくる言葉を口ずさむ。

「絢爛たる星々の煌めきよ、我らを過去へ導く道標となれ」

イリアを中心に、淡い蒼白の紋章が浮かび上がる。
星王の根源ともいうべきセイリから、その力と共に魔力を継承した結果、イリアの魔力光は汚れのない純白から淡い蒼白へと変わったようだ。

「アル・スフィニールの生きている時間へ！！」

イリアが展開した紋章が瞬く間に広がり、なのは達を淡い蒼白の光が包み込む。それと共に辺りのリンカーコアが輝き、相乗効果で更にイリアの紋章が強く輝く。

そして、限界を迎えたリンカーコア達が一斉に弾け、同時にイリア達を包んでいた淡い蒼白の光が忽然と消え、イリア達は姿を消した。

残ったのは金色の世界と、消えかけたセイリのみ。

「……」

セイリは無言で過去へと跳んだイリア達がいた所を見詰め続ける。

「もう、未来は見えない。けれどそれは、新たな可能性が生まれた証拠」

今のセイリを構築する光の粒子が解けていき、胸の部分まで消えて来ている。

「貴方達なら……きっとより良い未来を迎える事が出来る」

セイリは嬉しげな、それでいて満足そうな笑顔で――

「信じています。この呪われた運命を打ち破れる事を」

光となって消えた。

――我が愛しき子供達よ。

そして、この未来の星の雫もまた、砕けて消えた。

第二十一話　天空の最終決戦　未来を撃ち抜く星の輝き

時間とは、過去から現在へと流れ、そして現在から未来へと駆け抜けるモノ。それに干渉する事ができるのは、世界の気まぐれに巻き込まれた場合のみ。世界を構成する分子の一つでしかない人の子には、永遠に介入する事の出来ない絶対不可侵の領域。

しかし、もしそれを意図的に行えるとすれば。それは物質でない事が条件になる。時空の壁を乗り越えるのは物質には不可能。なれば、物質を持たない意志だけならば時空の壁を飛び越える事が出来る。

理論的には可能でも、実際の問題はとても多い。まず、飛び越える者の意志の強さ。戻りたい過去へのイメージが強くなければ戻れず、例え戻っても別の人間に乗り移ってしまう可能性がある。もう一つは精神力。過去へ無事に戻った時、その時まで持続している意識に未来の意識が流れ込む事によるショックに耐えられるか。そして、時空の壁を飛び越えるだけのエネルギーの確保。

大きく分けてもこれだけの問題がある。更に、過去へ戻るだけが問題ではない。戻ってからも問題はある。

それは――過去を変えられるかどうかだ。

「これが絶望。これが貴方達の限界。これが私と貴方の差」

アルとリリスを除いたこの場にいる人の意識にノイズが走る。

この後リリスがアルに攻撃し、アルがそれをリミットブレイクで切り抜け、リリスを相打ちし、星の雫の中でセイリと出会い、こうして過去に戻ってきた事。いろんな情報が脳に直接流れ込んできた。

「これが絶対の力を持つ星王」

だがそれをまさしく未来の自分の意識が割って入ってきた様な感覚だった。だが、どちらも自分でありまたどちらの意識も、一つの意識として継続して続いている。

そして、この未来を変えろと言ってくるかの様に、体の傷が、体力が、魔力が回復していく。

「まだ……だ……まだ終わって、ない。諦めて……たまる、か……！」

「魔力も残ってないくせによくやるわね」

目の前で繰り広げられる巻き戻しをしたかのような二人の台詞。

まだ、アルが生きている。過去に戻ってきたなのはとイリアは、ただそれだけで涙が溢れそうになるほど嬉しかった。

クロノもフェイトもはやてもヴォルケンリッターの四人も、ちゃんと過去に戻って来れた事に安堵する。

「もういいわ。もう十分この力は試せたから」

左手の輝きを一つの魔力球へ昇華させ、バチバチとエネルギーが弾ける。

このままでは同じ事の繰り返しだ。そして、今度も同じ奇跡が起きるとは限らない。

セイリが、星の雫に取り込まれた人々が望む最良の未来。その未来を夢で終わらせず、現実にする為には……。

（アル君に、リミットブレイクさせないっ！）

なのはがレイジングハート握る手に力を込める。

「さようなら。愚かでお莫迦なお兄ちゃん」

リリスの目の前に出現した銀色の魔方陣に銀色の魔力球を叩き付け――

「刹那の輝きに時を見よ！　アストラル――」

「バスター！」

「――なっ！？」

発射しようとした瞬間。桜色の閃光がそれを遮ってリリスを襲う。

「きゃあああああ！？」

爆発と共にリリスの悲鳴が夜空に木霊し、硝煙がリリスを包み隠す。

突然な事態に、アルはただただ目を丸くして声もなく驚く。動けないと思っていた人間が、先ほどよりも威力が上がった最速砲撃を放つなんて露ほどにも思っていなかったからだ。

そんな風にアルが呆然としていると、その前になのはがレイジングハートを左手に握って立ちふさがる。

「もう、さっきみたいにはいかない！　アル君は、私たちが守る！」

その後ろ姿を見上げるアルには、先ほどまでのなのはとは比べ物にならないほど、その背が大きな背中に見えた。

このわずかな間に、彼女の身に何が起きたのかわからない。だが、その力強さはかつて自分が両親から感じていたモノによく似ている気がした。

大切な家族を守る事に誇りを持っていた父。そんな父の隣に並び立つ事に誇りを持っていた母。

二人の面影を、アルはなのはの背に幻視した。

「くぅ……い、痛いっ……。私が、星王たるこの私が……なぜ、星の民ですらない子供の一発にダメージを……！？」

晴れた硝煙の中から、左手を抑えて呻くリリスの姿が現れる。

抑える左手の掌は手袋の部分が消し飛び、火傷を負ったように僅かに煤（すす）けいる。一度たりとも抜けなかったリリスの防護服（バリアジャケット）を抜いた証拠だった。

「それは、イリアが力を貸してるからだよ」

イリアがアルのそばに歩み寄り、立ち上がりかけの身体を支えて立ち上がらせる。その身体から薄らぼんやりと蒼白の光を放って。

「なっ……せ、星王化？　そ、そんなバカな。だって、あの子の紋章は私の中に抜き取った筈……！　星王になれる訳が……！」

リリスがイリアの状態を見て動揺を隠せない。

それはそうだ。アルと同様に未来の記憶を持たない彼女が、真に星王となったイリアの急激すぎる変化を理解できるはずがない。

「ホントに、イリア……なのか？」

「うん、イリアだよ。お兄ちゃん」

アルから見たイリアは、先ほどまで器の中で守られていた少女とは思ないほど変わっていた。見た目的には、光っている事以外は殆ど変わらない。だが、その内面はとても大きく成長していた。

未来で兄の死を体験し、兄を想い心配してくれる人達を知り、そして星の民の知られざる秘密と運命を知り、星王になる事を受け入れた。アルという兄を持ち、テトとルルという両親を持つ星王家の正統王位継承者の長女。これだけの素質があれば、階段を何段階も飛び越えた成長ぶりを発揮してもなんら不思議はない。

しかし、それを時間に表せば二～三時間は経っているかもしれない。だが、未来から戻ってきた事を知らないアルにとっては数十秒の間に起きた出来事と変わらない。

混乱するリリスの四肢に、水色のリングバインドが捉える。更にその左右にフェイトとシグナムがリリスの首元にデバイスを突きつけて現れる。

「もうこれ以上、好きにはさせない」

「やられた借りは返させてもらうぞ」

「くっ！」

ギロッという擬音が聞こえてきそうなほどの迫力で、リリスはフェイトとシグナムを交互に睨みつける。

「少し殴りすぎるかもしれないが……。どうせ捕縛する為の戦闘だ。遠慮する必要はないな」

「まぁちょっとだけ、縮むかもしんないけどな」

口元を僅かに吊り上げて言ったクロノに、ヴィータは同じ様にニヤリと笑う。

頭に血が上りやすいヴィータと常に冷静沈着がモットーのクロノが、揃って不敵な笑みを浮かべて同じ様な事を言うのは……ただただ不気味だ。

「二人ともちょっと怖すぎや」

「気持ちは分からなくもないですが……」

「せめて騎士らしく正々堂々としてほしいものだな」

はやて、シャマル、ザフィーラがぼやく。

だがそんな三人も戦意は十分らしく、デバイスと拳を握って上空を見上げている。

「くっ……ぐぅ……っ！！」

ギリギリと砕けんばかりに歯を喰いしばり、フルフルと怒りに身体が震えだす。

何が起きているのかわからない。何が起きてこうなっているのかが理解できない。天才と謳われ不可能を可能とまでして見せた自分の頭脳を持ってしても、意味が全く分からない。

それが非常に悔しい。そして今、自分でも理解できない現象をいとも簡単に起こして見せ、こうして自分を拘束している魔導師たちが憎たらしい。

「小娘如きに……！」

腹に響く様な低い声がリリスの俯いた口から洩れる。

「この、私がっ……！」

最早女性としての矜持すら頭の中から消え失せかけているリリスは、歯を剥き出しにして怨嗟の声を上げる。

ゾワリとリリスの銀髪が逆立ち、その身体から銀色の魔力が滲み出る。

「星王たる、この私が……！」

フェイトとシグナムは、リリスの強大な力と共に放つあまりにも大きな気迫に気圧され、僅かに身を引く。

次の瞬間――

「負ける筈はないっ！！」

リリスの怒声と共に、溢れた魔力が爆発するように吹き出す。

吹き出した魔力がリリスの身体を取り巻く水色のバインドを吹き飛ばし、更に傍に控えていたフェイトとシグナムまでも吹き飛ばしてしまう。

その衝撃波はなのは達のいる所まで届き、なのは達の立っている神殿の最上部に強風が吹き抜けていく。

「本気……だね」

なのはが視線をリリスから離す事無く呟く。

リリスから噴き出した魔力はいくつもの光球となって集束され、略式の集束砲撃の様な砲門としてリリスの周囲に無数に生成されていく。

「ああ、そうだな。みんな聞いてくれ」

クロノはリリスが砲撃をチャージしている間に全員へ念話を送る。

『彼女の力が僕らに通じなくなった事で、彼女はこれまでの様な手加減はしてこなくなる。こちらも気を引き締めて行くぞ！』

『おう！』

アルとイリア以外の全員から力強い返事が返ってくる。

それを待っていたかのように、リリスの砲撃のチャージが終了する。

「全てを撃ち抜け！！」

《Ａｓｔｒａｌ　Ｒａｚｏｒ　Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｂｕｒｓｔ》

集束された魔力はまるで花火の様に、リリスを中心として爆ぜ、銀色の砲撃が飛び散った。

それを合図にアルはイリアに連れられて星の器の中に退避し、なのは達は二人一組で空へと舞い上がる。はやてとクロノ。シャマルとザフィーラ。なのはとヴィータ。フェイトとシグナム。それぞれ最も相性の良い相手と共にリリスへと挑む。

そして星の器はイリアが星王となってもその機能を如何なく発揮して二人をリリスの砲撃の雨から守り、なのは達はお互いをフォローし合いながら連続で放たれ続ける砲撃を回避する。

「サンダーブレイド！」

フェイトが砲撃が終わった直後に、環状魔方陣で巻いた金色の雷の剣を多数発射する。

リリスはそれをシールドを展開することで放たれた雷の剣を弾こうとするが、いくつかの雷の剣は弾かれる事無くリリスのシールドに突き刺さる。

「ブレイク！」

そしてフェイトがキーワード唱え、シールドに突き刺さった雷の剣

が爆破されて放電による広域攻撃へとシフトする。

「ぐぅ……！　はぁあああ！！」

だがリリスは魔力に物を言わせて無理やり放電を引き千切る。

「レヴァンティン！」

その隙にフェイトの正面に躍り出たシグナム。

《Ｊａｗｏｈｌ！　Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！》

鞘に納められたレヴァンティンがシグナムの掛け声でカートリッジを一発排出。

「はぁあああ！　飛龍、一閃っ！！」

シグナムが気合の雄叫びと共にレヴァンティンを一気に引き抜き、踊る様に振り回す。その動きに合わせて薄紫色の炎を纏った連結刃（チェーンエッジ）がリリス目掛けて乱舞する。

「そんなモノっ！」

《Ｓａｃｒｅｄ　Ｃｈａｉｎ　Ｅｄｇｅ》

連結刃を模した銀色の鞭がリリスの左手に現れ、リリスもシグナム同様にそれを振るう。

シグナムの薄紫色の炎を纏った連結刃（チェーンエッジ）とリリスの銀色の魔力光のチェーンエッジが二人の間で衝突し合い、絡み合う。

だが所詮リリスのは魔力で構築した代用品。実体と質量を持つシグナムの連結刃（チェーンエッジ）と渡り合うには強度が足りなかった。

シグナムがレヴァンティンを回すように振るい、リリスのチェーンエッジを巻き込んで思いっきり引く事で、リリスのチェーンエッジを引き千切る様に破壊する。

リリスは一瞬悔しそうに顔を歪めるが、直ぐに笑みを浮かべて次の魔法を展開する。

《Ｅｄｇｅ　Ｂｌａｓｔ》

シグナムに砕かれたセイクリッドチェーンエッジの欠片が輝き、まるで羽虫の様に縦横無尽に駆け回る小さな魔力弾となってシグナムに襲いかかる。

「くっ……」

シグナムは急いでレヴァンティンを自分の周りに渦を巻くように振るい、竜巻状に取り巻くレヴァンティンの連結刃（チェーンエッジ）が襲いかかるエッジブラストの光刃を蹴散らす。

「撃ち抜け、雷神！」

その背後からフェイトが飛び出し、大剣のバルディッシュを振り被る。

《Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ》

大きく振り被ったバルディッシュを勢いよく振り降ろす。だがその距離は遠く、到底当たるとは思えない。

しかし、振り下ろした勢いと共に金色の半実体魔力刃が伸縮し、見事にリリスを射程に捉える。

「くっ……あああああ！！」

《Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ａｒｍｓ》

リリスの両腕に銀色の魔力が集束し、まるで手袋状で前腕部も覆っている籠手の様になる。

その銀色の魔力光の籠手に覆われた左腕を引いて拳を握り、迫りくる金色の大剣の魔力刃に向かって、握った拳を打ち出す。

ガコォン！！と轟音を響かせて激突した両者の攻撃は、接触している部分で火花散らして電撃が迸り銀色の光が溢れている。

「はぁああ！！」

一見互角に見えた迫り合いも、リリスの残った右腕の一撃と共に、再び轟音を響かせて文字通り殴り飛ばした。

そして、右腕に装填されていた魔力を魔力球に変換。それを大技の後の硬直で動けないフェイトに向け、銀色の魔力を解放する。

「あ……」

フェイトも気が付くが、ジェットザンパーを使った反動とバルディッシュの刀身を殴られた衝撃で体制を崩し、二重の反動で動けない。

バルディッシュも刀身を即座に戻そうとするが、リリスの砲撃の方が速い。

「テスタロッサ！」

そこへ、レヴァンティンの連結刃（チェーンエッジ）が前を横切る。フェイトは反射的にそれを魔力でガードした右手で掴み、シグナムが思いっきりレヴァンティンを引いて連結刃（チェーンエッジ）を引き戻し、フェイトを砲撃の軌道から救出する。

「ありがとう、シグナム」

「礼は後だ。来るぞ！」

シグナムが見上げた先では、いた。リリスが左手の魔力も別の魔法へ変換して左掌に銀色の光球を浮かばせていた。

《Ｓｔａｒ　Ｓｐｌａｓｈ》

光球を持つ左手を突出し、同時に光球が弾ける。弾けた光球からは小さな小さな銀色の礫が溢れ、さながら壁の様に迫ってくる。

少し前、アルの母親であるルルが使っていた魔法と同じ魔法である。だが、そこ数はルルとは文字通り桁が違う。

しかし――

「二度も同じ手は効かんよ！」

アースラチームの砲台こと八神はやてが詠唱していた魔法が発動する。

「本日二度目の……」

金色の剣十字の杖を振り上げるはやての視線とフェイトとシグナムの二人の視線が一瞬交わり、二人はアイコンタクトを交わして左右へ回避しながらなのは達の方へと戻る。

「デアボリック・エミッション！」

その行動と共にはやてが杖を振り下ろし、漆黒の光球が急速に膨張しながらリリスの魔力弾の礫の壁を呑み尽くしていく。

そして全ての魔力弾を消し去ったはやての広域空間攻撃が消滅した直後、リリスの頭上でヴィータがグラーフアイゼンを振り上げた。

「轟天、爆砕！」

勢いよく振り上げたヴィータの身の丈ほどもあるグラーフアイゼンは更に数十倍にまで巨大化する。

「なっ！？」

「ギガント、シュラークッ！！」

ヴィータは振り上げたグラーフアイゼンを思いっきり、リリスに向かって振り下ろす。

「くっ！」

リリスはとっさに込められるだけの魔力を込めて、振り下ろされるグラーフアイゼンのハンマーヘッドの打撃面よりも広いラウンドシールドを三つ展開する。

ヴィータは展開された三つのシールドにグラーフアイゼンを叩き付けるが、リリスはシールドをクッションの様にして受け止める。

「ぐっ……！」

「このっ……！」

お互い全力で向かい合う。ヴィータは全身の力を使ってグラーフアイゼンを押し付け、リリスは全力で魔力を流し込んでシールドを強化、補正し続けて耐える。

そこに――

「エクセリオンバスター・フォースバースト！」

レイジングハートをこちらへ向け、四発のカートリッジを排出し、魔力をチャージし始めているなのはの姿がリリスの目に飛び込んできた。

リリスはそれを見て、直ぐに右掌に環状魔方陣が二つ交差するように巻き付いた銀色の光球を生成する。

レイジングハートの杖の先に桜色の光球が膨れ上がり環状魔方陣が取り巻く。

「ブレイク……！」

なのはの掛け声で、光球から四発の砲撃が左右上下の四方向から放たれる。

「フィールドオープン！」

《Ｆｏｒｃｅ　Ｆｉｅｌｄ》

リリスの右掌に生成した銀色の光球は膨張してリリスを包み込み、彼女の知る防御魔法の中で最も強固な防御力を誇るフィール系防御魔法として発動する。

直後、桜色の四つの砲撃がリリスの展開したフィールドバリアを捉える。

「シューーートッ！！」

四発の砲撃の中央から更に巨大な砲撃が放たれ、リリスを桜色の砲撃が包み込む。

しかし――

「くっ……あああああああ！！」

リリスは魔力を更に全開にしてフォースフィールドに回し、フィールドの面積を先ほどよりも急激に膨張させてヴィータのグラーフアイゼンとなのはのエクセリオンバスターを弾き飛ばす。

「んなっ！？」

「うそっ！？」

ヴィータとなのはが驚愕する。

ここまでかなりの魔力を使わせている筈なのに、彼女はそれ以上に魔力を湯水の如く放出していた。にもかかわらず、まだ魔力が底を突く様子をまるで見せないその力の大きいさは、まさしく魔王そのもの。

これが、ユーノの言っていた「無限の力」なのだろう。

星の雫から半永久的に供給され続ける魔力。それが底なしの魔力の原因だとわかっていても、肝心の星の雫は彼女と融合している為、彼女を倒さない限り封印することも破壊することもできない。しかし、リリスを倒すには星の雫をどうにかしなければならない。この矛盾が決定打を与えられない原因だ。

だが――

「いくよ、フェイトちゃん！」

「うん、はやて！」

まだ誰も――

「させるものですか！」

「それは、こっちの台詞です！」

諦めてなどいない。

両者に向かって両手を広げて砲撃を放とうとしたリリスの両腕を、シャマルが旅の鏡を展開してザフィーラが両手を突っ込んで無理やり照準をズラす。

ズレた砲撃はあらぬ方向へ飛んでいき、その身体を更に水色のバインドが取り巻く。

「ストラグルバインド。これなら数秒だけ、貴女の動きを止める事が出来る。だけどまぁ、数秒あれば十分だ」

クロノがフェイトとはやてにアイコンタクトで合図する。

二人は小さくコクリと頷くと、自分たちの最強の魔法の発動体勢に入った。

「雷光一閃！」

リローダーに残ったカートリッジ三発を使い切り、高速の儀式魔法によって発生した雷がバルディッシュの刀身に落ちる。

「プラズマザンバァァ！」

その雷のエネルギー刀身に蓄積させ紫色の雷が迸るザンバーフォームのバルディッシュを振り被る。

「響け、終焉の笛！　ラグナロクッ！」

はやての足元に白いミッド式の魔方陣、そして正面には白いベルカ式の魔方陣が展開され、ベルカ式の魔方陣の三角形の角三つに光球が三つ生成される。

フェイトとはやての二人は離れていながらも目と目でタイミングを合わせ、自分のデバイスを振り下ろす。

『ブレイカー！！』

フェイトの金色の雷を纏った大出力砲撃と、はやての白い砲撃の広域攻撃がバインドで身動きのできないリリスを飲み込む。

正反対の二方向から注ぎこまれる魔力が混ざり合い、白と金色が拮抗しながら鬩ぎ合う。

素捨て二人の魔力放射が終わり、安定していた魔力のバランスが崩れ、物凄い轟音と衝撃波を伴って大爆発。大量の硝煙がフェイトとはやての間を遮る。

「……すごい」

その様子を一瞬たりとも目を逸らす事無く見ていたアルは、無意識に呟いた。

何があってこんな状況になっているのかは今だに理解できないが、それでも今、目の前で戦っている彼女たちの本当の全力を見れば、それがどれだけ凄いことかが見てわかる。

ついさっきまでボロボロになっていた彼女達とはまるで違う。星王となったイリアの力添えがあるとしても、これほどの実力があったとは思わなかった。

（これが……アイツらの本気の力……）

勝てない。アルは素直にそう思った。いや、そう思わざる負えなかった。

自分が彼女達と互角以上に戦えたのは一重に、星の雫の恩恵があったからこそ。そしてその星の雫が無い今、自分は彼女達には絶対に勝てない。

「……っ」

アルは無意識の内に固く拳を作り、血管が浮き出てくるほど強く握

りしめていた。

悔しかった。さっきまでは自分が彼女たちの中で唯一リリスと対等に戦える存在だったはずなのに。だが今、数で上回っているとはいえ彼女たちはリリスを圧倒している。

今でさえ、彼女はフェイトとはやてのオーバーSランク級の魔法の二つも直撃を受け、未だに硝煙の中から出てこない。倒せてはいないのだろうが、相当なダメージになった筈だ。

しかし――

「ふ、ふはははは」

聞きたくない声が響いてきた。

「あはは、あハハハハハ！！」

硝煙の中から銀色の閃光が瞬いたと思ったら、特大の砲撃が空へと撃ち上がった。

撃ち上がった砲撃の衝撃波で、未だ大量に漂っていた煙が排される。

「ハァ、ハァ、この程度で……はぁ、この私を倒せれるとでも！？」

晴れた煙の中から現れたリリスが吼える。だがその防護服（バリアジャケット）はもうかなりボロボロになっていて、先ほど砲撃を放ったと思われる左腕で右腕を庇いながら僅かに前傾姿勢で息も絶え絶えの状態。

だが、その魔力に衰えが全く感じられない、万が一回復魔法を使われるとまた振出しに戻る事だろう。そうなれば、未来は変わらない。いや、むしろより最悪なモノになりかねない。

「化けもんかよ、アイツは」

ヴィータが嫌々しく呟く。

確かにバインドで拘束されながら防御魔法もなく、あれほどの魔力爆発の中心に居ながら、倒れるどころか耐えきって見せたのは正直思ってもみなかった事だろう。

「星王の力を借りたと言っても、所詮は余所者。本当の意味で力を使いこなせる筈がない！」

確かに今の彼女達でも、リリスを一撃で倒し更に星の雫までも同時に破壊するには、威力も魔力も全然足りない。

全員の最強魔法を同時にぶつけない限り無理だろう。だが、そんな分かりやすい攻撃をリリスが許す意筈がない。

再び両掌に魔力をチャージし始めるリリス。

だが――

「させない！」

ゴゥ！と唸る桜色の砲撃がリリスの魔力チャージを遮る。

「未来を変えてみせるって、みんなで誓った。だから、絶対あきらめない！」

「私を倒すまで？　なら、また無様に這い蹲らせてあげるわ」

「なら、何度でも立ち上がって見せる。あなたを倒すまで、なんどでも！！」

アルはちょうど正面の方向で白い防護服（バリアジャケット）を着て、不屈の心の名を持つ魔導師の杖をもって空に佇み、勇敢にリリスへ挑む魔導師を見上げる。

凄く遠い所で彼女は戦っている。仲間と共に、未来を賭けて強敵と挑んでいる。

自分も飛べば、彼女たちがいる高度まで行くことは簡単だろう。

だが――

「遠い……」

それだけでは辿り着けないほどの大きな距離を感じていた。

自分は地上で這い蹲りながら届かない空を見上げ、そして彼女は自分が見上げる空の上で悠然と自分の輝きを放っている。

いつか自分が捨てた物（誇り）でさえ彼女は持っていて、自分じゃ絶対に届かない所に彼女はいる。

地位や生まれ、友や家族、そしてこれまで過ごしてきた環境。アルとなのはとでは何もかもが違う。

だが、それでも二人には共通している事があった。

（それでも……オレは……）

それは――

（もう一度、あそこへ……）

どんな時でも絶対に諦めない心。

（もう一度、あの場所に立ちたい）

今、なのはが立っている場所。かつて自分もあそこに立っていた場所。イリアを守ると誓った時から、ずっとそこへ立ち続けていたはずだった場所。

だが、今の自分はそこに立つ事を自分からやめて、ただ下からそこを眺め、憧れるばかり。

そう……思っていた。

「お兄ちゃん」

アルと同様になのは達の戦いに見入っていたイリアが話し掛けてくる。

「イリア、みんなと一緒に戦いたい」

「え？」

まさかイリアが自分から戦いを望むとは思わなかったアルは反応が遅れ、返事が出来なかった。

だがイリアはそれでも続ける。視線はなのは達から逸らさずに。

「みんな、イリア達のために頑張って戦ってくれてるのに……。イリアは、力を貸して、戦ってもらう事しかできない」

星王となってから、イリアは精神面が成長した。それこそ「男子三日逢わねば括目してみよ」という諺の様な、飛躍的な成長を。

けれど、だからと言って彼女が何もせず、ただ自分の代わりに戦ってもらう事を良しとした訳ではない。

「お兄ちゃん」

「……イリア？」

イリアがアルを見詰めてくる。その瑠璃色の双眸が、アルの蒼い双眸をしっかりと捉えている。

「一緒に戦おう。仲間と一緒に」

イリアが言いたい事。それは、自分達ではどうあっても星の民の因縁は消せない。けれど、今の自分たちは孤独ではない。仲間がいる。助けてくれて、力を貸してくれる人たちがいる。

だからこそ、今自分達からその舞台に立ち、その因縁を終わらせよ

う。そう言っているのだ。

だがアルにはもう魔力はほとんど残っておらず、そしてイリアもなのは達に力を供給しているせいで戦闘などできるとは思えない。

「初代星王様の力が教えてくれるの。イリア達は元々ひとつ。だから、その能力も、一緒に使えばいいんだって」

イリアの眼はそんな疑問を吹き飛ばしてしまうほどの力強さを持っている。まるで、覚悟はできていると言っているように。

それを理解したアルは、それ以上何も言はわない。ただ、黙って頷いて上を見上げる。

そこには、今の自分では絶対に届かない所で戦っている仲間がいる。

（仲間……か。今までなら邪魔だって、一蹴してたんだろうけど）

認めたくはないが、いつの間にか自分でもそう思っていた。

しかし此処に来て、シグナム達に仲間たちの事を頼み。なのはに共に戦う事の心強さを教えてもらい。そして今、自分は彼女達に守られている。

協力なんては弱い奴らがやる事だ。今までのアルならばそう思っていただろう。

「今は違う」

アルはイリアの肩を借りつつも、自力で立ち上がる。

「アイツらは、アイツらだけは死なせない」

気付かない内に得ていた新たな仲間。星の民の仲間達は守る事が出来ず死んでしまったが、もう一度仲間を得られた。

敵でしかなかったであろうアルを、彼女たちは仲間として受け入れた。それは、守るべき者が増えたという事。

「そうだろ、イリア」

「うん！　もう二度と仲間を失いたくない！」

「オレ達の仲間は、オレ達の手で守る！」

それは、初代星王から脈々と受け継がれてきた意志。

「それが星王としての――」

「それこそがオレ達の――」

ＤＮＡに刻まれた、星の絆。

『星の民の誇り！！』

二人のを守る星の器が金色（こんじき）の輝きを放つ。

天を貫かんばかりに紋章から立ち上る黄金の光がアルとイリアを包み込み、夜の空を金色に染め上げる。

「な、なんや！？」

「こ、これは一体……」

「何が起きてるんだ……！？」

はやてやクロノ、ザフィーラが自分の身体を見て驚きの声を上げる。

いや、はやてとクロノだけではない。フェイトやシグナム、シャマルやヴィータ、そしてなのはの身体も、立ち上る金色（こんじき）に輝いている。

「こ、この現象……まさか！？」

リリスが恐怖にも近い悲鳴のような声を上げる。

今起きている現象に、限りなく近い可能性に気づいてしまったのだ。

――我が子孫たちよ。

立ち上る黄金の光の中。イリアは聞き覚えのある声を聞いた。

――次代の星王よ、よくやった。無事に過去へと戻れたのですね。

未来で見た初代星王セイリが、今度は半透明な姿でイリアとアルの前に現れる。

「あなたは……」

――我は貴女が知るセイリ。僅かな可能性に賭け、お前達に星の雫の力と、我が意志の一部を与えさせて貰いました。

つまり、なのは達には未来の星の雫の力を分散させて与え、そしてイリアには自らの意識の一部を継承時にひっそりと封じ込めていた。

故になのは達は不思議な高揚感と共に魔力と体力を回復させ、イリアは星王の力を使いこなす事が出来た。

――そして今此処に、全ての鍵は揃った。

星王の女性と星の民の男性。二人の心が星の絆（ステールラ・ノードゥス）によって繋がれいて、
そして高ぶった感情がこれ以上に無いほど完全にシンクロした時。
かつて二分された力は、共鳴を始める。

その第一段階が今。

――絆を持った星王と星の民。そしてその絆によって封印が解かれた星の器。そして我が魂を宿し完成された星の雫。全てが揃った時、真に星王の力が解き放たれる。

覚醒した星の器は、星王の力を極限まで増幅させる増幅器（ブースター）。

増幅された星王の力は、星の絆（ステールラ・ノードゥス）によって繋がっている星の民の希少（レア）能力（スキル）と共鳴（リンク）する。

そして星王の魂を宿した星の雫が、二人の最後の扉の鍵を開ける。

――さぁ、今こそ解き放つのです。この世界、アルカディアに燦然と輝く星々の――――光葉（アース・コア）の星光を！

そう言ってセイリは消える。自分の役目は果たし終えた様に。

それを見送ったアルとイリアは、互いに見つめ合い、そして同時に頷いた。

「行くぞ、イリア」

「うん、お兄ちゃん」

アルは右手を、イリアは左手を重ね合わせ、グッと互いに指を絡めて強く握り合い、二人は正面を向いて並び立ち、目を瞑る。

アルから溢れた黒い魔力光がその身を包み、イリアからは淡い蒼白の魔力光がその身体を纏い、二人の魔力光が星の器の放つ金色の光と交わり始め、二人の姿が見えなくなっていく。

そして更になのは達の光も強く、アルとイリアの輝きと同調して大きくなっていく。その光はデバイスを通じ、光の筋となって二人の下へと送られていく。

「リミット――」

それが合図だと感じたアルは一気に希少能力（レアスキル）を解放する。

「ブレイク！」

ドン！という衝撃音と共に黄金の光は弾け、なのは達の輝きも消える。

その光の内から現れたのは、漆黒に輝く光球と純白に煌めく光球。二つの対照的な光は、交わる事無くまた反発する事もなく並び立つ。

全員がその様子を息を呑んで伺っていると、二つの光球はより一層激しい閃光を伴い、なのは達の眼を晦ませる。

そして、カシャァーン！というガラスが砕け散る様な音と共に、光球の壁が粉々に砕け散る。

その中から出てきたのは、柔らかな羽毛を模した魔力によって生成された漆黒の翼と純白の翼を背に宿し、鮮やかな瞳の色はそれぞれの魔力光と同じ黒と蒼白となったアルとイリア。その姿はまるで堕天使と聖天使のよう。だが共通しているのは、星の民の証である銀色の髪。

アルとイリアは翼を羽ばたかせて浮上、そのまま更に翼を羽ばたかせて舞い上がる。

「アル……君？」

なのはが躊躇いがちに尋ねるが、アルは一瞥しただけでなのは前に躍り出る。

「いけるか？　ウルフ」

静かにウルフに問いかける。

《フ……。もう少し自己修復の時間が欲しかったが、仕方ないな》

ウルフ傷だらけのコアを点滅させながら答える。

フレームはアルの魔力で修復されても、本体であるウルフのコアは修復されない。これは、星の民が使うインテリジェントデバイスの欠点ともいえる部分。デバイスが意志投影できるようになる代わりに、コア本体は応急処置では修復できなくなってしまうのだ。

この状態で戦えば、確実にウルフは修復不可能なレベルまで自壊しまうだろう。

「そうか……。もう少しだけ頑張ってくれ、そうしたら……ゆっくり休める」

《フフフ、そうさせてもらおう》

アルとウルフの短い別れの言葉。

この半年の間、ずっと共に戦い、共に生きてきた彼らだからこそ、言葉で飾る必要はない。ただ一言に、全ての想いを込めて、言葉を

交わすから。

キッとリリスを睨みつけるアル。

「此処からは、オレ達が相手になってやる」

アルは、銃剣のウルフを構える。

「これ以上、オレの仲間はやらせない！」

その言葉を聞いたなのはは、アルがようやく自分たちの事を仲間と認めてくれたと理解し、胸が熱くなるのを感じた。

そう、その感覚は、かつてフェイトと初めて友達になれた時とよく似ている。

「そう……そういう事。今までのあなた達の言葉から察するに……未来を知っていたという訳ね」

なのはやさっきのセイリの言葉から、リリスはなぜこうなったのかを推測する。

「その様子だと図星ね。でも未来を行き来した形跡は無い。って事

は――――意識だけ未来から送ってきたという事かしら？」

驚異的な推理力。だが、リリスは元々天才科学者。物理法則や時空間理論については、この場にいる誰よりも詳しい知識を持っている。そこから情報を捻りだし、今までの経過を整理し、現状を理解した。

なのは達の口から洩れたヒントがあった上ではあるが、驚嘆に値するほどの推理力。

「まぁもっとも、貴方以外が……だけどね」

リリスはこちらを睨みつけてくるアルに向けて不敵な笑みを返す。

文字通り彼女は天才だ。その才能を人の為に使えていれば、きっと彼女は歴史に名を残す偉人になれただろう。

「だからどうした。オレが、オレのやるべき事を変えるとでも思ってるのか？」

「まさか、貴方が死ぬのを恐怖するとは思っていないもの」

ふふふっと笑うリリス。だが、確実にその身に魔力を身に纏っていく。

「オレはもう、あの時の様に独りじゃない」

アルもまた同じように魔力を身に纏っていく。

「イリアも、お兄ちゃんと一緒に戦う」

アルが魔力を身に纏うほど、イリアも同じように魔力を解放していく。

三人から溢れ出す魔力が接触し合って、ビリビリと空気が震える。

「戦った事も無いような子供が……私と対等に戦えると思い上がってると――」

フッとリリスの姿が消える。

「死ぬわよ！」

そして次の瞬間、左手に銀色の光剣を握り、それを振りかぶってイリアの背後に現れる。

だが――

「別に思い上がってないもん！」

イリアはその背に宿る純白の翼でリリスの光剣を受け止め、反転すると共に翼を広げてリリスを退ける。

その背からアルが飛び超えてウルフを振るう。

「言った筈だ！」

ガキィン！ガキィン！と音を立てて光剣と銃剣が打ち合う。

「オレ達は、もう独りじゃないと！」

リリスが光剣を横から降り抜き、その動きに合わせてアルがウルフを盾にして受け止めそのまま振り払い、リリスは後ろへと後退する。

「てぇぇえええ！！」

そこでイリアがアルの背後から飛び出し、両手を前へ突き出して蒼白の砲撃を放つ。

「ぐっ……！」

リリスは右手を突きだしてシールドを展開し、イリアの放った砲撃を弾いて逸らす。

イリアの砲撃の放射が終わったと思い、シールド解除した瞬間。今度は黒い砲撃が飛んできた。

「うぁっ……！？」

なんとかヒレンジャクのオートプロテクションが発動してギリギリ砲撃を食い止める。が、砲撃の全てを防ぎ切れずに後方へ更に吹き飛ぶ。

「くぅっ……はぁあっ！」

《Ｓｔａｒ　Ｂｕｌｌｅｔ》

「ふっ！」

《Ｓｌａｓｈ　Ｃｕｒｔａｉｎ》

リリスは吹き飛ばされながらも体勢を整え、アルとイリアに向けて銀色の魔力弾を何発も放つ。

そしてアルはウルフの刀身に黒い魔力刃を形成。それを勢いよく真横に一閃し、描かれた漆黒の軌跡が壁の様に広がってリリスの魔力弾を包み込んで消滅する。

だが、斬撃のカーテンが消えると共に、リリスは砲撃のチャージを終え、銀色の閃光を開放する。

「シューティングブラスター！！」

「オーラスターシルド・ヴァリアブルヘキサ！！」

だがアルの斜め上後方にいたイリアが、掌サイズの六芒星を象った正六角形の淡い蒼白のシールドが群れを成すようにアルの前方に展開する。

リリスの放った砲撃は淡い蒼白の壁に阻まれて霧散。

「くっ、ならば！」

リリスが高速移動魔法を発動して一気に距離を取る。

「逃がすか！」

「させない！」

アルとイリアも翼を羽ばたかせてリリスの後を追う。
フェイトやはやて達が上げる先で、一本の銀色の光の帯に二つの黒と淡い蒼白の軌跡が交錯する。

「くっ、この！」

リリスは両手に光剣を持ってアルとイリアとを迎え撃つ。
アルとリリスが斬り結び、夜空の中で交差する。一瞬の隙を突いてイリアが砲撃を叩き込み、それを回避してリリスは魔力弾を乱射する。
しかしそれをアルが撃ち落とし、イリアはシールドで弾いて逸らし、再び高速の中でリリスはアルと交錯する。

（何なの！？　この二人の異常な呼吸の合い様は！？）

アルと剣を組み合させればイリアがバインドや砲撃を使用し、逆にイリアを攻撃すればアルに阻まれ、反撃される。そしてまた反撃すればイリアが食い止め、魔法使用直後の隙をついてアルが攻め、そしてまた――――の繰り返し。
まるで、お互いが何をするのかがわかるかのように。

なのは達のコンビネーションも十分驚異的だった。だがあれは、お互いの出来る事と出来ない事、そしてお互いの実力を細部まで知っているからこそできるコンビネーション。

しかし、アルとイリアは違う。アルはともかく、イリアはろくに魔法を使った事がなかった。なのにこの戦闘技術。天才でもあり得ない。

（すごい、身体が勝手に動く。何をすればいいのか、すぐに頭の中にでてくる！）

一方、イリアは今自分に起きている現象に驚嘆していた。

これも星王となった恩恵なのか。戦闘のせの字も知らなかった自分が、こんな高度な戦闘を繰り広げている。

いや、違う。これは兄の戦闘経験だ。旅だってからの半年で培ってきた幾多の戦闘経験が、イリアの中で自分の経験として活用されているのだ。

筋力や俊敏力が足りない部分は魔力でカバーし、兄となんら変わらぬ動きを実現している。

（分かる。次にイリアが何をするのか、手に取るようにわかる！）

そしてアルもまた、イリアが次に何をして、どんな事をしようとし

ているのかが頭の中に直接流れ込んできていた。
星の絆（ステールラ・ノードゥス）で繋がった事で、イリアが何を考え、そしてアルが何をしてほしいのかがわかるのだ。
感覚、経験、思考、感情、意識。その全てを共有している。
これが、これこそが初代星王として謳われ現人神と讃えられたセイリオス・スピカ・コンストレーの、族長に星の加護と呼ばれた希少（レア）能力（スキル）。そして、一族を救い、アルカディアを統一した魔法。ステールラ・ノードゥス。
かつてこの魔法は、かつての星の民を一つにまとめ、そして心を一つにして一族を守り。そしてその能力をアルカディアの人々の心を一つにして世界を平和に導いた王にのみ許された究極の魔法。
『はぁあああああ！！』
アルは銃剣を、イリアは淡い蒼白の光剣を持って乱舞する。
「くっ……ぁあああああ！！」
最初は二本の光剣でアルとイリアの剣撃の嵐を捌けていたリリスだが、徐々に加速していく二人に次第に着いていけなくなり、ついにその斬撃をその身に浴びる。

それに伴ってウルフのフレームもボロボロになっていく。だが、まだ壊れる訳にはいかないと、修復（リカバリー）しながら耐える。

だがリリスはそこで、あり得ないモノを目にする。

そこには――

「ま、まさか……」

桜色の恒星の様な光球を生成している、なのはの姿があった。

アルとイリアがリリスと戦い始めた時から、遥か上空で魔力を集束して準備していた高町なのはの最強にして最高の魔法。

周辺の魔力を掻き集め、体内を通さずに直接使用する魔力集束という最上級技術（エキストラスキル）。その技術で造り上げたなのはオリジナルの集束型砲撃魔法、スターライトブレイカー。

「う……見つかった!?」

だが、まだ集束の途中。まだイリアを一撃で倒し、そして星の雫を破壊するだけの魔力が集束できていない。

「小娘が！　小賢しい真似をぉ！！」

リリスがアルとイリアの包囲網を突破し、なのはへと肉迫する。

「さ、せるかぁぁあああ！！」

その後をアルが追う。

だが、リリスの前に回り込んだのはイリアだった。

「そうは……させない！」

イリアは右手を開いて前に突き出し、淡い蒼白の魔力を解放する。

解放された魔力は砲撃となってリリスを直撃し、爆発と共にリリスが後方へ吹き飛ばされる。

「ぐっ……」

なんとか体制を整えるリリス。だが――

「これが――」

動きの止まったリリスに向かってイリアが両手を開いて突き出す。

「オレ達の切り札！」

その反対側で、アルはウルフを腰に差して同じように両手を開いて突きだす。

アルの方から黒い光の閃光が放たれ、リリスを光の輪で捉える。更にイリアの方からも淡い蒼白の光が走り、リリスを同じように捕縛する。

『七星縛鎖（しちせいばくさ）・星煌陣（せいおうじん）！！』

放射されていた二つの光がリリスを中心に置いて、淡い蒼白と黒の二つの光が環状魔方陣を交互に描いて取り巻く。

そしてリリスの周りに六つの光点が現れ、それぞれが正六芒星を描いて環状魔方陣が弾け。更にリリスの身体を中心に一点が生まれ、リリスの身体を大の字で宙に張り付ける。

「ぐっ……このっ……！　外れない！」

リリスが必死にもがくが、真に星王セイリの力を継承したアルとイリアの二人が全力で張ったこの捕縛魔方陣は解けない。

しかし、それだけでは終わらない。

「ぐっ、ぁあああ……！？　ち、力が……力が、抜け……る」

二人が展開した捕縛魔方陣が、リリスから魔力を奪い去っていく。

中央の光点がリリスのリンカーコアから魔力を吸収、それを周りの六つの光点に流して捕縛陣を相乗効果で強化し続ける。

そしてこれで、全ての準備は整った。

だが――

「まだよ。まだ、まだ手は残ってる！！」

リリスは捕縛陣に魔力を奪われるよりも膨大な魔力を解放して、特大のフィールドバリアを二重で展開する。

捕縛魔方陣の魔力吸収速度をも凌駕する魔力で構築された二重のフィールド系防御魔法。

いくらなのはのスターライトブレイカーでも、これは破るだけでも難しい。

同じ理由でフェイト達にも破る事は出来ない。そして、アルとイリ

アも捕縛魔方陣を展開しているために動けない。

一瞬、なのはの脳裏にあの光景が蘇った。アルがリリスと共に爆散したあの光景が。

（ダメ！　そんな未来は絶対にもう起こさせない！）

だがなのはは諦めない。諦めたらもう一度あの光景を見る事になる。

自分と同じ不屈の心を持つ彼を、もう一度目の前で失う事になる。

（そんなの……）

グッと唇を噛む。

「そんなの絶対にイヤだ！！」

なのはは半ば叫ぶようにレイジングハートを振り上げる。

その時――

――君に……全て託すよ。

頭に優しい男性の声が響いて――

――私の……私達の大切な子ども達を……救ってあげてください。

優しい女性の手が、頭を撫でた気がした。

そして次の瞬間、変化は起きた。

桜色の光球に純白の光が混じり、さながら宇宙（そら）を流れる彗星の如く薄らと微粒子の雲を纏って、幻想的な輝きを放っていたのだ。

「全力……全開！」

なのははその声の主が誰なのかを直感的に理解した。だから、自分の持てる全てを持ってその想いに応える。

集束した光球が更に強く、より強く輝きを増す。

その様子を見ていたアルが、これならば行けると確信する。

「撃てぇえ！　高町なのはぁーー！」

アルがなのはに向かって叫ぶ。

「シューティングスタァァ――」

彗星の輝きを放つ星光の光球へ向かって振り降ろす。

瞬きのような一瞬の静寂と圧縮の後――

「ブレイカァァアアア！！」

弾けた星の輝きは二重螺旋の光の帯を伴いながら、彗星の如くに落ちてゆく。

それは一直線にリリスへと向かい、まるで彗星の様に星が燦然と輝く夜の空を駆け抜けていく。

アルとイリアは、リリスを残して直前の所で左右へ飛び去り、リリスは展開した二重の防御魔法で耐えようとして見せる。だが、そのバリアはあっけなく二枚とも砕け散る。

「ぁ……ぁぁ！　あああああああああ！！」

驚きと悔しさと恐怖とが混じった表情のまま、悲痛な断末魔と共にリリスは桜色と純白が綺麗に混じり合った星光に飲み込まれて消えていく。

リリスを飲み込んだ彗星の輝きは、神殿をも飲み込み広がってゆく。

星光の爆発が、この世界で生まれ育ち死んでいった全ての星の民の無念と、この世界の文明の終わりと共に死んでいった人達の恨みも巻き込んで真っ白に塗り潰されていく。

そして、この世界で最も天に近い塔が音を立てて崩れ落ちてゆく。

全員が見守る中、神殿は壮絶な崩壊音を轟かせながら周囲の森や山を巻き込んで倒壊していき、やがて音も止み、夜の世界に終わりが訪れる。

空から見える世界の果てから、新たな夜明けと共に太陽が顔を出す。

その輝きは、アルとイリア。たった二人の星の民の、新しい歴史の始まりだと、告げているように。

最終話　新たな夜明け、始まりの朝

今回起きた魔導師連続襲撃事件の報告書。

事の発端は、封印世界に指定されている世界、アルカディアで起きた無差別殺人だった。その世界でいる数少ない人類である「星の民」は、同じ民族であり元管理局員だったリリス・ルキフェルにとって滅亡。

唯一の生き残りである星の民の王族に当たる少女イリア・スフィニールと、その兄アル・スフィニール。二人はリリス・ルキフェルの望みを叶える為の道具として利用され、妹の方は人として生きる事の自由を奪われ、兄の方は犯したくもない殺人――リンカーコアの収集――を強要されたらしい。

だが、二人の風貌は目撃証言の姿――黒髪に紫の瞳の十五～六歳ぐらいの少年――とは似ても似つかない風貌だ。二人とも銀色の髪にイリアは瑠璃色、アルは蒼い色の瞳をした十二～三歳の少年と十歳前後の少女だったからだ。

しかし、リリス・ルキフェルは天才魔導師であり技術者だ。変身魔法など簡単に使える。それならば、自分とはまるで掛け離れた風貌をしていればまず怪しまれる事は無い。そう考えての行動だとしても不思議ではない。

因みに、襲撃犯の魔力は非常に高い事がこれまでの接触で判明。そしてアル・スフィニールの魔力は微弱だという事は保護時の検査で判明している為、この事件の容疑者から除外する。

そして、今回彼女が及ぼした被害は、フリーの魔導師、管理局の魔導師、次元犯罪者も含め約二百二十人にも及ぶ。奪われたリンカーコアは「星の雫」というロストロギアの中で半永久的に魔力を蓄積、放出を繰り返す動力として使われていた。

「星の雫」には他にも「星の器」という絶対防御領域を展開するロストロギアあり、あとロストロギアではないが「星の鍵」と古い蔵書で称されていた星王の正統継承者の証を揃えると、無尽蔵の魔力を得る事が出来るという、闇の書を超え得る可能性を秘めた危険なロストロギアだった。

星王とは、かつてアルカディアを統一した王が「星の民」の族長だったことから、星王と呼ばれるようになったとの事。そしてその王の直系に当たる子孫が今回保護されたスフィニール兄妹であり、初代星王が女性であったことから、星王になる正式な権利があるのは兄のアル・スフィニールではなく、妹のイリア・スフィニールにある。

しかしその実態は、初代星王が邪念なく世界を纏めようと怒りや憎しみなどの感情を捨て、後に回収した結果、肥大化して力と意志を持ったもう一人の自分に肉体が耐えきれず、二つの能力と共に二人の人間として分離してしまった事が原因である。

別れた二人の人間は男女で別れ、女性には星王となって力を受け継いでいく能力が生んだ長女にのみ備わり、男性の方にはリミットブレイクという希少能力が宿った。それが今の星の民の原型であり、女性のみが星王になれる原因である。

そしてリリス・ルキフェルはこの星王の証を抜き取り、自分の物として使用できる技術をプロジェクトFによって開発。その技術で自

分が数百年ぶりに復活する星王となり、世界を征服することが自分の望みだと公言。

こちらも相当の被害を受けるも、真に星王となったイリア・スフィニールとアル・スフィニールの二人の協力により、リリス・ルキフェルを撃破、現行犯逮捕する事に無事に成功した。

だが戦闘の影響か、リリス・ルキフェルの星王としての力は完全に失われており、更に少々老化が急速に進んで見た目の年齢が二十代後半から四十台にまで老いていたが、健康面に問題はない。

保護対象：封印世界「アルカディア」出身、アル・スフィニール。

要救助者：封印世界「アルカディア」出身、イリア・スフィニール。

逮捕者：元時空管理局本局　属遺失物管理課　新技術開発研究部所属、リリス・ルキフェル。

罪状：超広域次元世界における犯罪行為。及び児童虐待、公務執行妨害、管理局所有物への器物破損、大量殺人、違法技術の無断使用、管理外世界・封印世界での無断魔法使用。

あの事件が終わり、アースラに戻ってから三日。

なのはが放った特大の集束砲はリリスを飲み込み、更に神殿すらも撃沈させた。神殿は木端微塵に吹き飛び、神殿の中央である塔も横倒しになって倒壊し、星の器も完全に失われてしまった。

一応リリスは全壊した神殿の瓦礫の上で気を失って倒れている所を発見、逮捕された。その時すでに星の雫が無かったことから、破壊されたものと思われる。

「ふぅ……」

クロノは座っている椅子の背凭れに凭れ掛かって、疲れた声が混じった溜息を漏らす。

此処はアースラの中のクロノの自室に当たる部屋だ。彼は先ほどまで上に報告するための報告書、および裁判所への準備要求書の作成に追われていたのである。

そこへ部屋のブザーが鳴り、聞きなれた女の子の声が聞こえてきた。

「ああ、開いてるよ」

クロノが椅子に座ったままそう言うと、扉が横へスライドして廊下から黒い執務官服に身を包んだ金髪ツインテールの少女、フェイトが、お盆にコーヒーを乗せて入室してきた。

「どう？　お兄ちゃん」

「……お兄ちゃんはやめてくれ。まだ一応、仕事中だ」

「でも、もう区切りができたしたんでしょ？」

ニコニコしながら言うフェイトの一言に、何も言えなくなって黙るクロノ。

フェイトが彼の義妹となってからもう三年近くが経つというのに、未だに呼ばれ慣れないお兄ちゃんである。

「で、終わったの？」

「ああ、さっき終わったよ。……フェイトの方は？」

クロノはフェイトから湯気の立ち上るコーヒーを受け取る。

フェイトもお盆を腰に当てる様にしてクロノと話す。

「こっちもさっき終わって、義母さんに確認してもらった所」

「そうか、なら安心だな」

フェイトは執務官とはいえ、まだなったばかりの新米。あともう一か月ぐらいはここで経験を積んでいくことになるだろう。その為の練習という名の書類作成の手伝いだ。

故にフェイトには、裁判の時のリリス・ルキフェルの起訴状を書いてもらっていたのだ。

「そういえば彼らは？」

「二人とも、もう起きてるよ。でもまだ、うまく動けないみたい」

苦笑しながらフェイトは答える。

あの決戦が終わった直後。アルとイリアは突然意識を失って落下。なんとかフェイトとシグナムが二人を助けられたが、それから丸一日ほど目を覚まさなかった。

シャマルが言うには、最後に起こしたあの変身の影響ではないかとの事だが、詳しい事は何一つわかっていない。気を失うと同時にあの翼は解ける様に消えてなくなり、今では瞳の色も元に戻っている為、調べても何もわからなかった。

目が覚めても、身体が物凄く重く硬くなっているようで、目が覚めた初日はベットから起き上がるのも一苦労だった。だが今では普通に歩けるぐらいは出来るようになり、アルは体をほぐすトレーニングをシャマルの監視の下で行っており、イリアもようやく普通に食事ができるぐらいには回復した。

ただし、ただ一点を除いて。

「二人が魔導師でいられなったのは残念だな」

そう、アルとイリアの二人は、魔力を極端に失ってしまっていたのである。リンカーコアこそ失っていない為、魔法は使えるには使えるのだがほんの僅かだ。

シャマルの精密検査と診断によれば、二人の元々の魔力はアルがＡＡ＋ぐらいでイリアがＳ＋程だったらしい。だが今では、アルはＥランクにイリアはＢランクにまで落ちていた。

勿論アルの魔力は元々が少なく、星の雫の力で漸くなのは達と互角だったが、イリアは魔力保有量の元々が多い星の民の女性で星王の正統継承者であったので不思議はない。しかし星王になってからの状態だと、確実に最高魔導師ランクのＳＳＳ＋を軽くオーバーしていた筈だとシャマルは云う。それを聞いてリンディが露骨に残念そうにしていたのは、アル達に秘密だ。

「うん、すごく残念」

「母さんに毒されて来たのか？　フェイト、君らしく――」

君らしくないセリフだな、と続くはずだった言葉だが、それは次にフェイトが言う台詞で無くなる事となった。

「これじゃあ、決着付けられない」

「――君はいつでも君らしいな」

シグナムとフェイトは此処で有名なバトルマニアである。そんな彼女が、不完全燃焼で終わったアルとの戦いが気にならない訳がなかった。

そんなフェイトの模擬戦大好き人間ぶりに呆れ顔のクロノは、とっても残念そうに目を伏せているフェイトを冷やかに見つめながらコーヒーを啜った。

（……甘い）

どこかでブイサインしながら笑っている母さんをいつかぶっ飛ばす。そんな風に思いながら。

★☆★☆★☆

フェイトが残念そうにしてクロノが甘すぎるコーヒーにも悶えている頃。シャマルのいる医務室を舞台にして、イリアの体を解す為のリハビリが行われていた。

イリアはベットの上で固くなった体を柔らかくする為に屈伸や前屈

などをシャマルに手伝って貰っていた。因みにアルは一日も動かなかった日が無かったのが幸いしてか、イリアよりも動けていたので、アルフやザフィーラやなのはと一緒にアースラのトレーニングルームに行っている。

「あたたた」

「イリアちゃんは物凄く硬くなってるわね～」

「だってイリア、ぜんぜん運動、してなかったから……はふぅ」

イリアの背を優しく押したり引いたりを繰り返しながら、シャマルと言葉を交わす。

それはそうだ。元々イリアは半年もの間、薄暗く狭い空間に閉じ込められていてロクに動く事も無かったのだ。全体的な体力や筋力が著しく低下していても何ら不思議はない。イリアの肌が白いのは元々だが、それに輪をかけて白い。その四肢は触れれば折れてしまうんじゃないかというほど細い。

リリスの罪状に幼女監禁を付け加えて貰えるように進言しようかと、一瞬だけ思ったシャマルだった。

「でもあの中にいたから、あんまりイヤな気分はなかった――たたたたっ」

「星の器って本当に生命（いのち）を守る事だけに特化してたのね」

中にいる星王の命が絶えないようにあの空間内で光や水、空気が栄養素に変換されて人体に取り込まれていたのだろう。今となっては確かめようがないが。

しかし不思議なのは、最後のアルとイリアの身に起こったあの変化である。

アレが本当に星王化の真の効果だとすれば、その時のイリアとアルは今以上に健康的で肉付きもよく、普通の少年少女の体型だった。どんなに星王の魔法が優れているとしても、あれほどの変化ならばそのまま残ってもおかしくない。

それにあれがただの変身魔法で無い事ぐらいは誰が見ても一目瞭然。あれほどの魔力を発揮してリリスをあと少しのところまで追いつめた。その能力は正直言って異常だ。

「ね、イリアちゃん」

「なぁに？　シャマルさん、はふぅ……」

「あの時、貴女達に起きた事を教えてもらってもいい？」

イリアは「う～ん……」と首を捻りながらもポツポツと話し出した。

「あの時、イリアの中に……お兄ちゃんがいたの」

「アルくんが？」

「うん」

イリアの中にいたとはどういう事なのだろうか。それを聞こうとする前にイリアが言った。

「う～ん、なんて言えばいいんだろ？　ええっとね……お兄ちゃんが、イリアの中で一緒になってたの。でも、お兄ちゃんの中でもイリアがいて。でも違うことを考えてて……」

必死に説明しようと言葉を探すイリアだったが、説明しきれないみたいで唸り続ける。

そしてシャマルはイリアが言いたい事を反復しつつ推理してみる。

「同時にお互いがお互いの中で同時に存在する……でも思考は別々……もしかして、意識の共有？」

「そう！　そんな感じ！」

勢いよく振り返ったイリアの表情に、ぱぁ！と笑顔が咲く。

「あと他にもね、今まで戦ってきたお兄ちゃんの経験が入ってきたの！」

この発言には、流石のシャマルもびっくりした。

意識を共有していただけではなく、なんと経験まで完全に本人に反映されていたのだ。

だが、それならば戦いを知らないイリアがあれほどの戦闘をやってのけた事に説明がつく。なぜなら、もっとも実践慣れしているアルの経験を余す意事無く発揮しているのだから。

「じゃあ、もう一度あの状態になれる？　って聞いたら出来る？」

イリアは少し考える仕草をするが、直ぐに首を横に振る。

なんで？とシャマルが聞くと、イリアはこう答えた。

「今のイリア、ただのイリアだから」

再びシャマルは理解できなかった。

イリアにただもへったくれもあるのか。そう思うと共に一つの答えが浮上してきた。

「それって、もしかして……もう星王じゃなくなってるって事？」

「うん」

イリアは何の迷いもなく頷いた。

「星の民の力を全然感じないの。前はお兄ちゃんが近くに居れば何をしているのかも手に取るようにわかったのに」

それは、イリアが星王の力を完全に失ったという事。故に魔力を失い、紋章も使えなくなった。勿論、もう星王の継承もできない。

本当の意味で、星の民に刻まれていた呪いは消えたのだ。

「それにね、寝ている時に星王様がこう言ってたんだ」

イリアは深呼吸すると、その星王が言っていた言葉を思い出すように口にした。

「力とは、呪いでもあり救いでもある。力で救える心と守れる命があれば、力では出来ぬ事があり変えられぬ事がある。力による過ちはその身に呪いとなって刻まれる。けれども力による過ちは、同じく力によって正されるのも、また事実なり」

シャマルにとってその言葉は、まるで自分たち向けて言われたような言葉だった。

かつて数え切れぬほどの人を不幸にしてきた闇の書。改竄された哀れな魔導書こと夜天の魔導書。

壊されて歪んだ力は暴走していた。それでも正しいと信じて魔力を蒐集していた自分達ヴォルケンリッター。けれどその結果は最悪。けれどもその最悪を最善に変えたのは、なのは達の力があったからこそ。

力による過ちは、同じく力によって正される。その言葉は誠に正しい。力は人を歪ませもし、導きもする。光と闇の両方を有するモノ。

力とは、呪いでもあり救いでもある。表裏一体の諸刃の剣。けれど、だからこそ出来る事と出来ない事があり、成すべき事の為に力は必要なモノ。

大切なのは、己がなすべき事を成し遂げる覚悟と、間違えても正してくれる信じあえる仲間がいる事。それが、力を正しく使う為に必要な事。

そして今の自分達には、その仲間も覚悟もある。だから心配することは何もない。

「ふふふ、ありがと」

「ふえ？　なにが？」

「ううん。なんでもない。さぁ、リハビリの続き続き」

「え？　ホントにどうしたのシャマルさあたたたたた！」

「頑張って女の子らしい柔らかい身体に戻ろう！」

「いたたた！　ほ、骨が折れちゃうよぉ～！」

医務室に悲痛な悲鳴を上げるイリアと楽しそうなシャマルの声が響いていた。

そしてそれを近くにいた助手や医療班の人たちは微笑ましく眺めていた。

「お兄ちゃぁーん！　助けてぇ～！」

イリアの助けを求める声を無視して。

★　☆　★　☆　★　☆

イリアがシャマルに苛められ――もとい、リハビリに精を出して悲鳴を上げている頃。

アルとアルフとザフィーラ。そしてなぜかなのはも含めた四人は、魔法訓練施設のトレーニングルームでアルと組み手を繰り広げていた。

今、組み手をしているのはアルとザフィーラ。なのはとアルフはその様子をハラハラしながら見ていた。だがもちろん手加減はしてもらっている。

「ふっ！　はっ！」

バシン！バシン！と拳と掌が打ち合う音がトレーニングルームにテンポよく響く。

アルが左手の拳を打ち出し、ザフィーラがそれを同じく左手で受け止める。続けてアルが右を打ち出せば、同じようにザフィーラは右で受け止める。

「はぁっ！」

アルは右手を引く勢いに乗せて左足で、ザフィーラの右肩を狙った

ハイキックを繰り出す。だがザフィーラはそれを鍛えられた太い筋肉質な右腕で受けて止める。

ハイキックを受け止められたまま、アルは片足でジャンプして空中で身体を捻る。

「せぇえ！」

反時計回りでの回転に乗せて左足の踵で、ザフィーラの左顔を狙って蹴るも先ほどと同じく左腕で受け止める。

が、アルはそれだけでは終わらず左足を引いて体勢を変えながら、右足でも同じ所にやや上から蹴り込む。だがザフィーラも左腕の角度をやや上に向けてその一撃を受け止める。

ザフィーラはそのまま跳ね飛ばす様に左腕を振り払い、アルは身体を捻る事でその勢いを回転に転化。そのまま体勢を整えてザフィーラからやや離れた位置に着地。

そのまま反撃に移ろうとして右足を踏み出した瞬間――

「あ……？」

足の力が抜けてそのまま床にバタリと沈んだ。

見ていたなのはとアルフ、そしてザフィーラが慌ててアルに駆け寄

って起き上がらせる。

「アル君、大丈夫？」

「……大丈夫だ。ただちょっと、力が抜けただけだ」

「とりあえず、この辺りで休憩にした方がいいだろう。そろそろ三十分は経つ」

「そうだね。歩けるかい？　手ぇ貸そうか？」

「ああ、助かる。とりあえず……動けない」

アルはアルフに腕を持って立ち上がらせて貰って壁際まで歩いていく。

彼は以前と随分変わっていた。以前は、まるでなのは以外は存在しないかのように振る舞っていたのにも関わらず、今では誰とでもフレンドリーに接している。

一度でも仲間だと思えば、それは何物にも代えがたい大切な存在である。故に仲間は守らねばならない。同じく仲間である自分達の手で。それがアルやイリアを始めとした、星の民の唯一にして絶対厳守である掟であり、誇りである。

だからなのは達全員を仲間だと公言したアルは、ちゃんと自分として接しているのである。ただし、なのは以外の人間は未だに苗字もしくはセカンドネームで呼ばれているが。

だがそれは星の民が古来よりつけ継いできた伝統が故の理由がある。しかもアルがそれを言わず、イリアも知ってはいるが可笑しそうに笑うばかりで話してくれず、その伝統がどういった内容なのかは未だに謎のまま。ただその時、アルの顔がトマトの様に真っ赤だったと、付け加えるべきだろう。

アルフに助けられながらも壁際で腰を下ろしたアルは、深々と溜息を吐いた。

「相当疲れていたようだな」

「正直、全く思ったように動けない」

「っていう割にはあたし達といい勝負が出来てるじゃないか」

肩をすくめて言うアルフ。

「さっきだってもう二発は蹴り込むつもりだったんだ。なのにこの様。体が硬くなって重すぎる……動き辛い」

もう一度深々と溜息を漏らすアル。

実際に今までのアルの動きから考えても、まだまだ動ける筈だった。事実、なのは達と戦っている時は、今以上の俊敏さと運動を行なっていたし、三日間殆ど眠らずに動ける体力があった。

それらを考えると、やはり相当身体の動きに制限が掛かっているのか、それとも何か別の要因があるのか……。

「やっぱり……力の解放を使った事の反動か」

「力の解放って……あの翼のこと？」

小さく呟かれたアルの一言を聞き取ったなのはが尋ねてくる。

アルは無言で頷く。

「アレは、オレ達の中にあった星の民の力。それを対価に発揮される力だったみたいだからな」

アルは右手を持ち上げてその掌を見詰める。

そこから感じるのは、以前とは比べ物にならないほど安定してはいるが、遥かに能力の質が落ちたリミットブレイク。そして劣化した原因は、おそらくあの変化の所為だろう。

あの時、リミットブレイクしたはずのアルの身体は全く痛みも苦しみもなく、むしろ高い高揚感でいっぱいだった。

それにあの魔力で出来た翼。アレが身体の中を蹂躙する余分な魔力を吸収し、外へ発散する役目を担っていたんだろう。そのおかげで

リミットブレイクの真価を余す事なく使い切る事が出来た。

「という事はつまり、もう二度とあの力を使う事は出来ない。そういう事か」

「そうなるだろうな。最も、アレを使うには、オレとイリアが傍にいる事と、星の器と星の雫が揃わないと無理だ」

星の器は神殿の倒壊と共に破壊されてもう既になく、また星の雫も破壊された筈だ。つまり、もう二度とあの力を使う事は出来ないし。アルとイリアが魔導師として生きて戦っていく事はできない。そういう意味だった。

それに、以前はこの船程度の距離だったら感じ取れたイリアの存在感が、今ではもう全くわからない。

「オレの能力は、劣化して残っているみたいだけど――多分、イリアの星王としての力は完全に消えてなくなってるよ」

「分かるのかい？」

「今まで、イリアにどこか惹かれる感覚があったんだ。だけど今はそれがない」

星の民の男性と、星王の女性は必然的に惹かれ合う。勿論それは、アルとイリアや二人の両親もその例に洩れず。

だがそれは、初代星王セイリの善の力と二つに分かれた悪の力が混ざり合って引き裂かれ、元々一つで安定していた力が二つに分かれた事で不安定になり、安定を求めて一つに戻ろうとする副作用のような物。それが星の民の間で起こり、力の惹き合いを恋心と勘違いしているようなものだった。

だから、星王もしくは星王となる長女は星の民の人たちから大事にされ、また命を懸けて守られる。

勿論、それは血が濃ければ濃いほど強い影響力を持つようになり、その人間の思考パターンをも決めてしまう。その影響で星王家の血筋では、親兄妹間の近親相姦による血の継続がよく起こっていたそうだ。勿論、アルの両親は違う。

これらを踏まえて考えると、アルが異常にイリアを求めていた事情にも説明が付く。

因みに、これらの事は、倒壊した神殿の地下ありつつも奇跡的に無事だったリリスの研究室。そこで見つかった資料を元に、アルとイリアの証言を得つつクロノとフェイトが補正した星の民の秘密に関する情報だ。

最も、星の民としての能力を殆ど失ってしまった今では何の意味の無い情報ではあるが。

「なんて言ったらいいんだか、正直わからない。けど――」

「けど？」

なのはが首を傾げる。

「なのはにイリアを重ねて見なくなったのは、確かだな」

柔らかな笑みを浮かべて言った一言。だがその一言に当人であるなのはは凄く反応した。

「なんだかバカにされたような気分なの」

「可愛いくて可愛くて仕方ない、オレの大事な妹の生き写しとしてじゃなくて一人の人間としてなんだから。喜べばいいんじゃないか？」

「……なんで上から目線なの？」

なのはとイリアは、顔立ちがとてもよく似ている。髪の色や目の色、体型以外にもよく見れば意外と細部が違うのだが。

「特に理由なし。強いて言うなら……」

「強いて言うなら？」

アルはなのはをジッと見て――――フッ……と笑った。

「なに、その笑い方」

プクゥっと不満そうに頬を膨らませるなのは。

そんななのはを、アルはより可笑しそうに「ははは！」と笑う。そしてなのはが更に頬を膨らまし、それを見て更にアルが笑う。

ほんの三日前までは敵対していたとは思えないほどの和やかな空気だった。

「さてっと。そろそろ体も動けるようになったし、今度はアルフが相手になってくれ」

「ああ、いいよ」

アルは一人でスクッと立ち上がってトレーニングルームの中央へと歩いていき、その後をアルフが軽く体を解しながら付いていく。

「あ！　アル君まだ続き聞かせてもらってないよ！」

「運動音痴は黙って見てろ。運動音痴」

「にゃぁー！　二回も言ったー！」

「行くぞ！」

「来な！」

「なのはを無視しないでよぉ！」

両腕を振り回しながら叫ぶなのはを無視して、アルとアルフはリハビリついでの組み手を始める。

アルは、アルフと組み手をしながら思っていた。

（強いて言うなら――）

アルフが軽く突き出した右拳を左へのステップで躱し、アルフの左脇腹に目掛けてミドルキックを繰り出す。

だがアルフはアルの左足を左手で掴んで止め、そのまま自分の後方へ投げ飛ばす。

（お前に助けられたままじゃなくて――）

アルは身体を捻って空中で姿勢制御し、ダン！と床に着地する。

そのままアルフへと駆け出し――

（今度は俺が――）

右ストレートを繰り出してアルフの突き出した右手と打ち合い、バシン！と音が響いた。

（助ける側になりたい）

ニヤリと笑みを浮かべるアルは、その後も度々休憩を挟みながらアルフとザフィーラ。二人を相手にリハビリとは思えぬ体術を披露し続けた。

★　☆　★　☆　★　☆

そして、アルやイリアがリハビリを初めて一週間後。地球時間で八月二十日。なのは達が事件を担当してから実に二十日以上が過ぎた。

アルとイリアはすっかり回復し、イリアに至っては細すぎた体型も今ではなのは達となんら変わらぬ健康そのものとなっていた。

それを一番喜んだのは、言うまでもなくアルだ。彼は半年間イリアを助けるために世界を彷徨い歩き続けた結果、重度のシスコンと化していた。ついでにイリアも同じ理由で、兄に負けず劣らずのブラコンと化していた。

本当に好き合っていないのかと疑いたくなるほどのラブラブぶりだ。因みにその兄妹は今、クロノ、リンディ、エイミィの三人とアースラの食堂で昼食をとっている。

今日は私立聖奨大付属小学校の登校日なので、事件もないなのは達は今学校に行っている。

「こんなに静かな時間は久しぶりだ」

「そんなに忙しかったの？」

「ああ。誰かさんがいつどこで現れるかわからなかったから、緊張感で満ち溢れてたよ」

イリアの質問にクロノはアルを睨みながら言い、アルは素知らぬ顔で顔をズラしながら昼食に手をついていた。

そんな様子の昼食の風景に、リンディとエイミィは楽しそうに笑う。

「しっかし、まさか本局からの護送艦が来るなんて思わなかったなぁ」

「そうね。このままアースラが連れて行くものだと思ってたわ」

エイミィとリンディが意外な展開だったと話し始める。

二人が言う通り、リリスの護送は本局からの護衛付きの護送艦が迎えに来て、明日の午前中には到着し、その日の午後にはアースラも共に本局へ向かう予定になっている。

今回の事件。魔導師連続襲撃の犯人であるリリス・ルキフェルは第一級広域次元犯罪者として扱われている。それを決めた管理局本局は、それだけ慎重になっているという事だろう。

だがそのおかげでこうして久しぶりにゆっくり出来ているのだから感謝すべきなのかもしれない。

因みに、当人は力を完全に失った影響か、アースラの収容室で大人しくしているらしい。一応、魔力を封じる装置を取り付けられてはいるが。

「それで？」

「ん？」

さっきまで黙々と食事を続けていたアルが唐突に口を開いた。

「オレ達に話があるから、こうしてわざわざ一緒に食事をとってるんだろ？」

「ふふ。相変わらず鋭いわね」

リンディはいつもの笑顔を浮かべたまま、食事の手を止めてアルとイリアに向き直る。

それを見たクロノとエイミィも食事の手を止める。

「話っていうのは、これからの事」

リンディは間を置いて話し始める。

「貴方達は、この事件の重要参考人として本局に一緒に行って貰う事になってるのは、知ってるわね？」

リリスの有罪は確定されてるも同然だが、形式上で裁判は絶対必要。だから二人にもそれに出頭して貰わなければならない。という事は、クロノとフェイトの二人から説明を受けている。

因みにその時、アルの罪を全面的にリリスが受け止めるというのも、その時クロノから聞き、アルは「自分の罪は自分で償う」と激昂したが、クロノから次々挙げられていく問題に結局クロノの言う通りにするしかなかった。

アルとイリアは揃って頷く。それにリンディは微笑みを浮かべて、続きを流す。

「一応、私が貴方達の保護責任者にはなってるんだけど……」

リンディはアースラの艦長。つまりこの船の最高責任者であるので、この船で保護している二人の保護責任者となるのは不思議ではない。

だがリンディの言いたい事はそういう事ではない。

「このまま……私達の家族にならない？」

新しい家族として、新しい場所で、自分の養子にならないかと言ってきた。

アルとイリアは両親を亡くして帰る場所もない。だからと言って、このまま彼らをただ本局の保護施設に送るなど、リンディがする筈もない。

かつてフェイトを養女として受け入れた時は、彼女を確実に守る為に必要だったからなのとフェイトに新たな居場所を与える為。それになにより、それを選んだ彼女の意思だ。

だから、経緯は違えど彼女と同じく事件で両親を失い、天涯孤独となってしまったアルとイリアの家族となる事でその寂しさを和らげ

てあげたい。そう思っての提案だった。

だが――

「あんたがオレ達の保護責任者になってくれたのには感謝してる。そのおかげで、オレはこうしてイリアと一緒に居られるし、此処で楽しくやっていけてるって事も。でもオレは……」

アルは少し申し訳なさそうに俯き、そして――

「オレは誰かの家族には入らない。オレの家族は、オレが作る」

覚悟を決めた目でリンディを見やる。以前の様に威圧して意を読み取ろうとする目ではなく、自分の意志を相手に伝える覚悟を持った目で。

それはこれからを生きていく為に、そしてアルがアルとして、アルが命を奪ってきた彼らの「生きた筈の未来」を生きる為に必要なケジメだから。

「イリアちゃんも？」

リンディがそう尋ねれば、イリアは多少迷いながらも頷く。

アルが「イリアはイリアの自由にしてもいいんだぞ」と言い「名前は違っても、兄妹である事は変わらないんだ」と続けて言うが、イリアは首を横に振る。

「イリアは、リンディさんをお母さんって呼んでもいいかなっても思ってる」

その言葉に、リンディは微かに微笑む。

「でもイリアは力をなくしても、もうイリアとお兄ちゃんしかいないけど……イリアは星王だもん」

もう兄以外の星の民がいなくても、星の民として生まれ育ち、そしてその星の民の長となる者として、やはり譲れない物はある。

「イリアだって、誇り高き星の民の一人だもん！　お兄ちゃんがケジメをつけるのに、イリアだけつけないなんてイヤ！」

例えまだ十歳でも、その心は確かに星の民の一人として胸を張れる誇りを持っている。

だからこそ、アルだけがケジメをつけるという事が許せない。

だからこそ、アルと共にケジメをつけたいと思っている。

「だから、イリアもお兄ちゃんと一緒」

「そう……残念だわ」

そう言うリンディの顔は確かに残念そうだったが、どこかでそうなるだろうと思っていたんだろう。あまり驚いてはいなかった。

だがその代り、隣に座るクロノは目を見開き、エイミィはその場での拒否の回答に驚きを隠せないようだった。

しかし、それにしても星の民というのは誇り高い民族だ。

「まぁそれだけ二人の気持ちが強いなら、もう何も言う事は無いわ。でもこれだけは言っておくわね」

リンディはそういうと、先ほどまで浮かべていた苦笑から一変して真剣な表情になる。

それを見たアルとイリアも背筋を伸ばしてリンディと向き合う。

「一応、二人が不自由なく暮らしていけるように手配するけど、必ずそこで上手くいくとは限らない。だから……」

真剣な声での台詞に、イリアは思わず生唾をゴクリと呑む。
だが次の瞬間、リンディは優しい笑みを浮かべて言う。

「いつでも頼ってきてね。例え家族にならなくても、私たちはいつでも貴方達の力になるから」

その言葉に、アルはついつい苦笑いしてしまい、イリアは目を輝かせて何度も何度も首を縦に振って頷いた。
クロノとエイミィも、そんな二人の様子を見て笑みを零し、肩をすくめる。

「さあ、料理が冷めちゃうわね。さっさと食べましょ」

「は～い！」

リンディの掛け声に元気よく答えるイリア。そしてアルも、そんなイリアを嬉しそうに見ながら自分も食事を再開し、クロノとエイミィも食事の手を進める。
食事の最中、リンディとイリアとエイミィの会話は弾み、食堂には笑い声が絶えなかった。
そしてその様子を、他の局員たちも微笑ましげに眺めていたのであった。

翌日。

空高く太陽が昇り、モコモコとした雲が一つ、また一つと流れていく青空の下、一陣の風が吹き抜けていく。

今では誰も立ち入らなくなった、人はだれも住んでいない世界。数日前まで超巨大な建造物があったとは思えないほど、そこには青々と生い茂った草原が広がっていた。

そんな場所に、二つの銀色が揺れながら歩いていた。一人はアル。もう一人はイリアだ。

二人は本局に行く前に、封印世界アルカディアに一度だけ立ち寄りたいと懇願し、こうして二人だけで来ている。

「……」

「……」

アルとイリアは会話もなくその草原を歩き、やがて目の前に倒壊した建物が現れる。

二人は瓦礫と化した神殿の登っていく。まるでこの先にあるモノを目指していくかのように。

そして――

「……見つけた」

アルが一枚の瓦礫をどかせると、そこには破壊されたはずの星の雫があった。

無数の罅が入り、今にも壊れてしまいそうなぐらいボロボロになっているが、まだ七色の輝きを放ってそこにあった。

イリアが両手ですくい上げる様にそっと持ち上げると、ひび割れた部分から水色の小さな光球が一つ、漏れてきた。

それはフワフワと揺れながらゆっくりとしたスピードで、アルとイリアの周りを回る。

「これ、リンカーコアだ」

アルがその光を見ながら呟いた。アルには見覚えがあったのだ。その色合いの輝きに。

これほどボロボロになりながらも、まだ星の雫の中でリンカーコアは生きている。

「イリア……やるぞ」

「うん。お兄ちゃん」

イリアの両手に重ねる様に、アルが両手を被せる。

徐々に二人の両手の間で七色の輝きが強くなっていき、二人を包んでいく。

そして――

カシャァーン！！

ガラス細工が砕け散る様に、星の雫が無数の光の粒になって跡形なく壊れる。

刹那。二人を金色の輝きが包み込む。

『……っ』

そのあまりの眩さに、一瞬目が眩む。

だが、次に目を開けた時。そこで見た物は――

「これは……」

「きれ～……」

二人を包み込むかのように、様々な色で光り輝く七色の光たちだった。

これ全てがリンカーコア。そして全てのリンカーコアは、ありがとうと言うかのように瞬く。

それを見て、アルはなぜか涙が出てきた。

申し訳なかったとは思ってる。だが、この涙は悲しいからでも辛いからでもない。

その胸に広がるのは、ただ嬉しさだったから。

「お兄ちゃんは、恨まれてなかったんだよ。みんな、お兄ちゃんを応援してたんだよ」

そういうイリアの瑠璃色の瞳からも涙が流れている。

アルと同じように、その胸に嬉しさが満ち溢れていたから。

それが伝わったのがわかったのか、リンカーコア達は瞬いて空へと登っていく。

光の一つ一つが生前の姿をして、アルとイリアに笑顔で手を振りながら。

そして、自分たちと同じ銀色の髪をした女性も微笑みながら、リンカーコア達と共に空へと登っていく。

「……」

「……」

彼ら彼女たちを全員見送ったアルとイリア。

涙を拭いて、笑顔で顔を見合わせる。

「いくか、イリア」

「うん。お兄ちゃん」

アルとイリアは手を繋ぎ、歩いていく。

これからの自分たちの未来を歩いていく為に。これまで犠牲になっ

てしまった人たちの為に、今まで生きてきた星の民の先祖たちの為に。

新しい未来を歩いていき、アルとイリアは光となってこの世界から消えてなくなった。

跡には、風に揺れる草原の草たちと、神殿の残骸の天辺に刺さっているボロボロの漆黒の刀身をした銃剣のフレームだけだった。

Epilogue

4 years later.

「ほんならシャマル。グレアムおじさんに小包送っといてな？」

八神家の玄関で、はやては靴紐を結びながらシャマルに頼む。

この四年ではやてはかなり背が伸びて、シャマルの頭一つの半分下ぐらいの背丈になっている。

「はい。おまかせです」

「シグナムは、後で合流やね」

「はい。後ほど」

玄関で自分を見送ってくれる家族に挨拶して立ち上がり、玄関を開ける。

「あ、はやて。行ってらっしゃい！」

「行ってきます！」

子犬フォームの青い毛並みのザフィーラを散歩に連れて行く所だったヴィータが、手を振ってはやてを送り出し、はやてもヴィータに手を振りながら走っていく。

†　八神はやて　†

私立聖祥大付属中学校三年生兼時空管理局特別捜査官。

守護騎士ヴォルケンリッターを率いる優秀な魔導騎士として、ロストロギア関連事件の操作に才覚を発揮する。

「……よしっと」

リンディが自分で作ったお弁当を持ち、リビングへと移動する。

本当に三十代なのかと疑いたくなるぐらいの若さを維持している。

が、この点だけで言えば高町桃子も同類なので言及はされていない。

「フェイト。はい、お弁当」

「ありがとうございます。母さん」

アルフと戯れていたフェイトは、立ち上がってリンディからお弁当箱を受け取る。

フェイトもこの四年で女性らしく成長し、出る所は出て凹む所は凹んでいる。ツーテールの髪型はやめて、腰までのロングヘアを先で一つに纏めた髪型に変えた。

†　フェイト・T・ハラオウン　†

私立聖祥大付属中学校三年生兼時空管理局執務官。

使い魔アルフを伴って、執務官となって第一線で活躍中。

†　リンディ・ハラオウン　†

時空管理局提督。

現在は艦長職を退き、平穏な本局勤務。本局勤めに異動したのは、自宅で子供二人の帰りを待つためのようだ。

「今日は久しぶりに、全員集合だな」

防護服纏（バリアジャケット）ったクロノが、アースラの艦長席に座りながら管制室の一番目に座るエイミィに話し掛ける。

「そうだね。クロノ君の艦長就任以来、初めてかもね」

椅子を半回転させてクロノに振り返って応えるエイミィ。

「ま、平和な任務だ。ちょっとした同窓会だな」

「ふふ。その様で♪」

「ユーノもいいか？」

モニターを繋いでいた先、本局にいるユーノに話しかける。

『ああ。時間通りに』

次元通信用の携帯で会話するユーノ。

「そう言えばユーノ君。なのはちゃんと何か進展とかあった？」

『いや、ちょくちょく会ってはいますが、別に進展とは……』

苦笑しながら言ってくるユーノに、エイミィが面白くなさげにぼやく。

「あ～あ」

「エイミィ、勤務中だぞ？　一応」

「へいへい」

『ははは』

と六年前からなんら変わらない掛け合いに、ユーノは笑う。

†　クロノ・ハラオウン　†

時空管理局提督、艦船アースラの艦長。

執務官は資格を持ち続けている為、執務官兼艦長となっている。

†　エイミィ・リミエッタ　†

時空管理局管制司令。

それぞれ昇進後も、コンビは未だ健在。

†　ユーノ・スクライヤ　†

時空管理局データベース「無限書庫」司書長。

司書の傍ら古代史の論文を発表、学者としての実績を重ねる。

桜咲く林道、私立聖祥大付属中学校に続く道中に、茶髪サイドテールの少女と、その少女より頭一つ低い銀色のストレートヘアの少女が並んで立っていた。

「あ。なのは、イリア！」

「なのはちゃん！　イリアちゃん！」

その後ろから、金髪ショートヘアのアリサ・バニングスと藍色ロン

グストレートの月村すずかが、手を振りながら呼び掛ける。

「アリサちゃん、すずかちゃん」

「アリサお姉ちゃん、すずかお姉ちゃん」

なのはとイリアは振り返って手を振る。

「おはよ」

「おはよう」

「おはよー」

イリアは嬉しそうにアリサとすずかの間に入って一緒に歩き始める。

「なのはちゃん、今日もお仕事？」

「うん。今日は久しぶりにみんな集まるんだ。お昼過ぎには早退しちゃうから、午後のノートお願い」

「はいはい。頑張ってコピーしやすいノート取るわよ」

「にゃはは、ありがとう」

困った様に笑いながらお礼を言う。

「なのはお姉ちゃん達、がんばるね～」

「あんたも今の内に進路決めときなさいよ、このこの！」

アリサはニヤリと笑いながらイリアの頭を小脇に抱える。

「アリサお姉ちゃ～ん。や～め～て～！」

と叫んではいるが、イリア自身も楽しそうに笑っている。

「あははは！　あ！」

ふと、なのはが笑いながら前方を見ると、もう二人の親友の姿を見つけた。

「おはよう！」

「おはよう」

はやてとフェイトの二人だ。

「フェイトお姉ちゃん、はやてお姉ちゃん、おはよー！」

「うん。おはよう、イリア」

「おはよー、イリアちゃん」

「おはよう。今日集まるんだって？」

「うん」

「ホンマに楽しみやわ」

「イリアも一緒に行きたいなぁ～」

「う～ん。多分、間に合わないと思う。イリアは学校あるんだし」

「むぅ……」

『あははは！』

更に二人の親友を加えて、賑やかに学校を目指して歩き始める。

†　高町なのは　†

私立聖祥大付属中学校三年生兼時空管理局武装隊、戦技教導官。

新任局員への戦技教導の傍ら、捜査官としても活動。優秀な成績を残している。

†　イリア・スフィニール　†

私立私立聖祥大付属中学一年生。

兄アル・スフィニールと共に第９７管理外世界「地球」で暮らし、今年からなのは達の通う学校へ通う事になった。

「アル君、五番テーブルに持って行って貰える？」

「了解」

桃子が作ったショートケーキセットをお盆に乗せ、簿版テーブルへと運んでいくアル。

長かった銀色の髪は短く切ってしまい、今ではショートヘアになってすっきりしていて、百七十を超える身長と相まって凄く格好良くなっている。

「お待たせしました。ショートケーキセットでございます」

「あ、ありがとうございます」

「いえ、ごゆっくり」

ニコリと微笑んで離れていくアル。

ウェイター姿の彼は、その容姿もあってこの店の看板店員となり、大評判なのである

「いらっしゃいませ！　お持ち帰りですか？　店内でご食事になりますか？」

新しく来店してきた二人組の女性客に近づき、接客するアル。

「ええっと、食事で……」

「かしこまりました。こちらへどうぞ」

軽く礼をしながら、女性客をテーブルに案内していく。

その首下には、白い宝石を嵌め込んだ銀色の指輪がチェーンで結ばれてぶら下がり、キラリと日の光を反射して輝いていた。

†　アル・スフィニール　†

海鳴市内の喫茶店「翠屋」のウェイター。今年で十六歳。

リンディの養子の話を断ってから高町家にホームステイする事になり、以来翠屋で手伝いしながら恭弥たちに剣を教えてもらっている。

あの日、出会った絆は、今もずっと結ばれている。

それぞれの成すべき事をこなしながら、それぞれの夢に向かって歩いている。

いつか胸を張って、今までの自分を誇りに思えるように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2469r/

魔法少女リリカルなのはA`s　EarthCore

2011年11月7日13時04分発行